庄内教育事務所
埋蔵文化財分室

山形県埋蔵文化財調査報告書第62集

境田C遺跡

発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター
6-1989-468-01

1982
日本道路公団仙台建設局
山形県教育委員会

1989
468
6

山形県教育庁文化課
89. 8. 29
埋蔵文化財係

教育庁文化課

089－468

山形県教育庁文化課
89. 8. 29
埋蔵文化財

教育庁文化課

089－468

境田C遺跡

発掘調査報告書

昭和57年12月
日本道路公団仙台建設局
山形県教育委員会

序

本報告書は，山形県教育委員会が昭和56年度に実施した東北横断自動車道酒田線の建設に伴う「境田Ｃ遺跡」の発掘調査をまとめたものであります。

境田Ｃ遺跡のある山形市西北部は県下でも屈指の穀倉地帯で，反収の多い実り豊かな地域であります。また，この地は県内でも最も早い段階に稲作文化が定着し，その後も着実な発展を続けて現在に至っていることが，国指定史跡「嶋遺跡」をはじめとする数多くの遺跡の存在によって窺い知ることができます。今回の調査で平安時代中頃の掘立柱建物跡，井戸跡，土壙など，農耕を営んだ一般庶民の集落が検出され，土器や木製品など当時の生活を物語る貴重な資料を得ることができました。

近年，埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と，国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には，数多くの問題をかかえております。県教育委員会におきましては，生活文化の向上，地域環境づくりなど「心広く豊かな県民の育成」という立場から，これらの間の調整を充分にはかり，今後とも埋蔵文化財の保護のため努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが，本調査にご協力をいただいた関係各位並びに地元の方々に感謝申し上げると共に，本書が埋蔵文化財に対する理解を深め，その保護・普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和57年12月

山形県教育委員会

教育長　大竹　正治

例　言

1　本書は，日本道路公団仙台建設局の委託を受け，山形県教育委員会が昭和56年度に実施した東北横断自動車道酒田線建設に係る『境田Ｃ遺跡』の発掘調査報告書である。発掘調査は，昭和56年６月15日から同11月７日まで，延86日間に亘って実施した。

2　調査にあたっては，日本道路公団仙台建設局，山形市教育委員会，山形県土木部空港・高速道路対策室などの関係諸機関の協力を得た。記して感謝申し上げる。

3　調査体制は下記のとおりである。

調査主体	山形県教育委員会	
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団	
調査担当者	主任調査員	佐々木洋治（山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長）
	現場主任	渋谷　孝雄（山形県教育庁文化課技師）
	調査員	長橋　　至（山形県教育庁文化課技師）
		名和　達朗（山形県教育庁文化課技師）
事務局	事務局長	浜田　清明（山形県教育庁文化課長）
	事務局長補佐	荻野　和夫（山形県教育庁文化課長補佐）
	事務局員	設楽周一郎（山形県教育庁文化課主事）
		田内　糸子（山形県教育庁文化課主事）

4　挿図縮尺は，遺構については1/40，遺物については1/2，1/3を基本としたが，遺構では一部1/50，1/60，1/100のものが，遺物では1/1のものがあり，それぞれにスケールを示した。図版の遺物は1/3を基本としたが，縮尺の異なるものは図版中に記した。

本文・挿図中の記号は，ＳＢ―掘立柱建跡，ＥＢ―掘り方，ＳＥ―井戸跡，ＳＫ―土壙，ＳＰ―ピット，ＳＤ―溝跡，ＳＸ―性格不明の落込み，Ｆ―遺構覆土を示す。

挿図の遺物の断面は白が土師器，黒が須恵器，点描が赤焼土器を表わす。

5　本報告書は渋谷孝雄が執筆・編集し，全体については佐々木洋治が総括した。遺物の実測は渋谷孝雄，名和達朗が担当し，挿図及び図版の作成については，田中せつ子，吉野映子，前田和子，黒金佳子，清野匡子，渡辺敬子の補助を得た。

目　次

Ⅰ　調査の経緯……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の経過……3
Ⅱ　遺跡の概観……7
　1　立　　地……7
　2　周辺の遺跡……9
　3　層　　序……9
　4　遺構と遺物の分布……10
Ⅲ　Ａ地区発見の遺構と遺物……15
　1　土　　壙……15
　2　ピット……22
　3　溝状遺構……23
　4　性格不明の落込み……27
　5　遺構外出土の遺物……46
Ⅳ　Ｂ地区発見の遺構と遺物……58
　1　掘立柱建物跡……58
　2　井戸跡……70
　3　土　　壙……73
　4　ピット群……89
　5　溝状遺構……97
　6　性格不明の落込み……101
　7　遺構外出土の遺物……102
Ⅴ　考　　察……113
　1　出土遺物の分類……113
　2　Ａ・Ｂ地区の土器組成……122
　　1）　Ａ地区の土器組成……122
　　2）　Ｂ地区の土器組成……122
　3　Ａ・Ｂ地区の土器群の年代……123
　4　遺跡の性格について……126
Ⅵ　まとめ……127

挿図目次

第１図　遺跡全体図……2
第２図　馬見ヶ崎川氾濫流路……7
第３図　遺跡位置図……8
第４図　土層断面図……10
第５図　Ａ地区遺構分布図……11
第６図　Ｂ地区遺構分布図……13
第７図　ＳＫ16・17・18・25……15
第８図　ＳＫ18出土土器……16
第９図　ＳＫ19・20・22……17
第10図　ＳＫ19・20・22出土土器……18
第11図　ＳＫ23・28……20
第12図　ＳＫ40～42・44及び出土土器…21
第13図　ピット及び出土土器……22
第14図　ＳＤ４及び出土土器……23
第15図　ＳＤ５・７及び出土土器……24
第16図　ＳＤ30平面図……25
第17図　ＳＤ30土層断面図，横断図……25
第18図　ＳＤ30出土土器……25
第19図　ＳＸ１出土土器（１）……29
第20図　ＳＸ１出土土器（２）……30

第21図　ＳＸ１出土土器（３）……32
第22図　ＳＸ１出土土器（４）……33
第23図　ＳＸ１出土土器（５）……35
第24図　ＳＸ１出土土器（６）……36
第25図　ＳＸ１出土土器（７）……37
第26図　ＳＸ１出土土製品……38
第27図　ＳＸ６及び出土土器……39
第28図　ＳＸ９及び出土遺物平面図……41
第29図　ＳＸ９出土土器（１）……42
第30図　ＳＸ９出土土器（２）……43
第31図　ＳＸ15出土土器……45
第32図　ＳＸ15・26・27・29・31……45
第33図　遺構外出土遺物（１）……47
第34図　遺構外出土遺物（２）……49
第35図　遺構外出土遺物（３）……50
第36図　遺構外出土遺物（４）……52
第37図　ＳＢ101……59
第38図　ＳＢ102……62
第39図　ＳＢ103……64
第40図　ＳＢ104……66
第41図　ＳＢ105……68
第42図　ＳＥ156・157 ……70
第43図　ＳＥ156出土木製品……71
第44図　ＳＥ158……73
第45図　ＳＫ154・155・347……74
第46図　ＳＫ154・155・347出土土器（１）…79
第47図　ＳＫ154・155・347出土土器（２）…81
第48図　ＳＫ154・155・347出土土器（３）…83
第49図　ＳＫ154・155・347出土土器（４）…84
第50図　ＳＫ154・155・347出土土器（５）…85
第51図　ＳＫ154・155・347出土土器（６）…86
第52図　ＳＫ154・155・347出土土器（７）…87
第53図　ＳＫ159……88
第54図　ＳＫ164・346及び出土土器……88
第55図　ピット群（１）……91
第56図　ピット群（２）……93
第57図　ピット群（３）……95
第58図　溝状遺構２群……97
第59図　溝状遺構１群……97
第60図　ＳＤ278出土土器……98
第61図　溝状遺構3a群 ……98
第62図　溝状遺構3b群 ……99
第63図　溝状遺構４群……99
第64図　遺構外出土遺物（１）……103
第65図　遺構外出土遺物（２）……104
第66図　遺構外出土遺物（３）……106
第67図　遺構外出土遺物（４）……107
第68図　土師器坏・高台付坏分類図……115
第69図　須恵器坏・高台付坏分類図……117
第70図　赤焼土器坏・高台付坏分類図…119

図版目次

図版１　遺跡全景……３
図版２　坪掘り（Ａ地区）……４
図版３　Ａ地区遺構確認状況……５
図版４　Ｂ地区遺構確認状況……６
図版５　土層断面……10
図版６　ＳＫ16・17・18土層断面……16
図版７　ＳＫ16.17.18.25完掘状況 ……16
図版８　ＳＫ22・19他土層断面……19
図版９　ＳＫ20土層断面……19
図版10　ＳＫ22内土師器出土状況……19
図版11　ＳＫ19・20・22完掘状況……19
国版12　ＳＫ23土層断面……20
図版13　ＳＫ23完掘状況……20
図版14　ＳＫ28完掘状況……20
図版15　ＳＤ４土層断面……23
図版16　ＤＳ30調査状況……24
図版17　ＳＸ１確認状況……27
図版18　ＳＸ９確認状況……40
図版19　土師器堝出土状況……40
図版20　須恵器壺出土状況……40
図版21　須恵器甕出土状況……40
図版22　Ａ地区主要遺構完掘状況……52
図版23　Ａ地区主要遺構東半……53
図版24　Ａ地区主要遺構西半……53
図版25　Ａ地区出土遺物（１）……54
図版26　Ａ地区出土遺物（２）……55
図版27　Ａ地区出土遺物（３）……56
図版28　Ａ地区出土遺物（４）……57
図版29　ＳＢ101確認状況……58
図版30　ＥＢ106土層断面……60
図版31　ＥＢ108土層断面……60
図版32　ＥＢ112土層断面……60
図版33　ＥＢ114土層断面……60
図版34　ＳＢ101完掘状況……60
図版35　ＳＢ102確認状況……61
図版36　ＥＢ116土層断面……63
図版37　ＥＢ122土層断面……63
図版38　ＳＢ102完掘状況（北方より）……63
図版39　ＳＢ102完掘状況（西方より）……63
図版40　ＥＢ128土層断面……65
図版41　ＥＢ135土層断面……65
図版42　ＳＢ103完掘状況（北方より）……65
図版43　ＳＢ103完掘状況（西方より）……65
図版44　ＥＢ137土層断面……67
図版45　ＥＢ140土層断面……67
図版46　ＳＢ104確認状況（西方より）……67
図版47　ＳＢ104完掘状況（北西方より）…67
図版48　ＥＢ146土層断面……69
図版49　ＥＢ148土層断面……69
図版50　ＥＢ105完掘状況（南方より）……69
図版51　ＥＢ105完掘状況（北西方より）…69
図版52　ＳＥ156・157確認状況……72
図版53　ＳＥ156・157調査状況……72
図版54　ＳＥ158・157（土層断面）……72
図版55　ＳＥ156底面曲物出土状況……72
図版56　ＳＥ158土層断面……73
図版57　ＳＫ154・155確認状況……73
図版58　ＳＫ154東西土層断面（東半）…75
図版59　ＳＫ154東西土層断面（西半）…75
図版60　ＳＫ155・347東西土層断面……75
図版61　ＳＫ154・155南北土層断面……75
図版62　ＳＫ154遺物出土状況（１）……76
図版63　ＳＫ154遺物出土状況（２）……76
図版64　ＳＫ154遺物出土状況（３）……76
図版65　ＳＫ155遺物出土状況（１）……76
図版66　ＳＫ155遺物出土状況（２）……76
図版67　ＳＫ155遺物出土状況（３）……76
図版68　ＳＫ155遺物出土状況（４）……76
図版69　ＳＫ347遺物出土状況……76
図版70　ＳＫ154F6遺物出土状況 ……77

図版71　ＳＫ154・155・347完掘状況……77
図版72　ＳＫ159土層断面……88
図版73　27・22—35～38区のピット群…89
図版74　溝状遺構１，２群完掘状況……100
図版75　溝状遺構２，３群完掘状況……100
図版76　縄文土器壺出土状況……107
図版77　Ｂ地区主要遺構群完掘状況……108
図版78　Ｂ地区主要遺構群完掘状況……108
図版79　Ｂ地区ピット群完掘状況……109
図版80　Ｂ地区井戸・土壙群完掘状況…109
図版81　Ｂ地区出土遺物（１）……110
図版82　Ｂ地区出土遺物（２）……111
図版83　Ｂ地区出土遺物（３）……112

付表目次

第１表　Ｂ地区ピット群の深さ計測表…90
第２表　土師器（Ⅰ）分類表……114
第３表　須恵器（Ⅱ）分類表……116
第４表　赤焼土器（Ⅲ）分類表……118
第５表　図示遺物計測表（１）……120
第６表　図示遺物計測表（２）……121
第７表　Ａ地区破片集計表（１）……129
第８表　Ａ地区破片集計表（２）……131
第９表　Ｂ地区破片集計表（１）……133
第10表　Ｂ地区破片集計表（２）……139

Ⅰ　調査の経緯

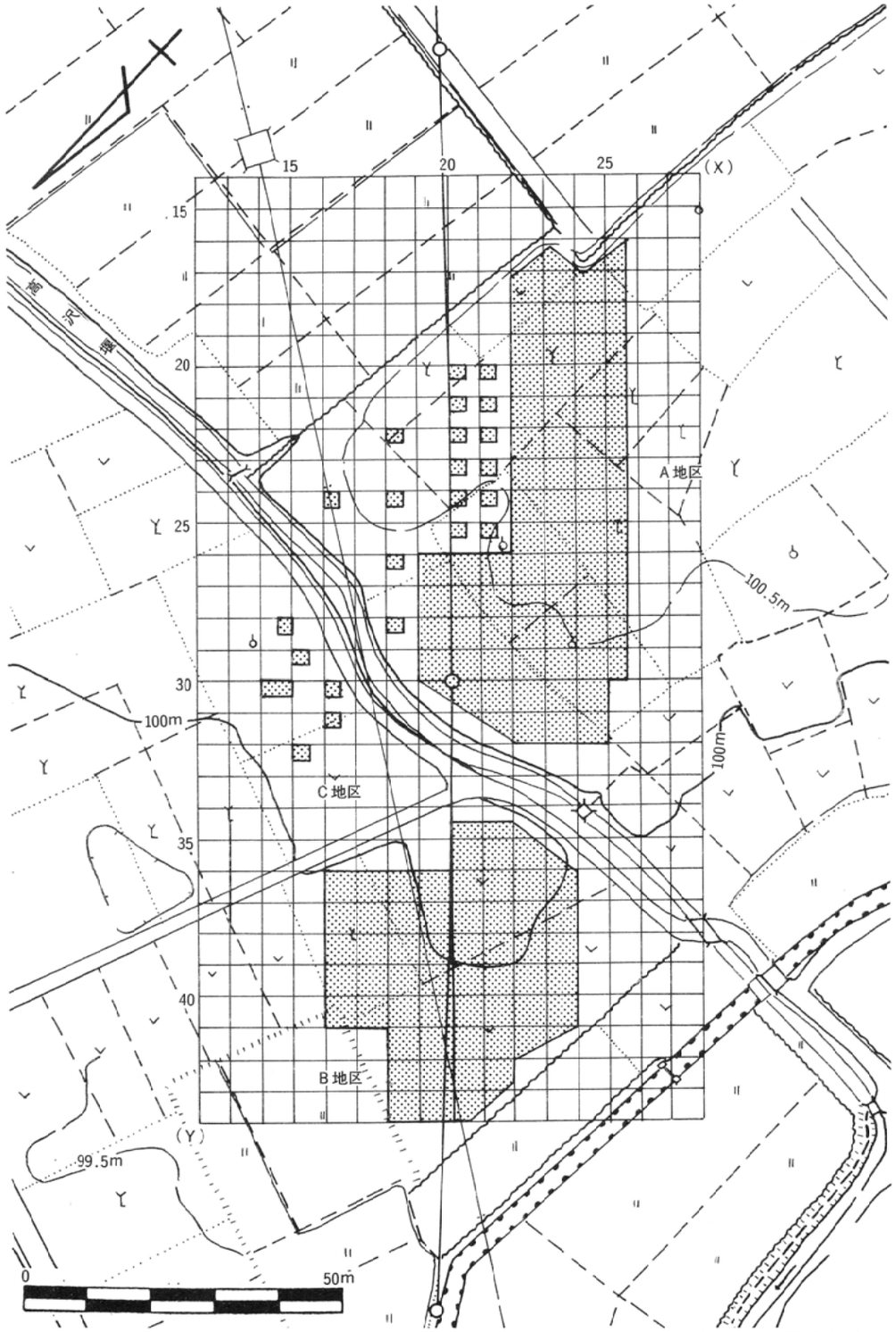
１　調査に至る経過

東北横断自動車道酒田線は，国土の普遍的開発をはかり画期的な産業の立地振興及び国民生活領域の拡大を期することを目的とした基幹高速道路である。宮城県仙台市を起点として山形県酒田市まで，その総延長は約156kmをはかる。このうち，山形市滑川から寒河江市高屋までの約16kmの区間は昭和48年10月19日に，また，山形市関沢から同滑川までの6.9kmの区間は昭和53年11月21日に整備計画が決定され，それぞれ同日に建設大臣から日本道路公団に対し施工命令が出された。路線の決定にあたっては，地形，地質，文化財の有無についての調査や，関連公共事業との調整が必要とされ，文化財については山形県教育委員会が主体となり，山形市滑川～寒河江市高屋間は昭和50～51年，山形市関沢～同滑川間は昭和55年度に分布調査を実施した（佐藤1977，名和・阿部編1981）。

分布調査は推定路線を中心として片側１km，両側で２kmを対象として行なわれた。その結果，滑川～寒河江間では新規発見20遺跡を含む54の遺跡が，また，関沢～滑川間では新規発見18遺跡を含む22遺跡の存在が確認された。このうち，滑川～寒河江間については試案ルートが200m幅に狭められた昭和51年に，この範囲に存在する10遺跡のうち山形市にひゃく寺遺跡，同上原古墳，同お花山古墳群，同境田Ａ，Ｃ遺跡，中山町物見台遺跡の６遺跡の試掘調査が行なわれている。

以上のような分布調査の結果も踏まえて，滑川～寒河江間は昭和54年に，また関沢～滑川間は昭和56年に正式な路線が決定されたが，滑川～寒河江間では山形市西の沢遺跡，同にひゃくじ遺跡，同お花山古墳群，同境田遺跡，中山町物見台遺跡の５遺跡の一部が路線にかかることが明らかになった。

山形県教育委員会では，これらの遺跡の保護対策について日本道路公団仙台建設局山形工事事務所・山形県土木部空港・高速道路対策室と数回にわたる協議をかさねた結果，用地買収後に順次記録保存のための緊急発掘調査を実施することで合意をみた。このなかで用地取得が比較的スムーズに進行した山形市見崎地区の境田Ｃ遺跡が，昭和56年度事業として緊急発掘調査の運びとなり，昭和55年10月30日に日本道路公団仙台建設局山形工事事務所立合のもと，表面調査による最終的な遺跡範囲の確定作業が行なわれた。この結果，高沢堰の北側（Ｂ・Ｃ地区）を新たに追加し，側道を含む路線内の遺跡面積約7,500m²が調査の対象となることが確定した。山形県教育委員会では，さきの試掘調査の結果も踏まえて経費の積算等を行い，昭和56年４月１日に日本道路公団仙台建設局と発掘調査委託契約を締結し，同年６月15日から発掘調査を実施することとなった。



第１図　遺跡全体図

2　調査の経過

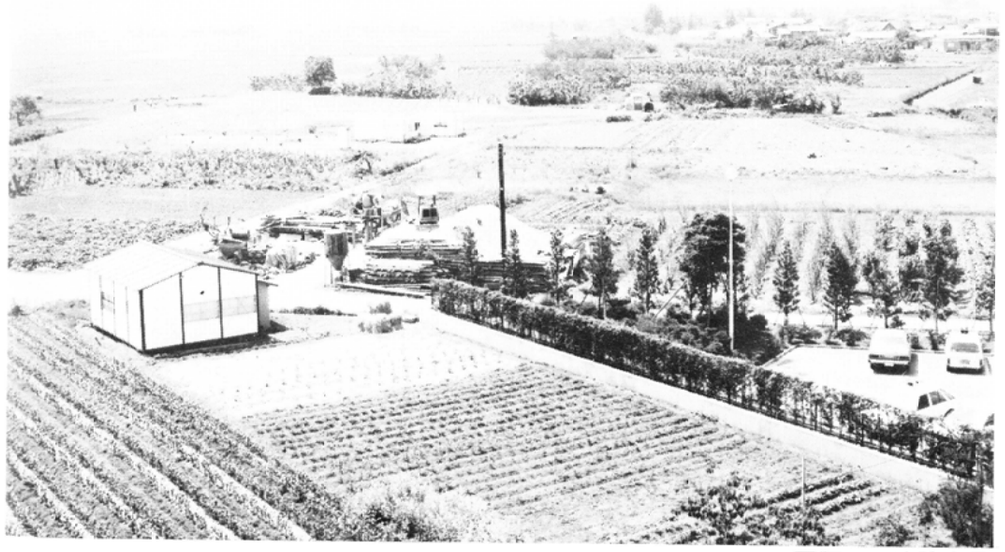
発掘調査は昭和56年６月15日から11月７日まで延86日間実施した。調査対象地区は遺跡の北部にあたる路線敷内で南北60m，東西140m，約7,500m²の面積をもつ。センターラインを基線として調査対象区内に５×５mのグリッドを組んで調査を進め，最終的に3,020m²について精査・実測を行った。なお，グリッド基線はN—43°—Wをはかる。また調査の便宜上，高沢堰の南側をA地区，北側の農道を挟んだ西側をB地区，東側をC地区と呼ぶことにした。調査は設定したグリッドをさらに４分し，2.5×2.5mの小グリッドの坪掘りから開始し，遺構・遺物の集中する地区を拡張・精査するという方法をとった。なお，A地区は排土置場の都合上，X軸22の線を境としてII期に分けて拡張・精査を行った。以下に，その経過を記す。

６月15～19日

15日に器材の搬入，鍬入式，グリッドの設定を行う。16日から坪掘りに入り，19日までほぼ終了する。A地区の南端，B地区に遺構・遺物の集中がみられる（図版２）

６月22～26日

A地区の22～25—18～29区（18×60m）を３区画に分け，バックホーで表土除去を行う。B地区は表土直下が地山となるため，手掘りで拡張することになり，一部拡張作業を開始。



図版１　遺跡全景

6月29～7月3日

A地区のバックホーで表土を除去した22～25―22～29区のII層を掘り下げ，地山面（III層）の面精査を行う。大溝跡1基，溝跡2基，土壙3基を確認する（図版3）。

7月6～10日

降雨によりA地区水没。B地区の粗掘りを行う。18～19―38～41区，20～23―34～39区の約700㎡が終了。柱穴と思われるピット多数，土壙，溝跡等を検出する（図版4）。

7月13～17日

先週に引続きB地区の18～23―40～43区など約500㎡の粗掘りを行う。ピットや，平行に走る溝群多数を確認。土師器，須恵器などの平安時代の遺物の他，縄文晩期の土器も出土。

7月20～24日

16日の梅雨あけ宣言により降雨の心配が消えたため，再びA地区の調査に入り，22～25―16～21区の粗掘り，面精査を行う。X軸24以西に大量の土器を含む落込みを検出。

7月27～31日

A地区の遺構精査。24～25―16～20区の大きな落込みＳＸ１の覆土の掘り下げを中心に調査を進める。この底面でＳＤ５，７，ＳＸ９，ＳＰ10～14等を確認する。

8月3～10日

図版2　坪掘り（A地区）

A地区の遺跡精査，平面実測。ＳＸ９と，その精査の際に確認したＳＫ16～18，19～20，22，28等の土壙，その他の溝，落込み等の精査を行い，22～25―16～24区の実測を行う。

8月17～21日

B地区の面精査。ジョレンによる面精査で遺構の確認作業を行う。20～21―37～38区で3×2間の掘立柱建物跡を検出（ＳＢ101）。他に組み合せ不明の多数の柱穴を確認。

8月24～28日

22～23日の台風による大雨で馬見ケ崎川が氾濫し遺跡も冠水する。このため，再びB地区の面精査を行う。新たに掘立柱建物跡4棟，土壙・井戸跡等5基を検出。また，C地区は補足調査を行い終了する。25日に新規発見の境田C′，D遺跡の取扱いについて協議。

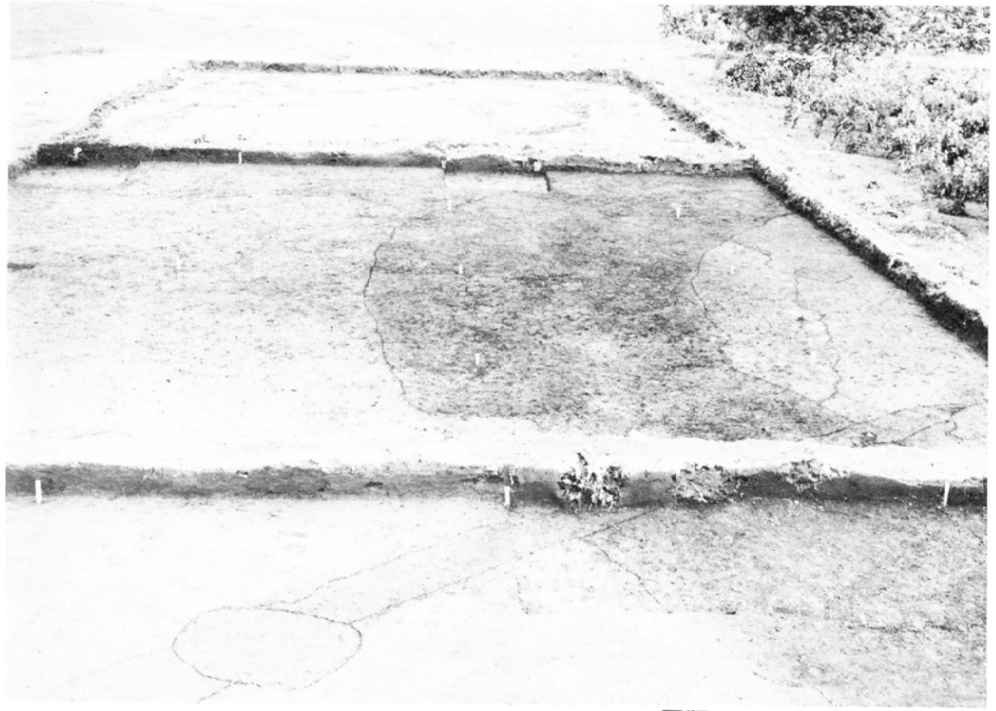
8月31～9月4日

B地区の遺構の精査。掘立柱建物跡の柱穴，ＳＫ154，155，159，ＳＥ156～158の精査と断面実測。このうちＳＫ154，155から多量の土器が出土。A地区のＳＤ30の精査。

9月7～9月11日

ＳＥ156等，B地区の遺構精査は9日に完了。10日から平面実測に入る。A地区の26～31―19～21区とB地区の16～17―36～41区を重機で拡張。7月の現地説明会に62名が参加。

9月16～18日



図版3　A地区遺構確認状況

B地区の平面実測，レベリング完了。先週重機で拡張したA地区の19～21—26～31区，B地区の17～18—36～41区の面精査を行う。B地区で大きな落込みＳＸ353と溝跡を確認。

9月21～25日

B地区の写真撮影の後，掘立柱建物跡の掘り方のたちわりを行う。A地区はＳＤ30，39，43，ＳＫ40～42，44，ＳＸ545の精査が終了し，平面実測に入る。

9月28日～10月２日

A地区19～25—26～31区の平面実測完了。B地区の掘り方のたちわりとその断面実測の後,ダメ押しのため全体的に地山層を掘り下げる。この際,Ⅲ層から縄文土器１個体が出土。

10月５～９日

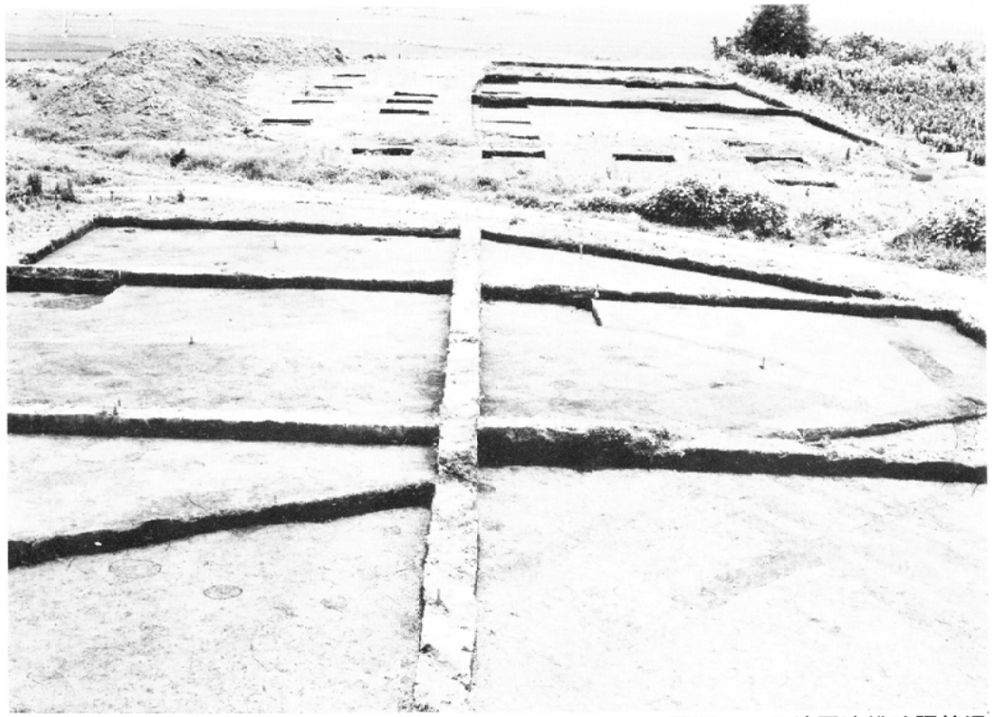
先週に引続きB地区の一段高い18～23—34～39区の地山層（Ⅲ層）を約10cm掘り下げ，面精査を行う。その後，掘り方，ピットを完掘し平面図の補足を行う。また，この作業と平行して，17～18—36～41の拡張区の精査と平面実測を行い，B地区の調査を終了する。

10月21～23日

境田C′遺跡の調査が，来年度事業となったため，器材，遺物を梱包し，現場を撤収する。

11月４～７日

重機を使用して，埋戻しを行い，調査を完了する。



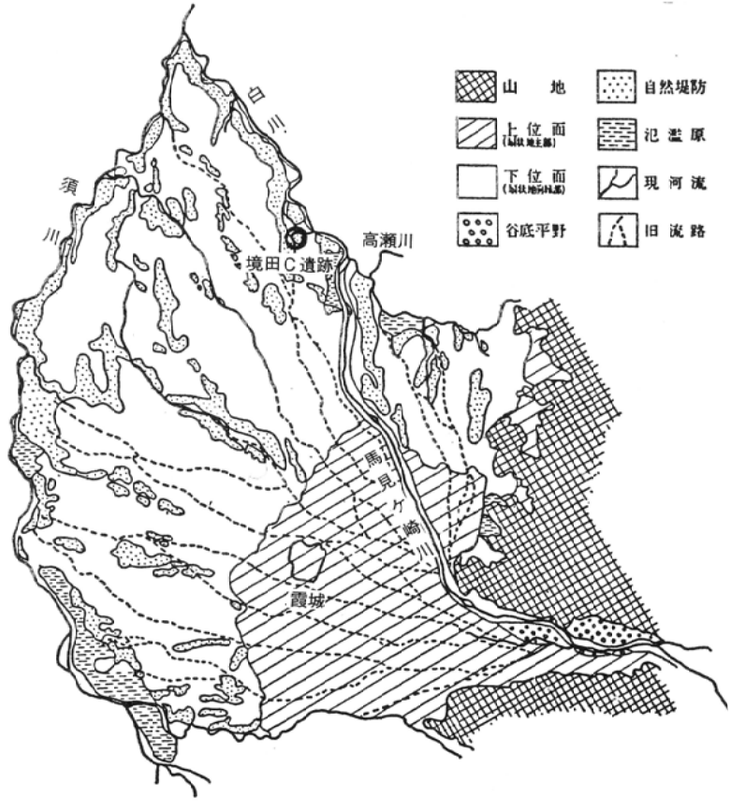
図版４　B地区遺構確認状況

II　遺跡の概観

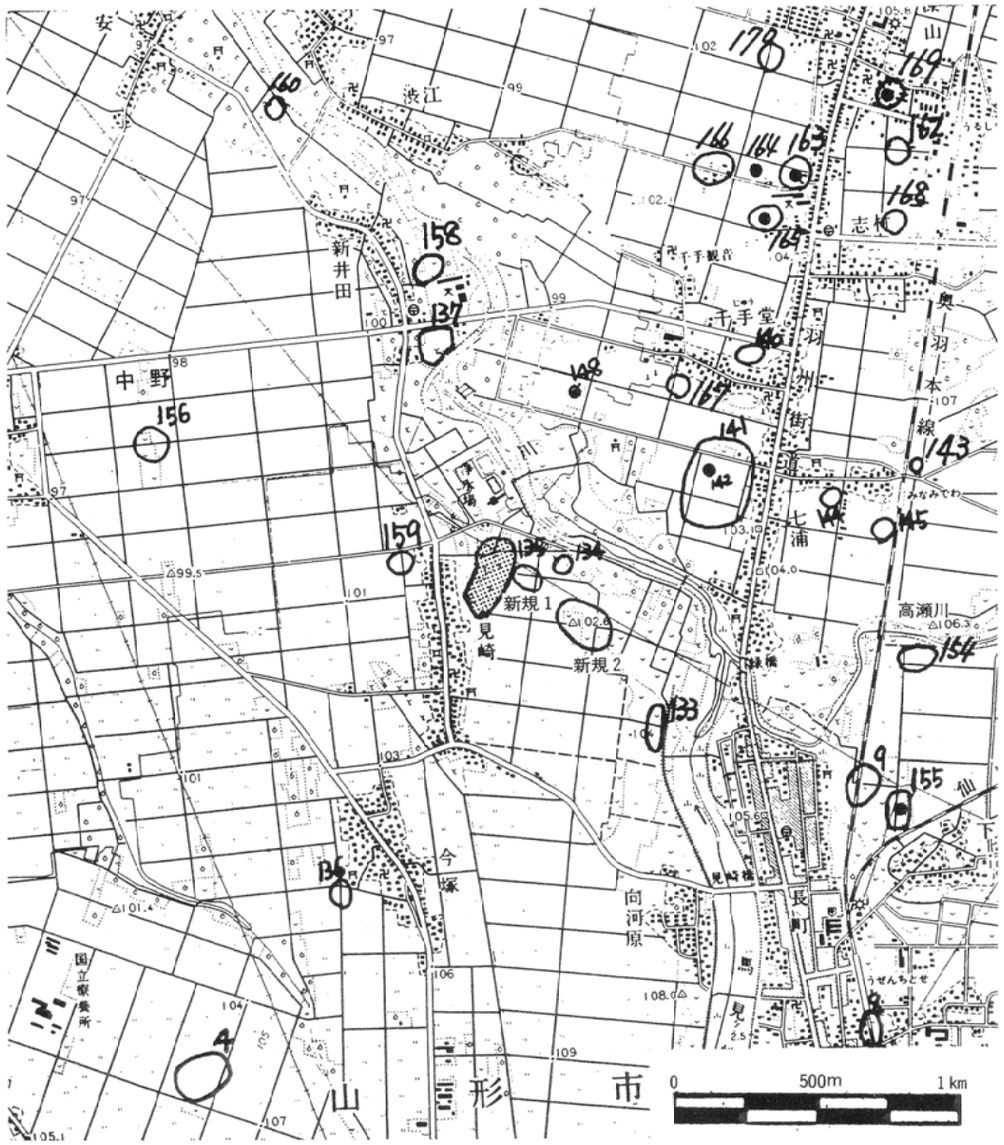
1　立　　地（第２～３図）

山形市北部では，奥羽山脈を源とする立谷川，高瀬川が西流し，この二つの川による複合扇状地を形成している。また，西流する馬見ケ崎川は盃山の麓で北北西に向きを変え，七浦付近で高瀬川と合流し，白川となって蛇行を繰り返しながら須川に注ぎ込んでいる。現在の河道は藩政時代初期に人為的に固定されたものとされ，それ以前は，旧県庁付近から江俣・陣場の南方を通って，鮨洗の北で須川に合流していたことが，最上氏時代末期の山形城下図などに記されている。また，この馬見ケ崎扇状地は，形成過程の途次にあることから，扇状地面のほとんどすべてが氾濫の危険地帯であり，しばしば流路が変ったことが地形学的に明らかになっている（第２図，米地1973）。これらの河川によって形成された扇状地末端には湧水地帯があり，さらにそれに続く低湿地（扇状地前縁部）中には自然堤防が発達し，その間をぬって湧泉地を源とする細く浅い流路が多数放射状，ないしは網状にひろがっている（山形・米地1967）。

境田C遺跡は，山形市街の北方約４kmに位置し，馬見ケ崎川や高瀬川によって形成された自然堤防上に立地している。標高は約100mをはかり，桑や果樹などの畑地として利用されている。この自然堤防は，今回の発掘調査により縄文時代晩期中葉には，その堆積作用が終了していたことが明らかとなった。馬見ケ崎扇状地の扇央～扇端部が，弥生・古墳時代以降も不安定な状態が続いた（佐藤他1979）のに対し，縄文時代晩期にすでに形成作用が終了した自然堤防とその後背湿地



第２図　馬見ケ崎川氾濫流路と地形面区分（米地1973より）



No.	遺跡名	立地	時期	No.	遺跡名	立地	時期	No.	遺跡名	立地	時期	No.	遺跡名	立地	時期
4	嶋	自然堤防	古墳～奈良	140	千手堂大門	扇端	平安	155	白山堂前	扇端	古墳	165	衛守塚4号墳	扇端	?
8	長町北河原	扇端	弥生後期	141	七浦	扇端	弥生～古墳	156	服部	自然堤防	平安	166	井守塚	扇端	平安
9	西の神	平地	弥生後期	142	七浦古墳群	平地	古墳	158	新井田	自然堤防	平安	167	南河原	扇端	弥生後期
133	境田A	自然堤防	平安	143	大明神	扇端	?	159	見崎	自然堤防	平安	168	北道上B	扇端	?
134	境田B	自然堤防	平安	144	五反	扇端	古墳後期	160	渋江	自然堤防	奈良	169	柴崎古墳群	扇端	古墳後期
135	境田C	自然堤防	縄文～平安	145	七浦二の堰	扇端	弥生	162	北道上A	扇端	弥生中期	170	漆山	扇端	弥生中期
136	今塚	自然堤防	弥生後期	148	狐2号山墳	扇端	古墳後期	163	衛守塚	扇端	古墳中～後期	新規1	境田C′	自然堤防	縄文～平安
137	天神	自然堤防	平安	154	下柳C	扇端	?	164	衛守塚2号墳	扇端	古墳前期	新規2	境田D	自然堤防	弥生～中世

第3図　遺跡位置図

は，稲作を生産基盤として弥生文化の到来によって，集落立地のうえで好条件を備えた場所となったものと思われる。

この事実を反映するように，境田C遺跡の周辺の自然堤防上や，扇端には弥生時代中期～平安時代にかけての多くの遺跡の存在が知られている。

2　周辺の遺跡（第3図）

本遺跡と周辺の立谷川扇端，馬見ケ崎川，高瀬川の自然堤防上の遺跡のなかで最も古いのは，本遺跡と，隣接する境田C′遺跡で，縄文時代晩期中葉の土器が，自然堤防形成期の最終末の堆積土中から出土している。

弥生時代に入ると，安定した自然堤防上と扇端部に多くの遺跡が立地し，県内においても屈指の遺跡群となっている。このうち，七浦遺跡，今塚遺跡，江俣遺跡からは石庖丁が，江俣遺跡から籾の圧痕のある土器片が出土し，水稲農耕文化を証拠だてている（加藤1973）。

古墳時代の遺跡も豊富である。このうち，明治12年に発掘された衛守塚二号墳は割竹形木棺をもち，副葬品として，櫛，弓，曲物等の残片や南小泉II式に属する土師器が出土している。山形市の菅沢二号墳，大之越古墳と並び，山形盆地では最も古い古墳とみられる（柏倉1953，加藤1973，川崎他1979）。また，古墳時代後期～奈良時代前半の農耕集落として国指定史跡嶋遺跡が著名である。昭和37～39年にかけ6次にわたる発掘調査が行なわれ，住居跡3棟，倉庫跡3棟の他，多数の柱痕，建築材が検出されている。出土遺物には引田～栗囲式の土器の他，はしご，たてきね，つち，容器，柄杓，つりかぎ等の生活用品，鍬鋤，手鋤，田下駄の生産用具，弓，矢，鞍橋の武具，紡織機，櫛等の木製品，管玉耳飾等の装身具，等々，低湿地ならではの多くの遺物がある（柏倉他1968）。古墳時代の終末期には箱形石棺をもつ，七浦，衛守塚，柴崎の各群集墳が知られている。

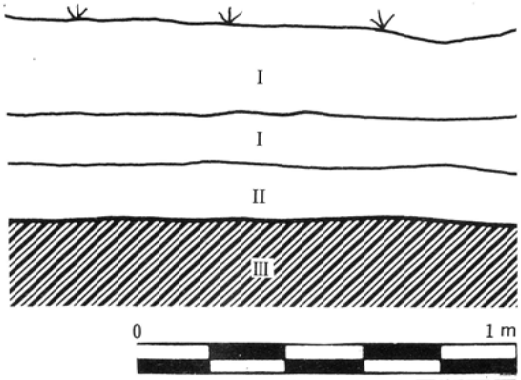
平安時代に入ると，自然堤防上に立地する遺跡が多くなる。特に白川左岸には境田A，境田B，境田C，境田C′，境田D，見崎，天神，新井田の各遺跡が鈴なりに存在する。これらの遺跡が同時期に存在したという可能性は薄いにしても，後背湿地を利用した水田経営が一段と安定したことに疑う余地はないであろう。

3　層　　序（第4図　図版5）

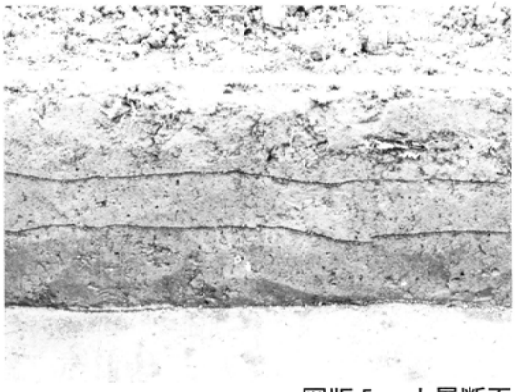
調査区の層序は，A・C地区，B地区で異なったあり方を示す。B地区では層厚約20cmの褐色シルト（耕作土）の直下が平安時代の遺構確認面である青灰色砂質シルト（縄文時代晩期の遺物包含層で約20cmの層厚をもつ）となり，以下，青灰色細砂（5cm），赤褐色粗砂（15cm），青灰色粘土（10cm）と続く。しかし，遺構確認面以下の層序は全体の傾向として砂と粘土の互層となっているが，地表下約120cmにある黒粘土（図版54）までの堆積土は各地区によって層厚もまちまちで，玉葱の皮のような状況を呈している。

A・C地区の基本層序は次に示すとおりである。

II層	褐色砂質シルト	耕作土で攪乱が著しい。層厚は20～25cm。
I′層	褐色シルト	炭化物を若干含む。X軸24以北に存在。層厚は5～20cm。
II層	暗褐色粘土質シルト	平安時代の遺物包含層である。層厚は15～20cm。
III層	明褐色粘土質シルト	平安時代の地山で縄文時代晩期の遺物包含層である。



第4図　土層断面図



図版5　土層断面

4　遺構と遺物の分布（第5・6図）

本遺跡からは，掘立柱建物跡，井戸跡，土壙，ピット，溝状遺構などの遺構が検出され，土器など整理箱で35箱の遺物が出土した。出土した遺物は，縄文時代晩期中葉，弥生時代中期末，古墳時代前期，平安時代の土器と，石器，古銭，鉱滓などがあるが，その大半は平安時代の土師器・須恵器・赤焼土器である。

A地区では約1600m²の精査を行った。遺構はX軸24以南，Y軸21以東にある落入みＳＸ１の底面で確認したものが多い(図版22)。遺物もこの地区のII層やＳＸ１の覆土，各遺構の覆土中に集中して発見された。ＳＸ１の底面で確認した遺構には土壙，溝，ピット，性格不明の落込みがある。これらの間には３～４時期の重複関係が認められる。ＳＤ４は南→北に流れる溝で，浅くて大きな落込みＳＸ６に注ぎ込んでいる。Y軸21以西にある大溝ＳＤ30から，ＳＤ43が掘られている。また，南北方向の溝ＳＤ39はＳＤ30を切り，ＳＫ41，42に切られている。なお，21―27区III層から縄文土器（粗製深鉢）１個体分が出土した。

B地区では約1400m²の精査を行い，その中央部を中心に多数の遺構を検出した。このうち，掘立柱建物５棟と多数のピット群は幅10～20mの自然堤防の頂部と思われる高まりに帯状の分布を示す。また，ＳＥ156～158の３基の井戸跡と，ＳＫ154，155，347の３基の土壙は切合って，あるいは近接して発見されており，掘立柱建物跡とのセット関係が注目される。溝群は，これらの遺構を囲むように，あわせて４群が確認されたが，時期は明らかではない。遺物の大半は19～20―37～39区と，ＳＫ154，155，347の覆土から出土している。

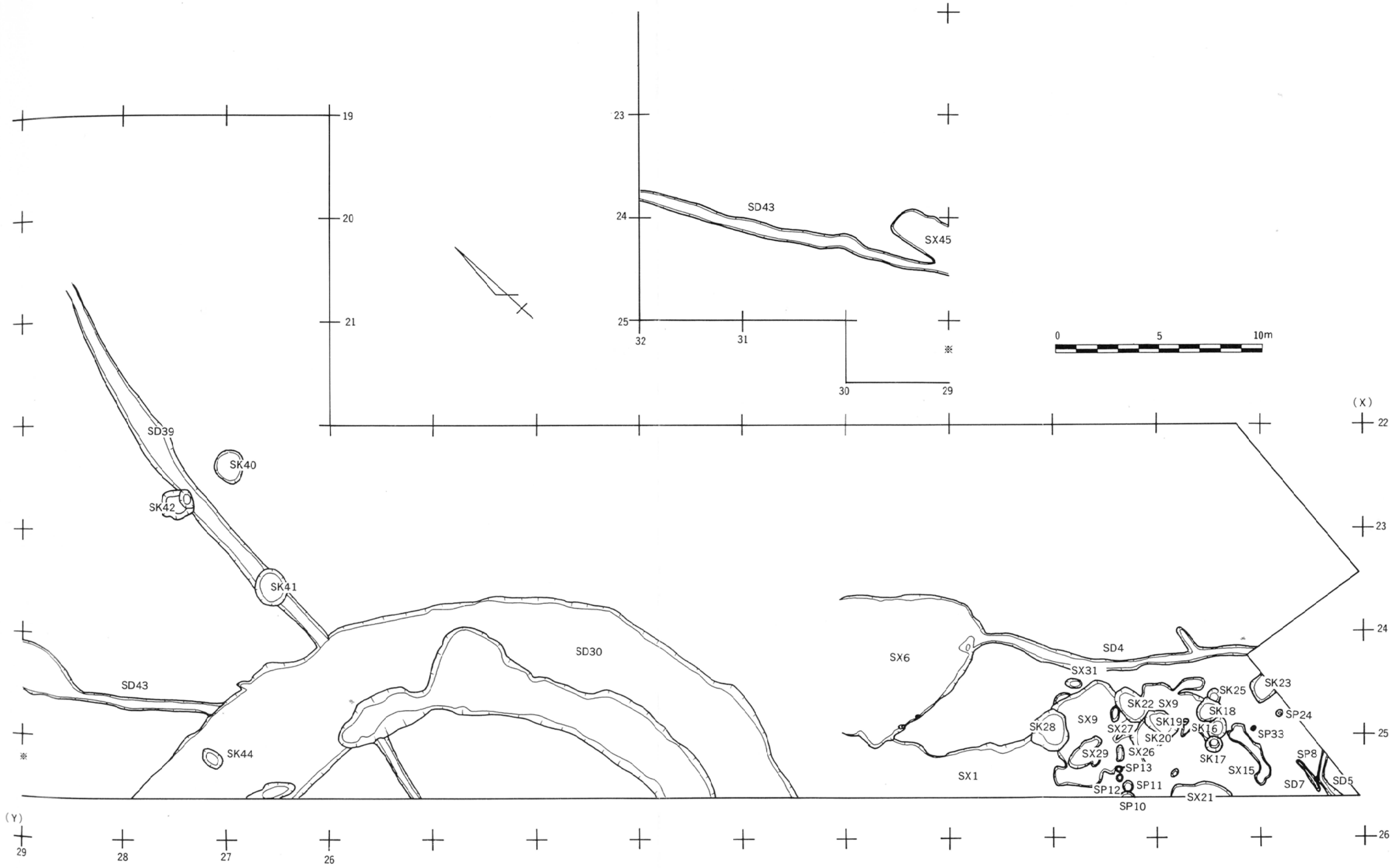
C地区からは土器の小破片が出土しただけで，遺構の検出はなかった。

cm。

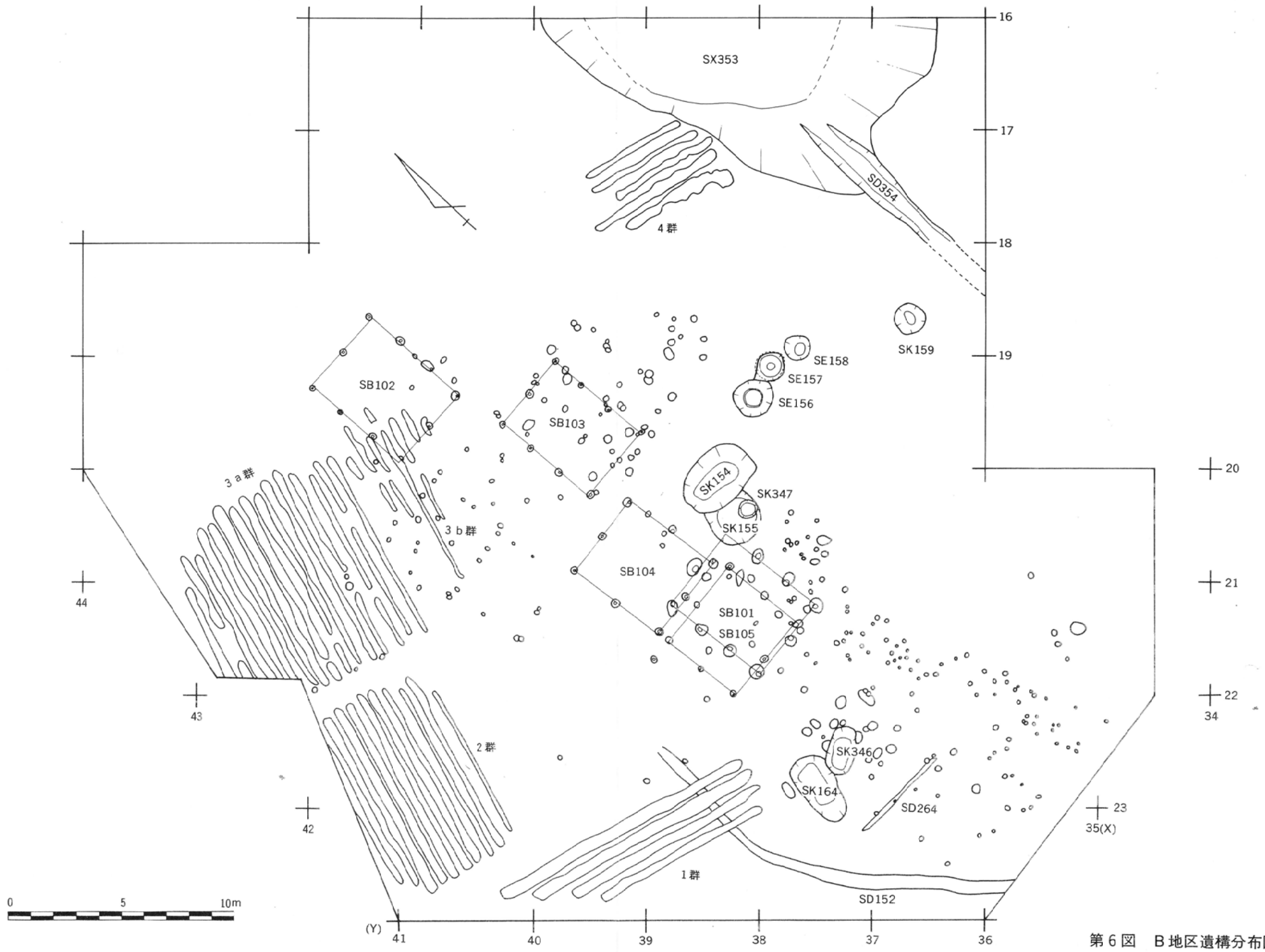
断面

され，
時代
半は

ＳＸ
遺構
，性
は南
大溝
41，
た。
のう
りに
の土
目さ
らか
る。



第５図　Ａ地区遺構分布図



第6図　B地区遺構分布図

Ⅲ　A地区発見の遺構と遺物

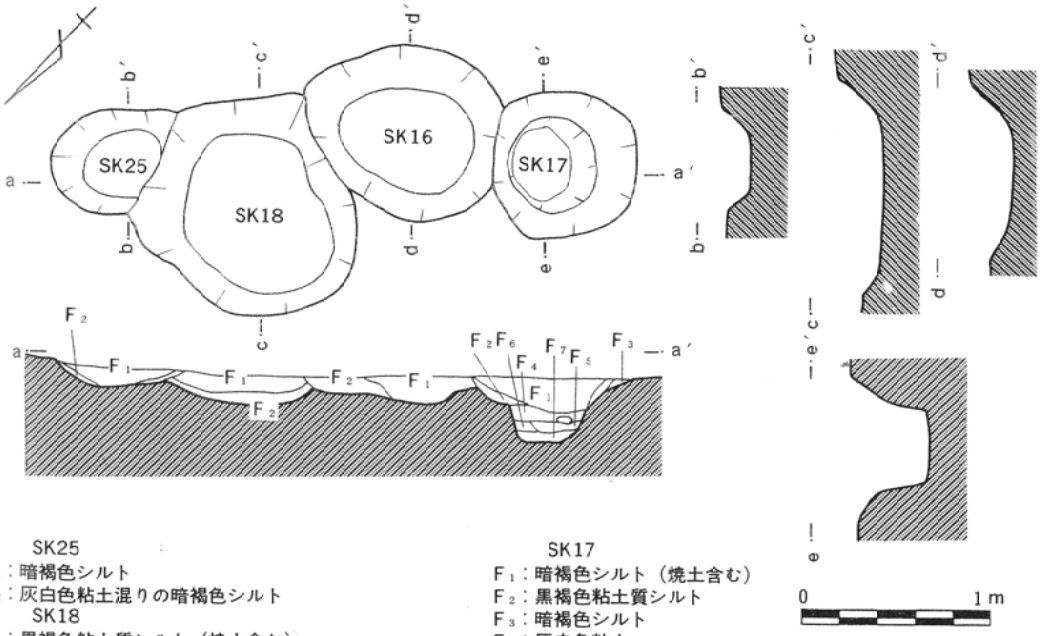
1　土　壙

A地区では13基の土壙を登録した。その出土遺物も含め以下に記す。

1）　ＳＫ16・17・18・25（第７～８図　図版５～６）

24・25―17区においてＳＸ１の底面で確認した。その新旧関係は，古い順に18→16→17となり，25は18を切っている。また，これらの土壙と重複する落込みＳＸ９は，ＳＫ18を切り，16，17，25に切られている。したがって，ＳＫ18は，ＳＫ28等とならび，A地区では最も古い時期の所産とみることができる。平面形は四者とも略円形で，径はＳＫ18が100～120cm，16が90～100cm，17が70～80cm，25が50～70cmであり，確認面からの深さは，それぞれ22cm，20cm，42cm，12cmをはかる。底面は四者とも平坦で，ＳＫ17以外はほぼ全周でゆるやかに立ち上がる。ＳＫ17は底面から急傾斜で立ち上がり，中ほどでくの字状に折れ曲って上面に達する。

覆土はＳＫ18，16，25でそれぞれ２層に，ＳＫ17で７層に分けられる。遺物はＳＫ18，16で土師器，須恵器，赤焼土器が，17で土師器，赤焼土器が出土している。



SK25
F₁：暗褐色シルト
F₂：灰白色粘土混りの暗褐色シルト

SK18
F₁：黒褐色粘土質シルト（焼土含む）
F₂：黒褐色粘土質シルト

SK16
F₁：暗褐色砂質シルト
F₂：黒褐色粘土質シルト

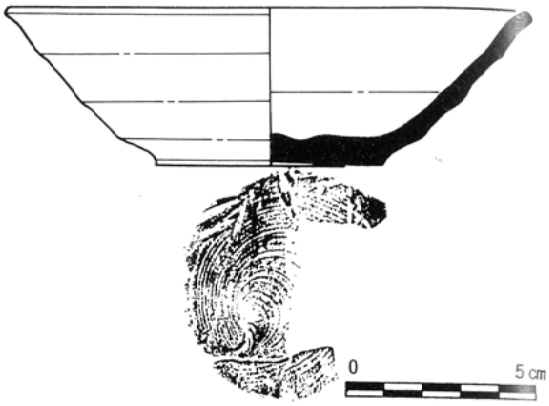
SK17
F₁：暗褐色シルト（焼土含む）
F₂：黒褐色粘土質シルト
F₃：暗褐色シルト
F₄：灰白色粘土
F₅：黒色シルト質粘土
F₆：灰褐色粘土
F₇：黒褐色シルト質粘土

第７図　ＳＫ16・17・18・25

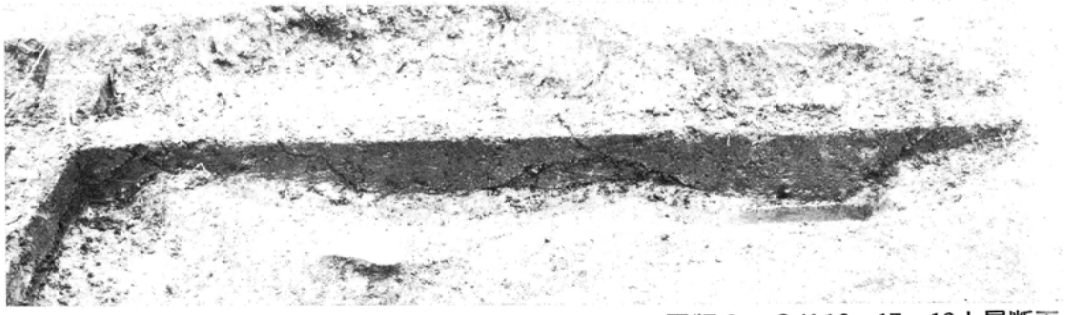
第８図はＳＫ18から出土した須恵器坏である。器高は低く，底部からほぼ直線的に立ち上がり，そのまま外傾している。内面はロクロナデにより平滑に仕上げられているが，外面の凹凸は激しい。底部切り離し技法は回転糸切りである。

破片は第７・８表に示した。

２）　ＳＫ19・20・22（第９・10図　図版８～11）



第８図　ＳＫ18出土土器



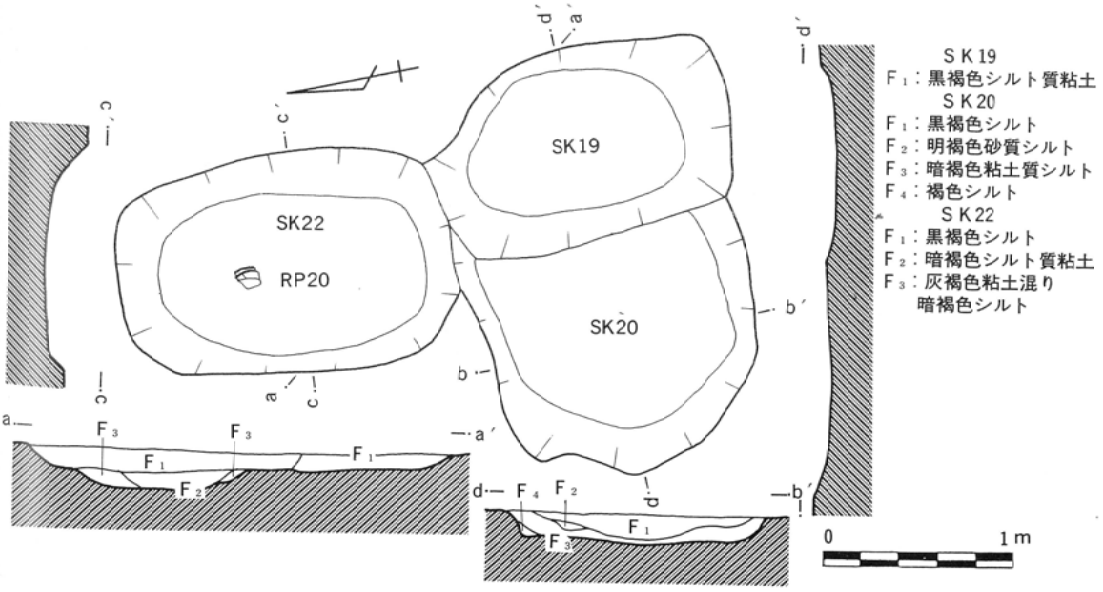
図版６　ＳＫ16・17・18土層断面

図版７　ＳＫ16・17・18・25完掘状況

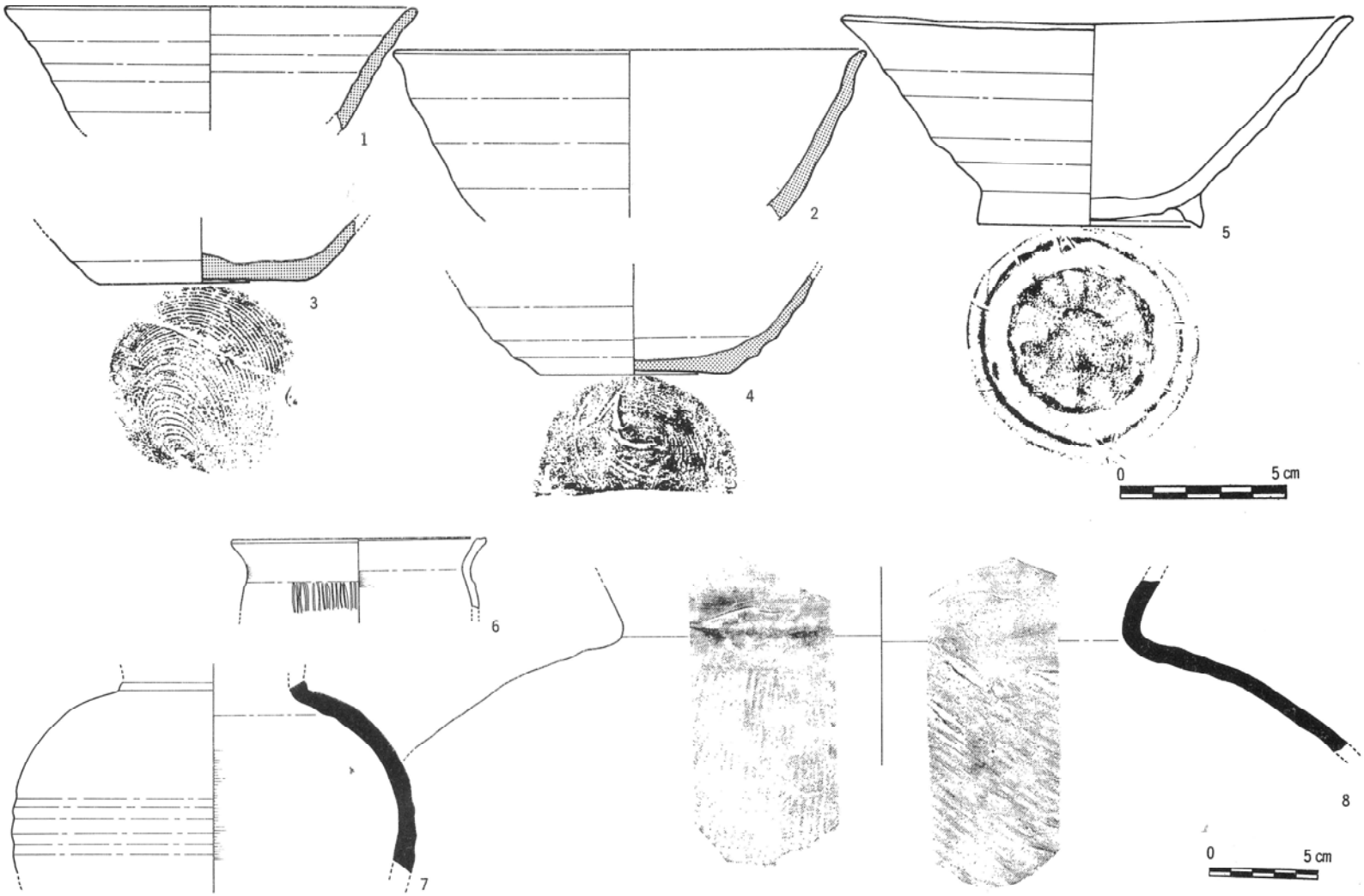
24・25—17・18区にあるＳＸ１の底面で重複して確認された。その新旧関係は古い順に20→19→22となり，ともに，これらの土壙と重複する落込みＳＸ９を切っている。平面形は三者とも楕円形である。ＳＫ22は長径178cm・短径117cm・深さ20cm，ＳＫ19は長径150cm・短径102cm・深さ10cm，ＳＫ20は長径170cm前後・短径145cm・深さ16cmをはかる。また，主軸方向はそれぞれＮ—11°—Ｅ，Ｎ—１°—Ｗ，Ｎ—82°—Ｗとなっている。ＳＫ19.20はともに底面がほぼ平坦で，ゆるく立ち上がっている。ＳＫ22も平坦な底面であるが，部分的に段をもっている。覆土はＳＫ22で３層，ＳＫ19で１層，ＳＫ20で４層に分けられた。

ＳＫ22からは土師器，須恵器，赤焼土器が出土している。第10図５は土師器の高台付坏である。坏体部は底部付近でやや丸味をもち，体部下半から直線的になり，そのまま外傾している。高台部は短かく外傾する。底部には高台部接合の際の調整により，菊花紋のような放射状のナデつけが見られる。内面は大部分が剝落現象を起こしているため断定はできないが，ヘラミガキによる調整が施されているようである。黒色処理は施されていない。７は須恵器の壺である。頸部から上と，体部下半が欠損する。体部は球形を呈し最大径はこの中央部にある。内面に横方向のカキ目が施されている。８は須恵器の甕で頸部径は約240㎜をはかる。内外面に平行タタキ，アテ痕がみられる。

ＳＫ19からも土師器，須恵器，赤焼土器が出土している。このうち図示できたものは赤焼土器の坏だけである。口径が127㎜とやや小形，体部中央から直線的に外傾するもの（第10図１），口径が146㎜と大形で口縁部がやや外反するもの（同図２）がある。また，３・



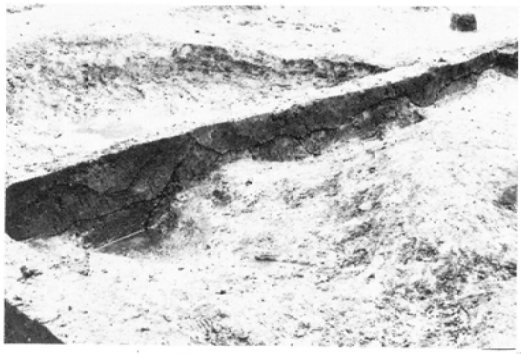
第９図　ＳＫ19・20・22



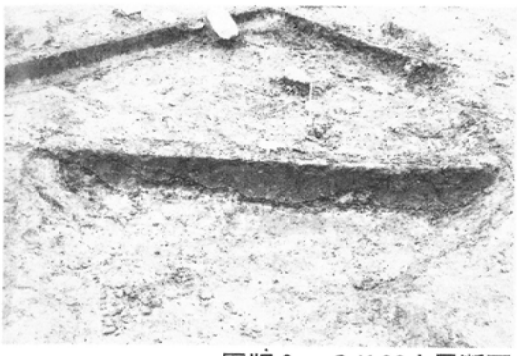
第10図　ＳＫ19・20・22出土土器

4は，回転糸切痕をもつ底部資料である。

第10図6はＳＫ20からら出土した小形の土師器甕である。口縁は単純に「く」の字状に外反し，頸部から上は内外面ともロクロナデが，体部外面には，縦方向の刷毛目が施されている。



図版8　ＳＫ22・19他土層断面



図版9　ＳＫ20土層断面

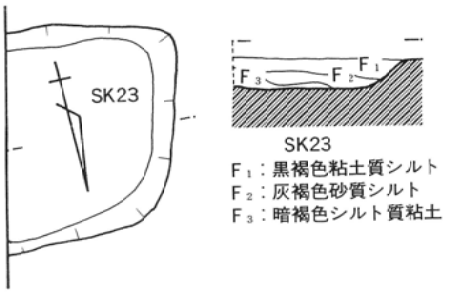
図版10　ＳＫ22内土師器出土状況

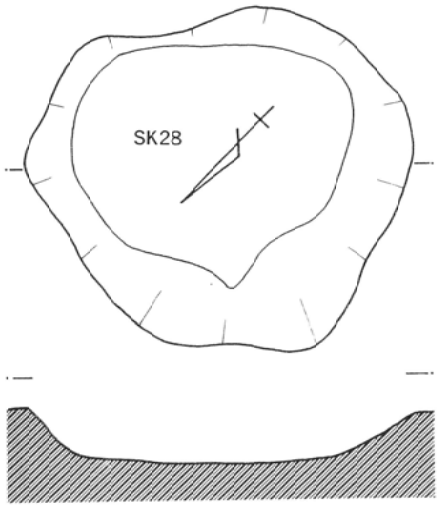
図版11　ＳＫ19・20・22完掘状況

3）　ＳＫ23，28（第11図　図版12～14）

ＳＫ23は16―24区においてⅢ層上面で確認された土壙である。その東半は調査区外となるため断定はできないが，平面形は，楕円形もしくは長方形になるものと思われる。短径が115cm，確認面からの深さは15cm前後をはかる。主軸方向はＮ―78°―Ｗをはかる。覆土は３層に分けられ，この中から土師器，須恵器，赤焼土器の破片が出した（第７・８表）。

ＳＫ28は24・25―18・19区においてＳＸ９の底面で確認されたＡ地区では最も古い遺構のひとつである。平面形は不整円形を呈し，径170～200cm，深さ25～30cmをはかる。底面は平坦でゆるやかに立ち上がり，暗褐色粘土質シルトの覆土から，土器片の出土がある。





第11図　ＳＫ23・ＳＫ28

図版12　ＳＫ23土層断面

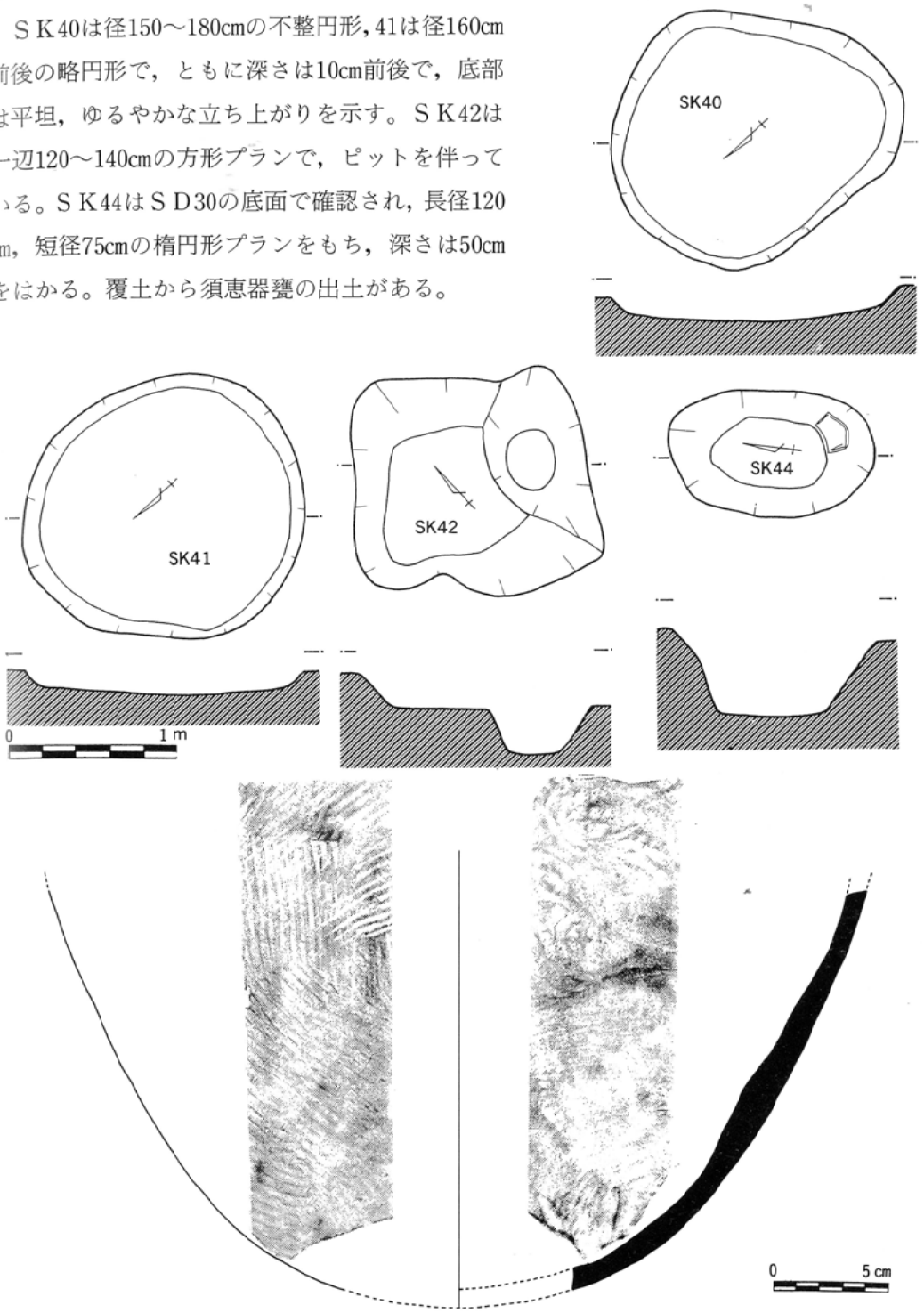
図版13　ＳＫ23完掘状況

図版14　ＳＫ28完掘状況

4） ＳＫ40，41，42，44（第12図）

ＳＫ40～42は22・23―26・27区のⅢ層上面で確認した土壙である。このうちＳＫ40―42はＳＤ30を切るＳＤ39を切っており，相当新しい時期の所産とみられる。

ＳＫ40は径150～180cmの不整円形，41は径160cm前後の略円形で，ともに深さは10cm前後で，底部は平坦，ゆるやかな立ち上がりを示す。ＳＫ42は一辺120～140cmの方形プランで，ピットを伴っている。ＳＫ44はＳＤ30の底面で確認され，長径120cm，短径75cmの楕円形プランをもち，深さは50cmをはかる。覆土から須恵器甕の出土がある。

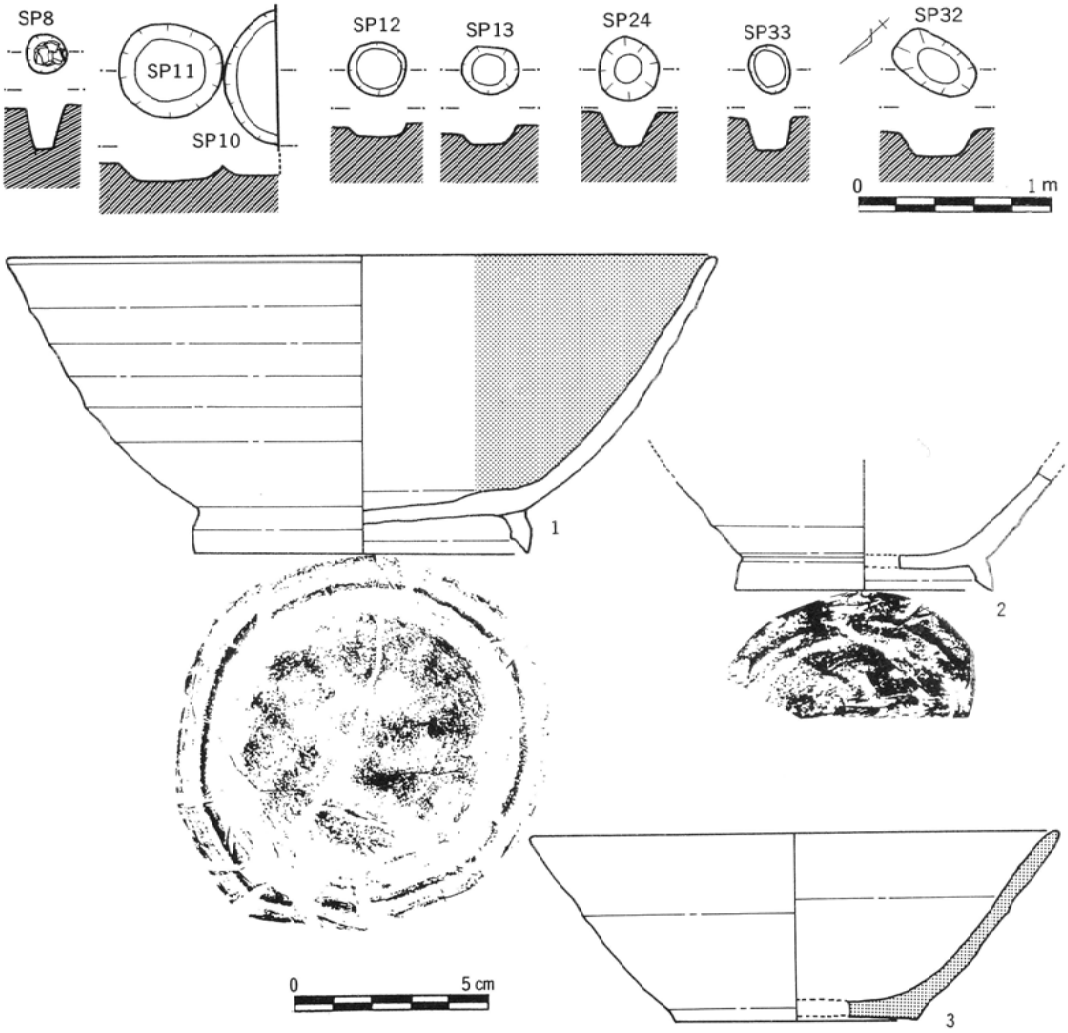


第12図　ＳＫ40・ＳＫ41・ＳＫ42・ＳＫ44及びＳＫ44出土土器

2　ピット（第13図）

いずれもＳＸ１の底面で確認された。確認面からの深度が20cm前後のＳＰ８，24，33と，10cm前後と浅いＳＰ10，11，12，13，32に分けられるが，アタリが認められるものはなかった。覆土はＳＰ８，10，11，12，32が黒褐色砂質シルト，ＳＰ13が暗褐色砂質シルト，ＳＰ24，33が黒褐色粘土質シルトであり，いずれも単一層である。

ＳＰ８，10から遺物の出土がある。第13図１はＳＰ８出土の土師器高台付坏である。坏体部はやや丸味をもって立ち上がり，体部下半から直線的になりそのまま外傾している。高台部は短かくやや外傾している。内面はヘラミガキ，黒色処理が施されている。３はＳＰ８出土の赤焼土器坏で，大きめの底部から直線的に外傾している。２はＳＰ10出土の土師器高台付坏で，剝落で内面の調整は不明である。１・２の底部に放射状ナデツケがある。



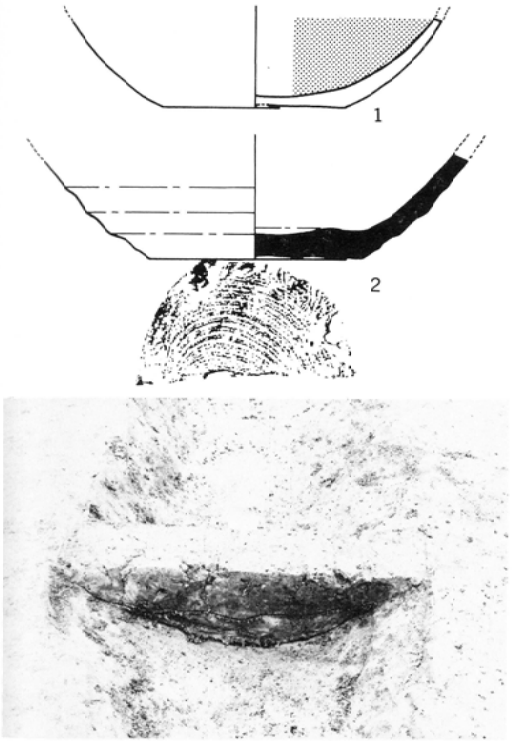
第13図　ピット及び出土土器

3　溝状遺構

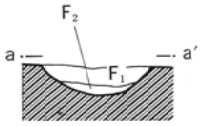
A地区では6本の大溝や溝状が遺構が検出された。

1）　ＳＤ４（第14図　図版15）

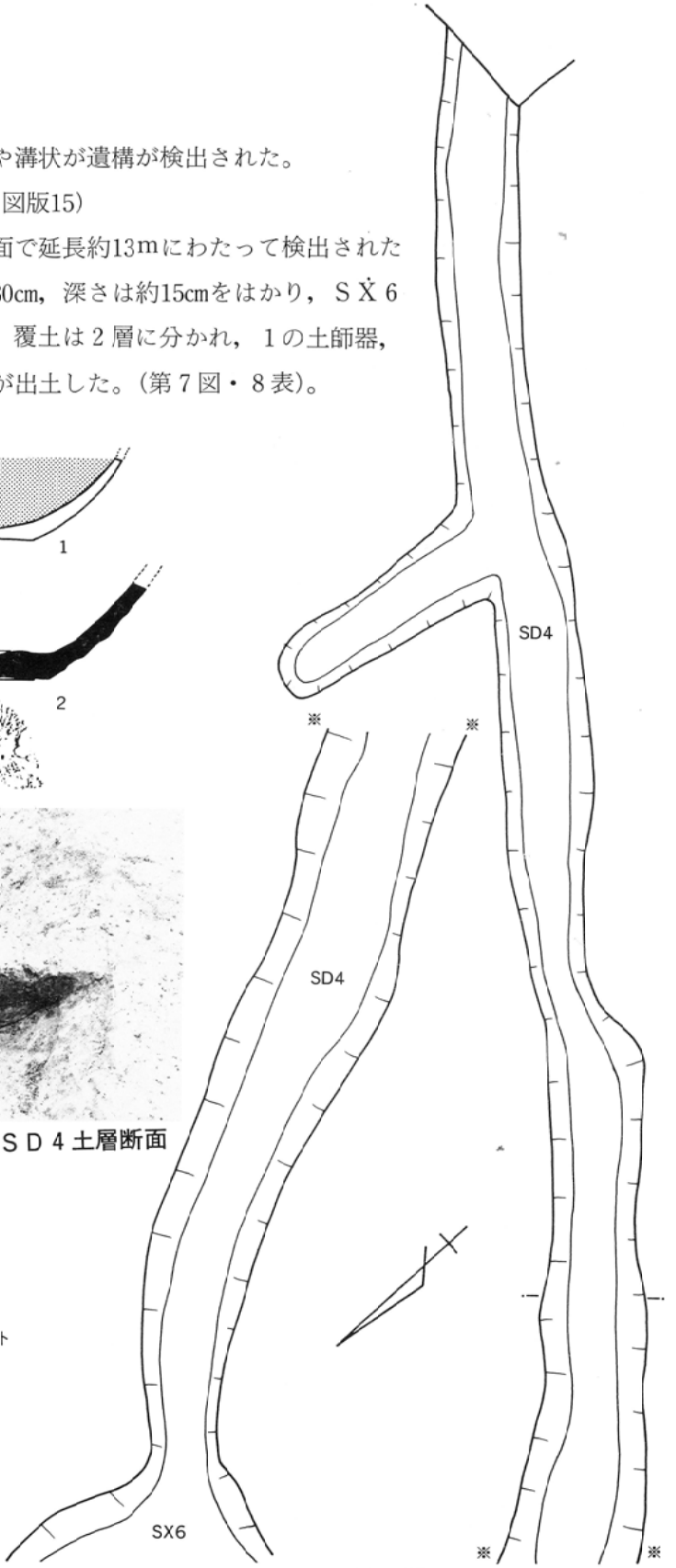
24—17～19区のⅢ層上面で延長約13mにわたって検出された溝状遺構である。幅30～80cm，深さは約15cmをはかり，ＳＸ6に近いほど絶対高は低い。覆土は2層に分かれ，1の土師器，2の須恵器坏の他土器片が出土した。（第7図・8表）。



図版15　ＳＤ４土層断面



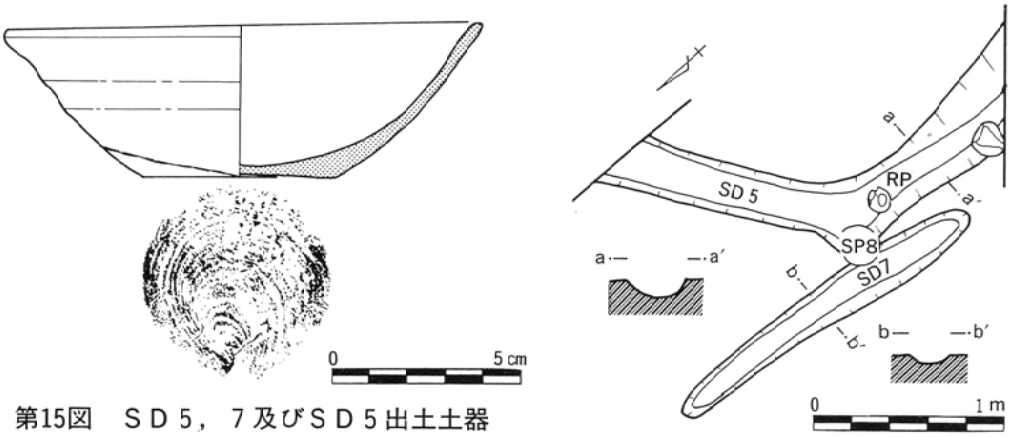
F1：黒褐色粘土質シルト
F2：暗褐色砂質シルト



第14図　ＳＤ４及び出土土器

2） ＳＤ５，７（第15図）

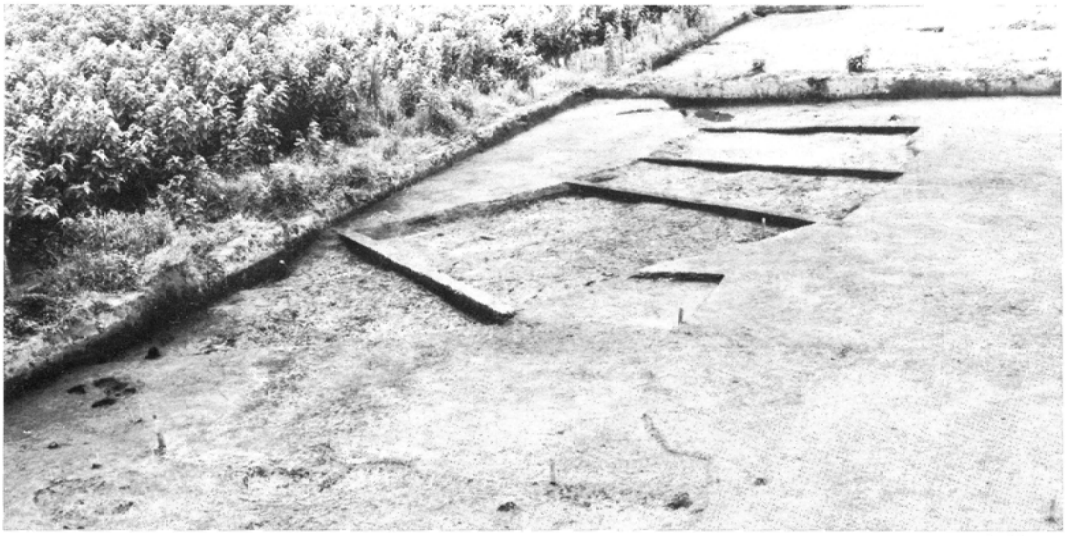
調査区の東端25―16区内においてＳＸ１の底面で検出された。ＳＤ５はやや開くＬ字状の溝で幅25～40cm，深さ10cmをはかる。覆土は黒褐色砂質シルトの単層で，底径が小さく内面の底部付近でゆるやかなカーブを描いて立ち上がる赤焼土器坏等の遺物の出土がある。ＳＤ７は長さ185cm，幅15～25cm，深さ５cm前後の浅い溝で，覆土はＳＤ５と同様である。



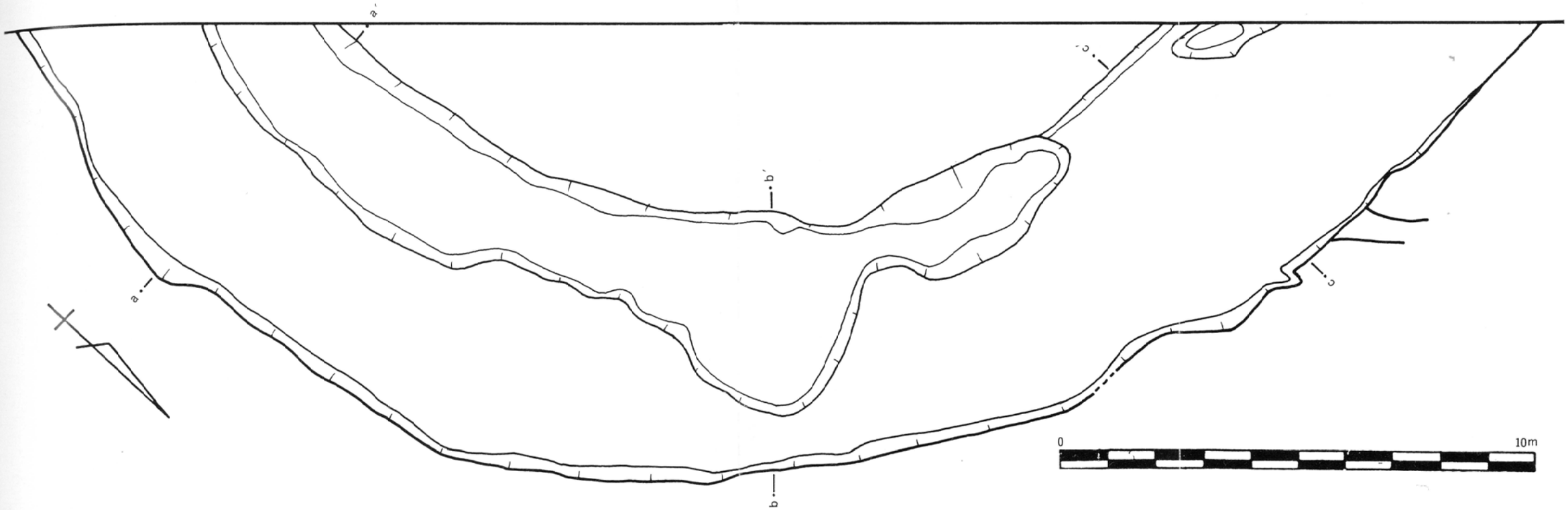
第15図　ＳＤ５，７及びＳＤ５出土土器

3） ＳＤ30（第16～18図　図版16）

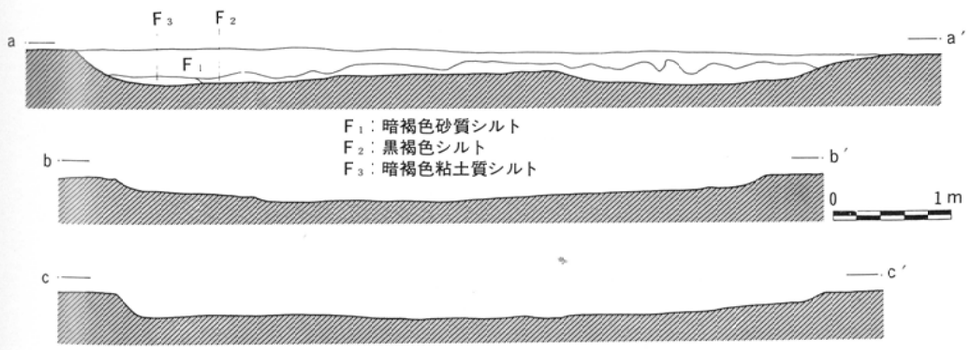
23～25―21～27区のIII層上面で検出された大溝で25―21～22区で調査区に入り，大きなカーブを描いて25―26～27区で調査区外へ抜けている。幅は５～６ｍで，部分的に南側が一段低くなっている。確認面からの深さは15～30cmをはかり，西に行くにつれて，絶対高が低くなり，東→西への流れが想定できる。遺物は第14図に示した赤焼土器の坏（１・２）土錘（３）の他，古式土師器，弥生土器，石器等，平安以前のものも出土している。



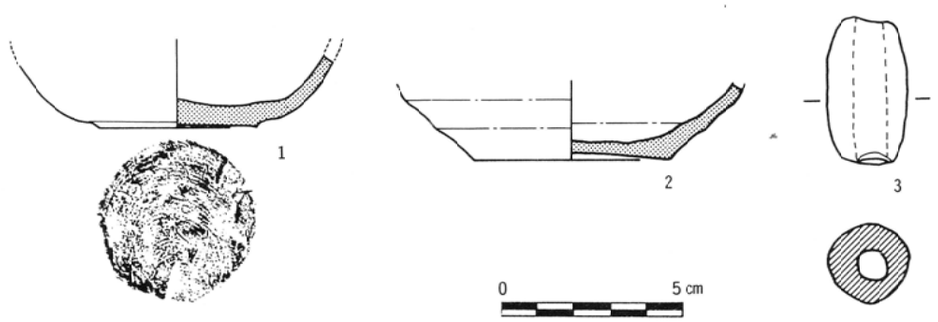
図版16　ＳＤ30調査状況



第16図　ＳＤ30平面図



第17図　ＳＤ30土層断面図・横断図



第18図　ＳＤ30出土遺物

4） ＳＤ39（第５図）

25―25区から21―28区まで約30mにわたって検出した溝で，ＳＤ30を切り，ＳＫ40，42に切られている。覆土は茶褐色シルトの単一層で，平安時代の土器が若干含まれているが，覆土が他の平安時代のものと異なることから，割合新しい時期の所産とみられる。

5） ＳＤ43（第５図）

24―25区においてＳＤ30から分かれる溝で，23―31区まで約24mにわたって検出した。なお，この溝はさらに西方に延び，Ｂ地区で検出したＳＤ152につながるものと考えられる。覆土は暗褐色砂質シルトの単一層で，平安時代の土器や弥生土器の出土がある。

4　性格不明の落込み

Ａ地区からは，遺構の分類でＳＸの記号を付した性格の明らかになっていない落込みが９ヶ所で発見されている。

1） ＳＸ１（第19～26図　図版17）

24・25―16～21区のIII層上面で確認された大きな落込みで，Ａ地区の主要遺構はほとんど，この底面で検出された。覆土は断面観察ではF_1：暗褐色粘土質シルト，F_2：黒褐色砂質シルトの２層に分けられたが，平面的にはF_2の上面で確認した。この層にはＡ地区の遺物総数の⅓強が含まれており，いわゆる遺物包含層とみることもできる。遺物には土師器須恵器，赤焼土器，土錘，硯の土器，土製品や，フイゴの羽口，鉱滓の鍛冶場に関するものがある。以下，それぞれの遺物について述べる。

a　土師器（第17～21図）

坏，高台付坏，鍋，甕の各器種があるが，坏は底部資料の破片が６片確認されただけで図示できるものはなかった。

高台付坏は，内外面とも黒色化処理の施されたもの（第19図１～６）と，内面にだけ黒色化処理の施されたもの（第21図７～10，第22図１～９）の二種類に大別できる。また，前者，後者とも，法量や高台の接合方法の相違によっていくつかに細分することができる。

第19図１～３は内外面ともヘラミガキの後黒色化処理が施された，高台の端部径が60～62mmの中形の高台付坏である。底部からやや丸味をもって立ち上がっており，１・２は直立する高台，３はやや外反する高台が付けられている。１～３とも高台の接合の際についた放射状のナデつけが観察される。

４は１～３よりひとまわり大形の底部資料で

図版17　ＳＸ１確認状況

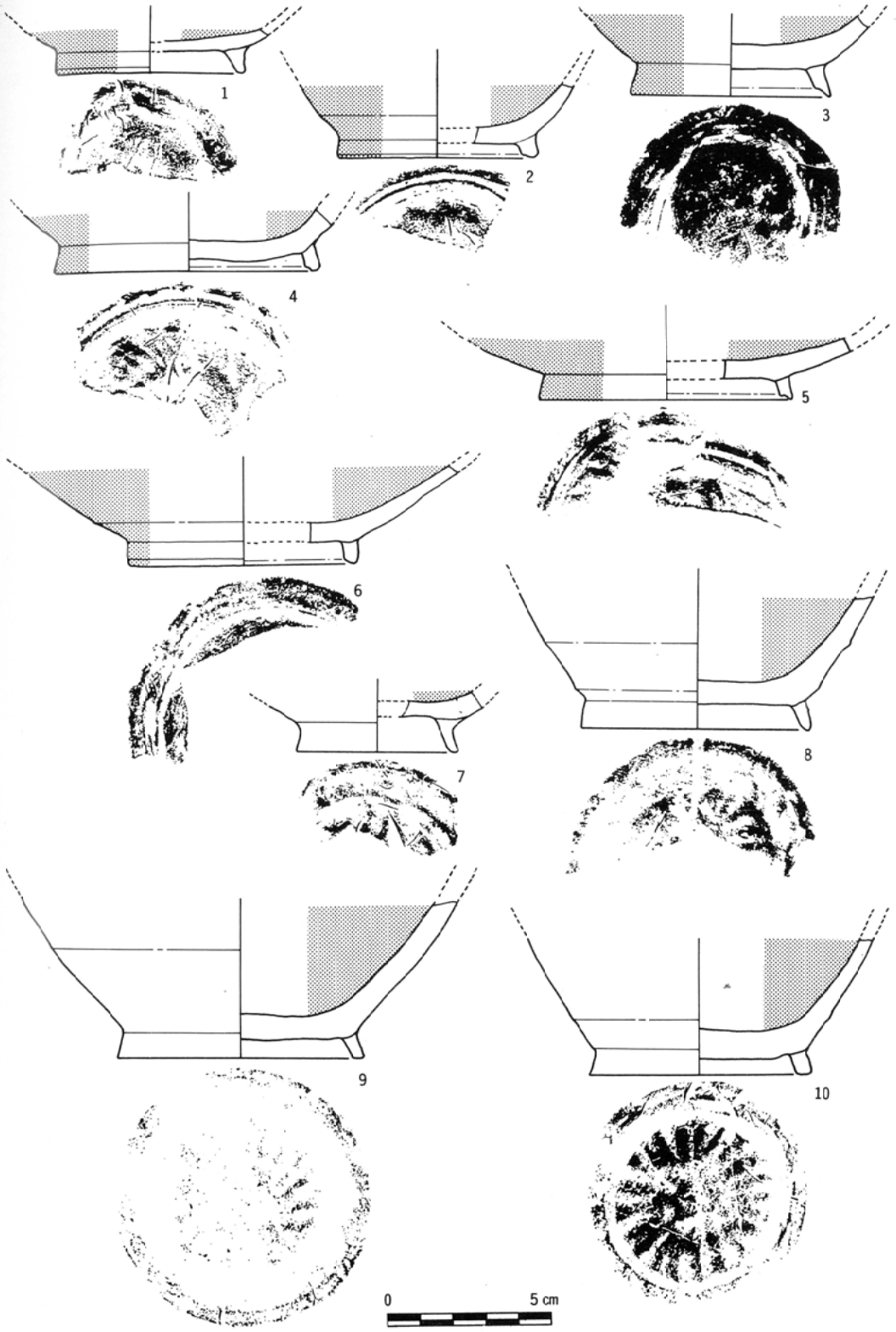
底部から直線的な立ち上がりを示す。5，6も大形の資料であるが，ゆるやかな皿状の立ち上がりを示している。高台部は4～6とも短かく直立する。底部にはいずれも高台部接合に伴う放射状のナデつけが認められ，切り離し技法は明らかではない。

7以下は内面にだけヘラミガキ，黒色化処理の施されたいわゆる内黒の土器である。7は底径の割に長く高い高台のつく小形の高台付坏である。8～10は中形で底部から割合急角度で直線的に立ち上がっている。三者とも短かめでやや外反する高台がつき，高台の接合の際の放射状ナデつけが一種の文様のように見事である。第20図1～3も中形であるが，底部から丸味をもって立ち上がっている。1にはやや外反する高台が，2・3には短かく直立する高台がつけられている。

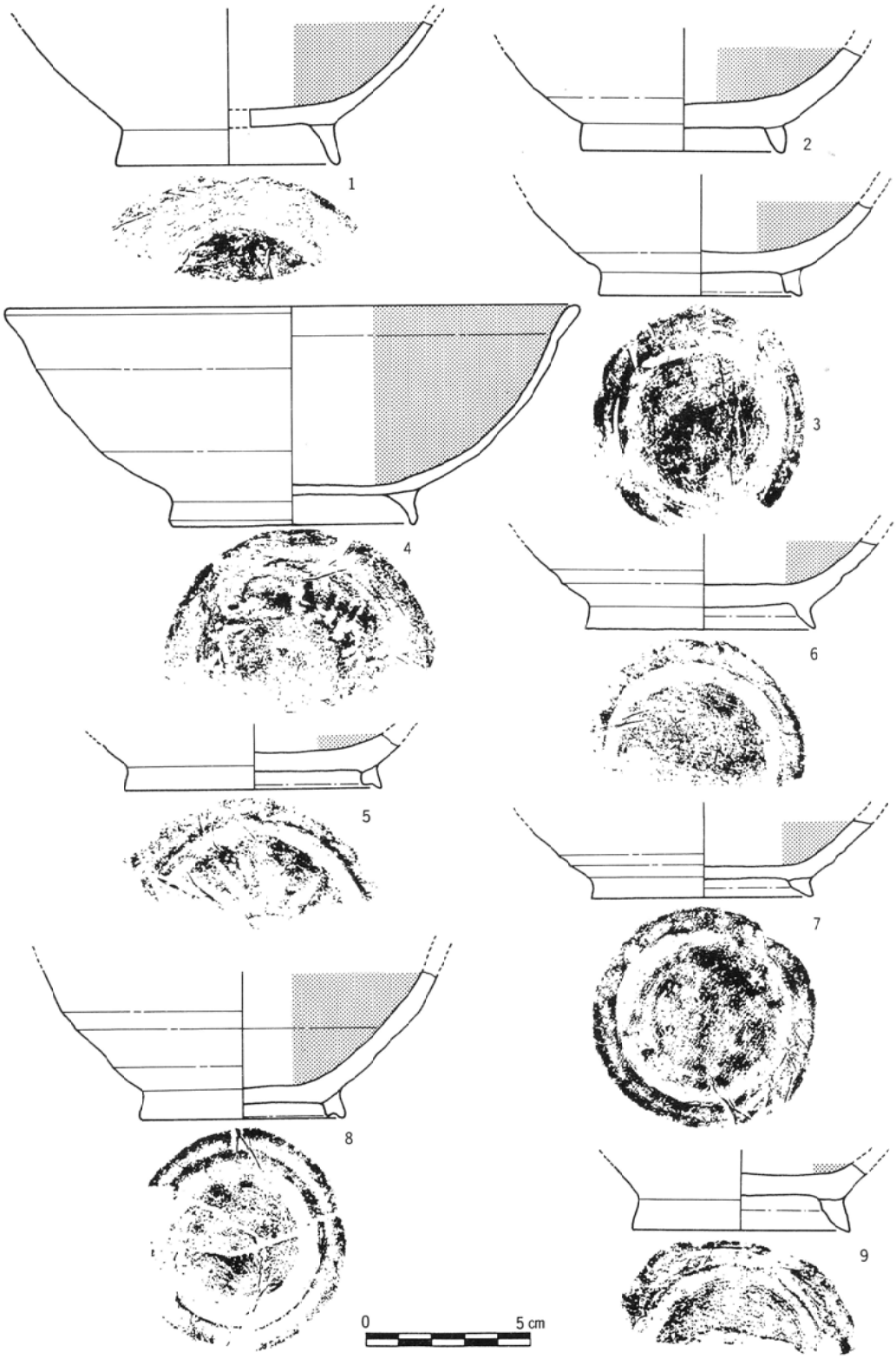
第20図4は高台部から口縁部までの形態が明らかな数少ない資料のひとつである。底部から体部にかけて丸味をもって立ち上がり，口縁下までゆるやかなカーブを描いてのび，口縁付近で若干「く」の字状に折れ曲って外反している。大形である割合に器厚は薄い。5も4と同様大形の資料であるが器厚は厚い。4，5とも底部に放射状ナデつけがみられる。6～9は坏部の切り離しの際の回転糸切り痕が明瞭に残る資料でやや大形の6，7，中形の8，9があり，前者はゆるやかに，後者は急角度に立ち上がっている。

第21図1～6は内面に黒色化処理の施されている口縁部資料である。坏が少ないことから，大半は高台付坏の口縁となるものと思われる。1は第19図の7に，2～4は第19図8～10及び第20図1～3，7・8に，5・6は第20図5～7の，それぞれの底部資料に対応するものと思われる。

甕は破片数が最も多いが図化できるものは少ない。第21図9は体部上半に最大径があり，口縁部は単純に「く」の字状に短かく外反している。口縁部は内外面ともロクロナデ整形が施され，体部外面にはロクロ目が観察される。10は口縁部が「く」の字状に外反し，口唇部が上方につまみ出されて直立している。口縁部は内外面ともロクロナデ整形が施され，最大径もこの位置にある。9，10とも薄手である。11は体部下半から底部までの資料で，外面はヘラケズリ調整が施されている。底部はナデ調整で平坦に仕上げられている。12～17は甕の口縁部資料である。12は「く」の字状に長く外反し，口唇部は上方につまみ出されて直立しており，内外面にロクロナデ整形が施されている。13は単純に「く」の字状に外反し口唇部中央に凹みをもち，内外面にロクロナデ整形が施されている。14・16・17は単純に「く」の字状に長く外反する。14は内外面ともロクロナデ調整が施されているが，16・17の内面には一部刷毛目が観察される。刷毛目を施してから最終的にロクロナデ整形を施したことが窺える。15は短純に「く」の字状に短かく外反しており，口縁部内外面にはロクロナデ，体部外面は縦方向の，内面には横方向の刷毛目が施されている。その



第19図　ＳＸ１出土土器（１）



第20図　ＳＸ１出土土器（２）

他の破片については第７表に示したが，体部破片では内外に刷毛目の施されるものが約半数を占め，外面にだけ刷毛目の施されるものを加えると約⅔に達する。また底部資料は糸切り痕の残るもの１点，横糸の間隔の狭いアンペラAが４点，間隔の広いアンペラBが２点，ナデ等で不明なものが14点となっている。

第21図18は堝の口縁部である。開きながらのびる体部が口縁でさらに外反し，口縁部は肥厚している。

b　**須恵器**（第21～22図）

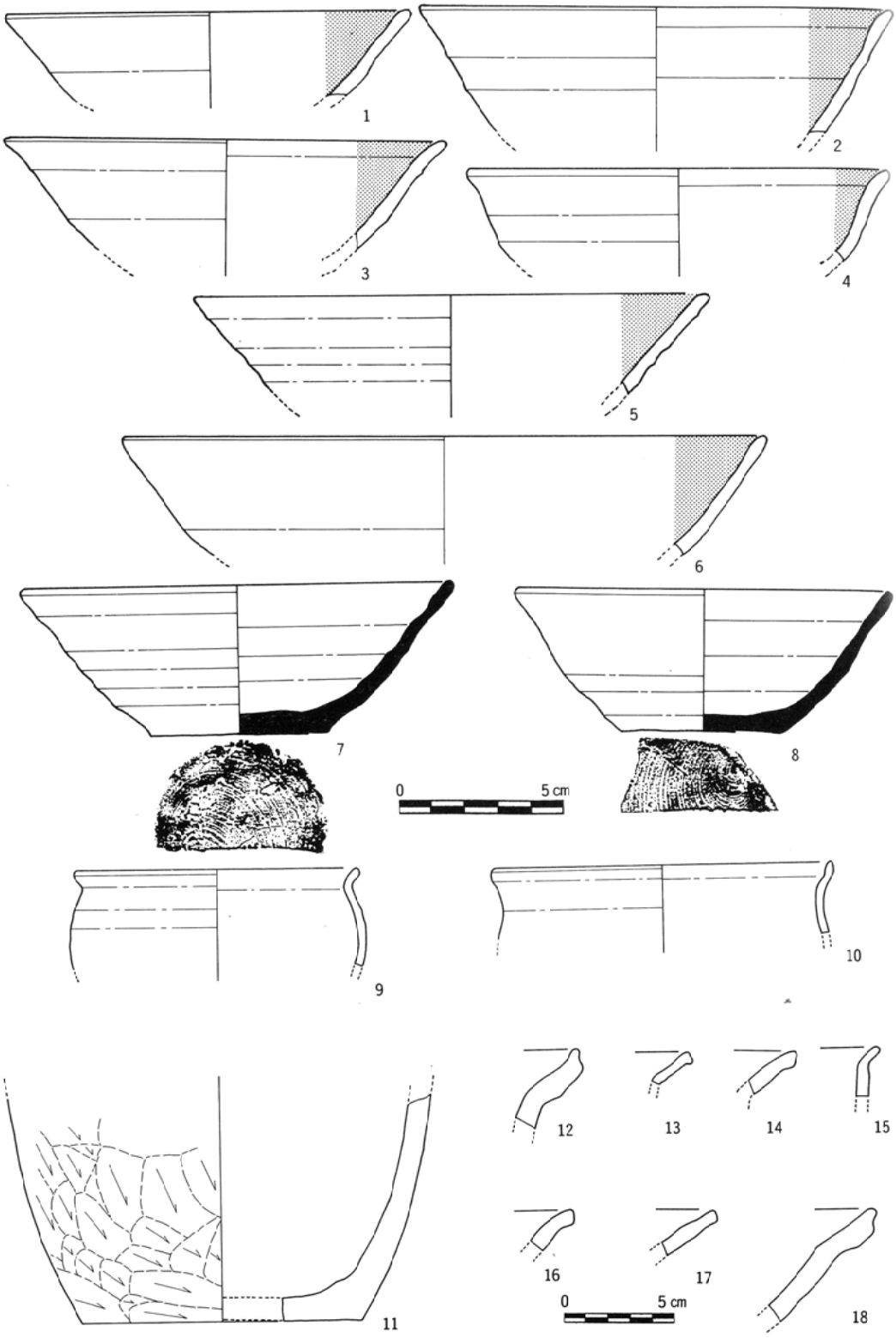
坏，壺，甕の各器種があるが，口縁から底部までの形態のわかるものは坏だけである。また，その破片数も，土師器，赤焼土器にくらべ少ない。

坏は実測可能なものが２個体出土した。第21図７は底部付近でやや丸味をおびて立ち上がり体部なかほどから直線的になりそのまま外傾している。８は口径の割に器高が高く，やや内湾しながら急角度で立ちあがり，体部なかほどから直線的になりそのまま外傾している。７，８の両者とも内外面の凹凸が著しく，底部の切り離しは回転糸切技法である。坏は破片まで含めても30点強と少ない（第８表）。

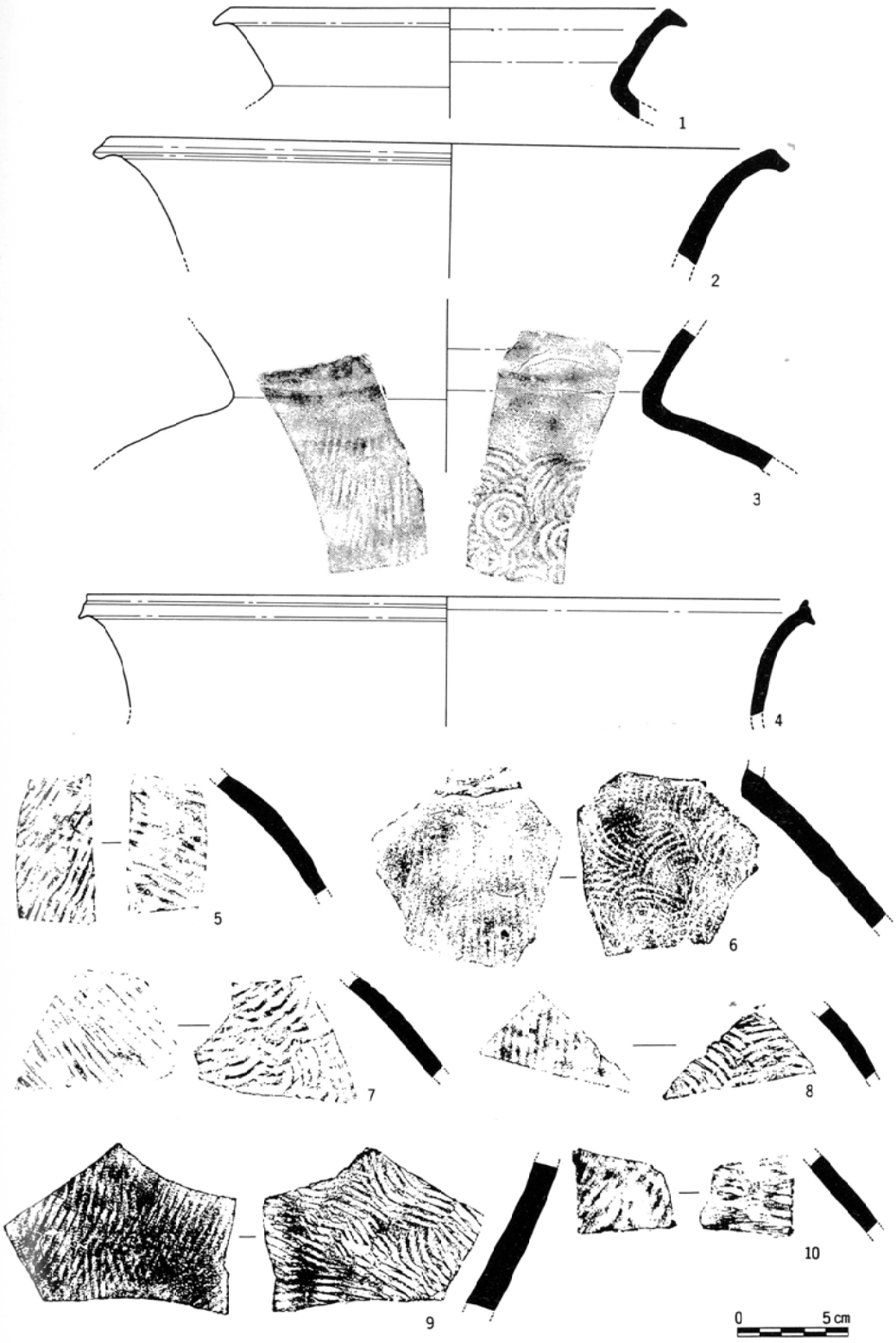
壺は破片で23片の出土があるが実測可能なものはなかった。

甕の破片は須恵器の破片総数の半数以上を占める。そのうち実測可能なものを第２２図に示した。１は頸部径が163㎜とやや小形の甕で肩部から口頸部にかけ「く」の字状に強く外反する。口縁部はさらに外側に「く」の字状につまみ出され，口唇部は外傾する。口頸部は内・外面ともロクロナデ整形が施されている。２は頸部径が220～230㎜前後で頸部がややたち，口頸部なかほどから口縁にかけ強く外反する中形の甕である。口唇部は外傾し中間が凹みをもつ。内･外面ともロクロナデ整形が施されている。３は頸部径196㎜の中形の甕で，肩部から口頸部にかけ「く」の字状に強く外反する。外面は頸部から上がロクロナデ整形，肩部から下に格子状叩目文が施され，内面は肩部の上方までロクロナデ整形が施され，その下に青海波文のアテがみられる。４は頸部径が290㎜前後の大形の甕で，頸部はほぼまっすぐに立ち，口縁近くで外反している。口唇部は外傾し，その端部を内面では上方に，外面では下方につまみ出し，特徴的な口唇部を形成している。

第22図５～10は甕の肩部ないしは体部破片である。５・10は内・外面とも平行叩目文・アテが施されている。６・８は頸部から肩部にかけての破片で外面に格子状叩目文が，内面には青海波文が施される。７は外面に平行叩目文が，内面に青海波文がみられる資料である。９はおそらく体部下半の資料で外面は格子状叩目文が，内面上部には青海波文，下部には平行のアテが施されている。他に内・外面とも格子状叩目，アテがみられるものや外面に平行叩目文が施され，内面に丸い石のようなものの圧痕がみられるものがある。



第21図　ＳＸ１出土土器（３）



第22図　ＳＸ１出土土器（４）

C　赤焼土器（第23～25図）

坏，高台付坏の二つの器種がある。破片数では土師器の2.6倍，須恵器の11倍強となり，他を淩駕する。

坏はすべて回転糸切りによって底部が切り離されたもので，その後の再調整は施されていない。法量や形態から数種類に分類できる。

第23図１・２は口径に比べ大きめの底部をもち，底部から急角度で直線的に立ち上がってそのまま外傾している。器高も高い。３は底径が小さく，底部付近で丸味をもってゆるやかに立ち上がりそのまま外傾している。１・２と比較すると器高は低く，器厚も極端に薄くなっている。４は１～３より大きく，底部から丸味をもって立ち上がり，体部下半から直線的に外傾し口縁付近でさらに外反する。５は４よりさらにひとまわり大きく，底部から口縁まで直線的に外傾している。器厚は薄い。

第23図６～10，第24図１～７は坏の底部資料である。第23図６は，同図３と同じような立ちあがりを示すが底径はさらに小さい。７～10は底径がいずれも50㎜以下で，丸味をもったゆるやかな立ち上がりを示すことから，３の仲間とみることができる。第24図１～４は底径が55～64㎜で，やや開き気味な立ち上がりとなることから第23図４・５の仲間であろう。５・６は底径が66～68㎜とさらに大きくやや丸味をもって急角度で立ち上がっている。７も大きな底径をもつが５・６にくらべゆるやかな立ち上がりを示す。

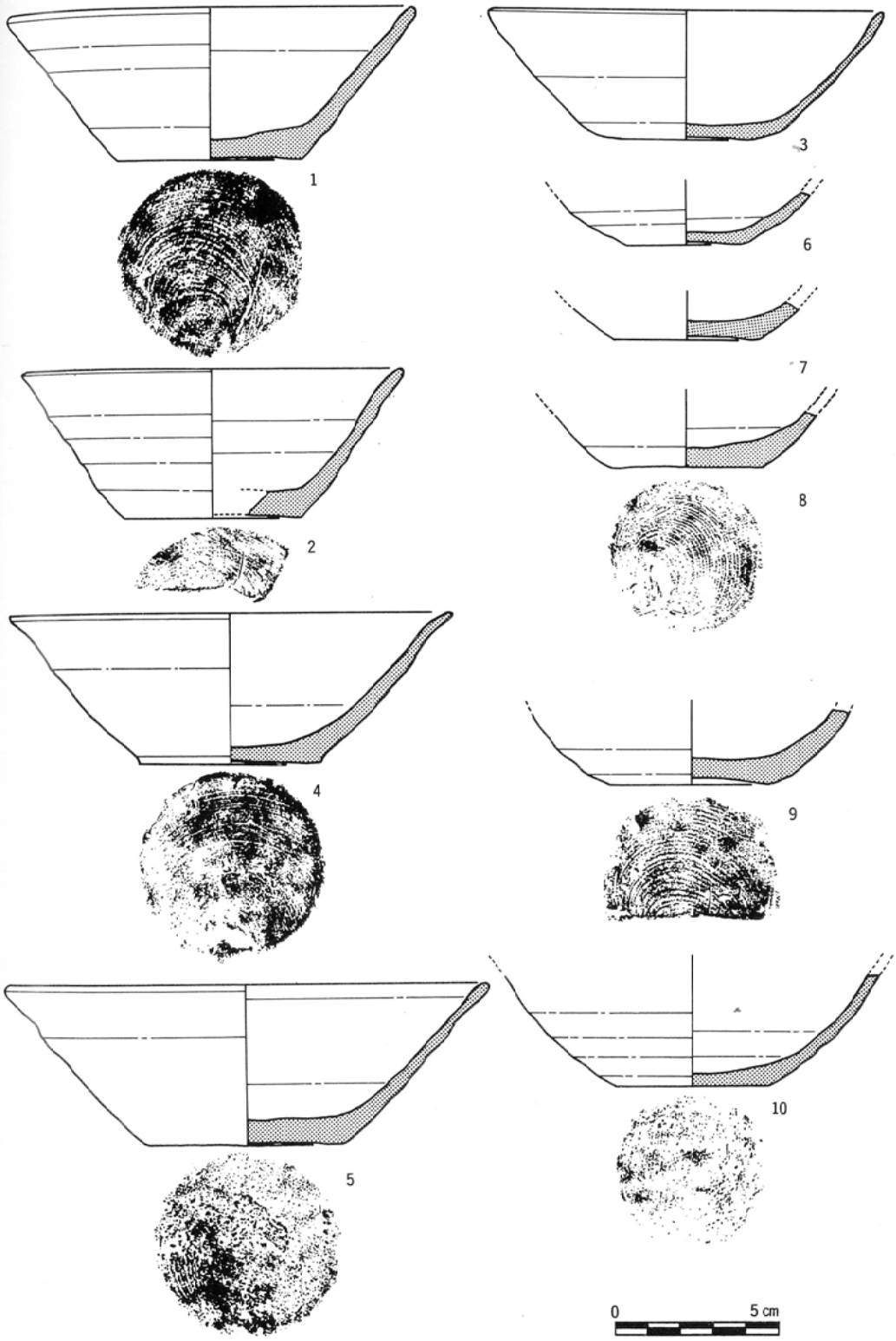
第24図８～15，第25図９～11は坏，高台付坏の口縁部資料である。体部からそのまま外傾するもの（第24図８～11，13～15，第25図），口縁部でさらに外反するもの（第24図12）があるが，器厚が３㎜内外の薄手のものが多く，この傾向は図化できない破片でも指摘できる（第８表）。

高台付坏で高台部から口縁まで全体の形態の明らかなものは１例だけであるが，高台部の大きさや，形態によって数種類に分類できる。

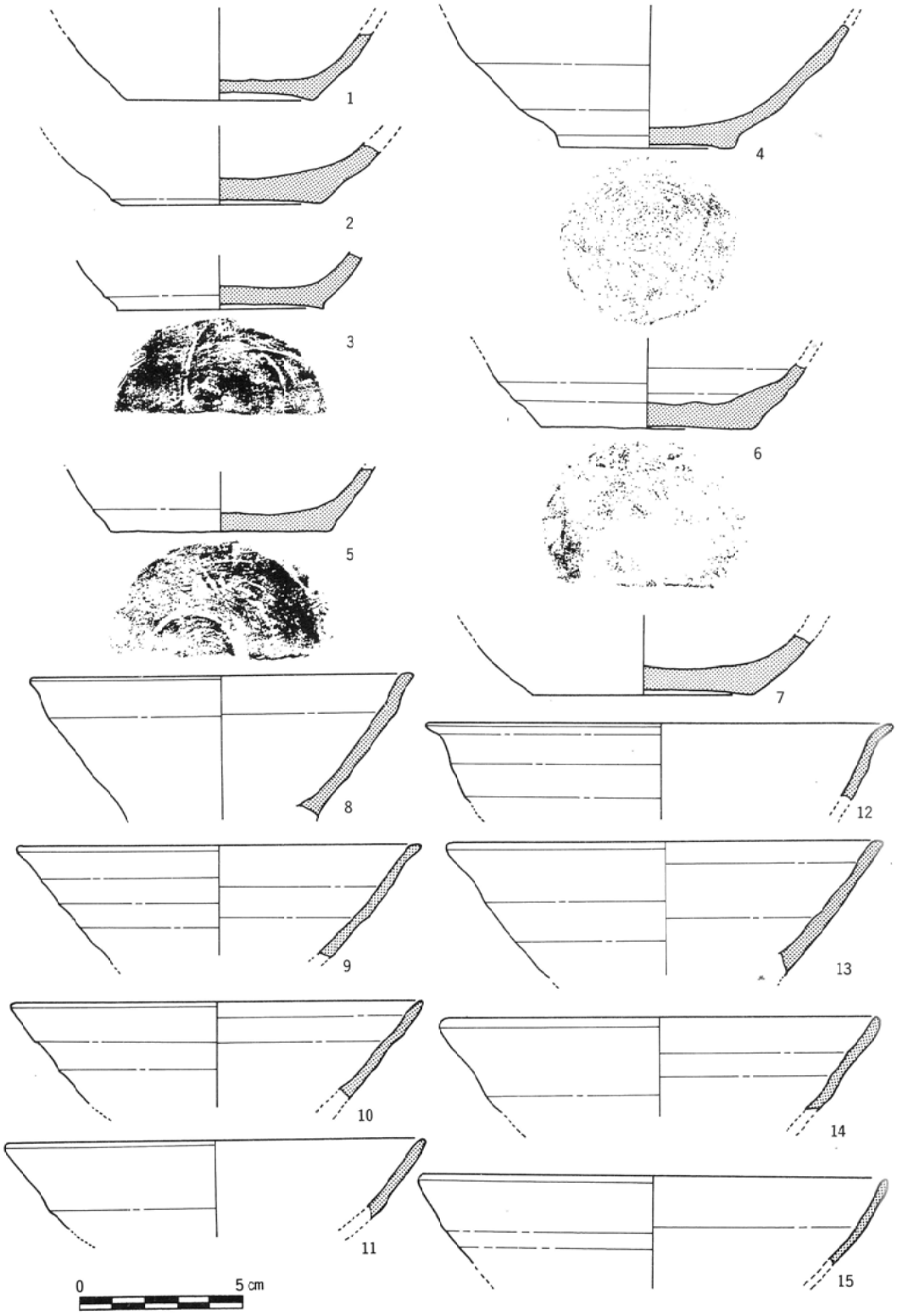
第25図１～３は高台の端部径が60～64㎜と小形で，長く外反する高台がつけられている。４は高台の端部径が68㎜，直立する短い高台がつけられている。５は端部径が72㎜で長く外反する。６は端部径82㎜で長く外反する。７は端部径76㎜で短かく直立する高台がつき底部からやや丸味をもって立ち上がり，体部下半から直線的になりそのまま外傾している。口径は170㎜と大形である。８も７に類似するが，高台がやや内側につけられている。

d　土製品（第26図）

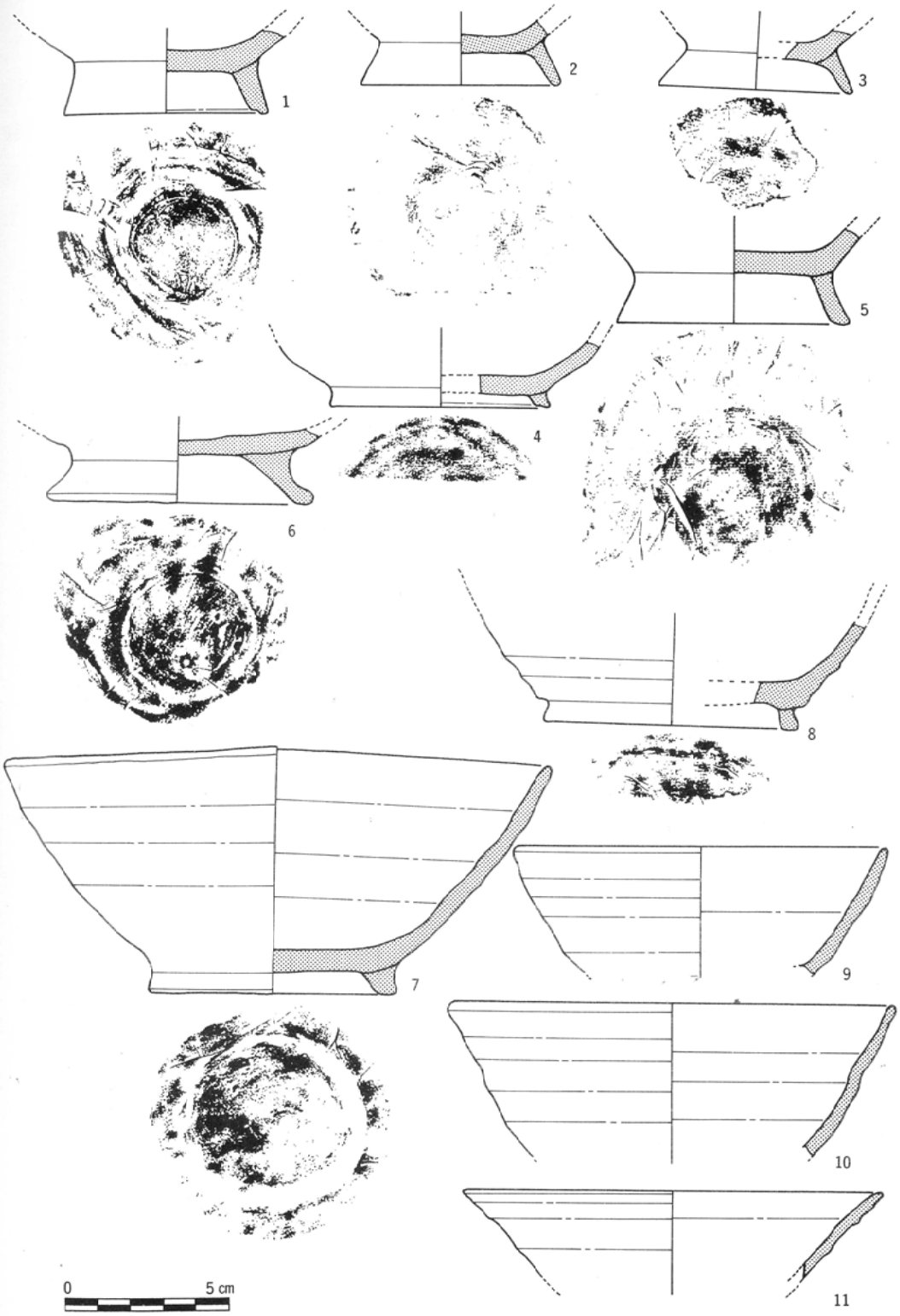
第26図１は風字硯の陸部左側の破片である。現在長67㎜，幅37㎜，厚５～８㎜をはかる。裏面には直径19㎜の円形の凹みがあり，この部分に円柱状の脚がついていたものと思われる。外縁の高さは陸から17㎜前後をはかり，ほぼ垂直に立ち上がり，前方にいくにつれて



第23図　ＳＸ１出土土器（５）



第24図　ＳＸ１出土土器（６）



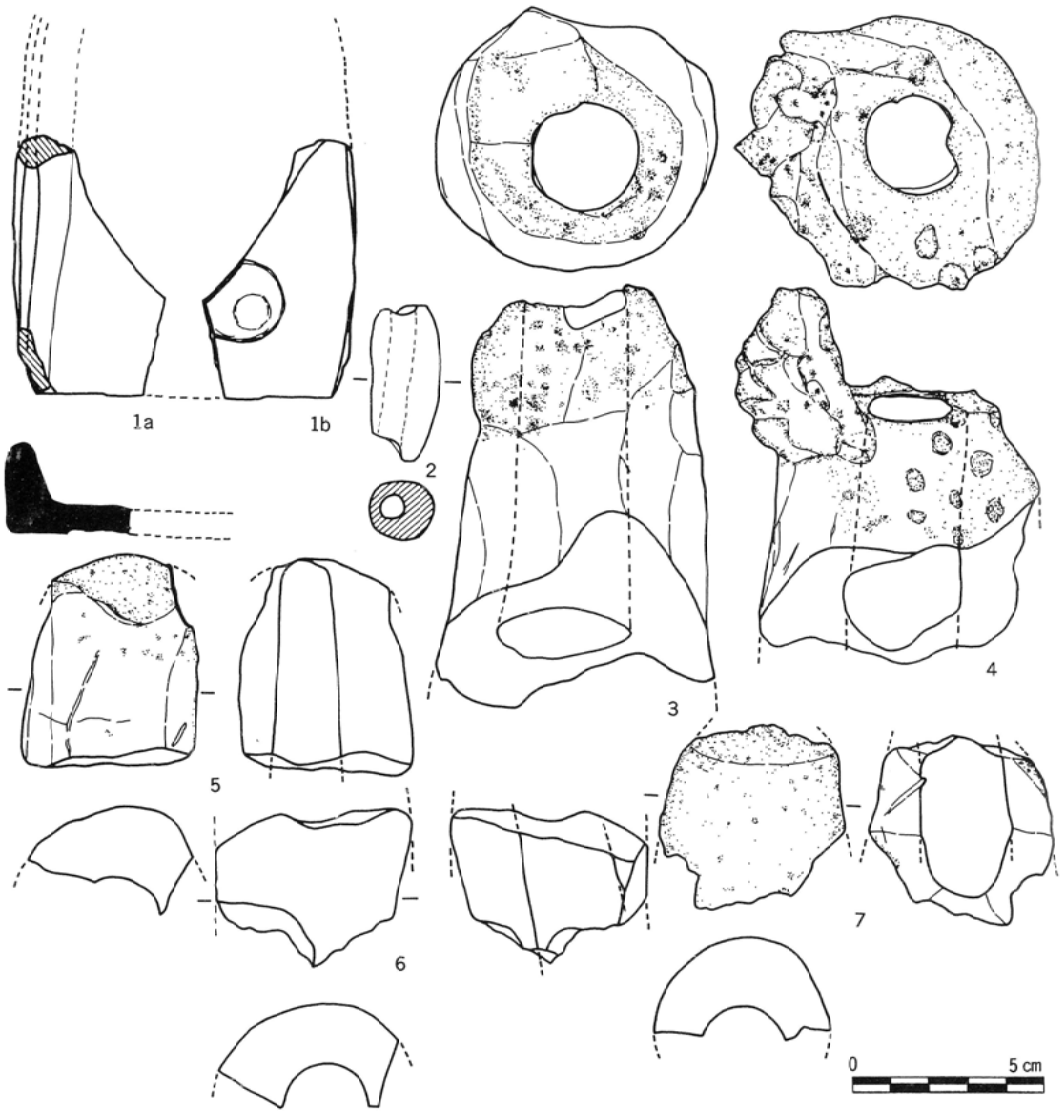
第25図　ＳＸ１出土土器（７）

裾幅が広くなっている。陸部は使用による磨滅が著しい。色調は淡い青灰色。

2は土錘である。つぶれた円柱形で両端とも欠損する。左寄りに径6㎜の貫通孔がある。

3～7はフイゴの羽口である。3～5，7の表面には火熱による多孔質のガラス状の付着物がみられる。風孔径は3の上端で24㎜，下端で30×35㎜，4の上端で20×26㎜，下端で30～35㎜をはかる。5～7は径20～24㎜前後と推定される。この他約30点の破片が出土している。

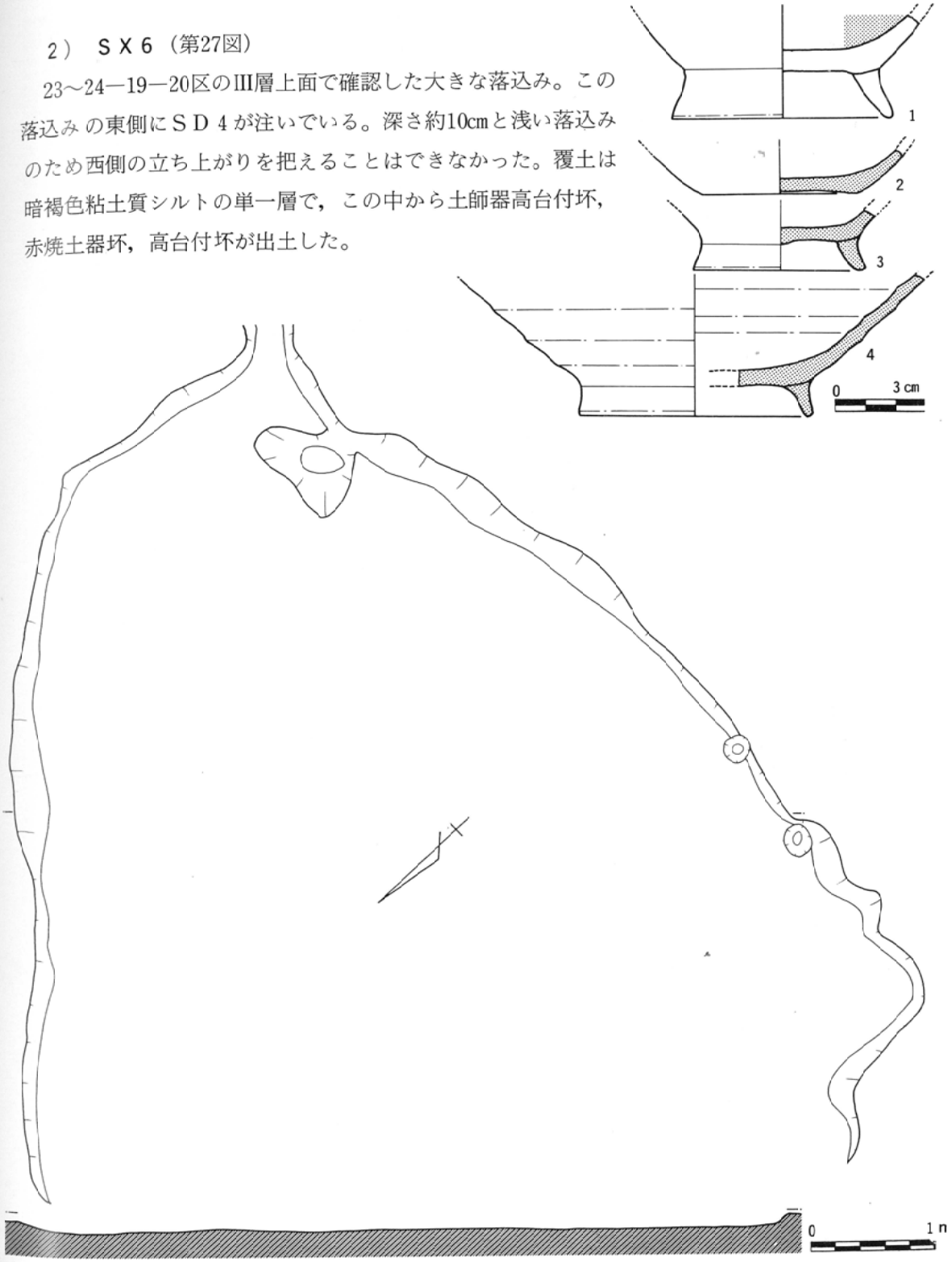
図版27の6～12は鉱滓である。全部で約50点の出土がある。



第26図　ＳＸ１出土土製品

2） ＳＸ６（第27図）

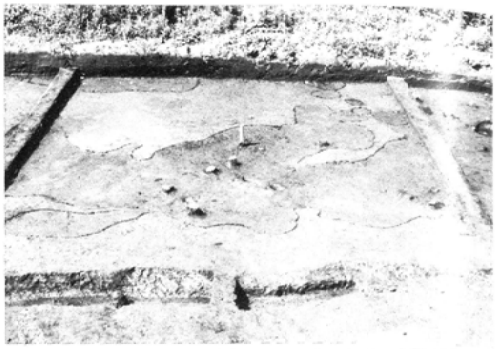
23～24—19—20区のIII層上面で確認した大きな落込み。この落込みの東側にＳＤ４が注いでいる。深さ約10cmと浅い落込みのため西側の立ち上がりを把えることはできなかった。覆土は暗褐色粘土質シルトの単一層で，この中から土師器高台付坏，赤焼土器坏，高台付坏が出土した。



第27図　ＳＸ６及び出土土器

3）　ＳＸ９（第28～30図　図版19～21）

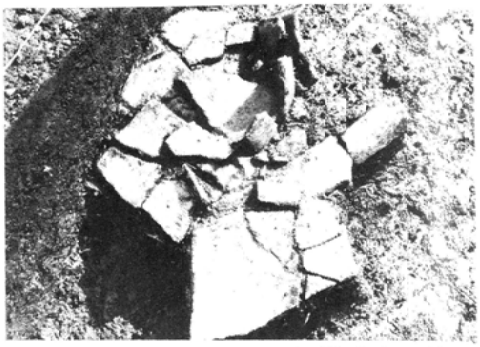
24・25—17・18区においてＳＸ１の底面で確認された不整形の大きな落込みである。同時に確認された土壙群との重複関係をみると，ＳＫ18，ＳＫ28を切り，ＳＫ16・17，ＳＫ19・20に切られている。底面には凹凸があり，確認することはできなかったが，複数以上の土壙との切合いもあったのではないかと思われる。覆土は２層に分けられ，ＳＸ１につぐ量の遺物の出土があった。遺物は土師器，須恵器，赤焼土器であり，他の遺構に比べ，甕や壺の実測可能な資料が目立った。



図版18　ＳＸ９確認状況

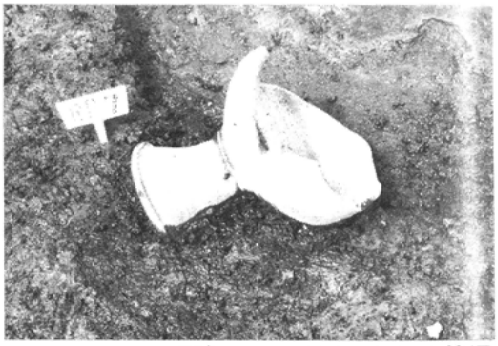
a　土師器（第29・30図）

坏，高台付坏，甕，堝の器種がある。坏は内面黒色処理の施された破片が８点出土しているが，実測可能なものはない。



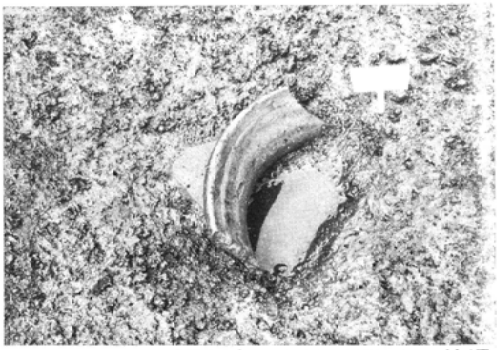
図版19　土師器堝出土状況

高台付坏は第27図１のほか，７点の底部資料が出土している。１は直立する短かい高台のつくり大形の資料で，割合急角度の立ち上がりを示す。坏部の切離し技法は回転糸切りによる。

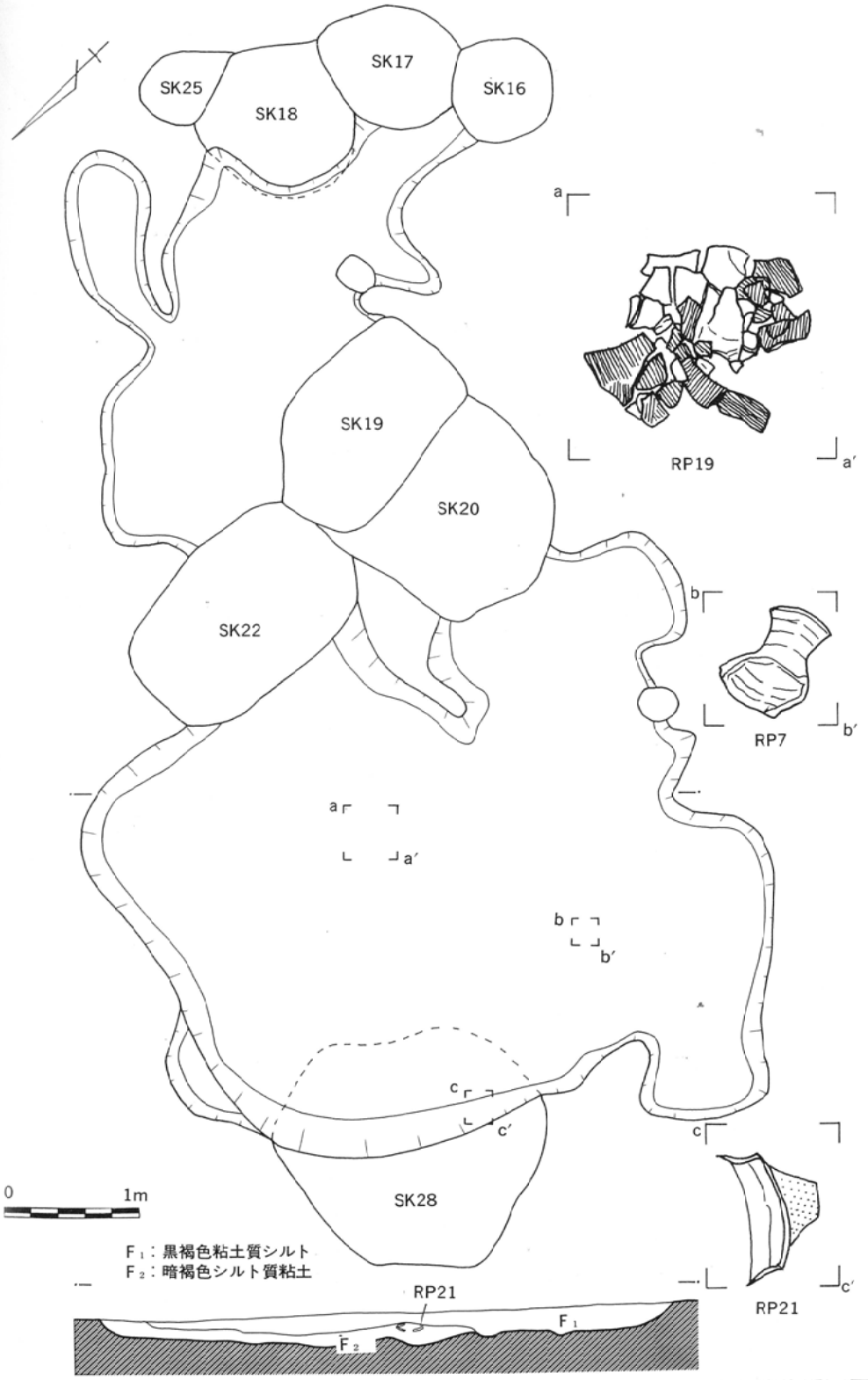


図版20　須恵器壺出土状況

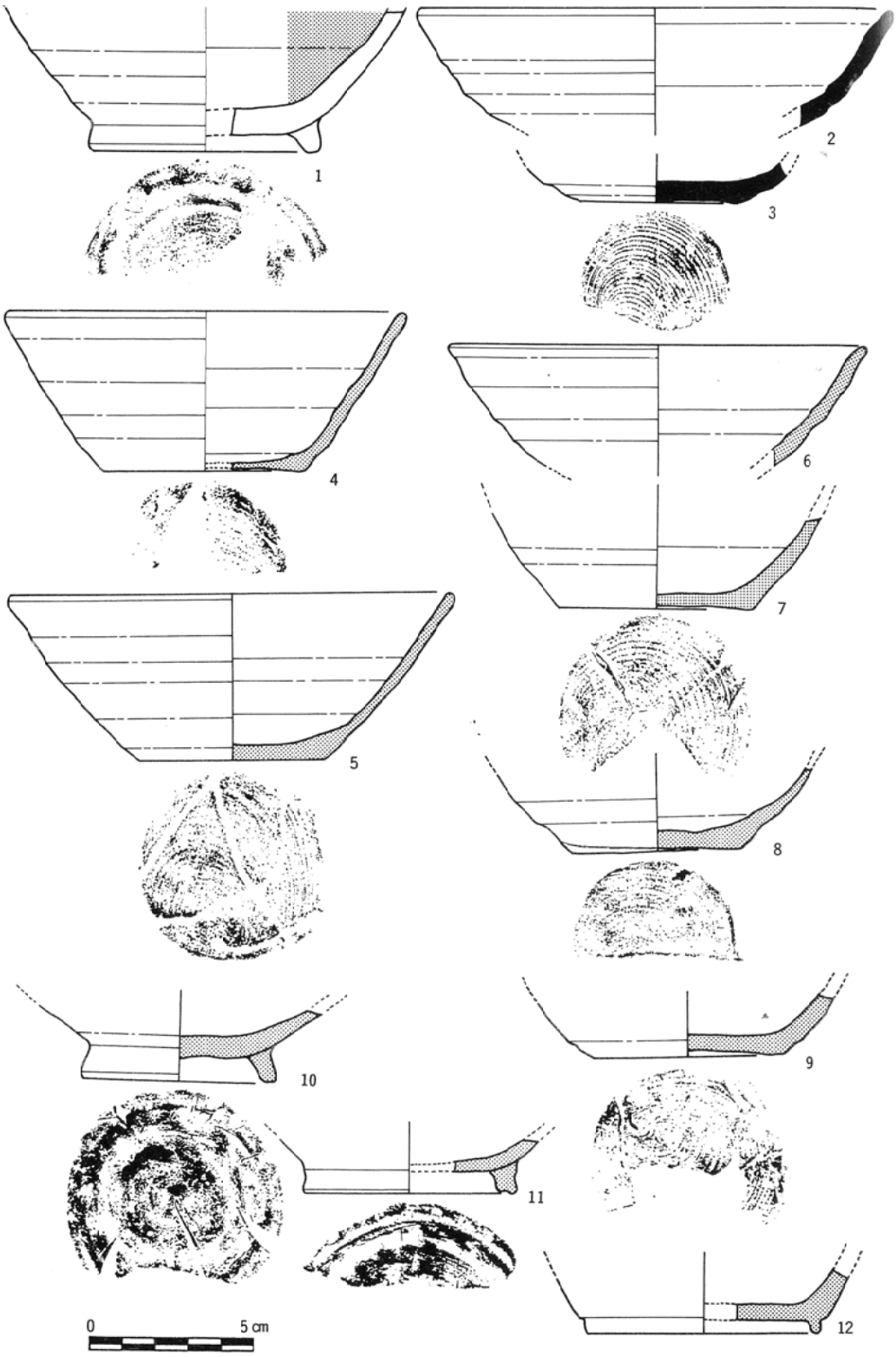
第30図５は大形の長胴甕である。口縁部は単純に「く」の字状に長く外反し，最大径は口唇部にある。頸部から口縁部にかけて，内外面ともロクロナデが施され，体部外面には縦方向の，内面には横方向の刷毛目が施されている。６は小形の甕で，単純に「く」の字状に短かく外反する口縁部をもつ。最大径は口縁部にある頸部下で膨みをもつ。外面は体部上端から頸部，口縁部にかけてロクロナデが，体部には縦方向の刷毛目が施されている。内面は，ロクロナデ整形となっているが，輪



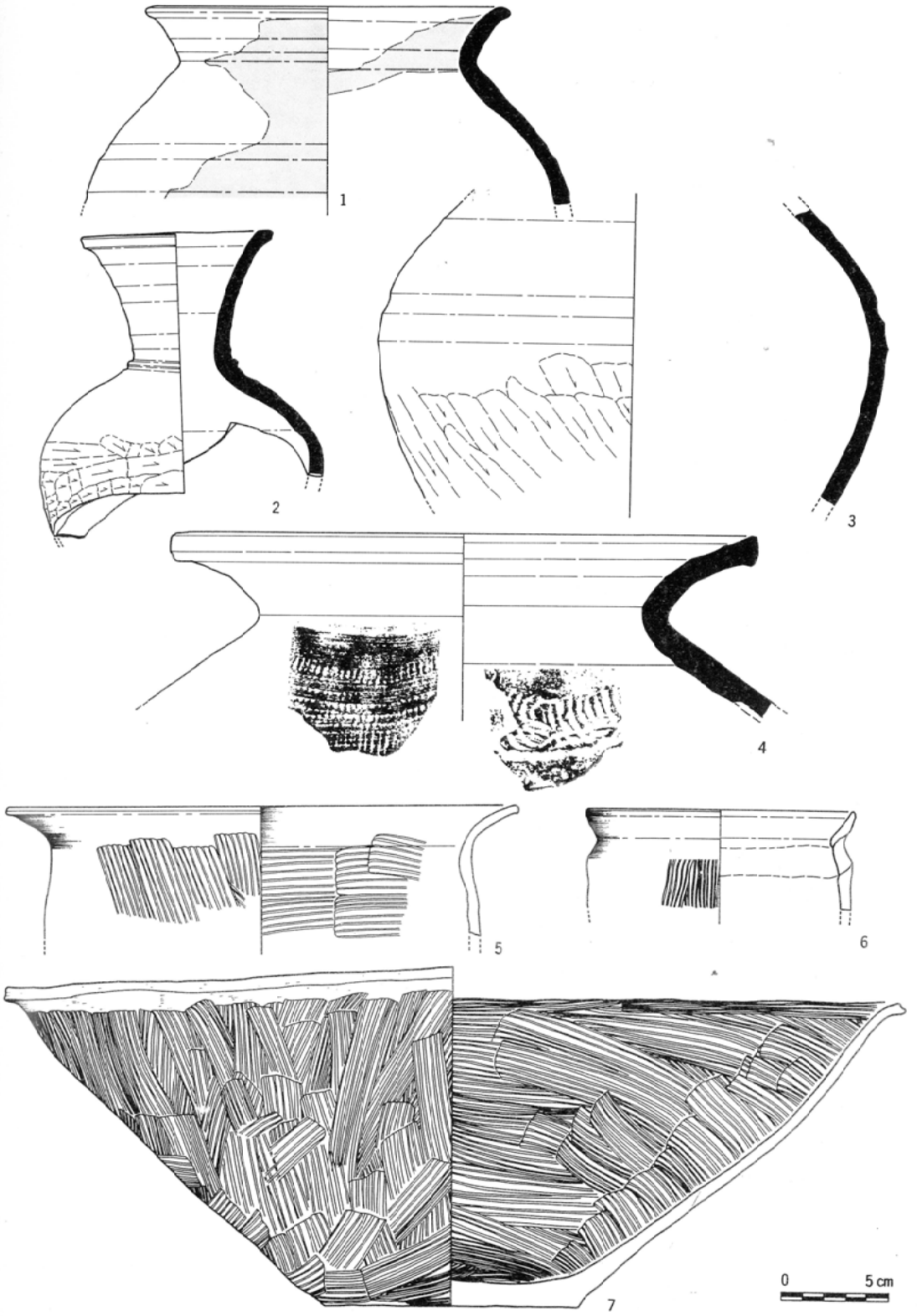
図版21　須恵器甕出土状況



第28図　ＳＸ９及び出土遺物平面図



第29図　ＳＸ９出土土器（１）



第30図　ＳＸ９出土土器（２）

積み痕が明瞭に観察される。

第30図７は堝であり，坏以外では唯一の完形資料である。その出土状況は図版19，第28図に示した。ロクロは使われていない。底部から直線的に外反し，体部中央でやや膨らみ，口縁部は強く外反している。口唇部は外傾し，中央に１本の沈線が巡る。口縁部外面にはヨコナデが施され，体部には底部に向う刷毛目が，そして底部付近では横方向の刷毛目が施されている。また，内面には口縁部から底部の境界まで横方向の刷毛目が施されている。底部外面には横糸の間隔の狭いアンペラＡの痕跡がある。外面の底部から体部中央にかけ，部分的にスス状の付着物が認められる。

b　**須恵器**（第29・30図）

坏，壺，甕の器種がある。坏は破片を入れても12点と少ない。第29図２は体部中央に丸味をもち，３は回転糸切りで切り離された極端に小さい底部をもつ。

第30図１～３が壺である。１は外反する短かい頸部をもつ。点描部には自然釉が付着している。３は体部資料で，球形の体部下半にはヘラケズリが施され，上半はロクロナデ整形となっている。２は長頸壺で球形の体部をもつ。頸部から口縁にかけてゆるやかに外反し，口唇部は直立する。頸部と肩部の境界の外面には一条の凸帯がめぐっている。体部上半から口縁にかけてはロクロナデ整形が，体部下半にはヘラケズリが施されている。

第30図４は甕の口縁から肩部にかけての資料で，その出土状況は図版21に示した。頸部径が193㎜と中形で，肩部から口頸部にかけ「く」の字状に強く外反し，口唇部は直立している。外面の頸部から上はロクロナデ整形，肩部以下は格子状叩目文が施され，内面は肩部の上端までロクロナデ整形，その下に青海波文のアテが施されている。

c　**赤焼土器**（第29図）

坏（第29図４～９），高台付坏（10～12）がある。４は底部から急角度で直線的に立ち上がり，そのまま外傾している。口径が小さい割に底径は大きく，器高も高い。器厚は薄い。５は底部付近でやや丸味をもって立ち上がり，体部下半から直線的に外傾している。器厚は薄い。６は口縁部，７～９は底部資料である。

10は高台の端部径が60㎜，11は64㎜と，ともに小形の資料で10には外反する高台が，11には直立する高台がつけられている。12は直立する低い高台がつき，底部から急角度で立ち上がっている。高台の端部径は68㎜をはかる。

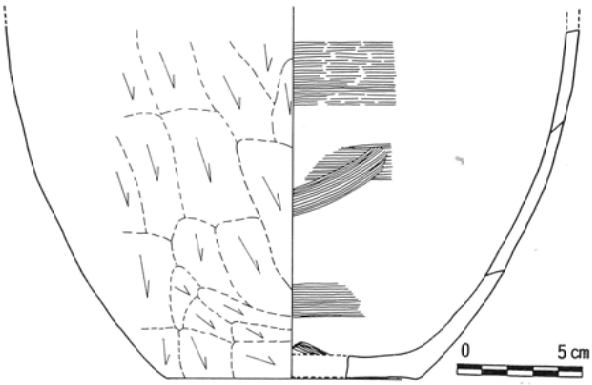
４）　**ＳＸ15，21，26，27，29，31**（第31・32図）

ＳＸ15は全長約３ｍ，幅50㎝の細長い落込みで確認面からの深さは５～15㎝である。覆土は暗褐色粘土質シルトの単一層で，第31図の土師器甕の出土がある。この甕は体部下半から底部にかけての資料で，外面は縦方向のヘラケズリ調整が施され，内面は横方向の刷

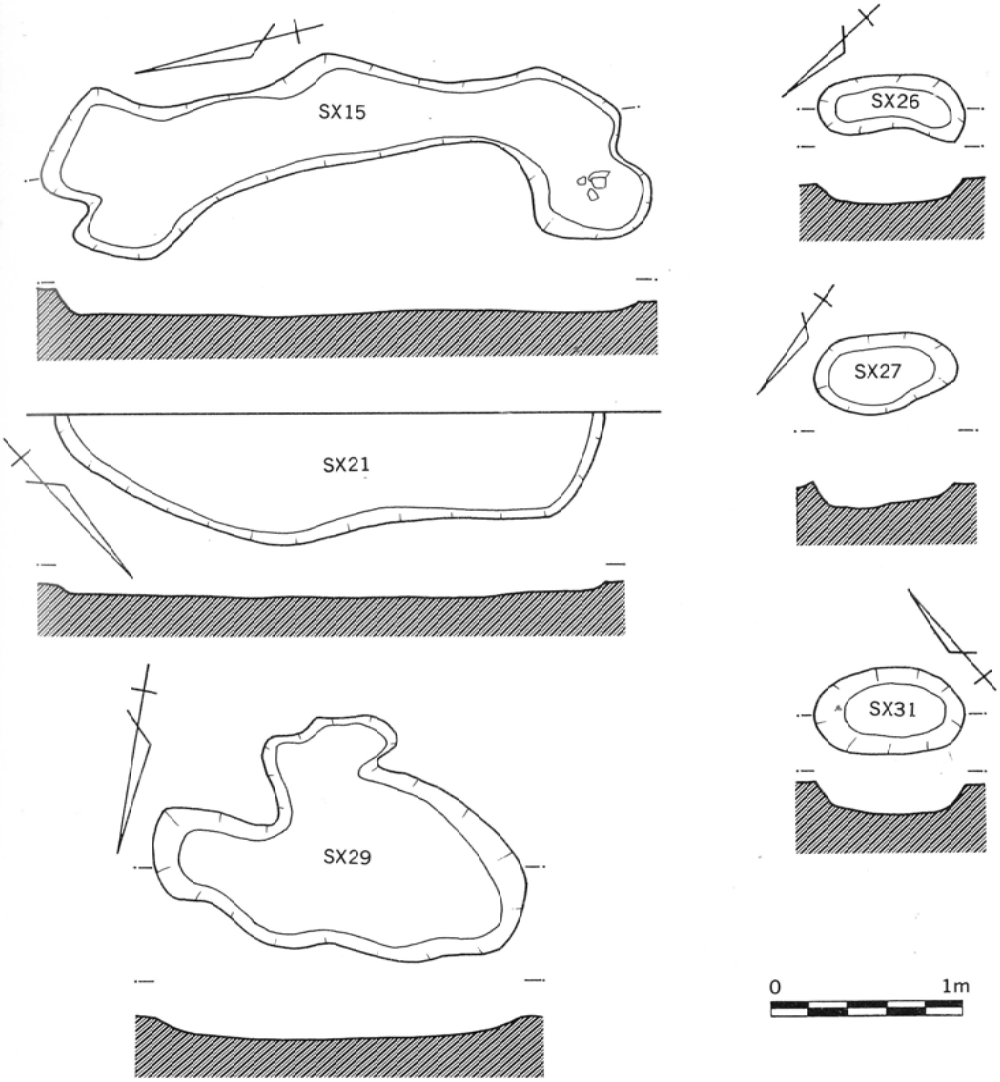
毛目の後，ロクロナデ調整が施されている。

ＳＸ21は大半が調査区外にある遺構である。覆土は黒褐色粘土質シルトの単一層で，土師器，赤焼土器の破片が出土した。竪穴状を呈する。

ＳＸ26，27はともに長情円形のプランをもち，覆土はＳＸ26が暗褐色粘土



第31図　ＳＸ15出土土器



第32図　ＳＸ15・26・27・29・31

質シルト，ＳＸ27が黒褐色粘土質シルトである。ともに遺物の出土はなかった。

ＳＸ29は平面形が凸形の落込みで，ゆるやかな立ち上がりを示す。覆土は黒褐色シルト質粘土の単一層で，遺物の出土はない。

ＳＸ31は，ＳＸ26，27と類似する小形の落込みで，覆土は暗褐色シルト質粘土の単一層。土師器の坏の破片が１点出している。

それぞれの確認面は，ＳＸ15，21がＳＸ１の底面，ＳＸ26，27，29がＳＸ９の底面，ＳＸ31がIII層の上面である。

5　遺構外出土の遺物（第33～36図）

Ａ地区出土遺物の約半数は遺構の検出作業のなかで発見された。これは基本層位のＩ層ないしはII層として取り上げているが，Ｉ，II層で多くの遺物が出土した地区内でＳＸ１他の遺構を検出していることから，本来はこれらの遺構のなかに含まれていたものと考えられる。その大半は，土師器，須恵器，赤焼土器の各器種の破片であるが，なかに図示可能なものもあった。

また，ＳＤ30などの遺構覆土や，Ｉ，II層から古墳時代の土師器や弥生土器，それに石器の出土があった。この時代の遺構の発見はなく，流れ込みによる再堆積と考えられることからこの項で扱った。

1）　平安時代の土器

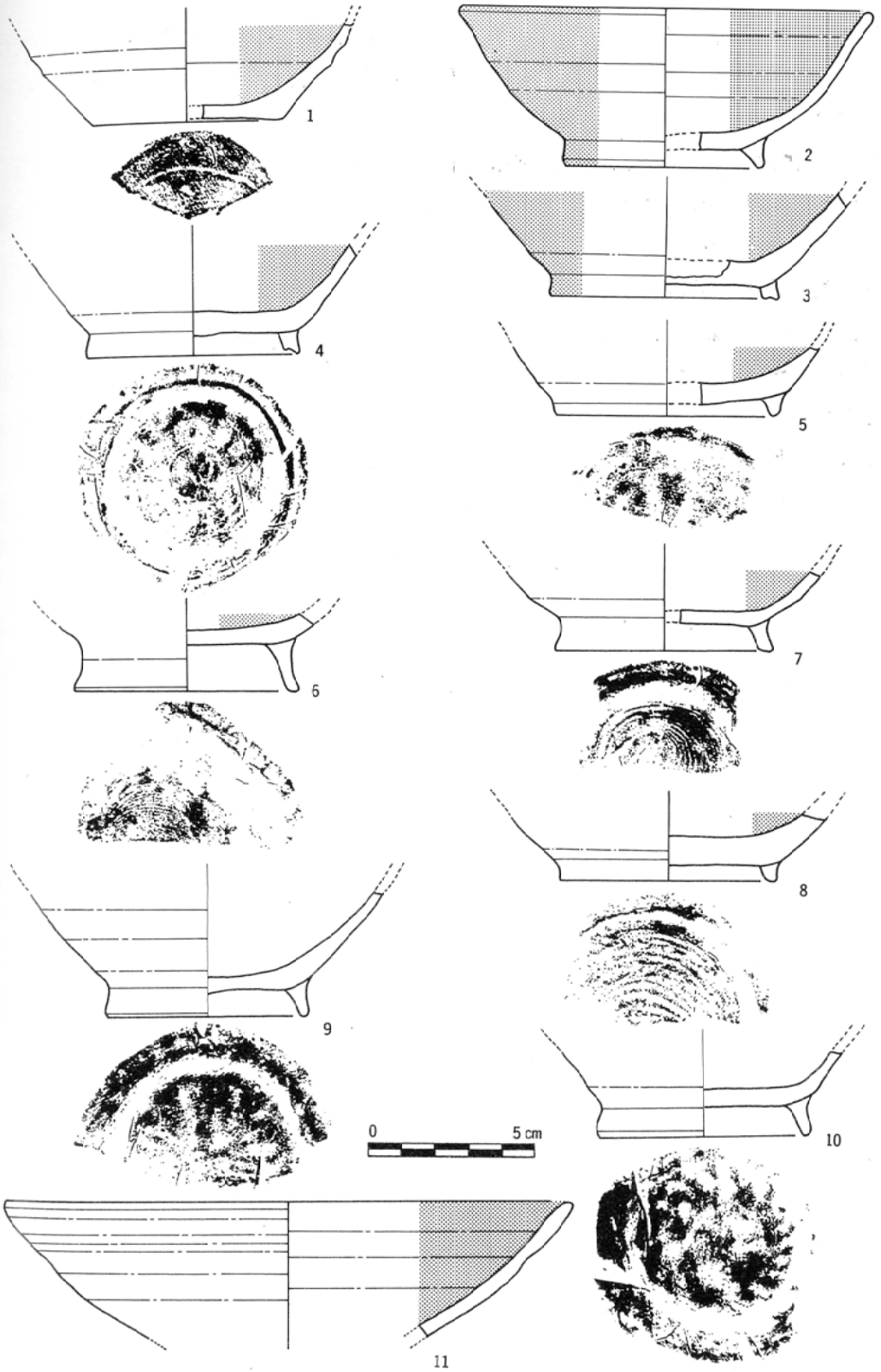
a　土師器（第33図）

坏，高台付坏，埦，甕の各器種がある。このうち，埦は破片が１点と少なく，また甕はいずれも小破片であり図示できるものはなかった。

坏は回転糸切り技法によって切り離され，内面にヘラミガキ，黒色処理が施されている底部資料が17点出土している。口縁部，体部資料は高台付坏との区別が困難である。第33図１は図示できる唯一の資料で，底部からやや丸味をもって立ち上がっている。器厚は薄い。

高台付坏は，内外面とも黒色化処理の施されたもの（２・３），内面に黒色化処理の施されたもの（４～８），内面にヘラミガキが施されているが黒色処理のないもの（９・10）の３種類に大別される。２は丸味をもって立ち上がり口縁部はやや外反する。底部はナデによって平滑に仕上げられており，切り離し技法は不明である。高台は短かく，やや外反している。内外面とも黒色処理の施された高台付坏のうち，底部から口縁までの形態の明らかな唯一の資料である。３はやや開き気味に直線的に立ち上がる大形の資料で，直立する高台が付けられている。底部には放射状のナデつけがみられる。

４は急角度で，５は丸味をもって立ち上がる内黒の高台付坏で，両者とも短かく直立す



第 33 図　遺構外出土遺物（1）

る高台が付けられ，底部には放射状ナデツケがみられる。6～8は坏部の切り離しの際の回転糸切り痕が明瞭に残る資料で，6には長く外反する高台が，8には短かく直立する高台が付けられている。

9・10は内面がヘラミガキによって平滑に仕上げられた高台付坏で，9は丸味をもって，10は直線的に立ち上がっている。ともにやや長く外反する高台が付けられ，底部には放射状ナデつけがみられる。

b　須恵器（第34図）

坏，高台付坏，蓋，壺，甕の破片の出土があるが図示可能なものは甕の底部資料2点だけである。坏の破片は口縁部12点，体部18点，底部9点であるが，底部資料はすべて糸切痕をもつ。高台付坏は1点，蓋は2点と少なく，蓋は口縁部が直角に折り曲げられている。壺の破片も多くはない。

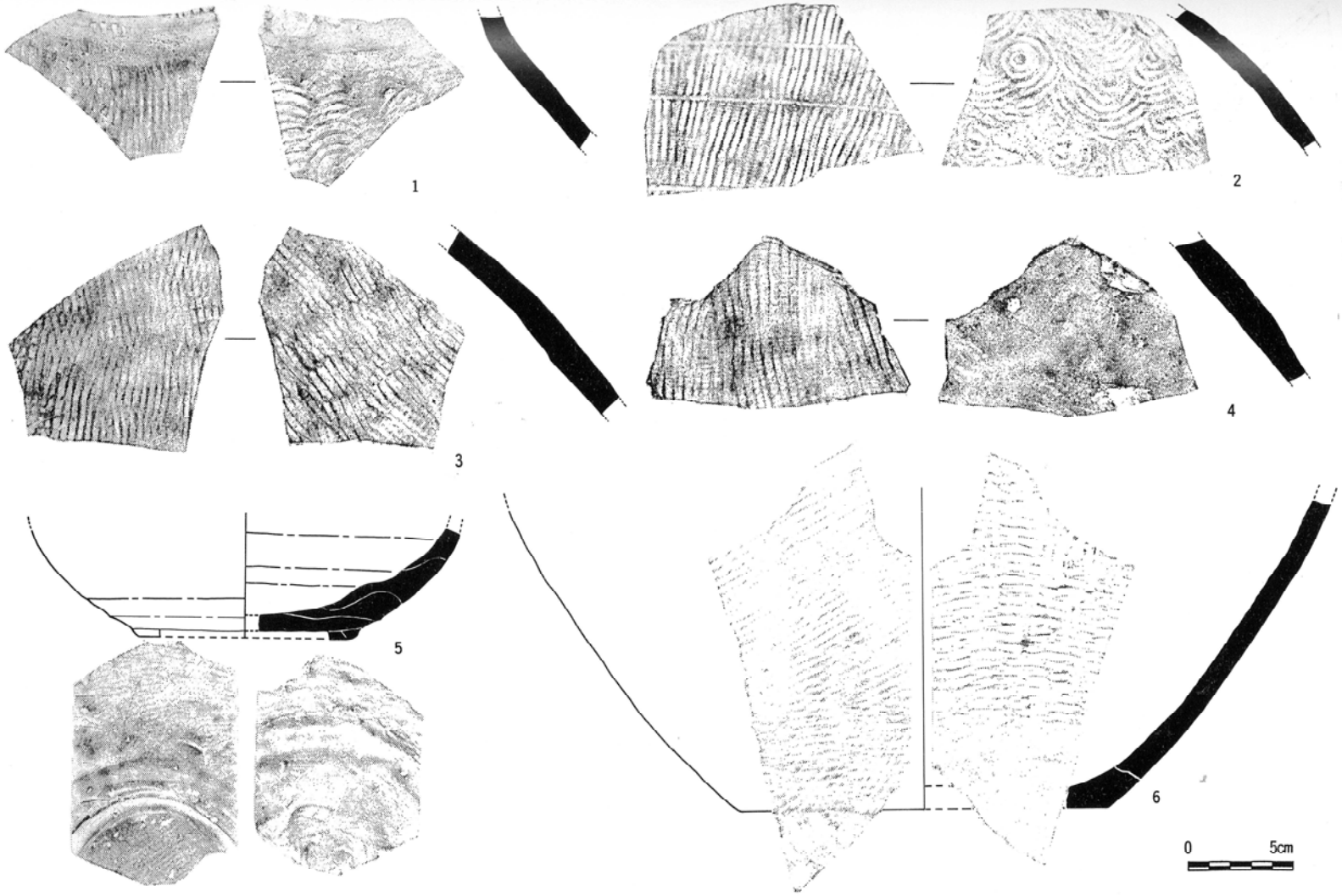
第34図1～4は甕の肩部ないしは体部の破片である。1は頸部から肩部にかけての破片で，外面は格子状叩目が施され，頸部はその後ロクロナデ整形が施されている。内面は青海波文のアテの後，肩部の上半までロクロナデ整形が施されている。2は肩部の破片で，外面には格子状叩目が施された後，沈線がめぐらされている。内面には青海波文のアテがみられる。3は肩部ないしは体部の破片で，外面に格子状叩目文が，内面に平行叩目文が施されている。4は外面に格子状叩目文が，内面に径3cmぐらいの割合平坦な丸石のようなもの圧痕が認められる。5は甕または大形の壺の底部資料で低い高台がつけられている。外面には底部まで格子状の叩目が施され，高台部付近はロクロナデにより平滑に仕上げられている。内面には凹凸の著しいロクロ目が観察され，断面には巻き上げないし輪積みの痕跡が明瞭に認められる。6は底が平底になる甕で，内外面とも平行叩目文が施されているが，内面の上部には青海波文の一部とみられるものが認められる。

C　赤焼土器（第35図）

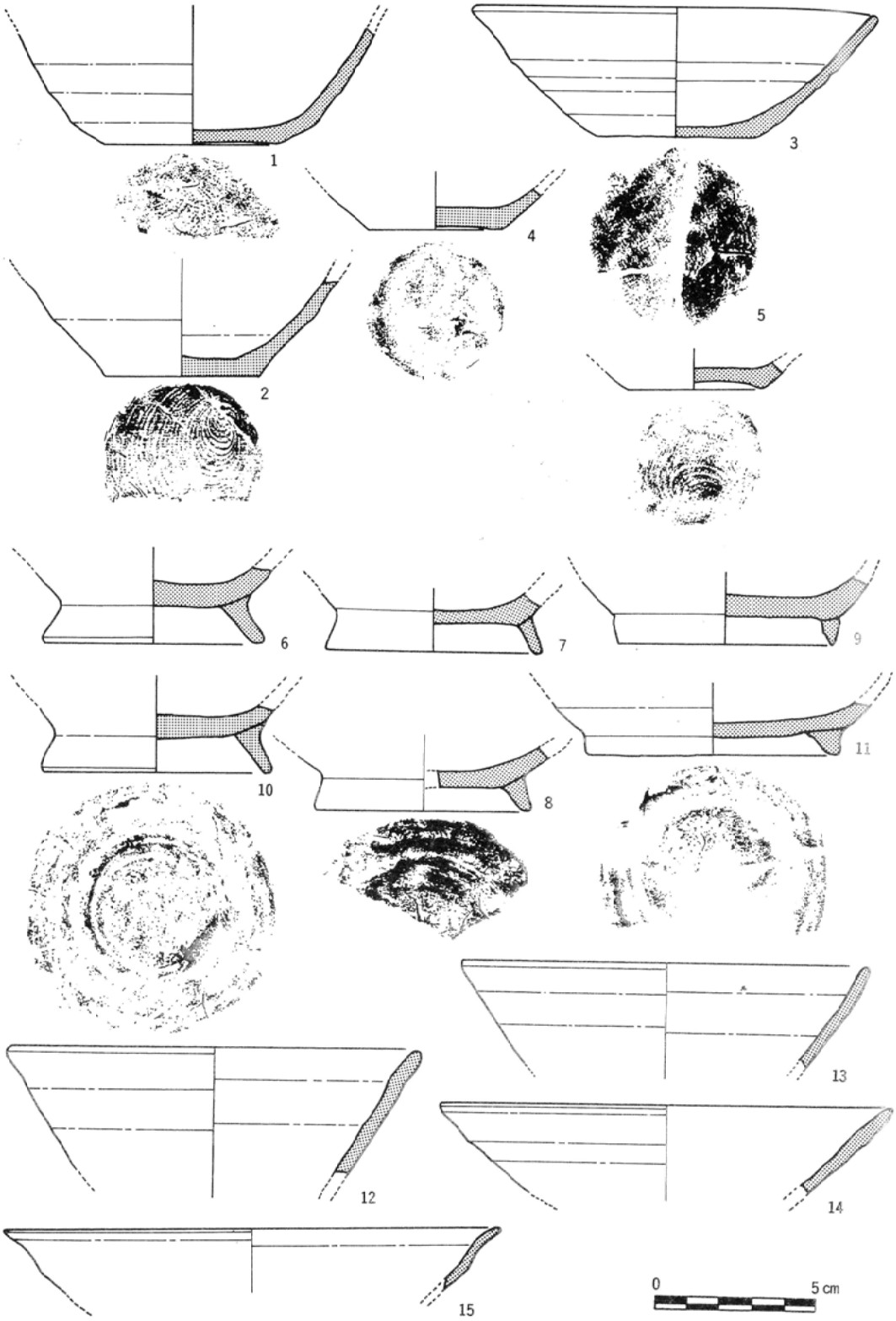
坏，高台付坏があるが全体の器形の明らかなものは1点の坏だけである。第35図1は底部付近でゆるやかに立ち上がり，底部下半から急角度で外傾している。2は急角度で直線的な立ち上がりを示す。3は丸味をもってゆるやかに立ち上がり，そのまま外傾する。4・5は底径の極端に小さな資料である。

6～8は高台の端部径がいずれも68mmで外反する高台の付く中形の資料である。9も端部径68mmをはかるが直立する高台が付けられている。10は端部径72mm，長く外反する高台が付く。11は端部径が80mmと大形の資料で直立する高台が付く。

12～15は坏，高台付坏の口縁部資料である。このうち14，15は口径が大きく，開き気味であることから，高台付坏とみられる。



第34図　遺構外出土遺物（２）



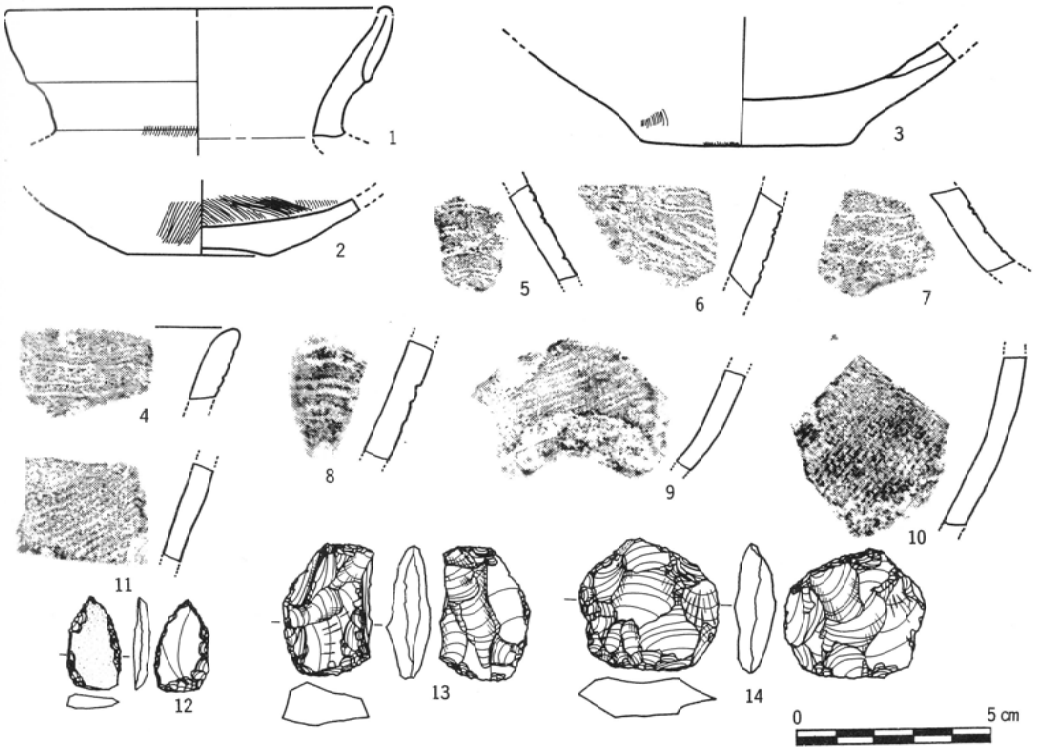
第35図　遺構外出土遺物（3）

2） 古墳時代の土師器，弥生土器，石器（第36図）

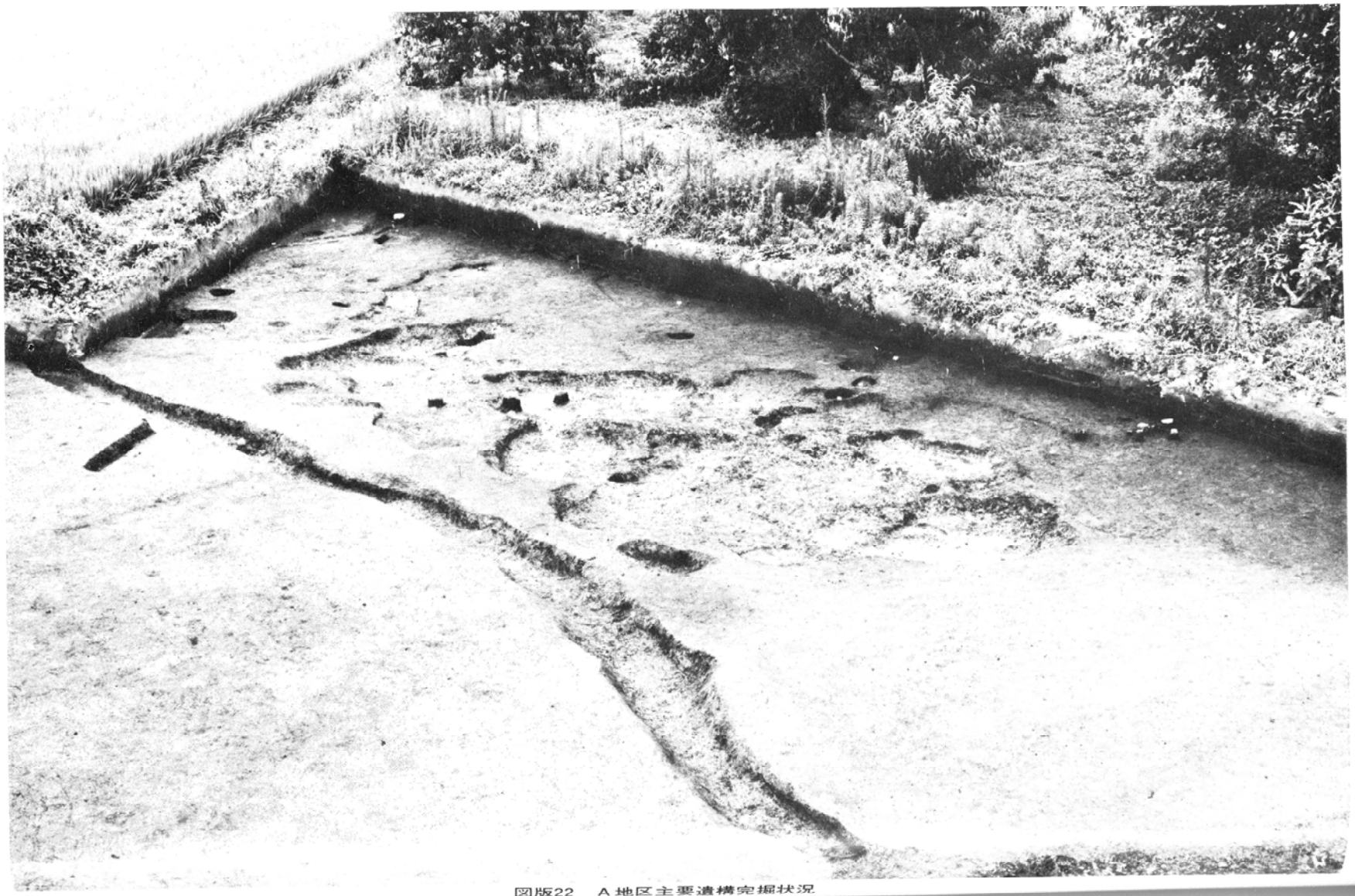
第36図１はＳＤ30から出土した土師器壺の口頸部資料である。口唇部がわずかに欠損する。複合口縁をなし，頸部から体部に移行する部分に刷毛目が観察される。口頸部の内外面ともヨコナデが施されている。2・3はともに壺の底部資料である。両者とも磨滅が著しいが，２では内外面に，３で外面に刷毛目が観察される。他に体部の破片が16片出土している。これらの土器は古墳時代前期の塩釜式に位置づけられる。

同図４～11はＳＤ30，43，ＳＸ６，45などの遺構覆土から出土した弥生土器の破片である。４は甕の口縁部破片で半截竹管状の工具で二本同時に引かれた平行沈線による横線文のある資料である。５は同じ手法によって描かれた渦巻文ないしは同心円文をもつ壺の破片とみられる。６は上半は連弧文，下半は附加縄文となる文様帯の境界の資料で，壺または甕の体部破片である。７は同じく連孤文の施された壺の破片と思われる。８にも二本同時に引かれた文様が施されている。９～11は附加縄文の施された壺ないしは甕の体部資料である。これらの土器は弥生時代中期末葉に位置づけられる「桜井式」の仲間とみられる。

同図12は薄手の剝片に周辺加工を施しただけの石鏃である。また，13，14は両極打法によって製作されたピエスエスキーユ（岡村1976）である。縦断面は凸レンズ状を呈し，13は折損している。



第36図　遺構外出土遺物（４）

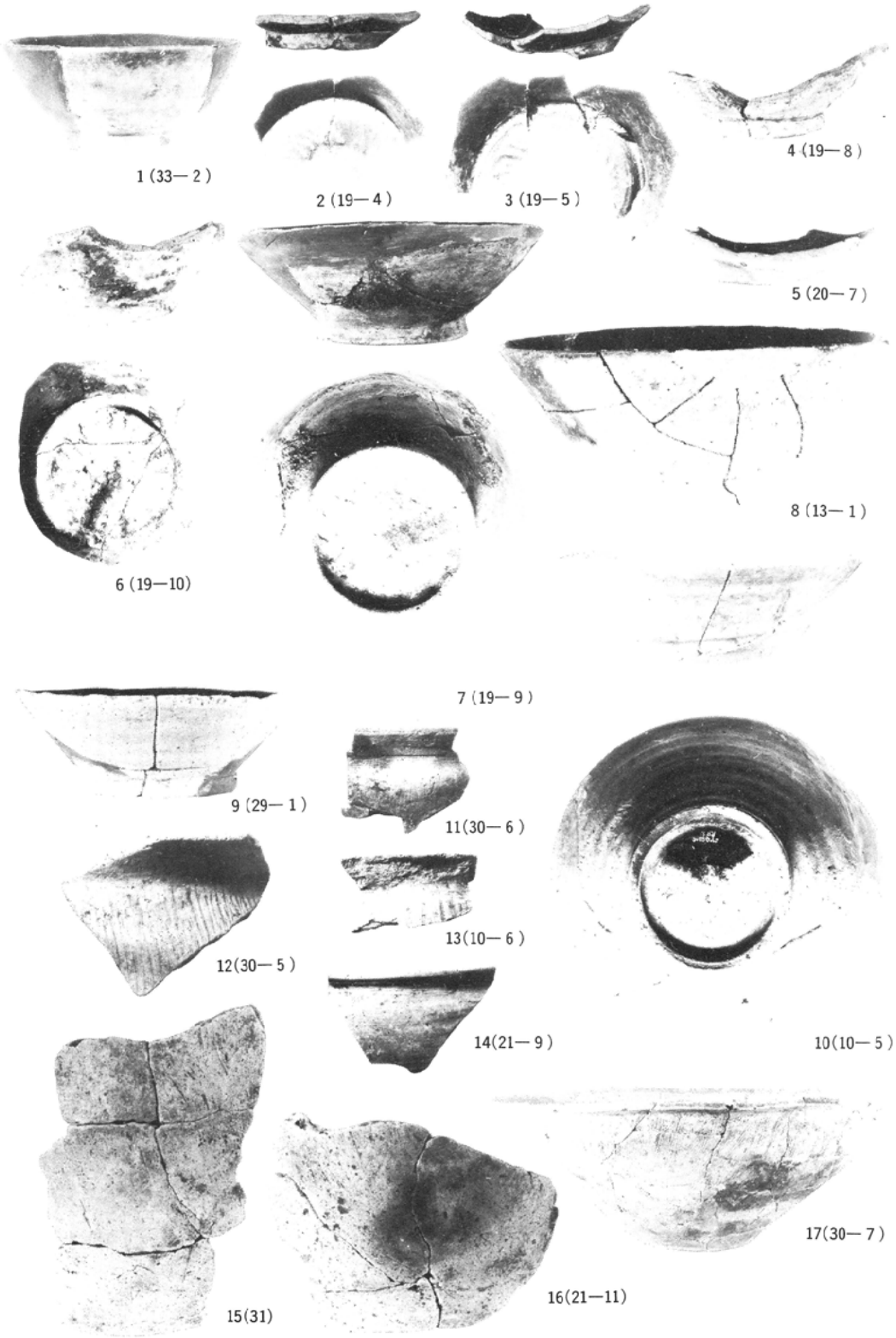


図版22　A地区主要遺構完掘状況

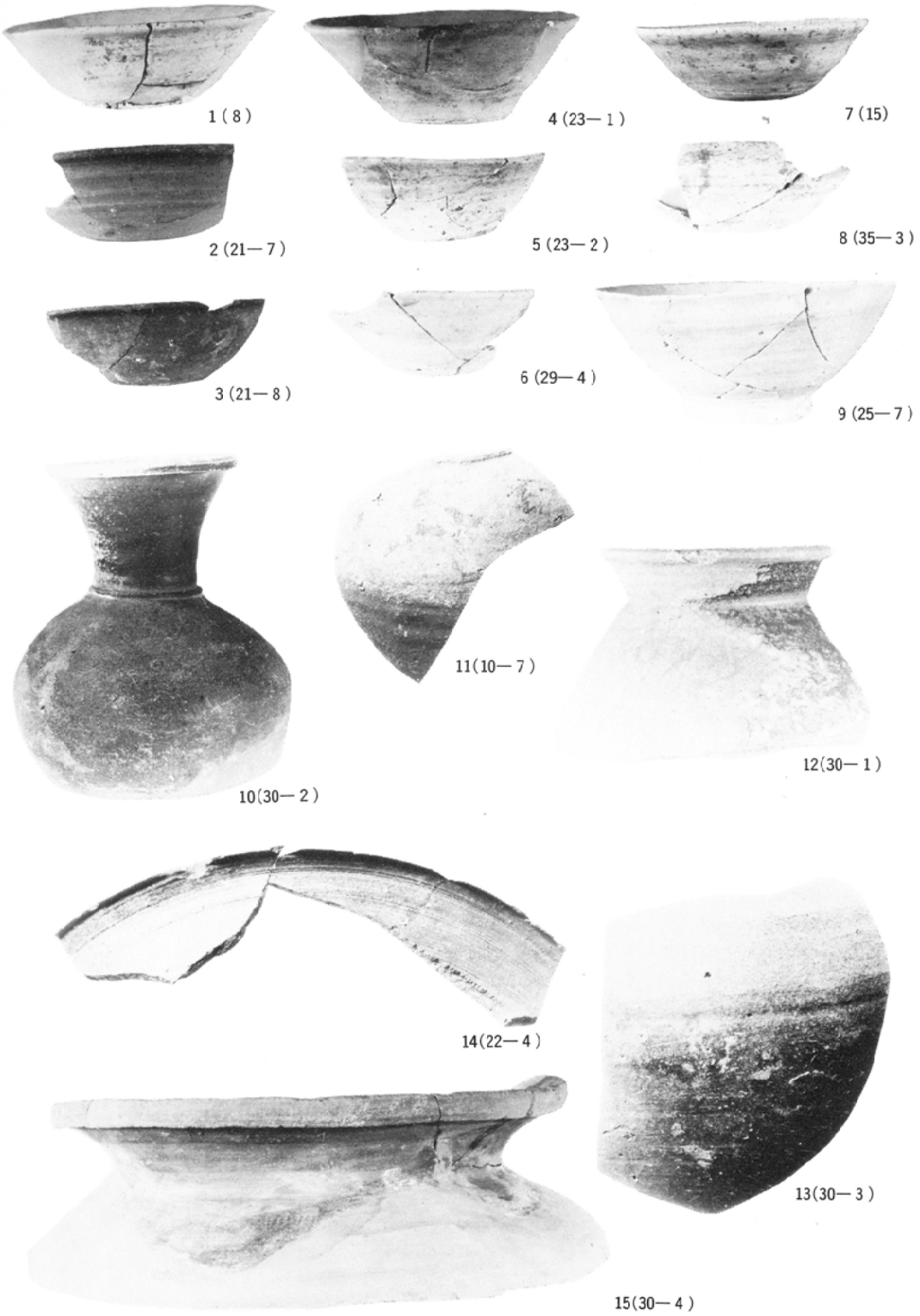
図版22　A地区主要遺構完掘状況

図版23　地区主要遺構東半

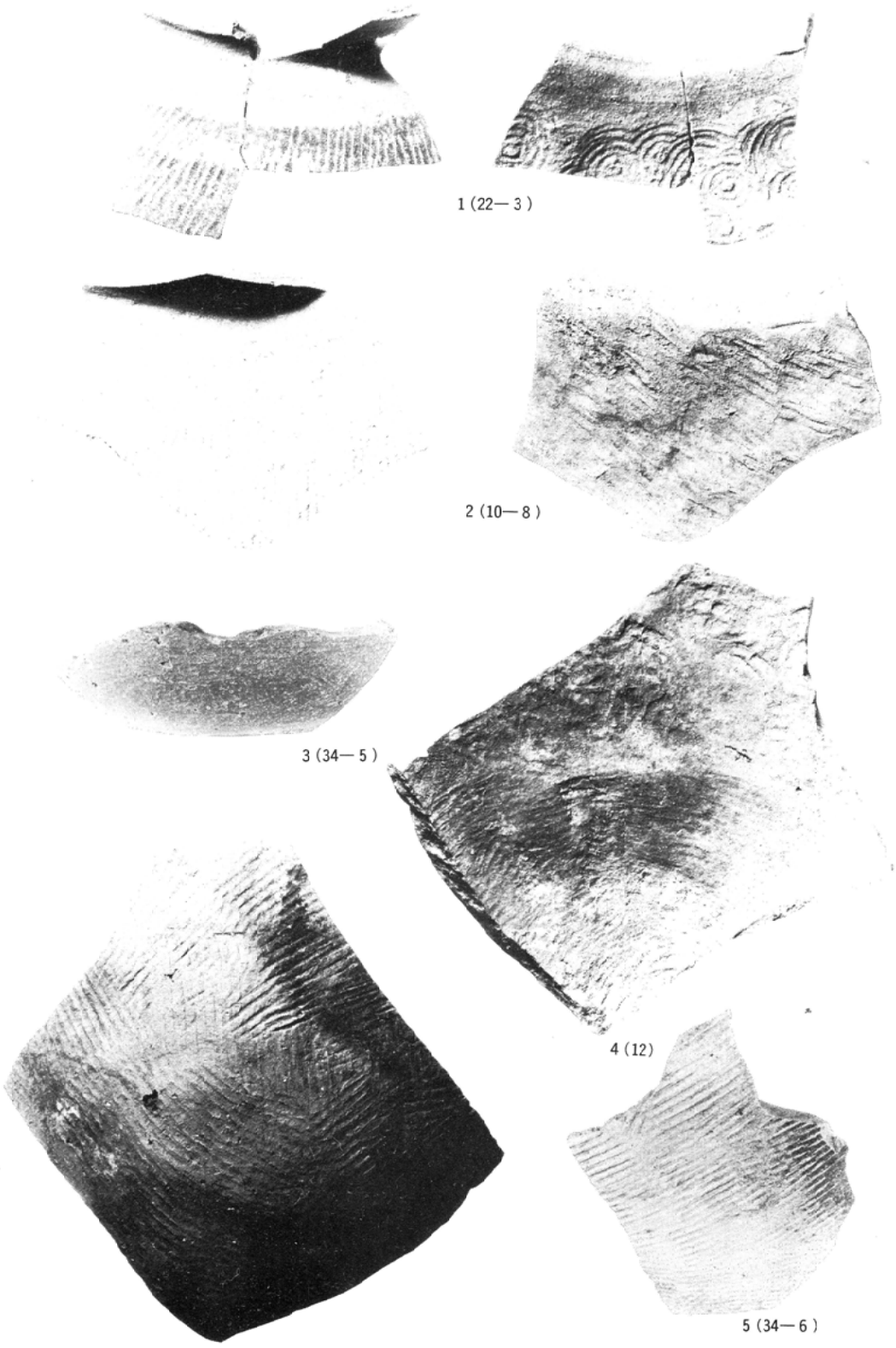
図版24　A地区主要遺構西半



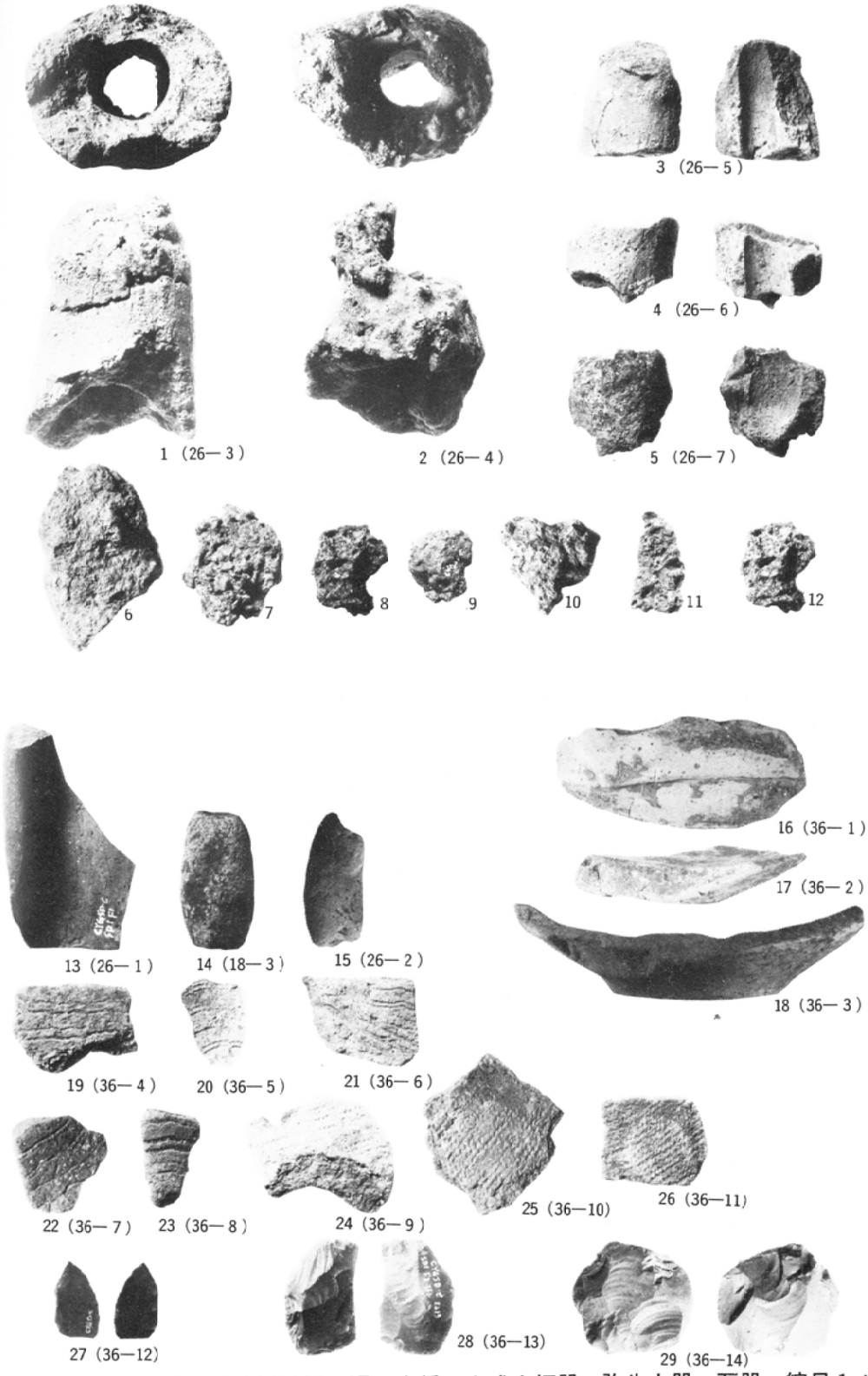
図版25　A地区出土遺物(1)土師器　縮尺1：3（17は1：6）



図版26　A地区出土遺物（2）赤焼土器（4～9）須恵器（1～3、10～15）縮尺1：3



図版27　A地区出土遺物（3）須恵器　縮尺1：3



図版28　A地区出土遺物(4)　硯，土錘，古式土師器，弥生土器，石器　縮尺1：2

Ⅳ　Ｂ地区発見の遺構と遺物

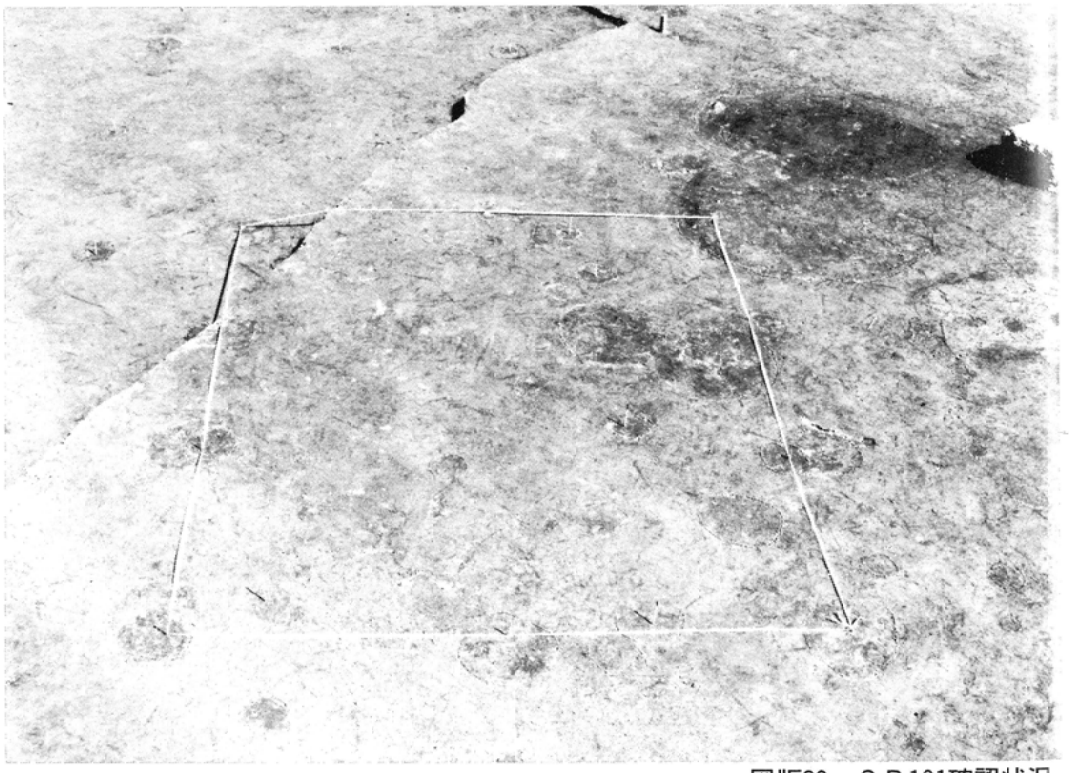
1　掘立柱建物跡

Ｂ地区では５棟の掘立柱建物跡を確認した。その重複関係から少なくとも３時期にわたると思われるが，各々の先後関係やセット関係は把えられなかった。

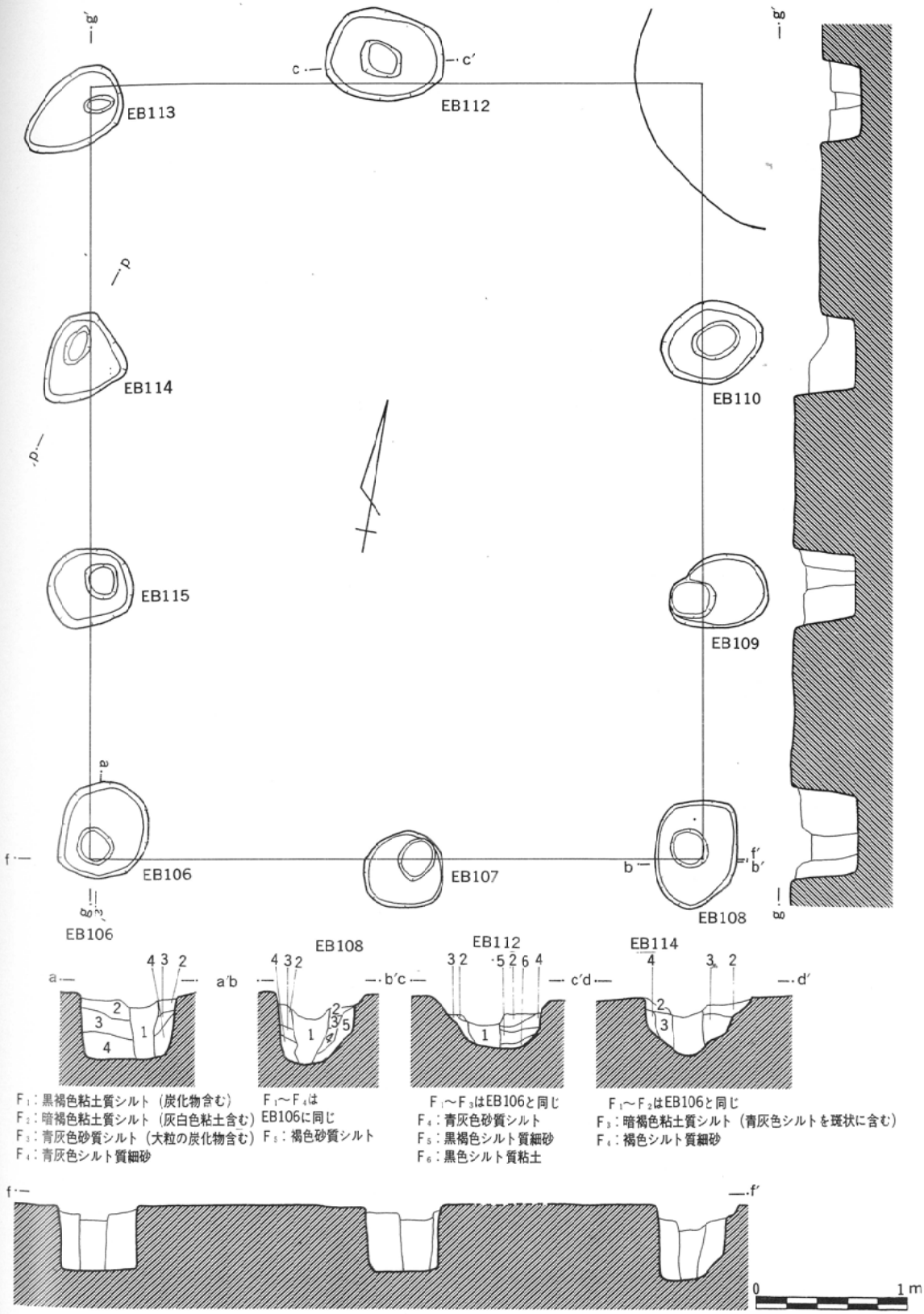
１）ＳＢ101（第37図　図版29～34）

20・21―37・38区において耕作土直下の地山面で確認した桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。ＳＢ104，105と重複するが，柱穴の切合いはなくそれぞれの先後関係は把えることができなかった。しかし，切合関係をもつ３基の土壙のうちでは最も古いＳＫ155に切られており，Ｂ地区で検出した遺構群のなかでは最も古いもののひとつとみることができる。建物の規模は南北5.1m，東西4.0mの南北棟で主軸方向はＮ－８°－Ｗとわずかに西に振れている。柱間距離は一定せず南北柱側で1.6～1.7m，東西柱列で1.8～2.2mをはかる。柱の掘り方は，一辺50～70cm前後の不整の隅丸方形で，確認面からの深さは40～50cmをはかる。中に径20～25cmの柱根の朽ちた痕跡（アタリ）が明瞭に認められた。しかし，このアタリは各柱列のなかで一直線には並ばず，若干の振れをもっている。

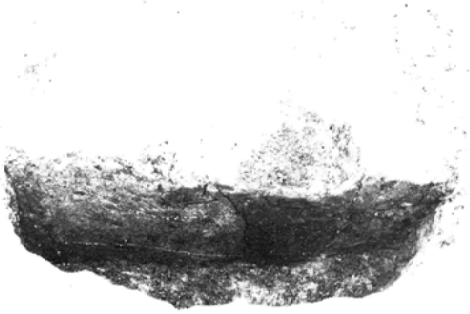
ＥＢ114の覆土から土師器の甕の体部と底部の破片がそれぞれ１点出土している。



図版29　ＳＢ101確認状況

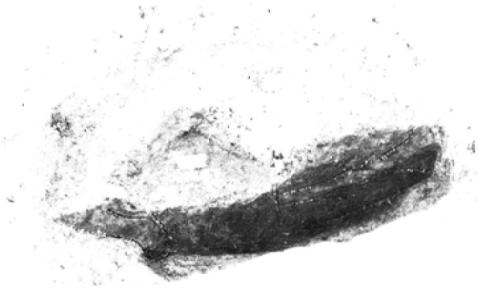

EB113
EB112
EB114
EB110
EB115
EB109
EB106
EB107
EB108
EB106
EB108
EB112
EB114
F₁：黒褐色粘土質シルト（炭化物含む）
F₂：暗褐色粘土質シルト（灰白色粘土含む）
F₃：青灰色砂質シルト（大粒の炭化物含む）
F₄：青灰色シルト質細砂
F₁～F₄はEB106に同じ
F₅：褐色砂質シルト
F₁～F₃はEB106と同じ
F₄：青灰色砂質シルト
F₅：黒褐色シルト質細砂
F₆：黒色シルト質粘土
F₁～F₂はEB106と同じ
F₃：暗褐色粘土質シルト（青灰色シルトを斑状に含む）
F₄：褐色シルト質細砂
0
1m

第37図　SB101

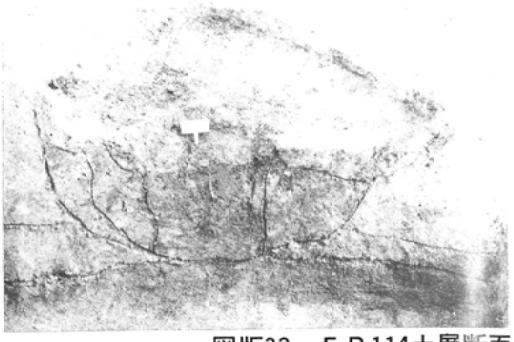


図版30　ＥＢ106土層断面

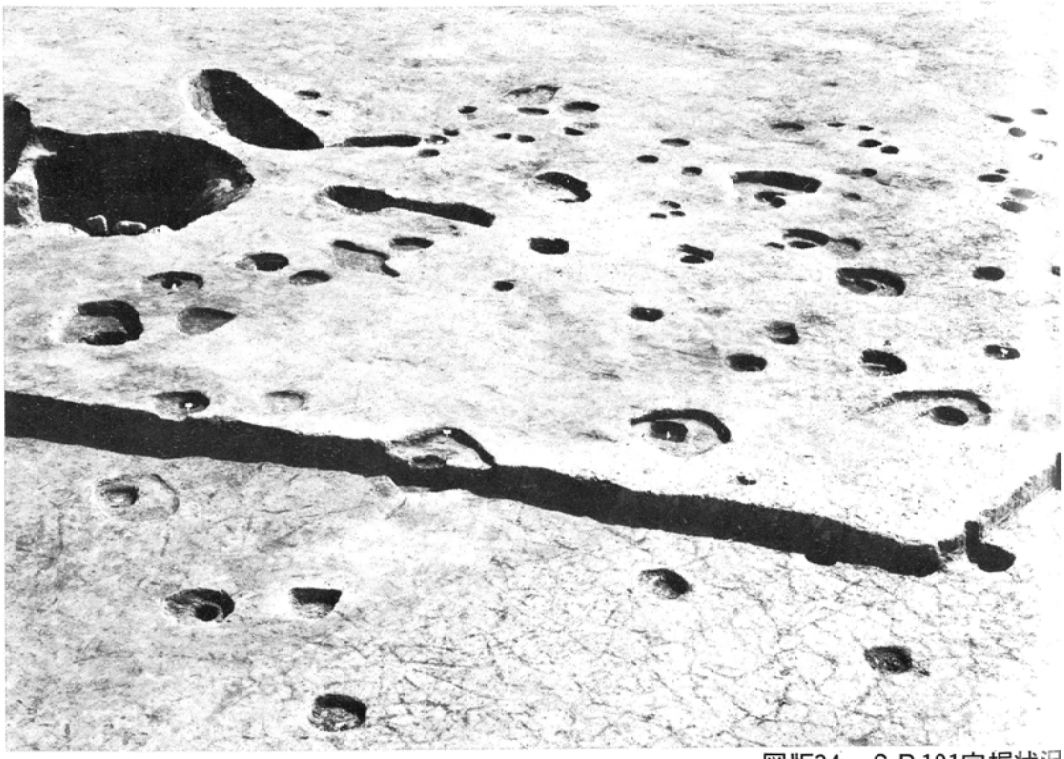
図版31　ＥＢ108土層断面



図版32　ＥＢ112土層断面



図版33　ＥＢ114土層断面

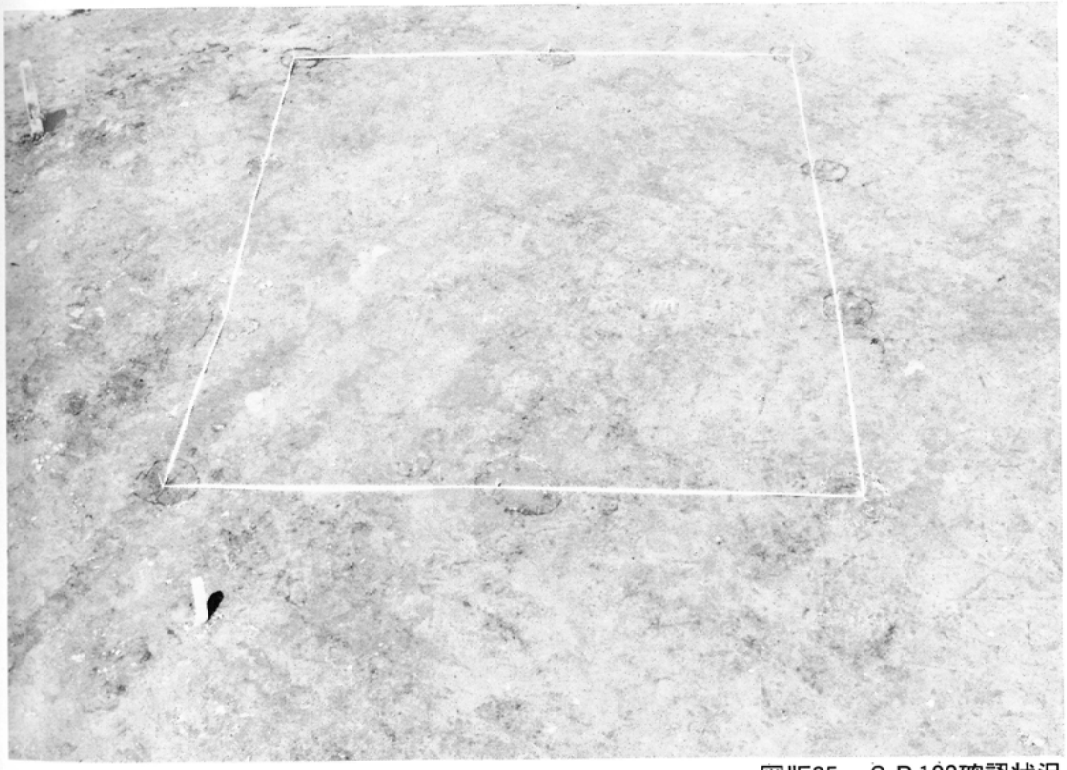


図版34　ＳＢ101完掘状況

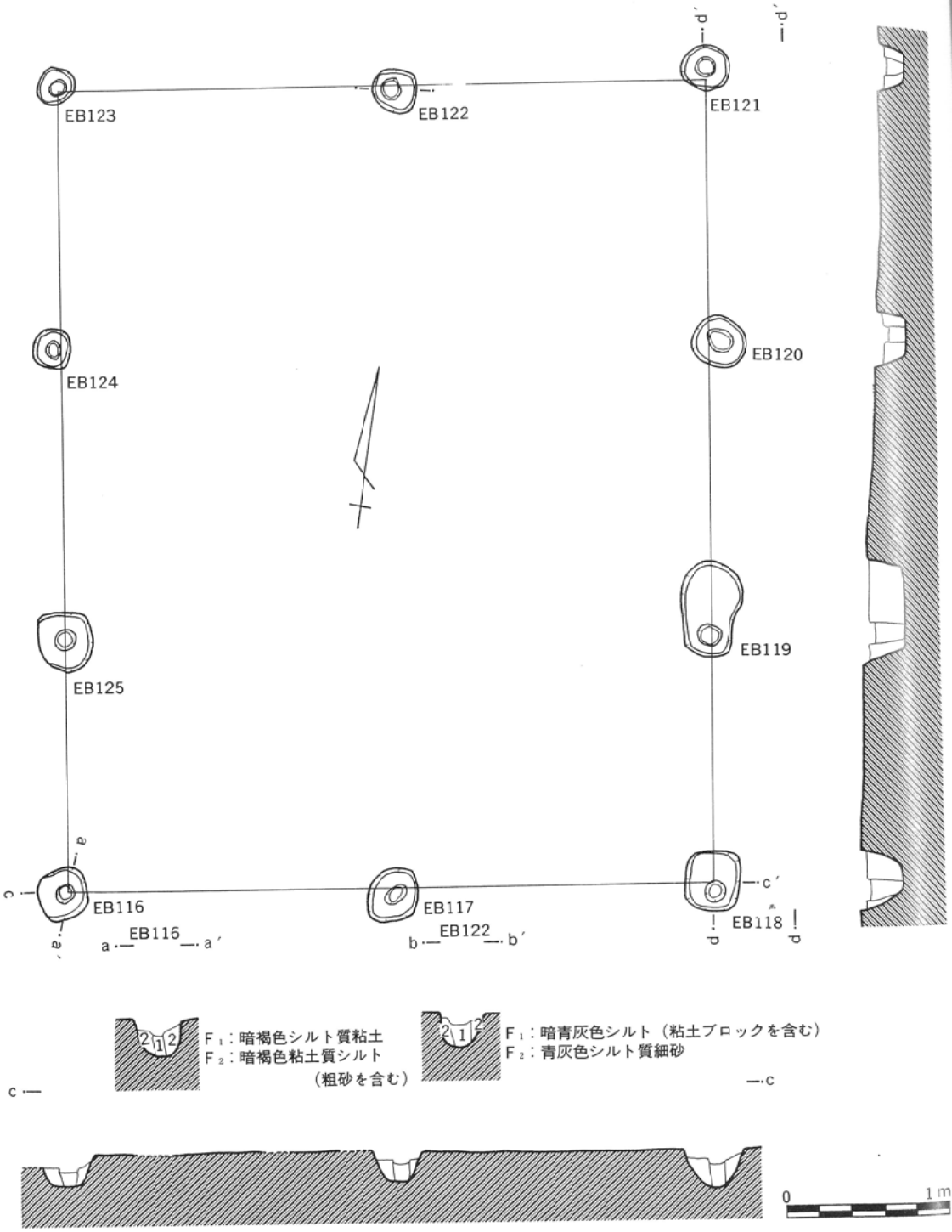
2）ＳＢ102（第38図　図版35～39）

18・19—40・41区において耕作土直下の地山面で確認した桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。この付近の地山面はシルト質の細砂となり，建物の中央部で自然堤防の頂部とみられるＳＢ101のある付近から約40cmほど低くなっている。また，地山面自体が南から北へ傾斜し，南側柱列と北側柱列のそれぞれの確認面の比高差は約20cmをはかる。この建物は溝３ｂ群によって切られているが，周辺には柱穴と思われるピットも少なく，住居に関する遺溝との重複関係はなかったものと思われる。なお，この建物の北側柱列の北方には遺構はなく，遺跡の北端と考えられる。

建物の規模は南北5.05～5.15m，東西4.0mの南北棟で主軸方向はN－８°—Wをはかる。規模主軸方向ともＳＢ101と一致する。柱間距離は西側柱列で北から1.65，1.80，1.60m，東側柱列で1.70，1.85，1.60m，北側柱列南側柱列では西から2.05，1.95mをはかる。柱の掘り方は一辺が30cm前後の不整隅丸方形，ないしは径30cm前後の不整円形で，確認面からの深さは20cm前後である。掘り方のなかには径10～15cmの円形のアタリがあり，各柱列ともほぼ一直線に並んでいる。平面的にはＳＢ101とほぼ同一規模であるが，後世の削平を考慮に入れても，掘り方，アタリとも約半分と小さく，性格の異なる建物であることを窺わせる。掘り方からの出土遺物はない。

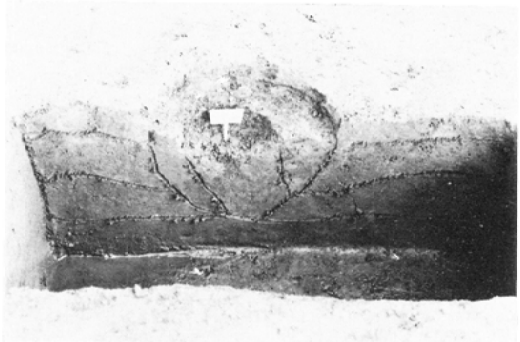


図版35　ＳＢ102確認状況


EB123
EB122
EB121
EB124
EB120
EB125
EB119
EB116
EB117
EB118
a
a′
b
b′
c
c′
d
d′
F₁：暗褐色シルト質粘土
F₂：暗褐色粘土質シルト
（粗砂を含む）
F₁：暗青灰色シルト（粘土ブロックを含む）
F₂：青灰色シルト質細砂
0
1 m

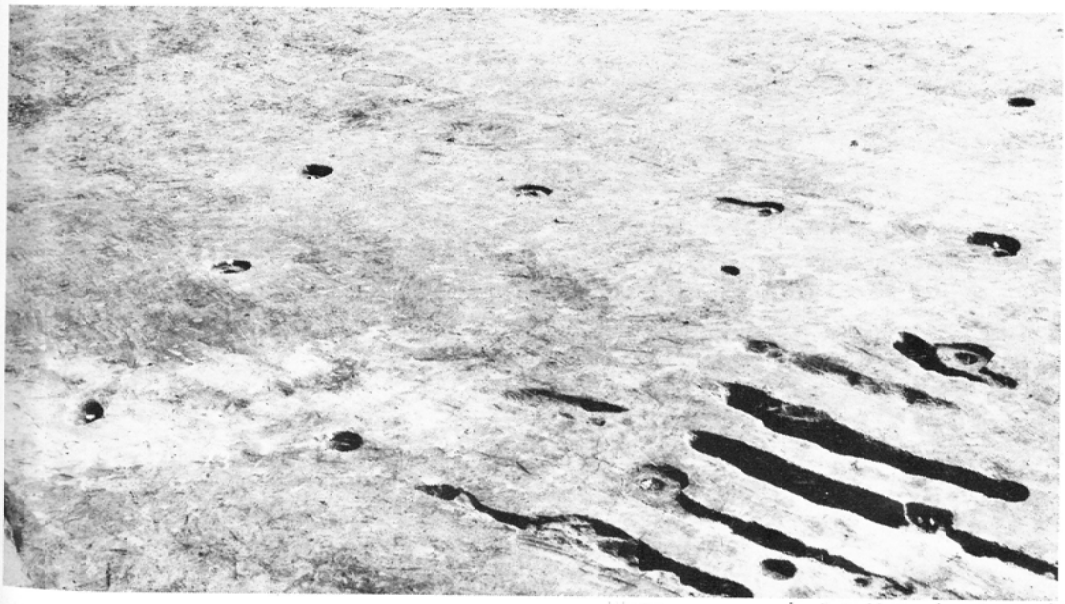
第38図　ＳＢ102

図版36　ＥＢ116土層断面



図版37　ＥＢ122土層断面

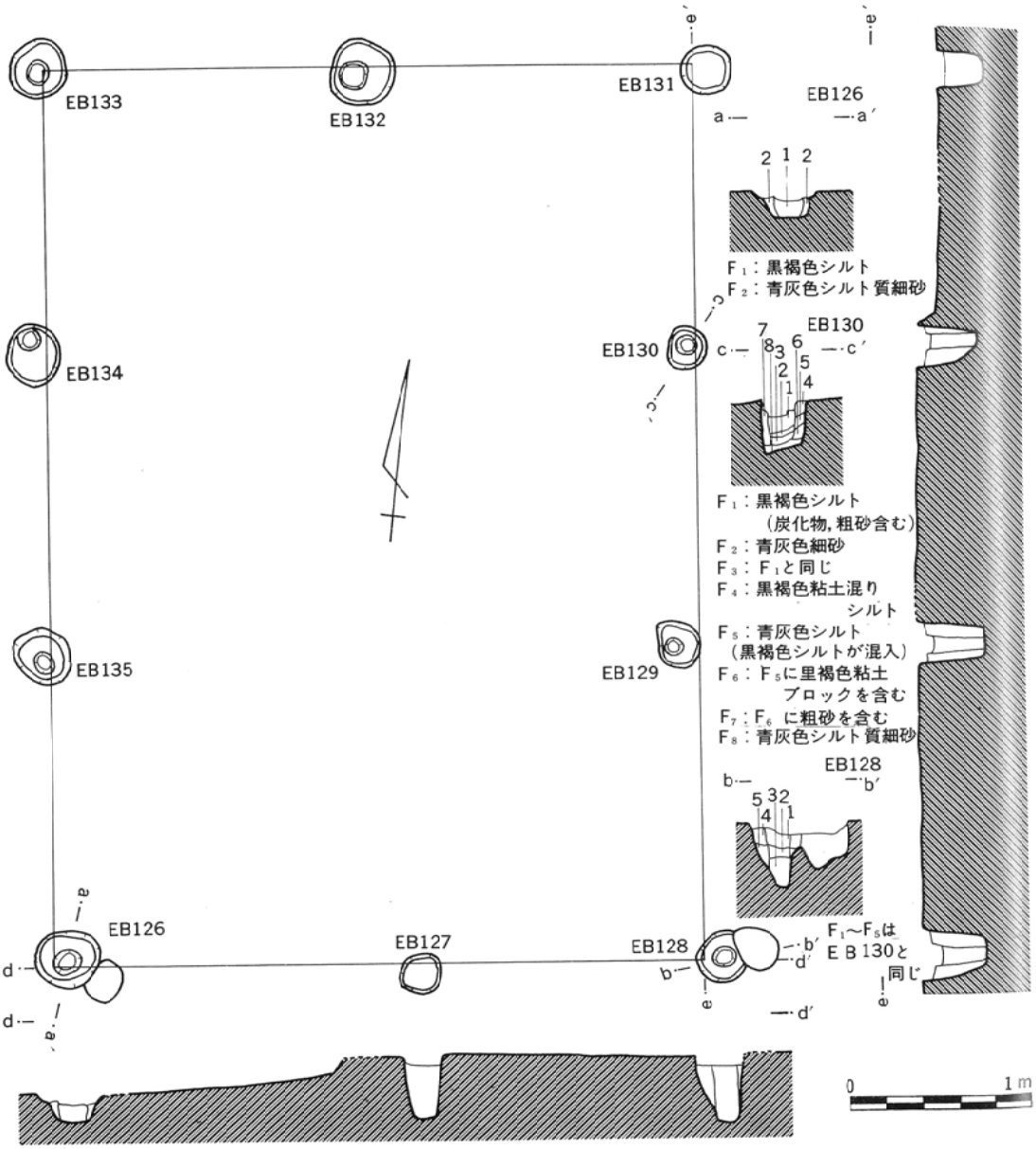
図版38　ＳＢ102完掘状況（北方より）



図版39　ＳＢ102完掘状況（西方より）

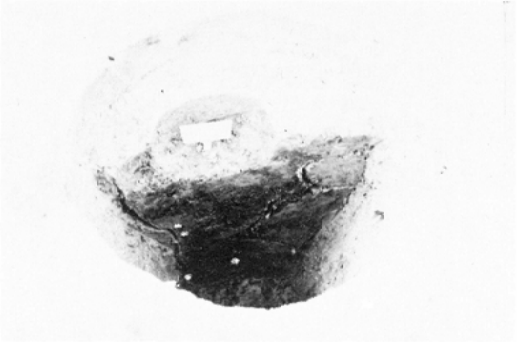
3）ＳＢ103（第39図，図版40～43）

19～39・40区の地山面で確認した桁行３間，梁行２間の掘立柱建物跡である。この建物の内部や周辺には多くの柱穴があり，２～３棟が重複していたものと考えられる。建物の規模は南北5.0m，東西3.6～3.7mの南北棟で主軸方向はN－７°－Wである。柱間距離は西側柱列で北から1.50，1.80，1.70m，東側柱列で1.55，1.70，1.75m，北側柱列で西から1.70，2.60m，南側柱列で2.00，1.70mをはかる。掘り方は径35cm前後，深さ40cmの不整円形で中に径10～15cmのアタリがある。ＥＢ131，135内から土師器甕，須恵器坏の破片が出土している。



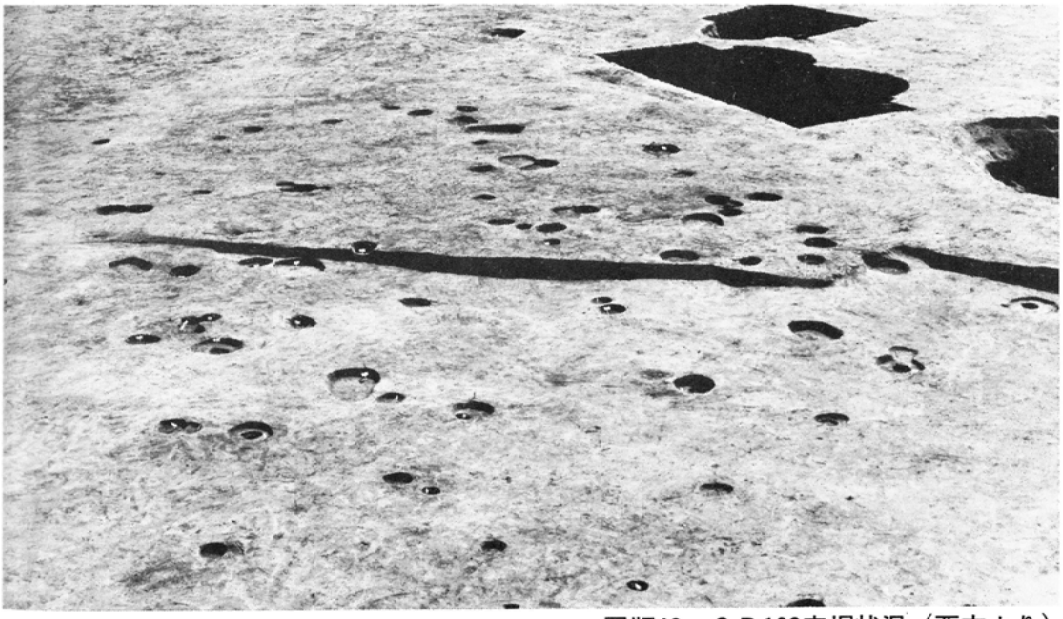
第39図　ＳＢ103

図版40　ＥＢ128土層断面



図版41　ＥＢ135土層断面

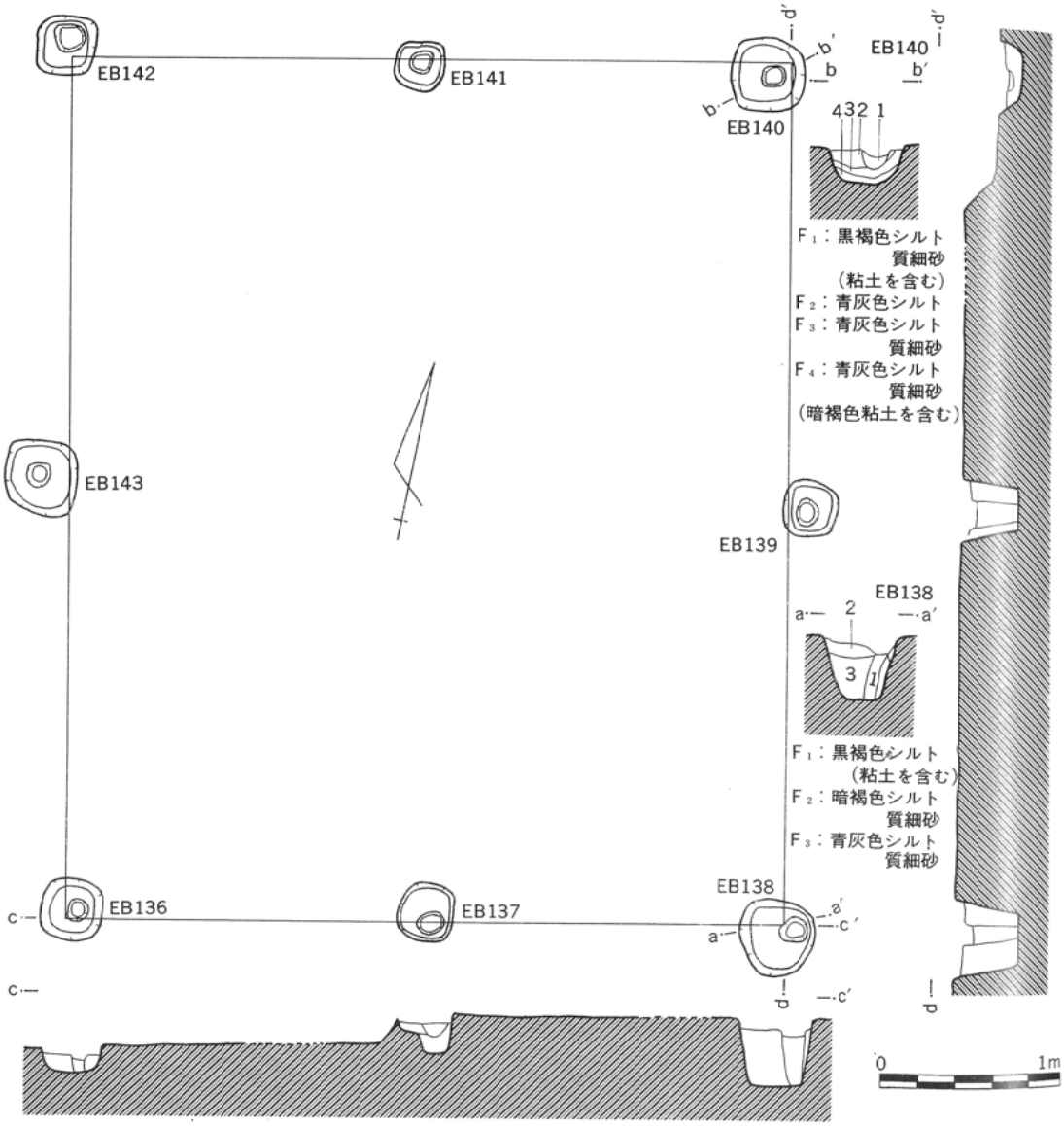
図版42　ＳＢ103完掘状況（北方より）



図版43　ＳＢ103完掘状況（西方より）

4）ＳＢ104（第40図　図版44～47）

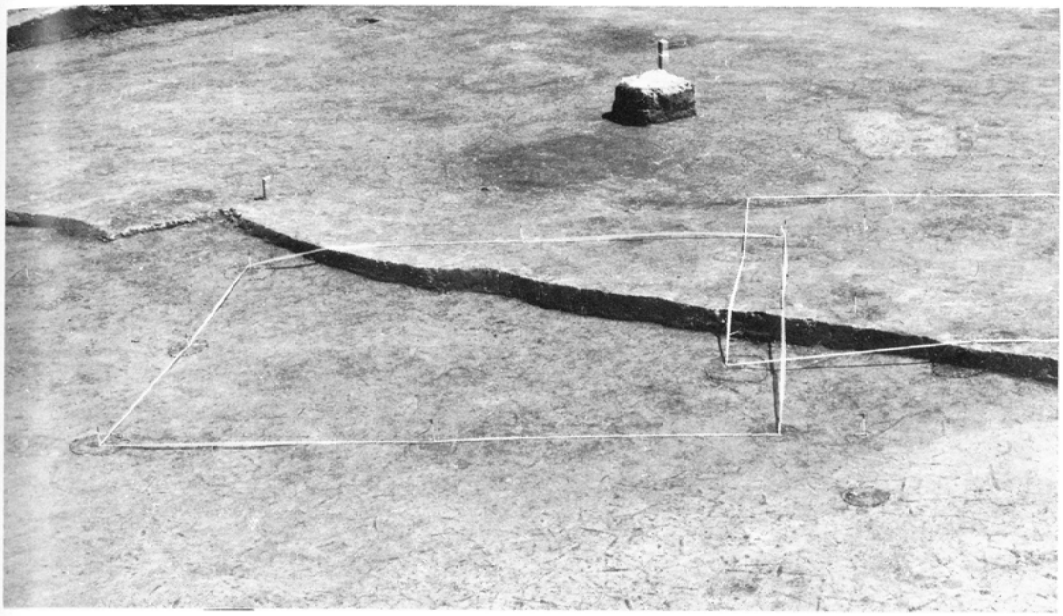
20・21—38・39区の地山面で確認した２間×２間の掘立柱建物跡である。ＳＢ101と重複し，50cmの距離でＳＢ105と隣接することから，同一時期とは考えにくい。建物の規模は南北4.7～4.8m，東西2.8～3.9mの南北棟で主軸方向はＮ—10°—Ｗをはかる。柱間距離は西側柱列は2.4m等間，東側柱列で北から2.4，2.3m，北側柱列で1.9m等間，南側柱列は西から1.9，2.0mである。掘り方は一辺約40cmの隅丸方形で，深さは30～40cm，中に径10～15cmのアタリがある。ＥＢ137から土師器坏，142から須恵器坏の破片が出土している。



第40図　ＳＢ104

図版44　ＥＢ137土層断面

図版45　ＥＢ140土層断面

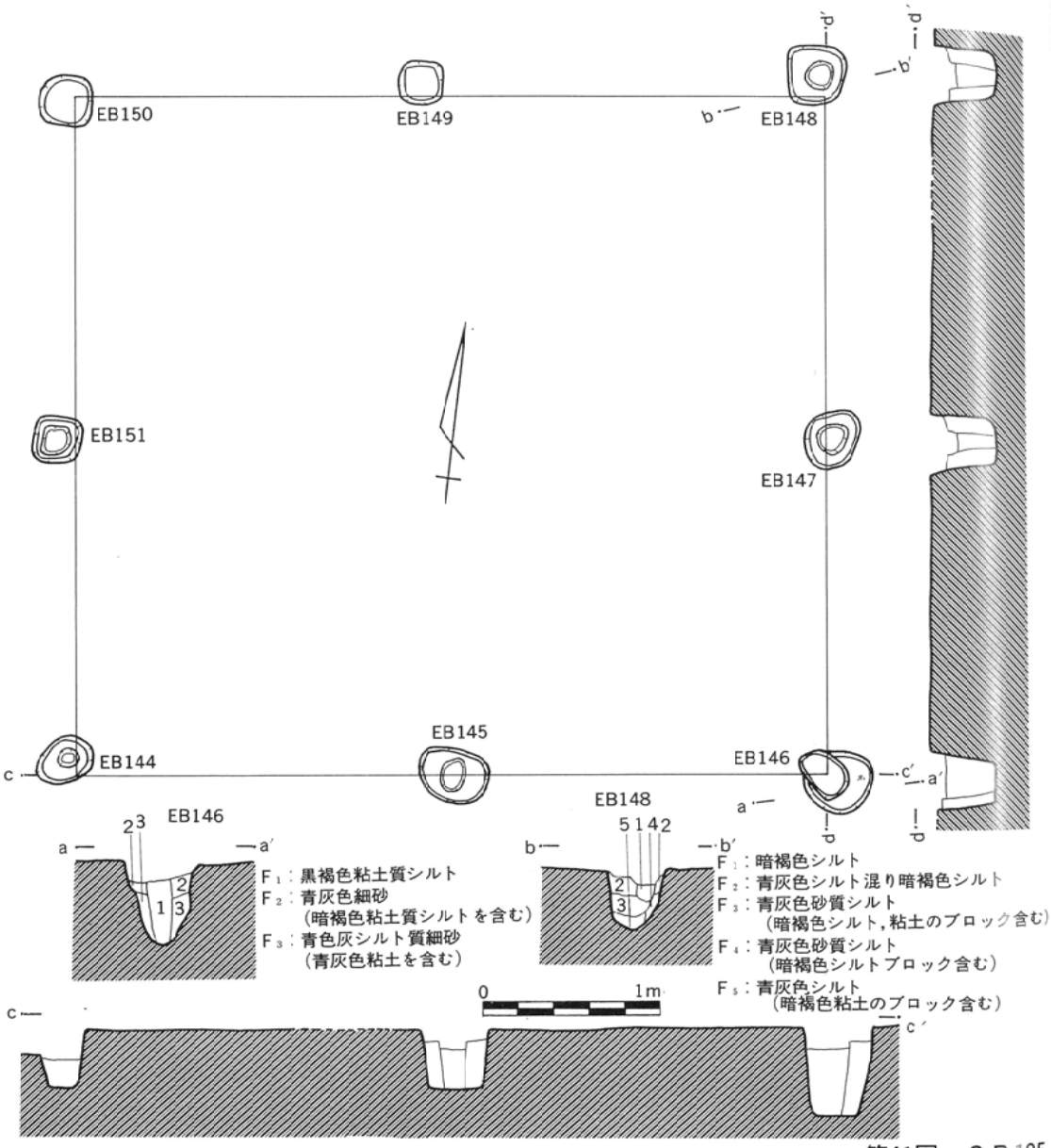


図版46　ＳＢ104確認状況（西方より）

図版47　ＳＢ104完掘状況（北西方より）

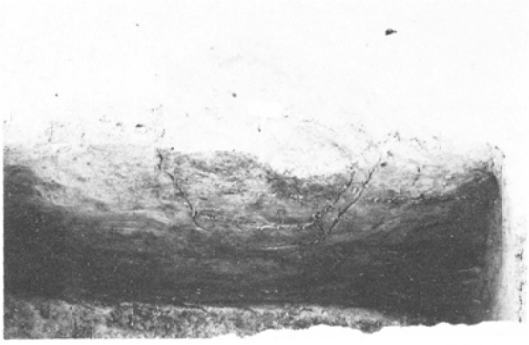
5）ＳＢ105（第41図　図版48～51）

21・22—38区の地山面で確認した２間×２間の掘立柱建物跡である。ＳＢ101と重複し，ＳＢ104と近接する。建物の規模は南北3.7～3.9m，東西4.20～4.25mの東西棟で主軸方向はN—83°—Eとなっている。柱間距離は北側柱列で西から2.00，2.20m，南側柱列で2.15，2.10m，西側柱列で北から1.90，1.80m，東側柱列で2.00，1.90mをはかる。掘り方は一辺30～35cmの不整な隅丸方形で，深さは35～50cm，中に径15cm前後のアタリがある。ＥＢ145，147，148内から土師器，須恵器，赤焼土器の破片が出土している。



第41図　ＳＢ105

図版48　ＥＢ146土層断面



図版49　ＥＢ148土層断面

図版50　ＳＢ105完掘状況（南方より）

図版51　ＳＢ105完掘状況（北西方より）

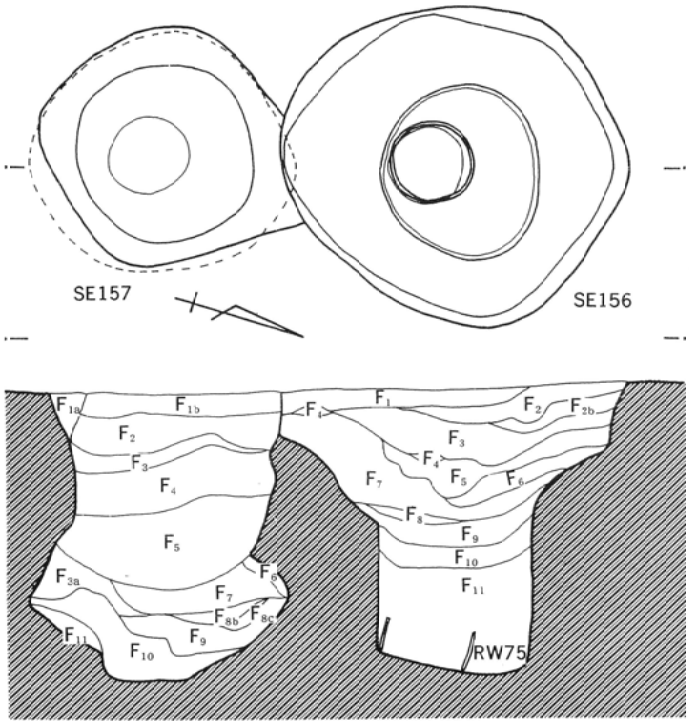
2　井戸跡

井戸跡は３基発見された。これらは重複，または近接して存在する。いずれも素掘りの井戸である。

１）ＳＥ156・157（第42・43図　図版52～55）

19―37･38区の地山面で検出した。156が157を切っている。156は不整円形のプランをもち径170～180cm，深さは150cmをはかる。直立気味に立ち上がり，底面から70～90cm付近で外側に開き，120cm付近で再び直立する。底面は平坦で曲物が置かれていた。また，底面から木簡の出土がある。157は径130cm前後の不整円型のプランをもち，深さは約150cmをはかる。図版54のように基本層位のⅧ層である黒色粘土層の下部から崩落しているため元の断面形は明らかではない。F_1から平安時代の土器片が出土している。

第43図はＳＥ156から出土した木簡，曲物である。木簡は現在長81mm，幅25mm，厚2.5mmで，材の上端の左，右に切り込みが入っている。図に示したような墨痕があるが判読はできなかった。形態からみて付札と考えられる。曲物は径約45cm，高さ約23cmで，厚さ4～5mmの柾目の板を使用し，内側は１枚板，外側は２枚板となっている。内面に５～７mm間隔で罫引を入れて丸め，両端は内側で10cm，外側で15cmほどを重ね，幅約１cmの樹皮でぬい合わせている。また外側の上部は竹釘で補強されている（図版83）。



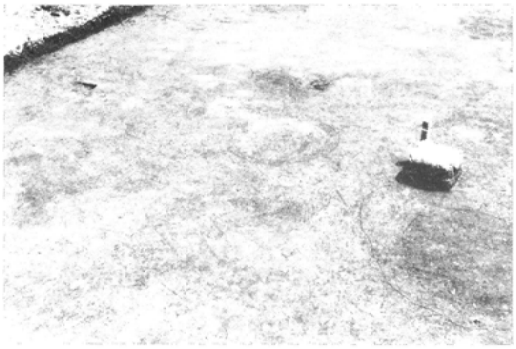
SE156
F_1：明褐色シルト質細砂
F_2：暗褐色粘土質シルト（黄褐色粗砂を含む）
F_{2b}：黒褐色粘土
F_3：褐色シルト質粘土
F_4：黄褐色粗砂
F_5：褐色砂質シルト
F_6：淡褐色砂質シルト
F_7：暗褐色粘土（酸化鉄含む）
F_8：暗褐色粘土質シルト（炭化物微量含む）
F_9：暗褐色シルト（暗褐色粘土のブロック含む）
F10：黒褐色シルト質粘土
F_{11}：青灰色シルト（有機物を多く含む）

SE157
F_{1a}：暗褐色シルト（粗砂含む）
F_{1b}：暗褐色細砂
F_2：暗褐色粘土質シルト
F_3：黒褐色シルト質粘土（炭化物を多量含む）
F_5：褐色粘土質シルト
F_6：暗褐色シルト
F_7：褐色シルト
F_{8a}：青灰色シルト
F_{8b}：暗褐色シルト
F_{8c}：黒褐色シルト質粘土
F 9：青灰色シルト
F_{10}：黒色粘土（青灰色シルトを含む）
F_{11}：青灰色シルト

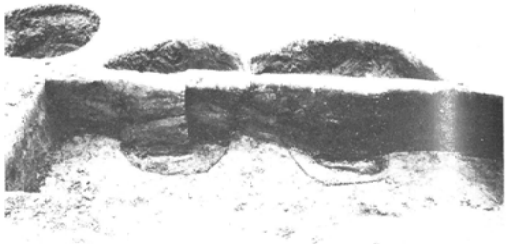
0　1 m

第42図　ＳＥ156・157

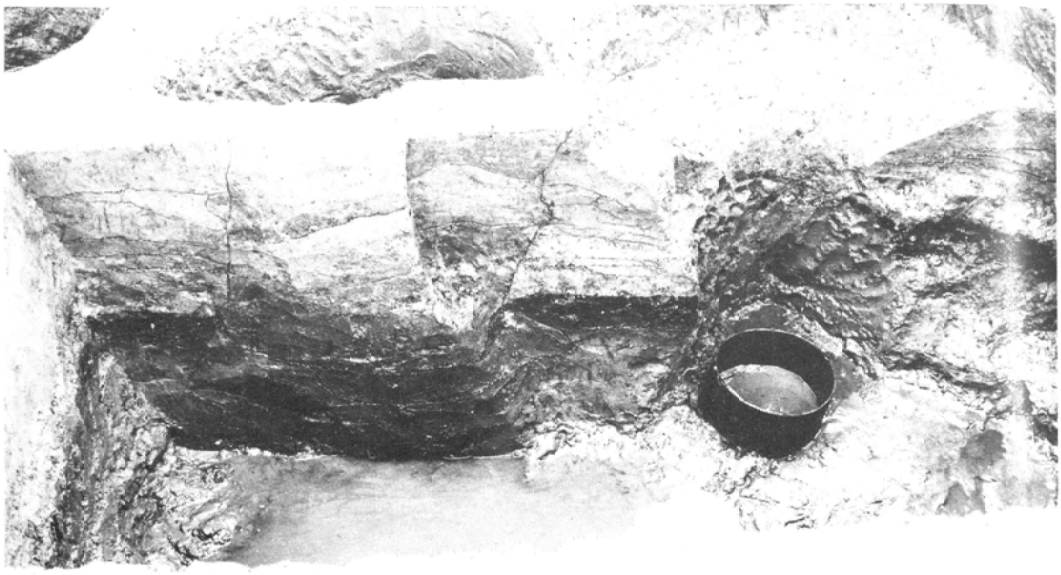
第43図　ＳＥ156出土木製品



図版52　ＳＥ156・157確認状況



図版53　ＳＥ156・157調査状況

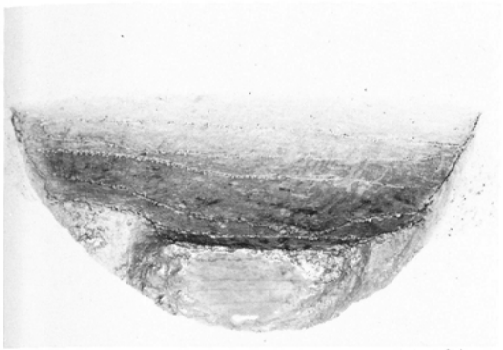


図版54　ＳＥ156（完掘）・157（土層断面）

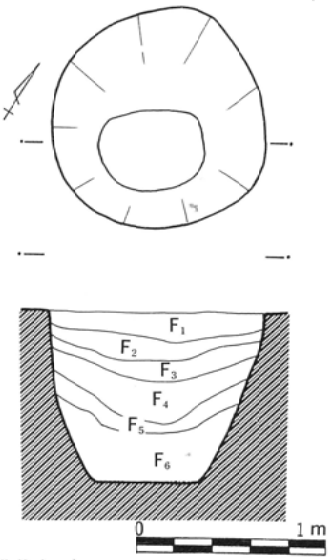
図版55　ＳＥ156底面曲物（ＲＷ75）出土状況

2）ＳＥ158（第44図　図版56）

18・19—37区において地山面で検出された。径110～120cmの略円形のプランをもち，深さは90cmをはかる。底面は基本層位Ⅷ層の黒色粘土層で，平坦な底面から急角度で立ち上がり，中程からほぼ直立する。覆土１層，４層から土師器，赤焼土器の破片が出土した。



図版56　ＳＥ158土層断面



F_1：褐色シルト（炭化物含む）
F_2：褐色砂質シルト（黄褐色細砂の小ブロック含む）
F_3：暗褐色粘土質シルト（橙黄色シルトの小ブロックを含む）
F_4：暗褐色シルト質粘土（黒褐色粘土のブロックを含む）
F_5：淡褐色砂質シルト
F_6：淡褐色砂質シルト（黒褐色粘土のブロック含む）

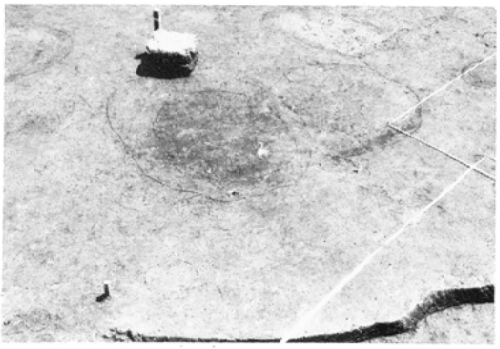
第44図　ＳＥ158

3　土　壙

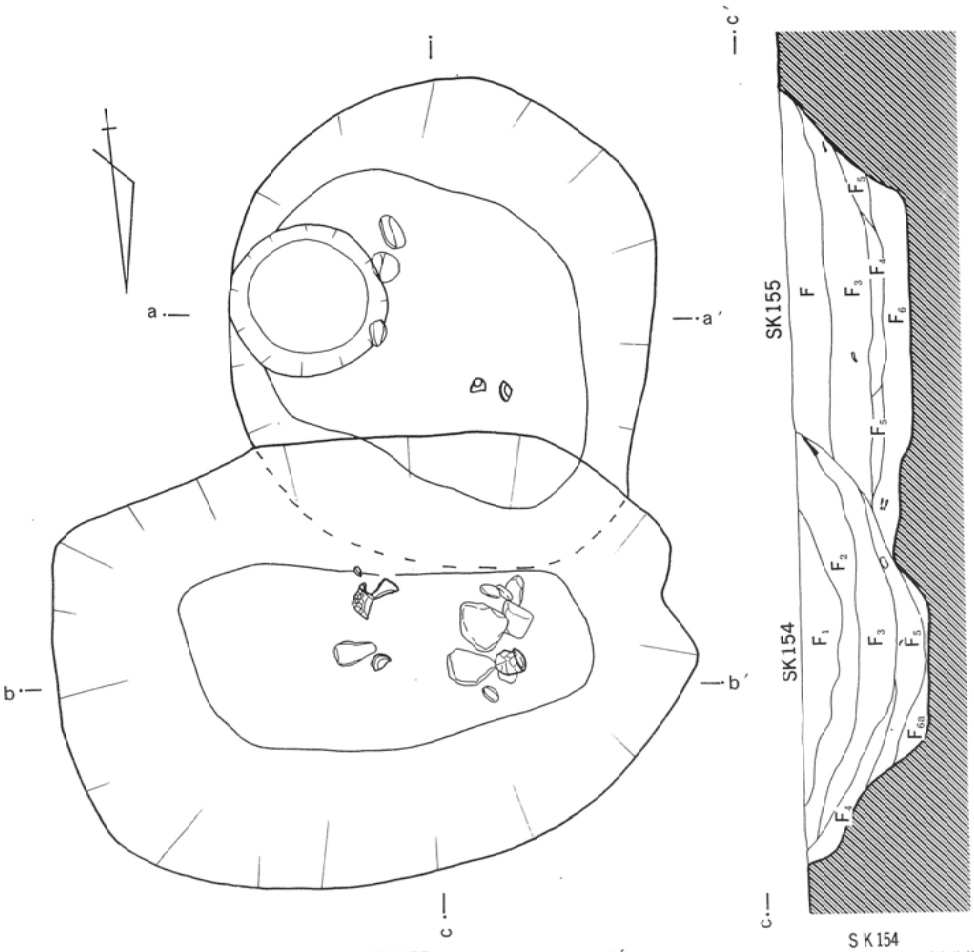
Ｂ地区では６基の土壙を登録した。そのうち，３基と２基が重複して，１基は単独で発見された。

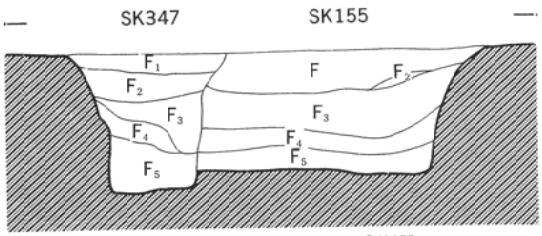
1）ＳＫ154・155・347（第45～52図　図版57～71）

19・20—38区において耕作土直下の地山面で発見された。ＳＫ347は，平面的に155の中にスッポリと収まり，また，それぞれの覆土一層がよく似ていることから，面精査の断階で確認することはできなかった。したがって当初はＳＫ154（新），155（古）の重複として調査を進めたため，本来ＳＫ347の覆土に入っていた遺物も，ＳＫ155内出土として取りあげたものがある。また，ＳＫ154から出土した大甕の口頸部破片(第51図1，図版70)と同一個体の破片が，ＳＫ155の各層から出土したり，須恵器の坏で互に接合するものがあるなど，本来ＳＫ155に包含されていたと思われる遺物が，ＳＫ154や347に再堆積したことが知られる。そして，前述したように，三者のなかでは最も古いＳＫ155の各堆積土から出土したとして取り上げた遺物のなかに，新しい時期のＳＫ347の遺物も混ってしまったことから，層位学的に遺物の変遷を確定させることはできなかった。



図版57　ＳＫ154・155確認状況



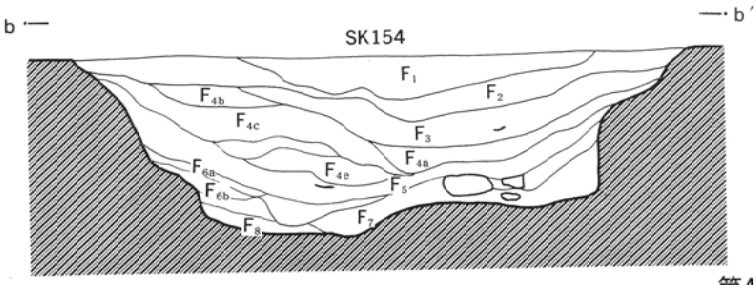


S K 347

F_1：褐色シルト（酸化鉄，粘土を含む）
F_2：青灰色シルト
F_3：青灰色シルト（若干の砂を含む）
F_4：暗青灰色シルト
F_5：暗青灰色粘土質シルト（均質で木炭粒を含む）

S K 155

F_1：褐色シルト（木炭，暗青灰色シルトのブロック含む）
F_2：褐色シルト（木炭粒を多量含む）
F_3：褐色砂質シルト（酸化鉄，暗青灰色シルトを斑状に含む）
F_4：暗青灰色粘質シルト（木炭粒を若干含む）
F_5：青灰色シルト（暗青灰色シルトを含む）
F_6：青灰色細砂（木炭粒を少量含む）

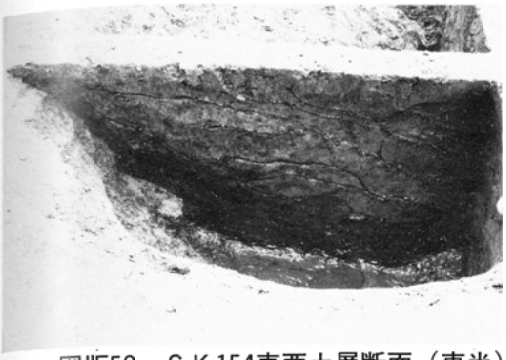


S K 154

F_1：黒褐色シルト（炭化物微量含む）
F_2：褐色シルト（木炭粒を少量含む）
F_3：暗褐色砂質シルト
F_{4a}：淡褐色砂質シルト
F_{4b}：明褐色細砂
（炭褐色シルトを斑状に含む）
F_{4c}：明褐色細砂と淡褐色シルトが同じ割合で混入
F_{4d}：淡褐色シルト
（明褐色細砂を含む）
F_{4e}：明褐色細砂
（淡褐色シルトを含む）
F_5：暗褐色粘土質シルト
F_{6a}：褐色細砂（暗褐色粘土質シルトが縞状に入る）
F_{6b}：暗褐色粘土質シルト
（褐色細砂が縞状に入る）
F_{6c}：暗褐色シルト質粘土
F_7：褐色シルトと暗褐色粘土質シルトが同じ割合で混入
F_8：暗褐色粘土（炭化物微量含む）

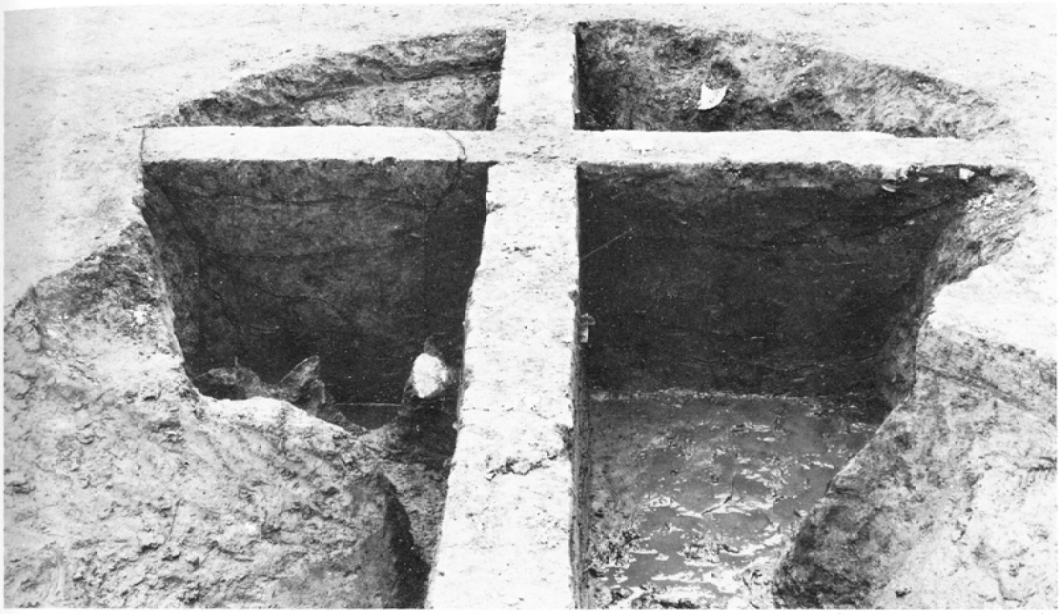
0 1m

第45図　S K 154・155・347

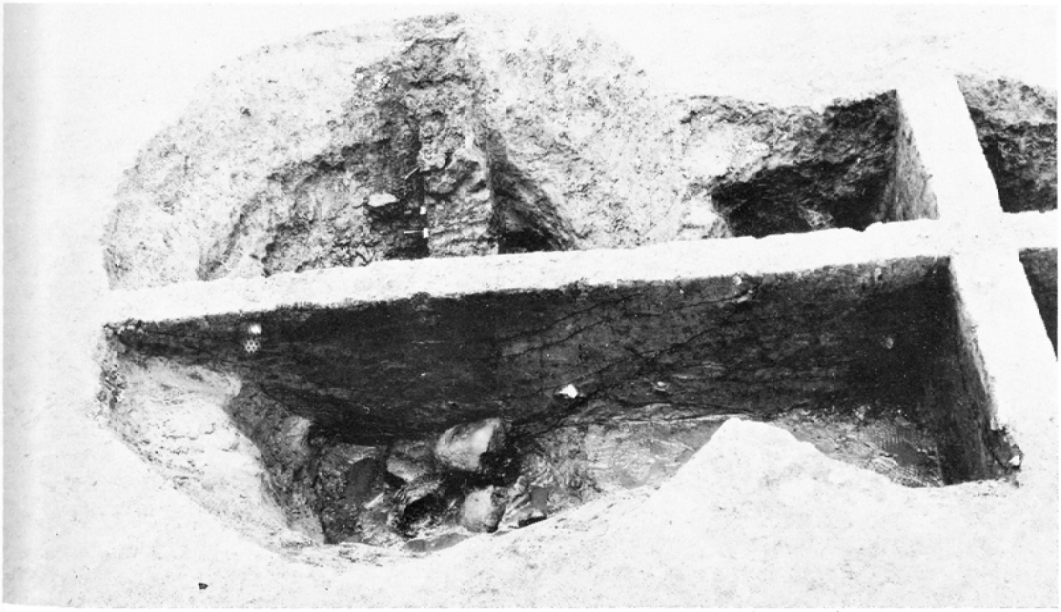


図版58　ＳＫ154東西土層断面（東半）

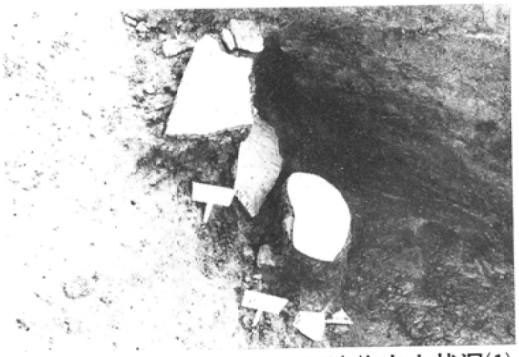
図版59　ＳＫ154東西土層断面（西半）



図版60　ＳＫ155・347東西土層断面



図版61　ＳＫ154・155南北土層断面



図版62　ＳＫ154遺物出土状況(1)

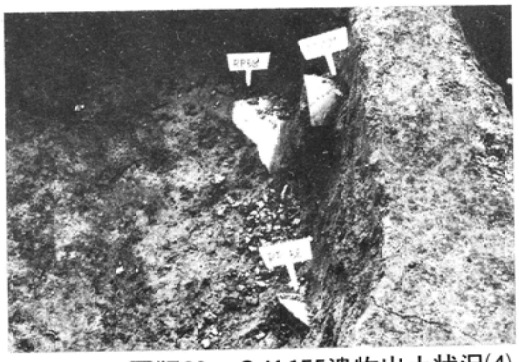
図版63　ＳＫ154遺物出土状況(2)

図版64　ＳＫ154遺物出土状況(3)

図版65　ＳＫ155遺物出土状況(1)

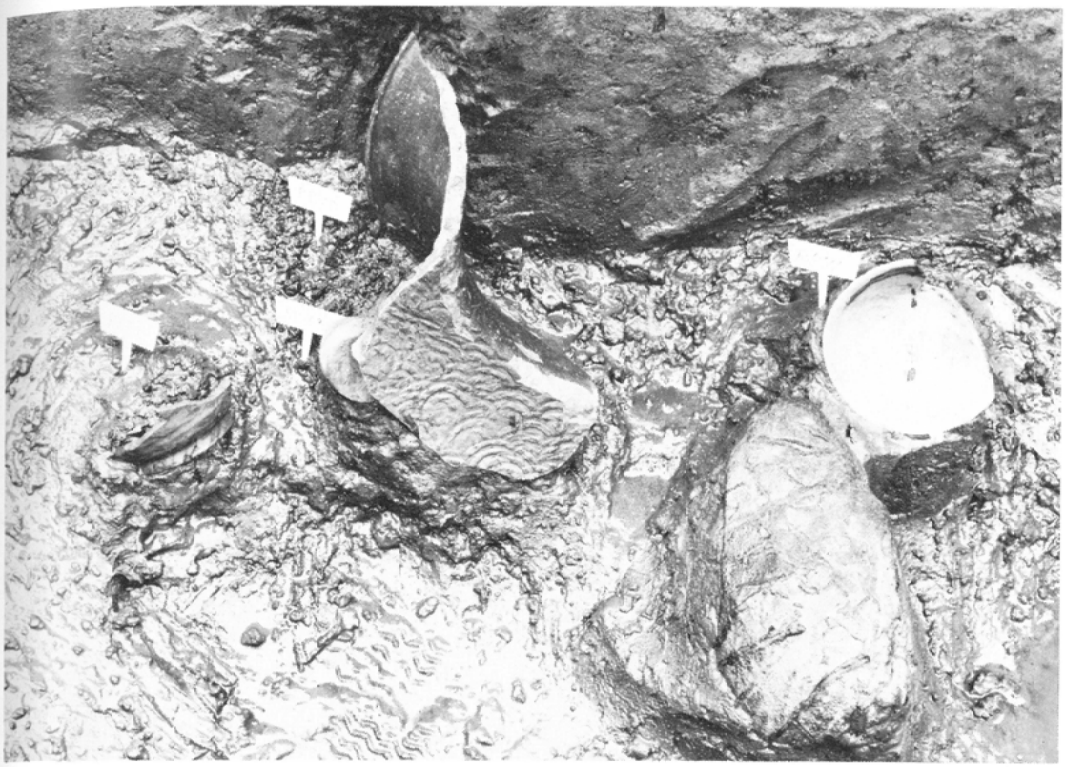
図版66　ＳＫ155遺物出土状況(2)

図版67　ＳＫ155遺物出土状況(3)



図版68　ＳＫ155遺物出土状況(4)

図版69　ＳＫ347遺物出土状況



図版70　ＳＫ154Ｆ$_{6}$遺物出土状況

図版71　ＳＫ154・155・347完掘状況

ＳＫ154は短径230cm前後，長径340cm前後の楕円形プランをもち，確認面からの深さは80～90cm主軸方向はＮ－89°－Ｅをはかる。底面は東側が若干深くなり，底面から30～50cmまで急角度で立ち上がり，その後は開き気味となる。底面からやや浮いた状態で，河原石８個からなる集石がある。

ＳＫ155は短径220cm前後，長径270cm前後の楕円形プランで，深さ60cm，主軸方向はＮ－11°－Ｅをはかる。底面はほぼ平坦で，急角度で立ち上がり，上端付近で外側に開いている。底面に３個の河原石がある。

ＳＫ347は径80～85cmの円形プランをもち，深さは70cmをはかる。平坦な底面からほぼ直立気味に立ち上がり，上端付近で外側に開いている。

これらの３基の土壙から出土した遺物は土師器，須恵器，赤焼土器があり，破片数ではＢ地区全体の20％強を占め，実測可能な土器はＢ地区全体の70％を越える。

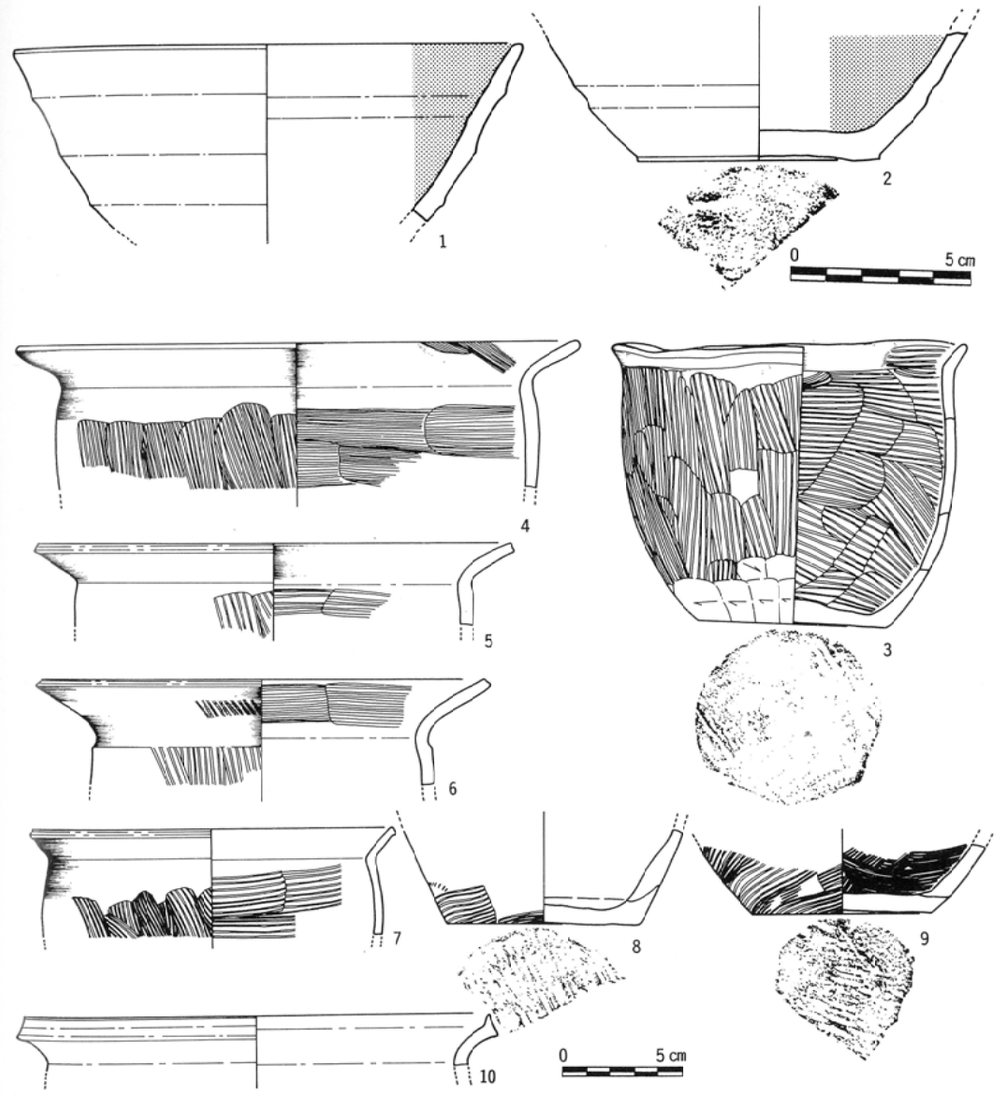
a　土師器（第46図）

坏，高台付坏，甕の器種がある。坏，高台付坏は図示した２点（第46図１・２）を含めても10点と少ない。１は口径144mmの中形の資料で，外面はロクロナデ，内面はミガキの後黒色化処理が施されている。２は大きめの底部から急角度で立ち上がっている。底部は回転糸切り技法によって切り離され，外面にロクロナデ，内面にミガキの後，黒色化処理が施されている。高台付坏は高台がはがれた資料が３点出土しているだけである。

甕は破片数が多いが大半は体部破片で，実測可能なものは少ない。第46図３は本遺跡で唯一の甕の完形品である。ロクロ不使用の中形の甕。底部は平底で横糸の間隔の狭いアンペラＡの痕跡がある。丸味をもって立ち上がり，体部下半から直立し，口縁部は短かく外反している。口縁部外面はヨコナデが施され，体部は縦方向の刷毛目が，体部下端には横方向のヘラケズリ調整が施されている。内面の口縁は刷毛目の後，部分的にヨコナデ調整，そして体部には横方向の刷毛目が施されている。同図４・５は大形の長胴甕の口縁部で，単純に「く」の字状に長く外反する資料である。口縁部外面はロクロ（？）ナデ，内面は刷毛目の後ロクロ（？）ナデ調整が，体部外面には縦方向の刷毛目，内面には横方向の刷毛目が施されている。６は中形の長胴甕の口縁部で，４・５と同様，単純に「く」の字状に長く外反するが，頸部に段が巡る資料である。口縁部外面には縦方向の刷毛目の後，ロクロ（？）ナデ調整が施されている。７は口縁部が単純に「く」の字状に短かく外反する中形の甕で，外面は口縁部から体部上端にかけてロクロ（？）ナデ調整が，それ以下には縦方向の刷毛目が施され，内面は口縁部にロクロ（？）ナデ，体部に横方向の刷毛目が施されている。４～７はいずれも破片資料であることから，ロクロの使用，不使用について断定をくだすことはできなかった。

同図８・９は甕の底部資料で，８は外面に刷毛目が，内面にはナデ調整が施されている。９は，内・外面とも刷毛目調整が施された資料である。ともに，横糸の間隔の広いアンペラＢの痕跡が認められる。

10は製作に際し，ロクロを使用している甕で，大形の長胴甕の口縁部資料と思われる。口縁部は「く」の字状に外反し，口唇部が上方につまみ出され，蓋受けのような段がつけられている。口縁部内外面ともロクロナデ調整が施されている。



第46図　ＳＫ154・155・347出土土器（１）

b　須恵器（第47～51図）

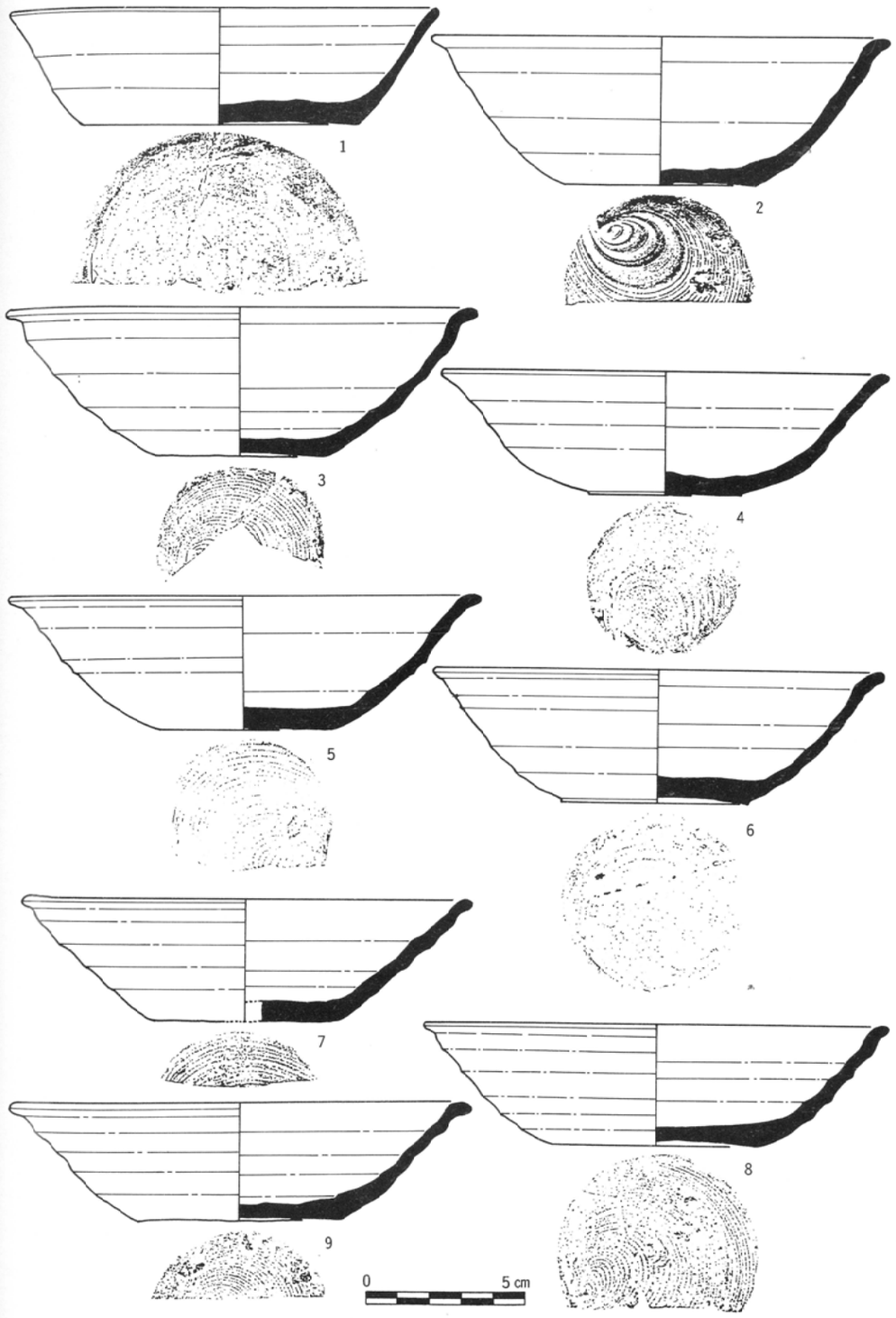
坏，高台付坏，蓋，壺，甕と本遺跡で出土したすべての器種がそろっている。それぞれは製作技法，形態，法量等によって数種類に細分できる。

坏は底部切り離しが回転ヘラ切りによるものと，回転糸切りによるものがあり，切り離し後の再調整が施されているものはない。

第47図１は回転ヘラ切りの痕跡を底部に残す資料で，大きめの底部から急角度で立ち上がり，そのまま外傾している。器厚は極端に薄い。２以下のものはすべて回転糸切り技法によって切り離されている。２・３はやや内湾気味に立ち上がり，口縁部が外反する。器高はともに47㎜と高い。４は丸味をもって立ち上がり，体部中程から直線的に外傾し，口縁部がやや外反する。２・３にくらべ器高は低い。５～７は底部からほぼ直線的に立ち上がり口縁部が強く外反する資料である。器高は低い。８・９は大きめの底部からほぼ直線的に立ち上がり，口縁部が強く外反する。第48図１は底部付近で丸味をもって立ち上がり体部下半から直線的に外傾する。器高は高い。２は大きめの底部から割合急角度で直線的に立ち上がり，そのまま外傾する器高の高い資料である。３～５は１・２に比べて器高が低く，やや丸味をもって立ち上がり，体部下半から直線的になり，そのまま外傾している。４は内面がナデによって平滑に仕上げられている。６は大きめの底部から割合急角度で立ち上がり，そのまま外傾する。器厚が厚く内面はナデによって平滑に仕上げられている。７・８は口径の割に器高の高い資料で，７はやや内湾気味に立ち上がり，口線部はやや外反する。８は大きめの底部から，ほぼ直線的に立ち上がりそのまま外傾している。

第49図は坏の口縁部資料と底部資料である。１は口径が167㎜と大形の資料で，体部中程から直線的になり，口縁部は肥厚して外反している。２～６はいずれも口縁部が外反する資料であるが，体部が丸味をおびるのも（２～４），直線的になるもの（５・６）の二者がある。７は口径が166㎜の大形の資料であるが，１に比べ急角度の立ち上がりをみせ，椀状の器形となる。８は直線的に外傾する資料である。９～13はいずれも回転糸切り痕を残す底部資料で10はやや丸味をもち急角度で立ち上り，11～13はゆるい立ち上がりを示す。

第50図１～３は高台付坏であり，４・５はその底部資料。６は口縁～体部資料と思われる。１は短かく外反する高台をもち，底部付近でゆるやかに立ち上がり，体部下半から急角度の直線状となりそのまま外傾している。２は短かく外反する高台をもち，底部付近で丸味をもって立ち上がり，口縁部は外反している。１より口径，底径とも小さいが器高は高い。３は短かく，ほぼ直立する高台をもち，底部付近で丸味をもって立ち上がり，体部下半から急角度の直線状となり，口縁部が外反する資料である。４は短かく直立する高台をもち，底部付近はゆるやかな立ち上がりを示している。５も直立する短かな高台がつけ



第47図　ＳＫ154・155・347出土土器（２）

られている。1～5はいずれも坏部が回転糸切り技法によって切り離されている。6は口径が120㎜と3よりもひとまわり小さいが，器形からみて高台付坏の口縁から体部にかけての資料であろう。

7は坏蓋の口縁部資料である。口径が120㎜の小形の資料で，数値からは6に対応するものとみられる。折り返されて玉縁状となった口縁部が強く外反している。

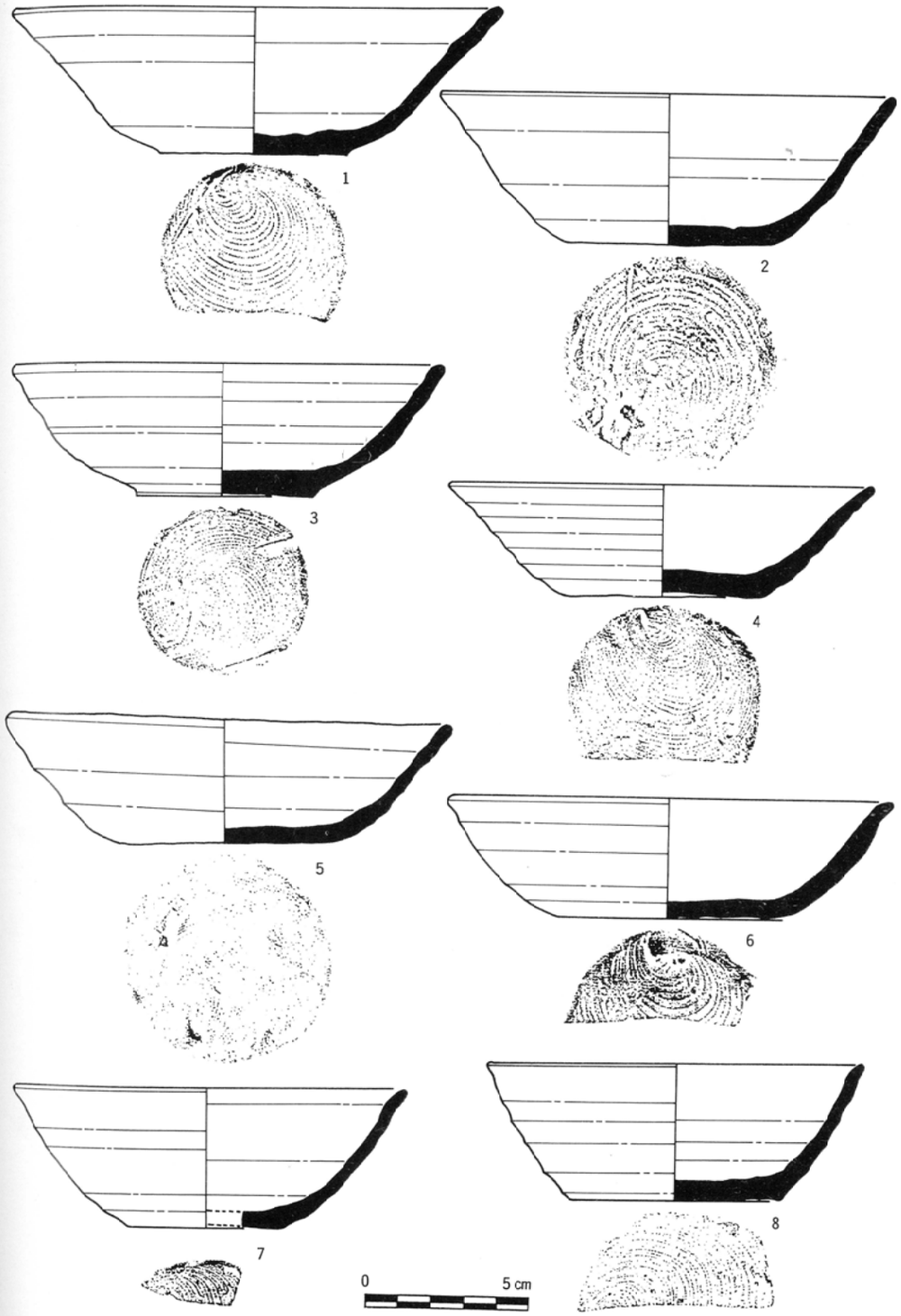
8は小さな底部から丸味をもって急角度で立ち上がる器形をもつ資料である。回転糸切りによって切り離された後，底部と体部の境界に回転ヘラ削りが施されている。小形の壺と思われる。9は底部から急角度でほぼ直線的に立ち上がる資料で短かく直立する高台がつけられている。10は底部からやや丸味をもって立ち上がる器厚の薄い資料である。ともに壺の底部であろう。

第51図は甕である。1は大甕で1aは口縁部から体部上半の，1bは体部下半の資料である。その出土状況は図版70に示したが，これと接合したり，接合はしないが同一個体と思われる資料はSK154・155・347を中心に平箱に一箱分が出土している。外面が暗青灰色，内面が赤褐色を呈し，二次的な火熱によって剝落しているものもある。口径355㎜，頸部径285㎜で，胴部最大径は660㎜前後になるものと思われる。肩部から口頸部にかけて直立し，口頸部上半から外反し，口唇部は外傾する。口頸部外面は格子状叩目の後，ロクロナデ整形が，内面にはロクロナデ整形が施されている。体部外面は格子状叩目文が，内面上半には青海波文が，下半には平行のアテが施されている。2は口径264㎜，頸部径144㎜の小形の甕もしくは壺で，口頸部はやや外反する。口頸部，肩部の内，外面はともにロクロナデ整形が施されている。

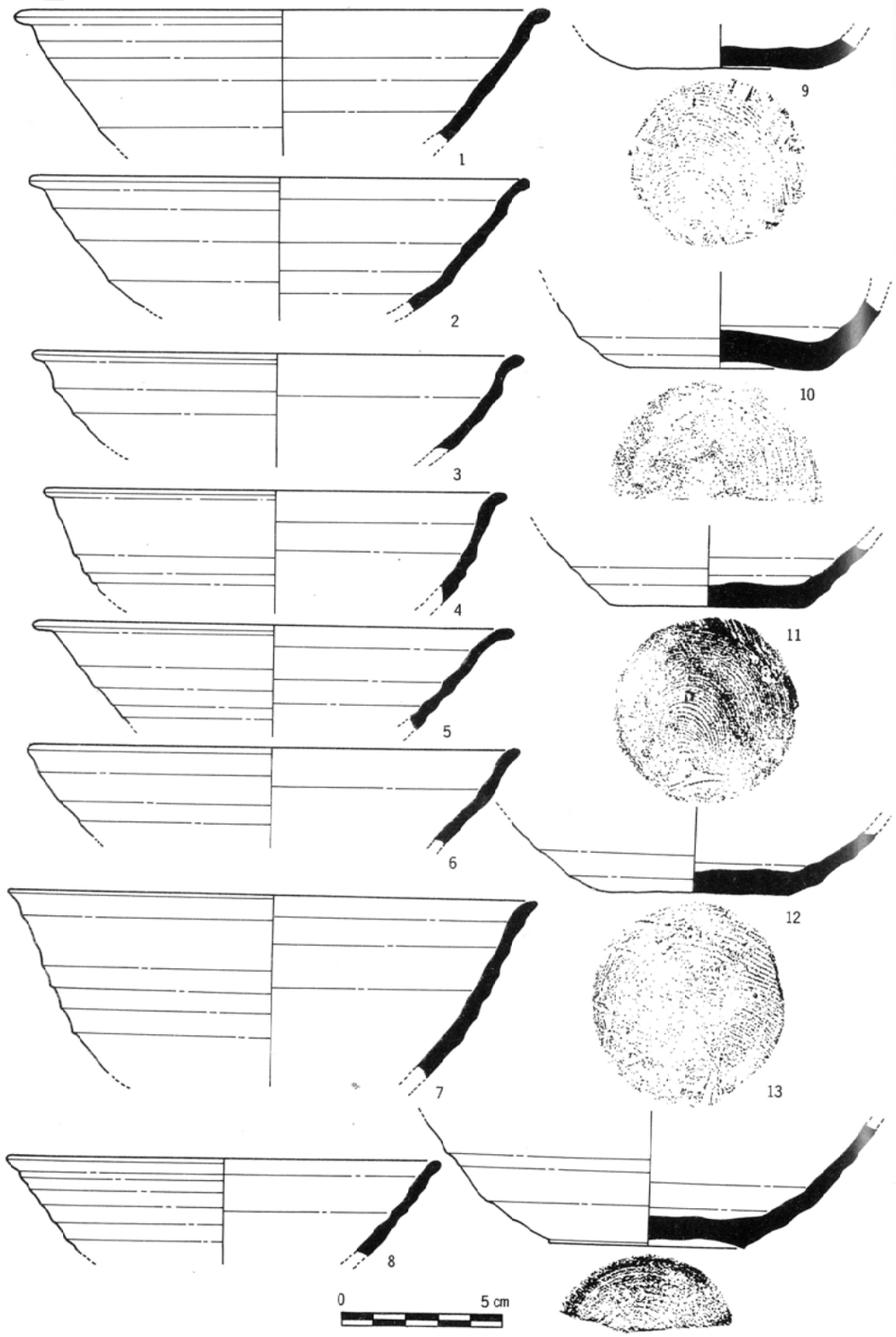
C　赤焼土器（第52図）

坏，高台付坏，甕が出土している。高台付坏は高台部のはがれた底部破片が1点，甕は体部破片が2点出土しているだけである。また，坏も実測可能なものが5点と少ないばかりかその破片数も少ない（第7表）。

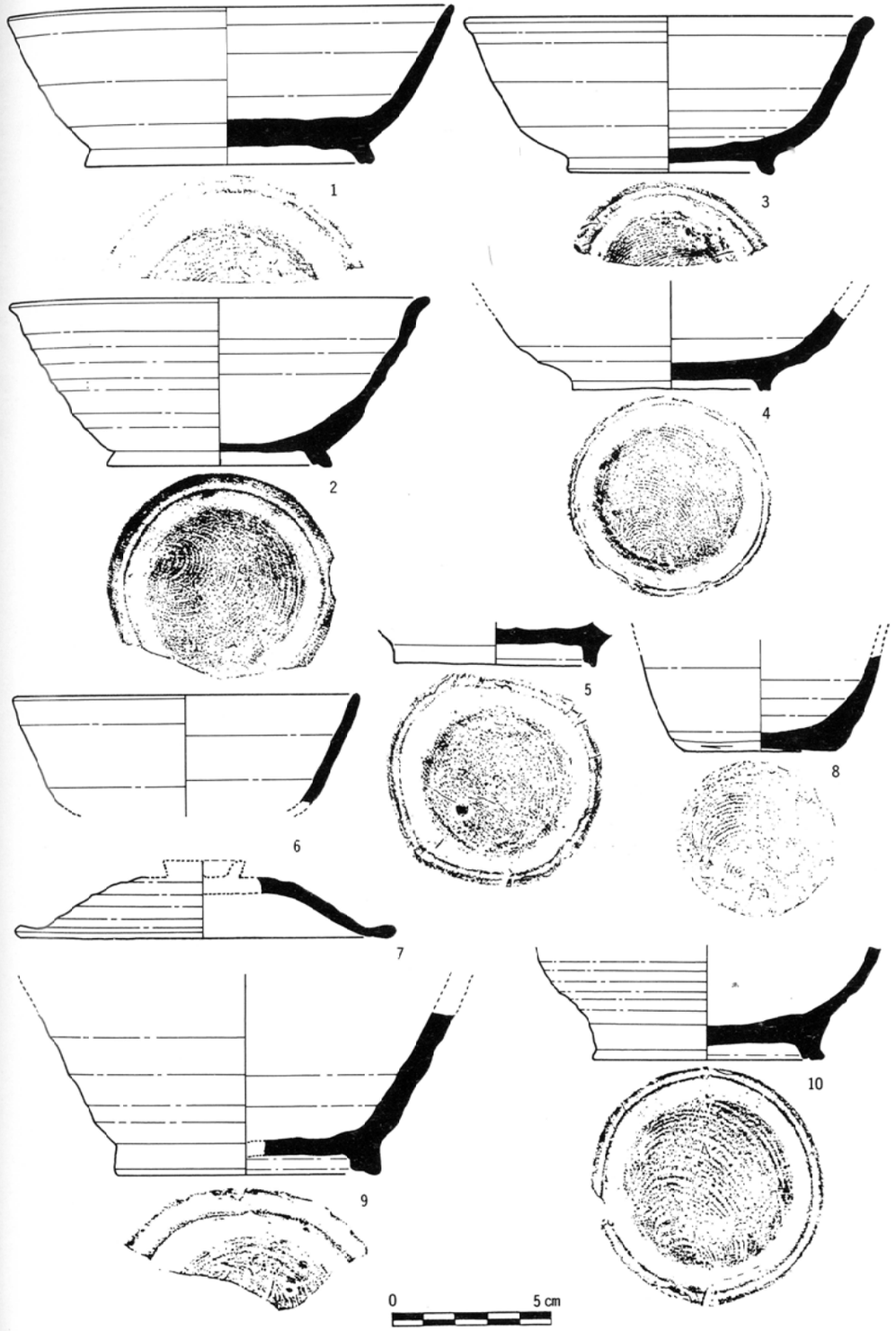
第52図1はSK154の覆土3層から出土したもの（図版63）で，口径も小さく，器高も低い小ぶりな資料で，焼けひずみが認められる。内面の底部と体部の境界が明瞭で直線的に外傾している。2はSK154の覆土2層から出土したもので，巻上げ痕が観察される資料である。3はSK347の覆土2層から出土したもの（図版69）で，器高の高い資料である。外面の底部と体部の境界が丸味をもち，直線的に立ち上がって，口縁部がやや外反している。4はSK347の覆土4層から出土したもので，底部付近でやや丸味をもって立ち上がり，体部下半から直線状となり，そのまま外傾している。内外面とも摩滅が著しい。5はSK154の覆土6c層から須恵器大甕などともに出土した（図版70）もので，底径が小さく，やや内



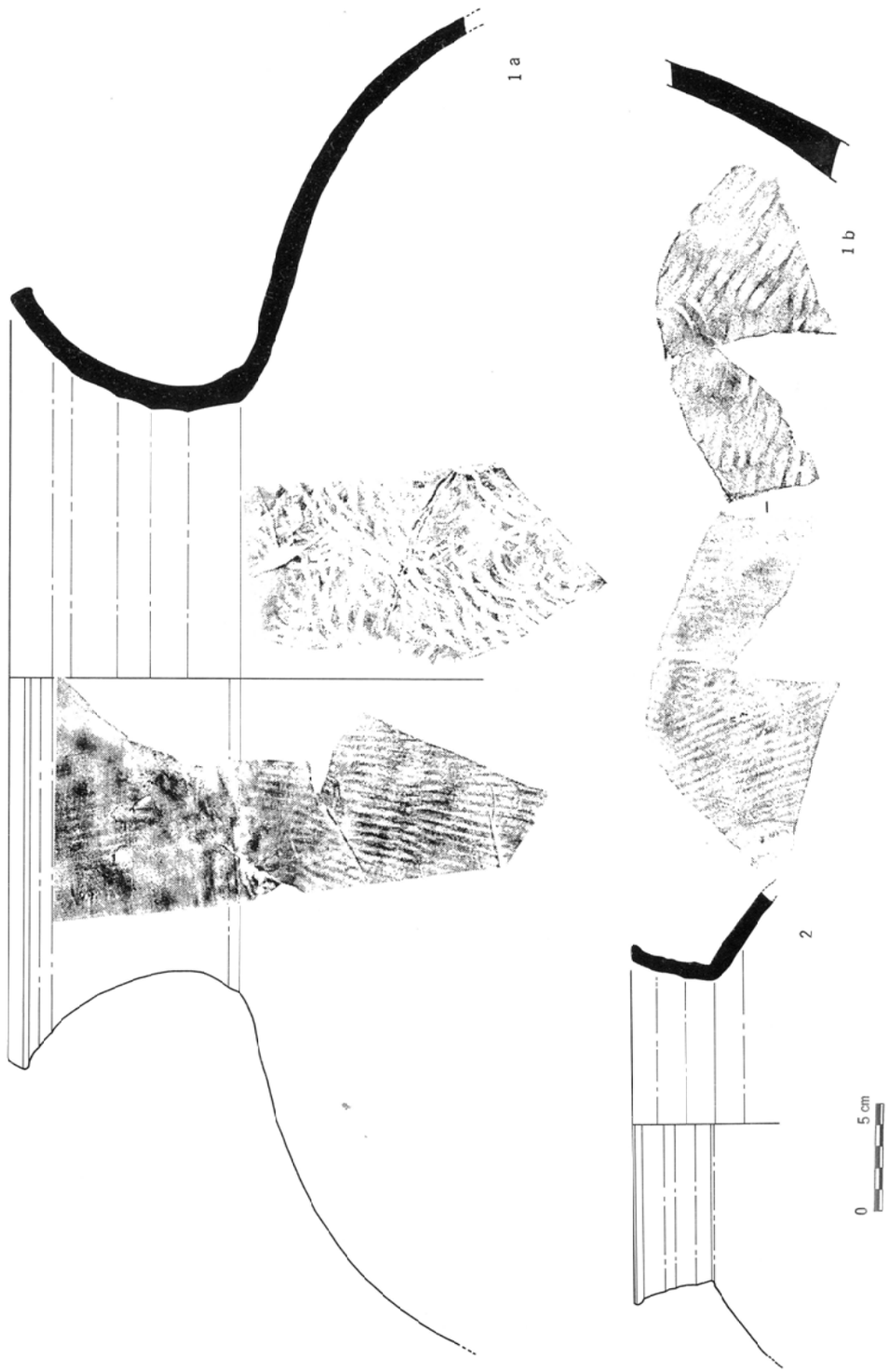
第48図　SK154・155・347出土土器（3）



第49図　ＳＫ154・155出土土器（４）



第50図　ＳＫ154・155出土土器（５）

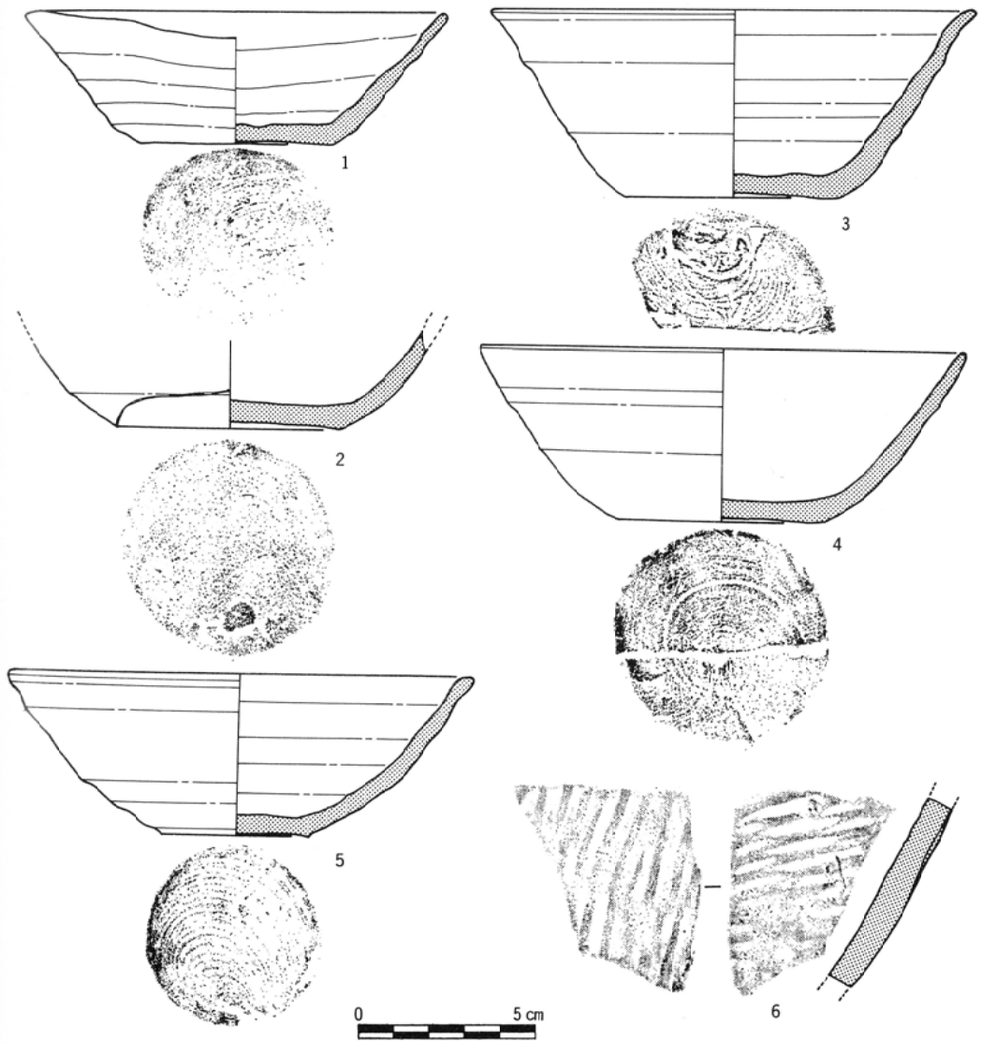


第51図　ＳＫ154・155・347出土土器（６）

湾しながら立ち上がって外傾する資料で，口縁部は肥厚している。

以上，実測可能なものはすべてＳＫ154，347の覆土から出土している。また，これら実測可能な坏のなかで，器厚の薄いものは１だけであり，また，破片も薄いもの，厚いものの割合がほぼ半々となっている(第10表)。Ａ地区に比べ器厚の厚いものが多いことが指摘できる。

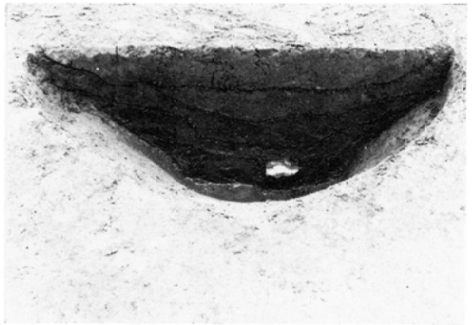
６は甕の体部下半の破片とみられる。外面に平行叩目文が，内面には平行アテが施されている。



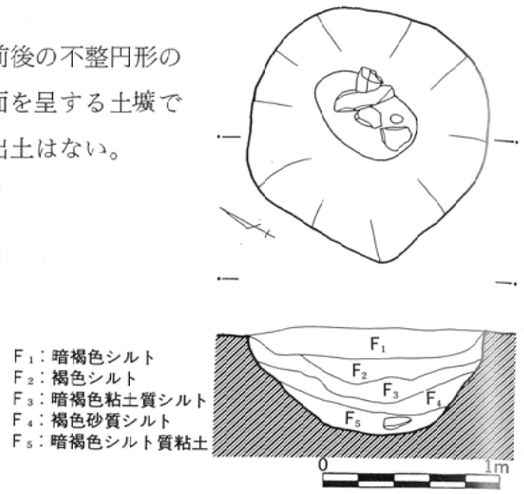
第52図　ＳＫ154・155・347出土土器（７）

2）ＳＫ159（第53図　図版72）

19―36区の地山面で検出した。径135cm前後の不整円形のプランをもち，深さ60cm，摺り鉢状の断面を呈する土壙である。底面に５個の角礫がある。遺物の出土はない。



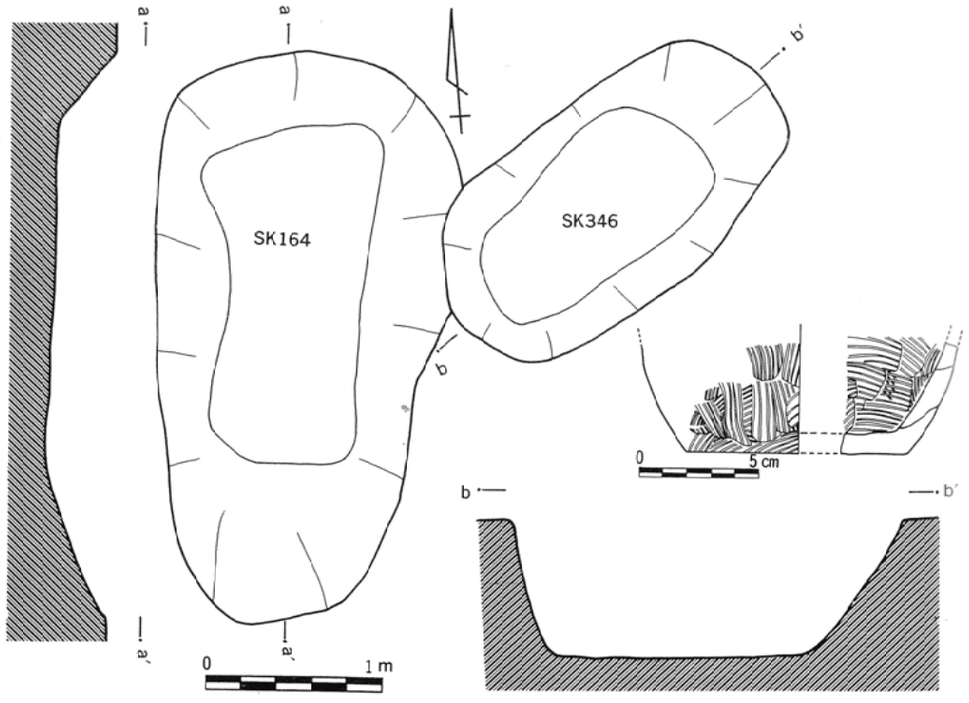
図版72　ＳＫ159土層断面



第53図　ＳＫ159

3）ＳＫ164・346（第54図）

22・23―37区の地山面で検出した。ＳＫ346が164を切り，346は周辺のピットを切っている。ＳＫ346は長径115cmの楕円形のプランをもち，確認面からの深さは67cmとなっている。主軸方向はＮ―54°―Ｅをはかり，底面は平坦で，急角度で立ち上がっている。覆土は暗褐色シルトと明褐色細砂が斑状に混り合う単一層で，このなかから，体部内外面に刷毛目の施された，土師器甕の出土がある。底部外面はナデによって平滑に仕上げられている。他に内面に黒色処理の施された甕の破片等の出土がある（第９表）。



第54図　ＳＫ164・346及びＳＫ346出土遺物

ＳＫ164は長径320，短径170～140cmの不整楕円形のプランをもち，確認面からの深さは35cm前後である。主軸方向はＮ―５°―Ｅをはかり，底面はほぼ平坦で，ゆるやかな立ち上がりを示す。覆土は褐色シルト質細砂の単一層で，土師器甕の破片が出土している。

4　**ピット群**（第55～57図　図版73　第１表）

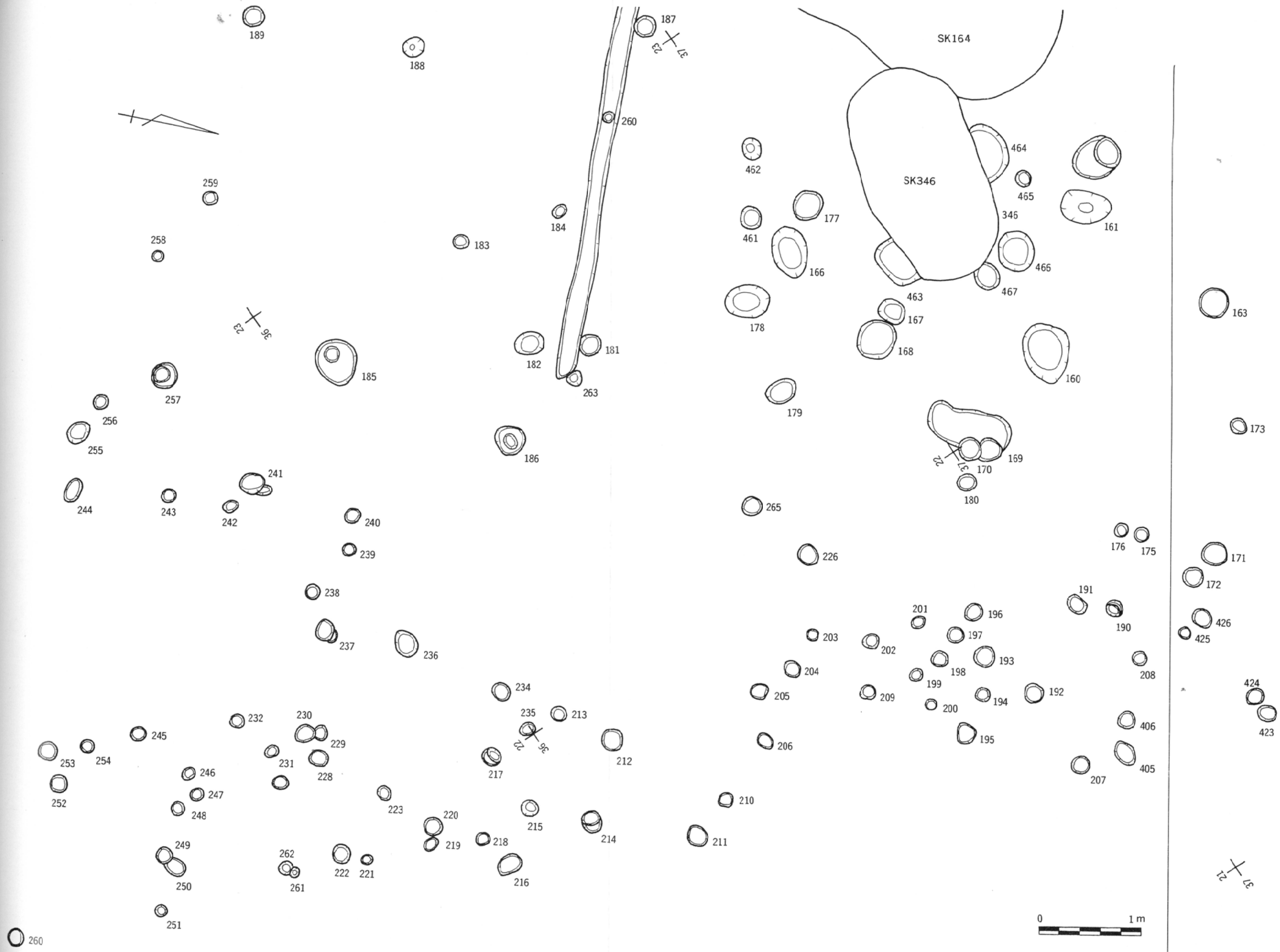
Ｂ地区では316個のピット・柱穴を検出し，このうち５棟分，合せて46個は組み合わされて掘立柱建物跡となった。しかし，残りの270個は建物跡として把握することはできなかった。これらのピット群は，自然堤堤の尾根にあたる高い部分に存在し，特に，ＳＢ101の南側，103周辺，102の南側に集中して発見された。Ｂ地区の遺構検出面が平安時代の竪穴住居の床面以下となっていることも十分に考えられることから，竪穴住居跡の柱穴の可能性も否定できない。また，ＳＰ348からは「至和元寶」が出土し（図版83），中世陶器の出土がないとはいえ，これらのピット群には中世以降のものも存在する可能性がある。なお，表中，「深さ」の「相対」とはベンチマーク―100cmからの深さである。

図版73　21・22―35～38区のピット群

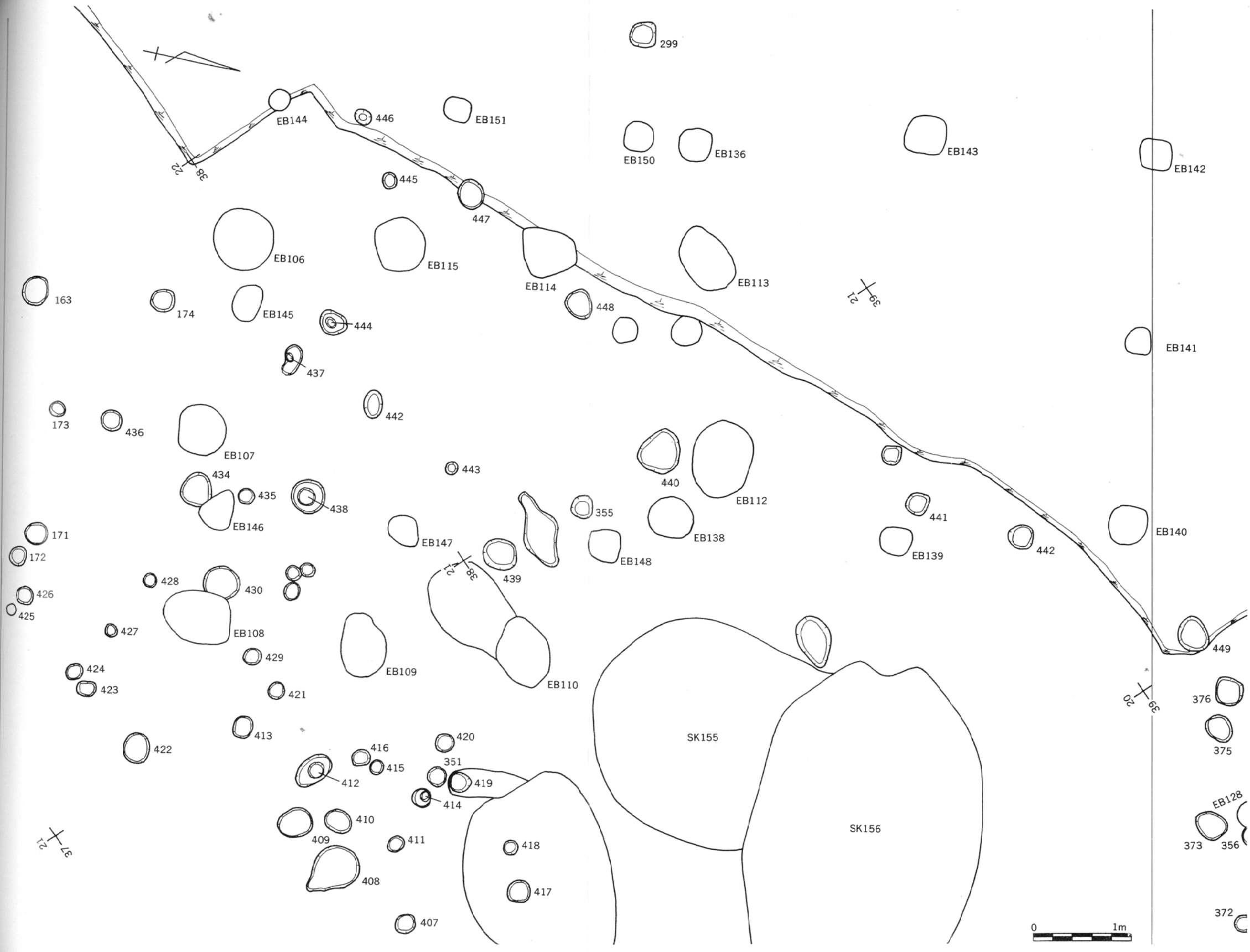
No.	グリッド	深さ		No.	グリッド	深さ		No.	グリッド	深さ		No.	グリッド	深さ		No.	グリッド	深さ	
		相対	確認			相対	確認			相対	確認			相対	確認			相対	確認
161	22—37	67	53	216	21—35	20	12	302	21—40	75	31	361	20—39	68	24	415	20—37	25	4
162	22—37	78	62	217	21—35	25	14	303	21—40	60	16	362	18—38	55	11	416	20—37	27	6
163	21—37	40	25	218	21—35	20	10	304	21—40	51	6	363	18—38	60	17	417	20—37	47	25
165	21—37	57	40	218	21—35	20	10	305	21—40	68	23	364	18—38	57	17	418	20—37	44	19
166	22—36	32	15	220	21—35	20	10	306	21—40	57	12	365	18—38	50	4	419	20—37	34	11
167	22—36	56	41	221	21—35	20	11	307	21—40	65	20	366	18—38	57	15	420	20—37	28	5
168	22—36	32	15	222	21—35	32	22	308	21—41	52	6	367	18—38	50	5	421	20—37	24	5
169	22—36	21	8	223	22—35	20	12	309	20—40	56	9	368	18—38	63	22	422	21—37	28	9
170	22—36	23	10	225	21—35	35	23	310	20—40	48	2	369	18—38	63	23	423	21—37	25	9
171	21—37	39	25	226	21—35	39	24	311	20—40	61	12	370	19—38	45	6	424	21—37	37	20
172	21—37	36	22	227	22—35	20	10	312	20—40	65	17	371	19—38	75	37	425	21—37	26	11
173	21—37	27	13	228	22—35	20	10	313	20—40	63	16	372	19—38	39	5	426	21—37	28	12
174	21—37	49	33	229	22—35	20	10	314	20—40	65	17	373	19—38	64	31	427	21—37	21	4
175	21—37	25	13	230	22—35	20	10	315	20—40	63	15	374	19—39	69	37	428	21—37	20	4
176	21—37	32	17	231	22—35	20	9	316	20—40	73	26	375	19—39	55	21	429	21—37	22	4
177	22—37	25	11	232	22—35	20	8	317	20—40	65	18	376	19—39	58	24	430	21—37	23	5
178	22—36	48	35	234	22—35	12	14	319	20—40	60	10	377	19—39	58	25	431	21—37	22	4
179	22—36	41	26	235	22—35	20	11	320	20—41	65	15	378	19—39	63	23	432	21—37	22	4
180	22—36	22	9	236	22—35	21	12	321	20—41	67	17	379	18—39	47	4	433	21—37	22	4
181	22—36	26	13	237	22—35	22	10	322	20—41	53	5	380	18—39	61	19	434	21—37	22	4
182	22—36	27	14	238	22—35	21	9	323	20—41	61	13	381	18—39	58	18	435	21—37	25	7
183	22—36	31	19	239	22—35	20	9	324	20—41	94	45	382	18—39	77	30	436	21—37	22	7
184	22—36	26	12	240	22—35	20	9	325	21—41	85	37	383	18—39	58	9	437	21—37	28	10
185	22—36	30	16	241	22—35	23	10	326	21—41	71	24	384	19—39	42	7	438	21—37	52	33
186	22—36	60	48	242	22—35	22	9	327	21—41	57	9	385	19—39	42	10	439	20—38	25	5
187	23—36	33	17	243	22—35	22	8	328	21—41	55	8	386	19—39	45	12	440	20—38	27	7
188	23—36	34	15	244	22—35	24	7	329	21—41	55	9	387	19—39	66	33	441	20—38	28	5
189	23—36	38	16	245	22—35	33	17	330	19—40	57	8	388	19—39	40	8	442	21—38	25	7
190	21—36	25	12	246	22—35	25	12	331	19—40	71	24	389	19—39	59	27	443	21—38	23	5
191	21—36	38	25	247	22—35	24	12	332	19—40	53	6	390	19—39	57	25	444	21—38	27	9
192	21—36	23	10	248	22—35	23	10	333	19—40	72	24	391	19—39	41	10	445	21—38	24	5
193	21—36	54	43	249	22—35	49	35	334	19—40	62	14	392	19—39	62	31	446	21—38	50	14
194	21—36	25	13	250	22—35	24	10	335	19—40	56	10	393	19—39	56	10	447	21—38	49	30
195	21—36	37	24	251	22—35	23	9	336	19—40	58	11	394	18—40	62	10	448	21—38	50	28
197	21—36	27	13	252	22—35	28	11	337	19—40	75	27	395	18—40	70	10	449	20—39	45	13
197	21—36	25	13	253	22—35	35	19	338	19—40	58	11	396	19—40	60	12	450	20—39	74	24
198	21—36	30	19	254	22—35	25	9	339	19—39	61	13	387	19—40	65	17	451	20—39	54	4
199	21—36	38	27	255	23—35	33	15	340	19—39	62	15	398	19—40	69	13	452	20—40	51	4
200	21—36	34	33	256	23—35	39	18	341	19—39	74	27	399	19—41	70	10	453	20—40	53	4
201	21—36	25	12	257	23—35	38	20	342	19—39	80	35	400	19—41	57	6	454	20—40	66	16
202	21—36	25	13	258	23—35	32	13	343	19—39	56	9	401	19—41	61	9	455	20—40	62	11
203	21—36	25	13	259	23—26	32	13	344	19—39	60	14	402	20—35	39	21	456	20—40	66	15
204	21—36	26	15	260	22—34	26	8	345	19—39	71	25	403	21—35	38	24	457	20—41	68	17
205	21—36	21	10	261	22—35	20	9	348	20—38	54	19	404	21—35	35	23	458	20—41	61	13
206	21—36	21	11	262	22—35	38	27	349	20—39	62	25	405	21—36	25	10	459	20—41	64	14
207	21—36	28	12	263	22—36	37	25	350	20—39	71	30	406	21—36	30	15	460	20—41	57	9
208	21—37	34	19	265	22—36	30	17	351	20—37	30	7	407	20—37	51	31	461	20—41	25	12
209	21—36	25	14	266	22—36	22	12	352	20—37	94	50	408	20—37	26	6	462	22—36	32	16
210	21—36	20	10	296	22—38	43	7	355	20—38	58	38	409	20—37	25	6	463	22—37	30	15
211	21—36	20	10	297	22—38	54	14	356	19—39	61	27	410	20—37	24	4	464	22—37	46	30
212	21—36	20	12	298	22—38	50	14	357	18—38	89	48	411	20—37	31	10	465	22—37	22	6
213	21—36	28	18	299	21—38	55	15	358	18—38	60	9	412	20—37	31	10	466	22—37	41	16
214	21—35	34	24	300	21—39	71	28	359	20—40	69	19	413	20—37	30	11	467	22—37	26	12
215	21—35	20	10	301	21—39	64	20	360	23—36	53	37	414	20—37	42	19	468	22—39	67	25

第１表　Ｂ地区ピット群の深さ計測表

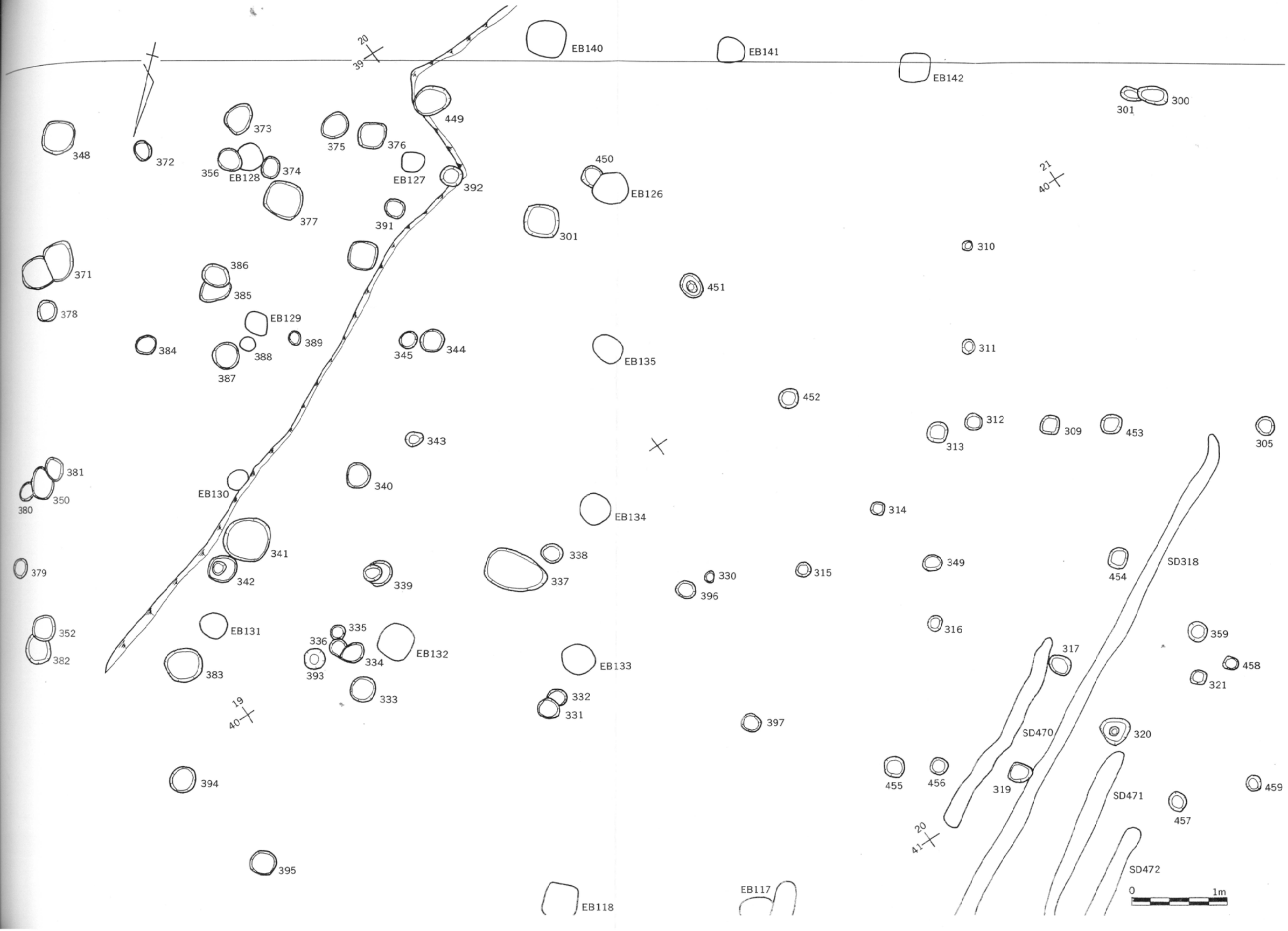
深さ	
相対	確認
25	4
27	6
47	25
44	19
34	11
28	5
24	5
28	9
25	9
37	20
26	11
28	12
21	4
20	4
22	4
23	5
22	4
22	4
22	4
22	4
25	7
22	7
28	10
52	33
25	5
27	7
28	5
25	7
23	5
27	9
24	5
50	14
49	30
50	28
45	13
74	24
54	4
51	4
53	4
66	16
62	11
66	15
68	17
61	13
64	14
57	9
25	12
32	16
30	15
46	30
22	6
41	16
26	12
67	25



第55図　ピット群（1）

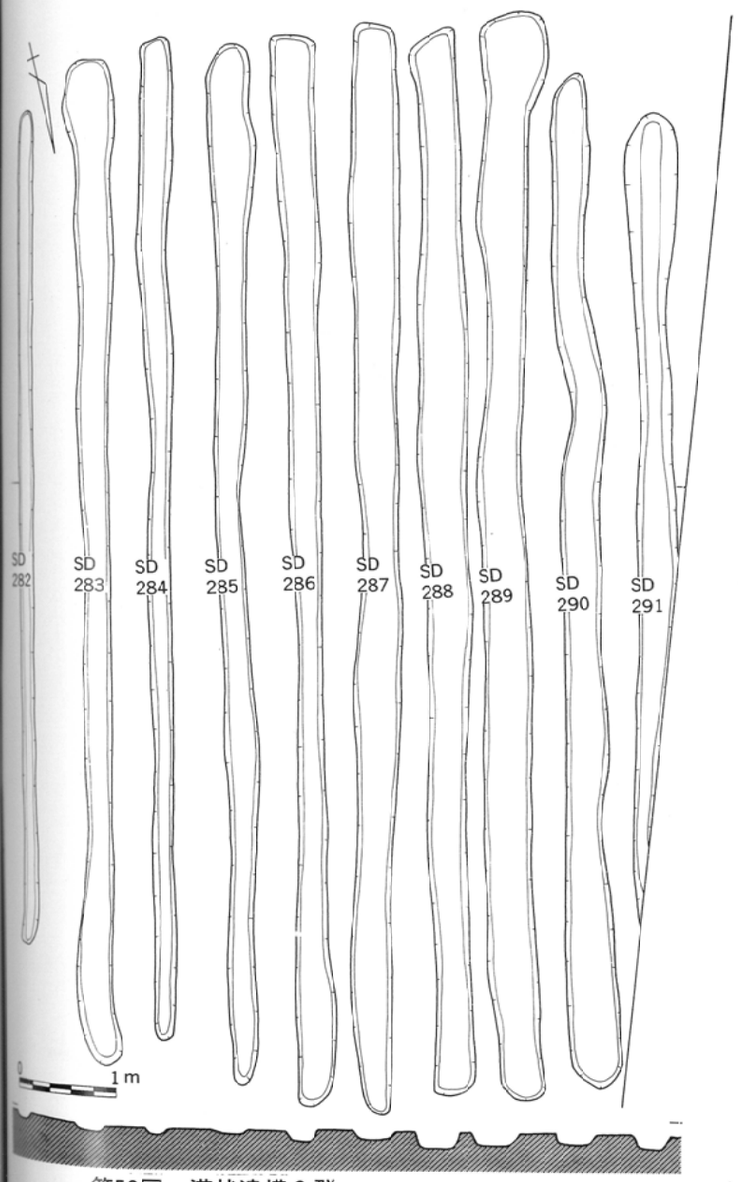


299
EB144
446
EB151
EB150
EB136
EB143
EB142
22
38
445
447
EB106
EB115
EB114
EB113
21
39
163
174
EB145
444
448
EB141
437
173
436
442
EB107
443
440
EB112
434
435
438
355
441
EB146
EB147
EB138
EB140
171
172
EB148
EB139
442
21
38
439
428
430
426
425
427
EB108
449
429
EB109
EB110
424
423
421
20
39
376
413
422
416
420
SK155
375
415
351
412
419
414
EB128
410
SK156
409
411
418
373
356
21
37
408
417
407
372
0
1m

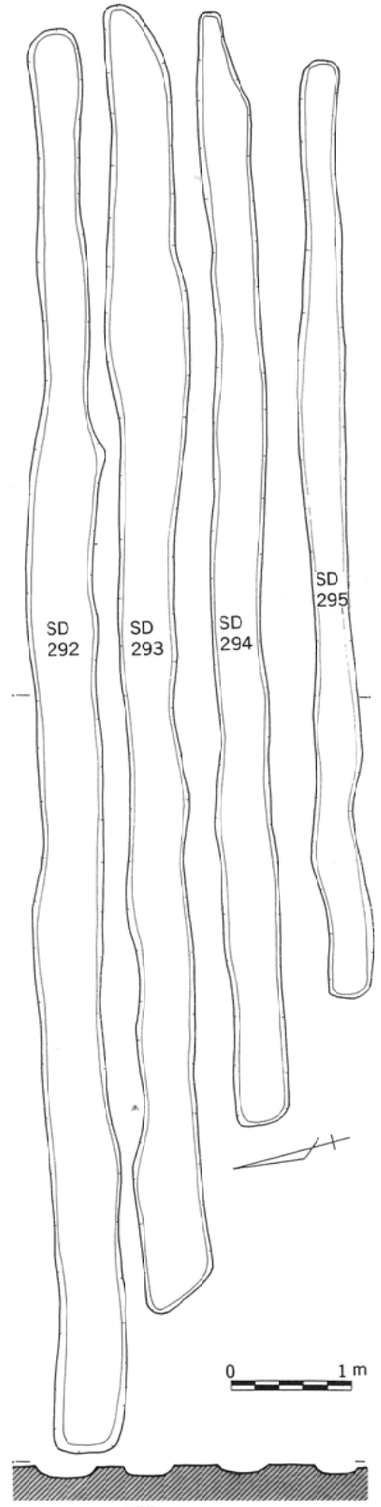

EB140
EB141
EB142
300
301
20
39
449
348
372
373
375
376
356
EB128
374
EB127
392
450
EB126
21
40
377
391
301
310
371
386
385
451
378
EB129
389
384
388
387
345
344
EB135
311
452
312
313
309
453
305
343
381
350
380
EB130
340
EB134
314
341
342
338
337
349
454
SD318
379
339
330
396
315
352
382
EB131
335
336
334
EB132
316
359
317
458
383
393
EB133
321
333
332
331
19
40
397
SD470
320
394
455
456
319
459
SD471
457
20
41
395
SD472
EB118
EB117
0
1m

5　溝状遺構（第6，58～63図　図版74・75）

B地区では単独の溝状遺構を3本，平行する4～10数本からなる溝状遺構を4か所で検出した。後者の覆土から出土した遺物はすべて平安時代のものであるが，磨滅が著しいことから再推積の可能性もあり，溝の作られた年代を確定することはできなかった。



第58図　溝状遺構2群

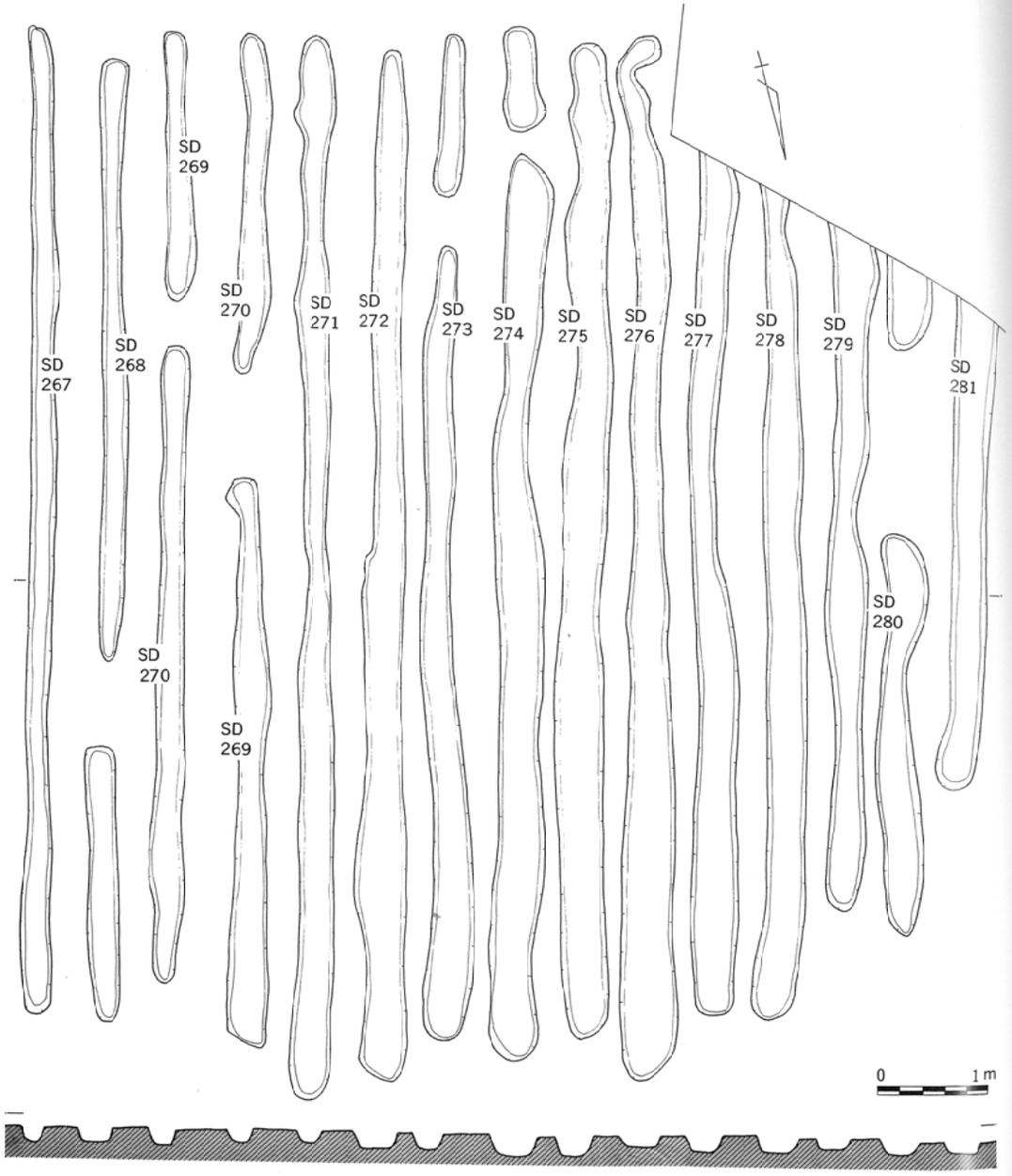


第59図　溝状遺構1群

1）1群（第59図　図版74）

22・23—38～40区で検出した4本からなる溝群で，SD152を切っている。その長さは8～12m，平均幅は40～60cm，深さ7～10cm，主軸方向はN—78°—Wをはかる。底面は凹凸が激しい。遺物はSD292，293，294から土師器甕，須恵器坏の破片が出土しているが，磨滅が著しい。

第60図　SD278出土土器



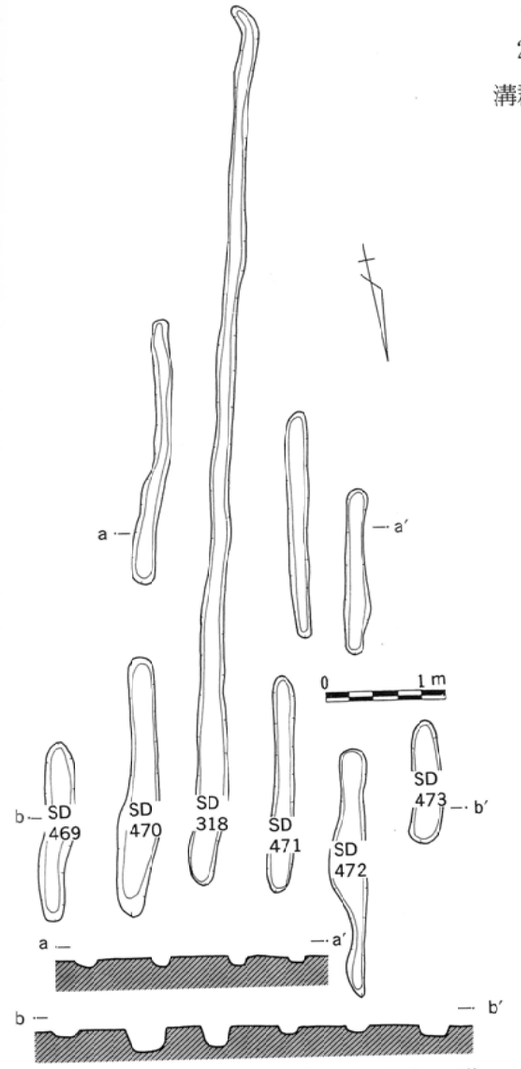
第61図　溝状遺構3 a群

2）2群（第58図　図版74・75）

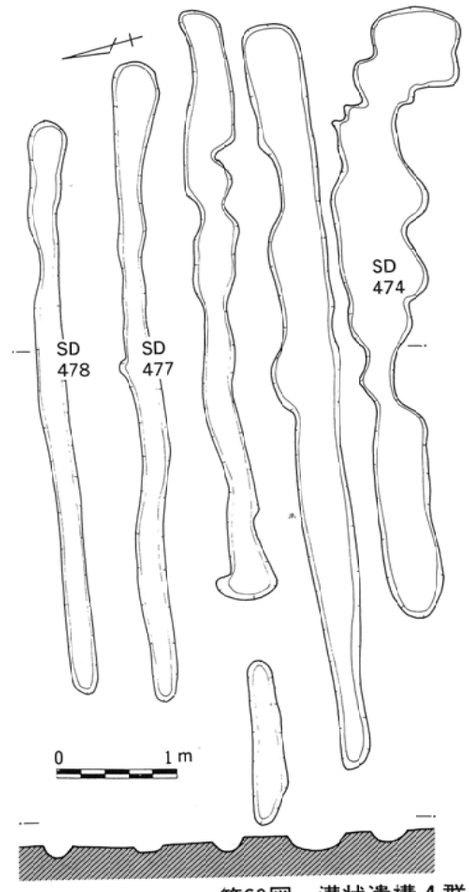
22・23—40・41区で検出した10本からなる溝群で，同じ走向を示す3a群とは1～1.5の距離をおき，ほぼ直角の走向を示す1群から約1.5mの距離にある。長さは7～9m，平均幅は20～40cm，深さは5～15cm，主軸方向はN—16°—Eをはかる。1群と同様底面の凹凸は激しい。遺物はSD284，288，289，290，291から，土師器甕，須恵器甕，赤焼土器坏の破片が出土している。

3）3a群（第60・61図　図版74・75）

20・21—40～43区で検出した15本からなる溝群で途中で切れるものもある。この溝群は



第62図　溝状遺構3 b群



第63図　溝状遺構4群

図版74　溝状遺構１．２．３ａ・ｂ群完掘状況

図版75　溝状遺構２．３ａ・ｂ群完掘状況

ＳＤ267の東へさらに拡がるとも考えられるが，ＳＤ473以東のものは不揃いであることから，これらを３ｂ群として扱った。長さは９ｍ前後，平均幅は30～40cm，深さは10～20cm，主軸方向はＮ－16°－Ｅをはかる。底面には凹凸がある。遺物はＳＤ278から底径が小さく丸味をもって立ち上がる須恵器坏（第60図）が出土した他，第９・10表に示したような破片が出土している。

４）３ｂ群（第62図　図版75）

19・20－40・41区で検出した６本からなる溝群で，このなかのＳＤ318は，ＳＢ102の柱穴ＥＢ116を，ＳＰ471はＥＢ125を切っている。長さは１～７ｍ，幅は20～30cm，深さは５～20cmとまちまちで途切れるものも多い。ＳＤ318の主軸方向はＮ－12°－Ｅをはかる。遺物の出土はない。

５）４群（第63図）

17・18－38・39区で検出した５本からなる溝に比べ，辺の出入りが激しい。ＳＤ474から土師器甕の破片が５点出土している。

６）ＳＤ152，ＳＤ264，ＳＤ354（第６図　図版73）

ＳＤ152は，22・23－35～38区で，延長約17ｍに渡って検出した溝で，前述したようにＡ地区で検出したＳＤ43につながるものと思われる。また，この溝は盤下げによって20cm程削平された23－37区からは底面の痕跡だけが認められ，これも22－38区内で消滅している。この溝の南側には柱穴，その他の遺構はなく，集落を囲むような溝であった可能性がある。幅は50cm前後，確認面からの深さは20cm前後で，覆土は暗褐色砂質シルトの単一層で，土師器甕の破片が出土している。

ＳＤ264は22・23－37区において検出した溝で，ＳＰ260を切り，ＳＰ187に切られている。長さ4.5ｍ，幅は20cm，深さは７cmをはかる。遺物の出土はない。

ＳＤ354は16～18－36・37区で検出された溝で，大きな落込みＳＸ353に注いでいる。幅は１～1.5ｍ，深さは20cm前後をはかる。遺物の出土はない。

６　性格不明の落込み（第6図）

調査区の北端16・17－36～39区で，大きな落込みＳＸ353（第6図）を検出した。この落込みにＳＤ354が注ぎ込んでおり，全体を把握していないが，大きな池，ないしは河川の跡になる可能性がある。全体の掘り下げは行っていないが，16－38区内の試掘調査の結果，第６図の実線で表わした部分で一時平坦になり，さらに北方に落ち込むことが明らかになり，調査区北端での底面までの深さは１.5ｍに達することが確認された。遺物は土師器，須恵器，赤焼土器の小破片が多数出土しているが，いずれも磨滅が著しい。

7　遺構外出土遺物（第64～67図　図版76）

Ｂ地区出土遺物の約60％は遺構検出作業のなかで発見された。これらは，グリッド名を付して取りあげているが，大半は19～22―36～38区内から出土し，とりわけ19・20―37・38の４グリッドに集中して発見された。このグリッドでＳＫ154・155・347の遺物を大量に含む土壙を検出していることから，これらの遺物も本来は，遺構内に含まれていたものと考えられる。遺物の大半は土師器，須恵器，赤焼土器の各器種の小破片であるが，実測可能なものもあった。

また，平安時代の地山面となる青灰色砂質シルト（Ⅲ層）から縄文時代晩期の土器と石器が出土している。遺構は発見できなかったが，土器の残存率からみて，流れ込みによるものではなく，本来この場にあったものと考えられた。

１）平安時代の遺物

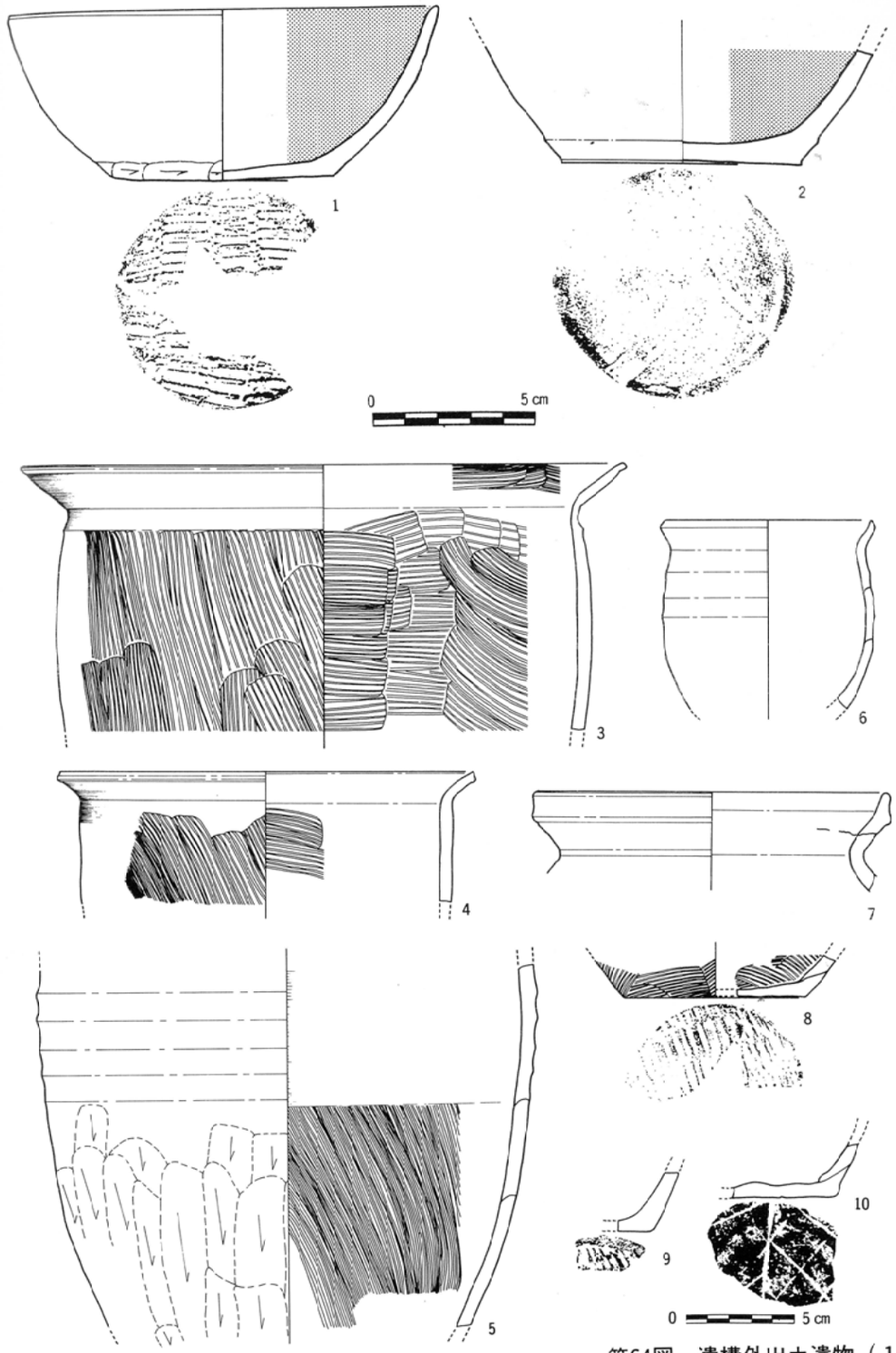
土師器，須恵器，赤焼土器の他，砥石がある。土器の破片数は第９・10表に示した。

ａ　土師器（第64図）

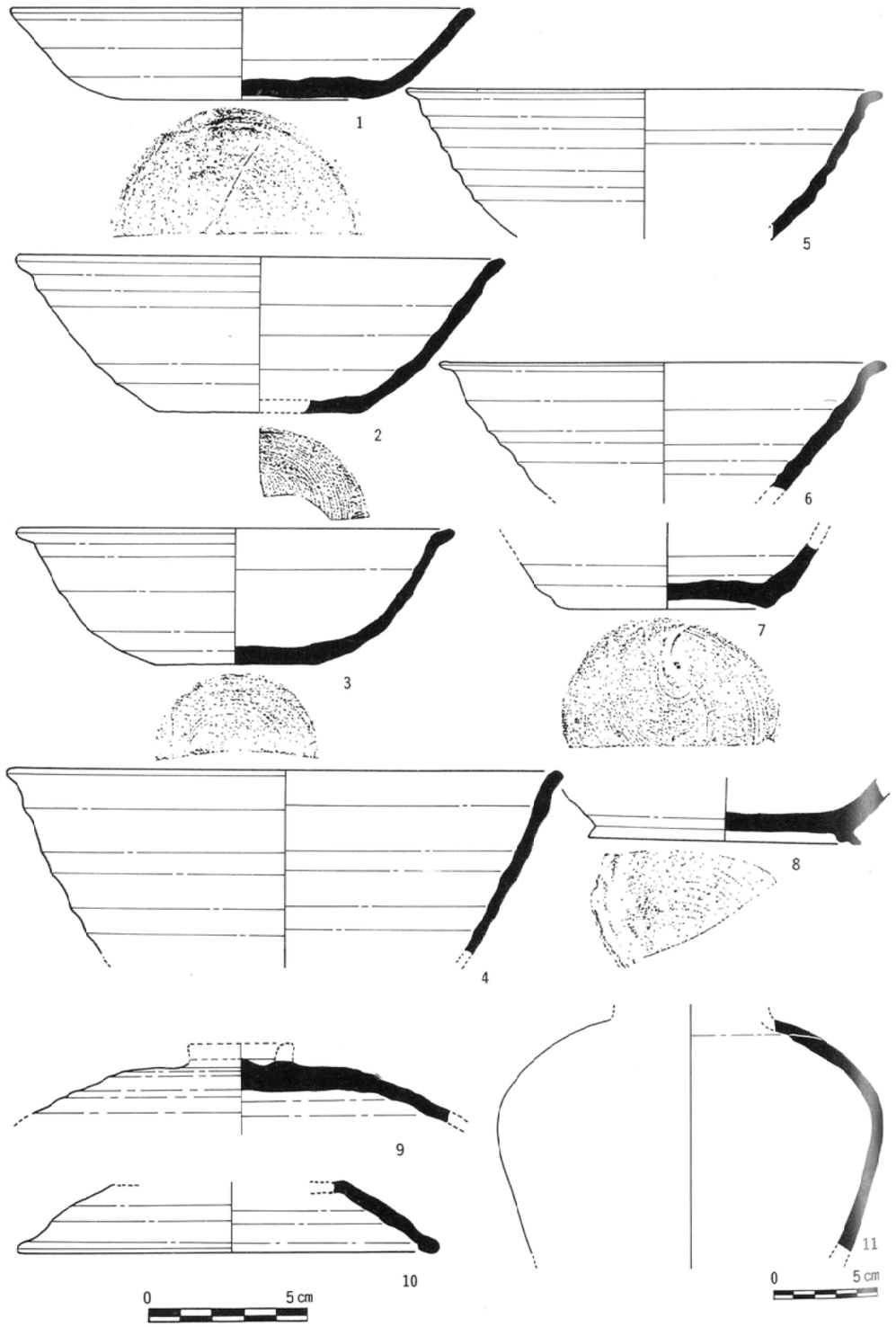
坏，高台付坏，甕の各器種があるが，坏，高台付坏には実測可能な２点を除いて，破片数で24点と全体の１％程しかなく，大半は甕の破片である。

第64図１は底部に横糸の間隔の広いアンペラＢの痕跡のある坏で，外面は体部中程から口縁部にかけて，ヘラミガキが施され，体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキの後，黒色化処理が施されている。坏でアンペラ痕の残る珍しい資料である。２は底径74㎜という大きめな底部から，ほぼ直線的に立ち上がる資料で，外面はロクロ（？）ナデ，内面はミガキの後黒色化処理が施されている。

３は最大径が口縁にある大形の長胴甕である。口縁部は単純に「く」の字状に長く外反し，頸部に段が巡る資料である。口縁部外面はロクロ（？）ナデ，内面には横方向の刷毛目が，そして体部外面には縦方向の，内面には横方向の刷毛目が施されている。４は最大径が口縁にある中形の長胴甕で，口縁部は単純に「く」の字状に短かく外反し，外傾する口唇部の中央部に凹みをもつ。口縁部内外面はロクロ（？）ナデ，体部外面は縦方向の，内面は横方向の刷毛目が施されている。５は長胴甕の体部資料である。体部上半はロクロナデ整形となり，下半は外面にヘラケズリ，内面に刷毛目が施されている。ロクロ整形が，外面のケズリ，内面の刷毛目を切っていることから，最終的にロクロによって仕上げがなされたことが窺える。６は口径が100㎜の小形の甕で，最大径は口唇部にあり，体部はやや膨らみをもっている。口縁部は「く」の字状に短かく外反し，口唇部は上方につまみ出されている。口縁部内外面，体部内外面ともロクロナデ整形となっている。７は口縁部が「く」の字状に外反し，口唇部が上方につまみ出されて，内面に段のつく中形の甕である。内，



第64図　遺構外出土遺物（１）



第65図　遺構外出土遺物（2）

外面ともロクロ整形である。8～10は甕の底部資料で，8にはアンペラB，9にはアンペラAの痕跡があり，10は木葉痕の残る唯一の資料である。

b　**須恵器**（第65図）

坏，高台付坏，蓋，壺，甕の各器種がある。

1は底部切り離しが回転ヘラ切りによる資料である。底部外面で丸味をもって，ゆるやかに立ち上がり，そのまま外傾している。内外面ともロクロナデによって平滑に仕上げられている。器高は低い。2はやや内湾しながら立ち上がり，体部下半から直線的に外傾し，口縁部が外反する資料で，器高は高い。3は内湾しながら立ち上がり，口縁部は強く外反している。器高も低く，小ぶりである。4～6は坏の体部から口縁部にかけての資料である。4は口径が174mmと大形の資料で，急角度で直線的に外傾しており器高も高い。5は内湾気味に，6は直線的に外傾し，両者とも口縁部は強く外反している。7は坏の，8は高台付坏の底部資料である。

9・10は坏蓋である。9は口径の大きい資料で，口縁部は欠損している。天井部には回転ヘラ切り痕がみられ，つまみの剝落した痕跡が残っている。つまみの上面は凹みをもち，中央で高まりをもつ。10は9より口径が小さく，折り返されて玉縁状になる口縁となっている。

11は壺の肩部から体部下半にかけての資料である。最大径が体部上半にある，やや肩の張る長頸壺になるものと考えられる。

甕の破片数は坏に次ぐ量となっているが実測可能なものはなかった。

c　**赤焼土器**（第65図）

坏，高台付坏，甕の各器種があるが，実測可能なものは高台付坏1点だけである。甕は体部破片の拓本を図示した。

1は短かく外反する高台の付く高台付坏である。厚目の底部から，やや丸味をもって立ち上がり，体部下半から直線上に開き，そのまま外傾している。焼けひずみが認められる。器面は内外面とも凹凸が著しい。坏部は回転糸切りによって切り離されている。

2～6は甕の体部の破片である。すべて，灰褐色ないしは赤褐色を呈し，須恵器との区別は容易である。2・6は体部中央部の破片で上部にロクロナデが施され，下半外面には縦方向に走る平行叩目文が，内面には平行アテが施されている。ロクロナデが叩目を切ることから，叩きによる整形の後，ロクロナデ整形を施したことがわかる。3・5は体部下半の破片で，5は叩きによる器面の凹凸が激しく，器厚も一定していない。4は体部下半から底部にかかる資料で厚味を帯びている。本遺跡では，この種の甕の体部上半から口縁にかけての部分と，底部資料については明確にはできなかったが，恐らく上半はロクロナ

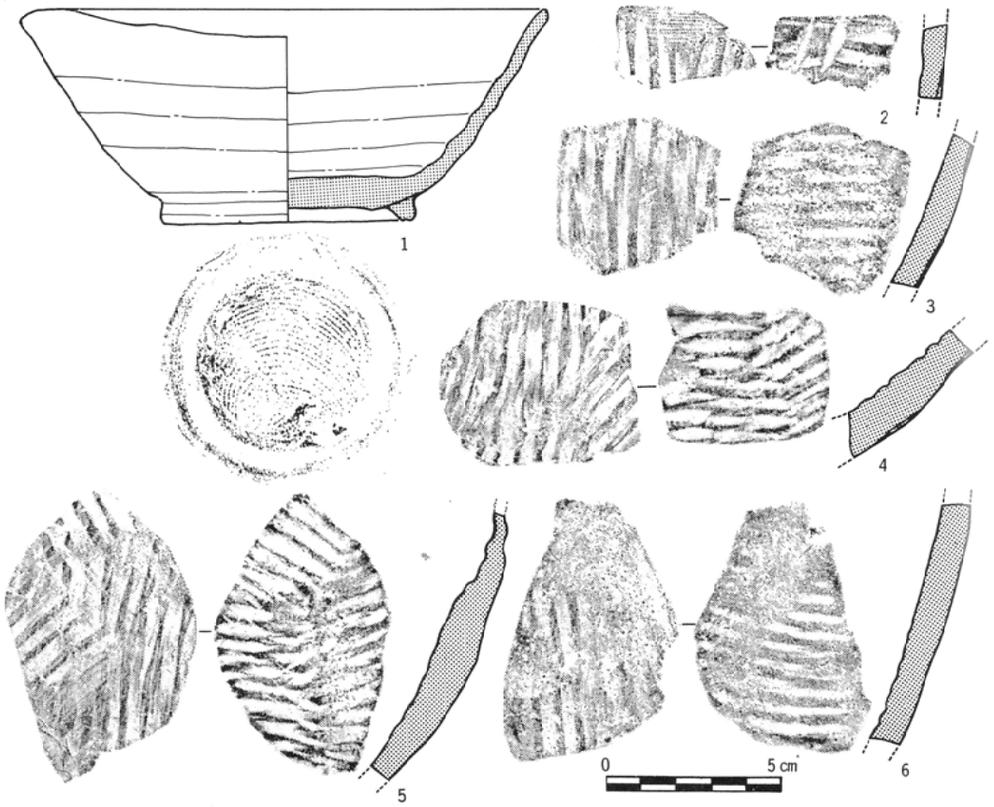
デ整形が施され，口縁部は「く」の字状に外反し，口唇部が上部につまみ出されて段をもつ形態（第46図10のようなもの）になるものと思われる。また，底部は丸底であろう。

d　石製品（第67図10）

20—38で出土した砥石である。現在長110㎜，厚さ45㎜でａ～ｄの各面が砥磨面となっている。ｄ面には幅の狭い平行する研磨痕が認められる。凝灰質頁岩製。

2）縄文時代の遺物（第67図１～４　図版76）

１は21—37区で，平安時代の遺構群の調査終了後，ダメ押しのために地山を掘り下げた際に出土したものである（図版76）。口径84㎜，器高148㎜の小形の壺で，体部は球状を呈し，頸部は開口気味に直立する。頸部は研磨され，体部には長さ１cm前後の原体によるＬＲ縄文が施されている。体部上半が文様帯となる。体部中央に３本の，肩部に２本，そして頸部との境界に３本の細い横沈線を巡らせ，次に，体部中央と肩部の横沈線の間に３本の縦沈線を入れることによって４単位に区画している。さらに，この区画されたなかに肩部の沈線の中央部から左右対近の曲線と，横沈線を描いて工字文状の枠取りを行い，この



第66図　遺構外出土遺物（３）

内部の縄文を磨り消している。岩手県九年橋遺跡の壺（藤村1978）にモチーフが類似し，大洞Ｃ₂式に比定される。２～４は19—37区のⅢ層から出土し，２・３は口唇部に刻目をもつ鉢，４は平行沈線をもつ鉢で，共に１と同一時期の資料である。

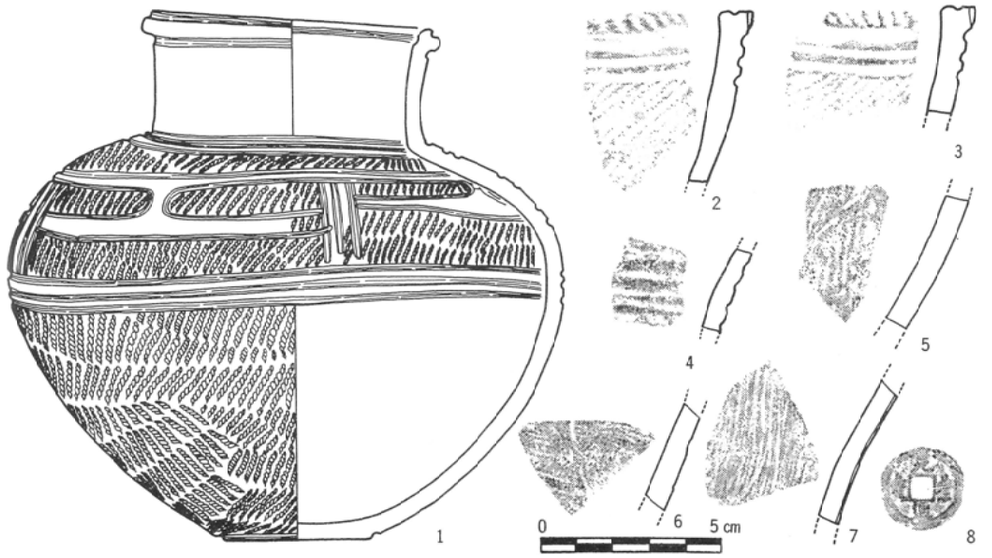
９は21—36区のⅢ層から出土した磨製石斧の基部資料である。石英安山岩製。

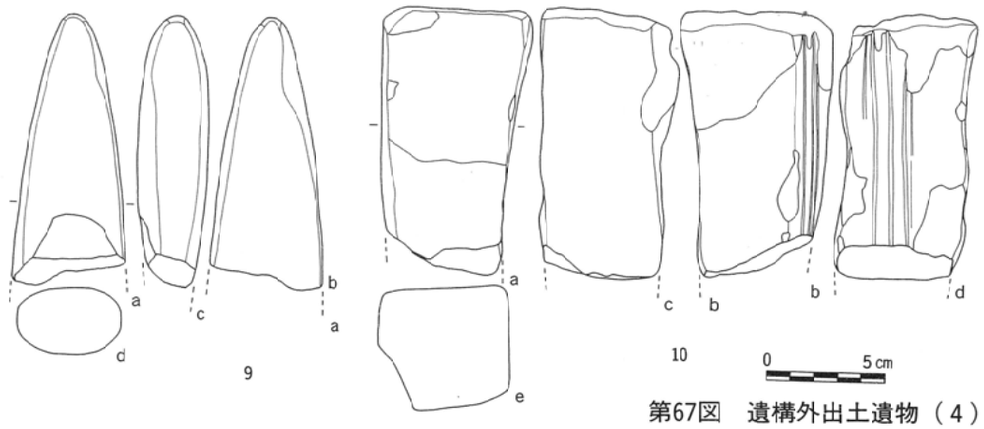
3）弥生土器（第67図5～7）

附加縄文のついた壺，甕の体部破片である。

4）古　銭（第67図８）　21—36から出土した。「元豊通寶」がある。

図版76　縄文土器壺出土状況





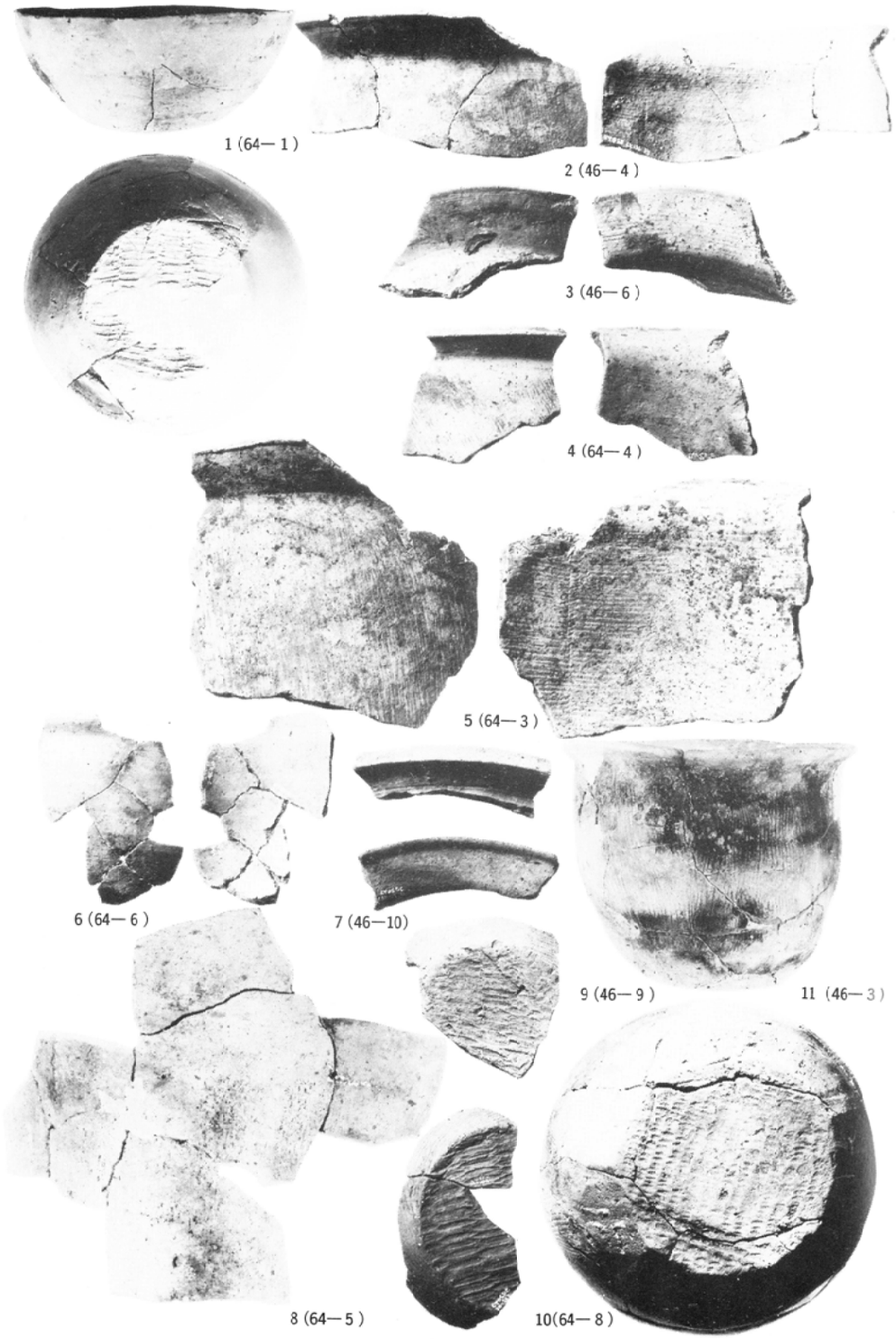
第67図　遺構外出土遺物（４）

図版77　B地区主要遺構群完掘状況（南方より）

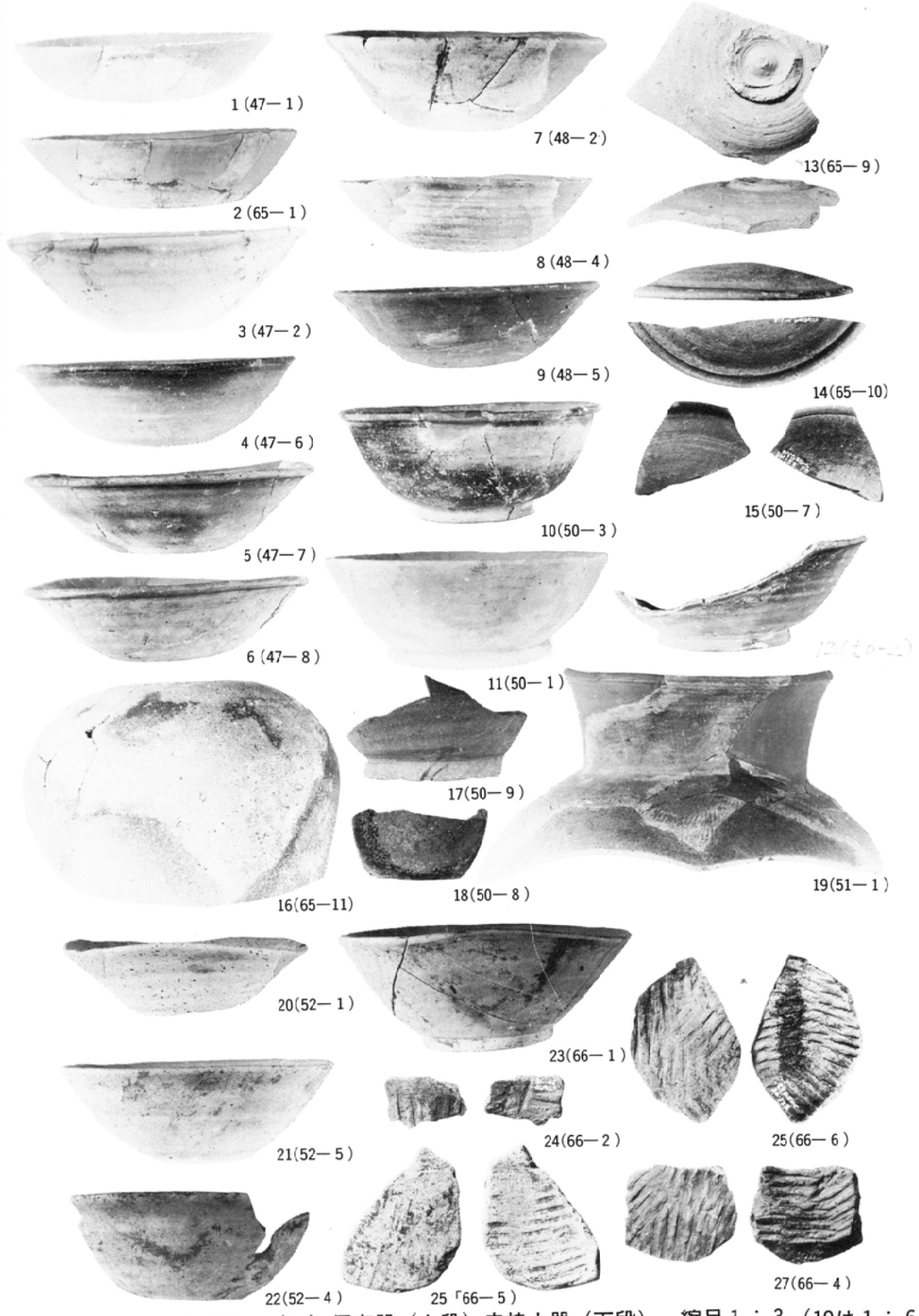
図版78　B地区主要遺構群完掘状況（北方より）

図版79　B地区ピット群完掘状況（西方より）

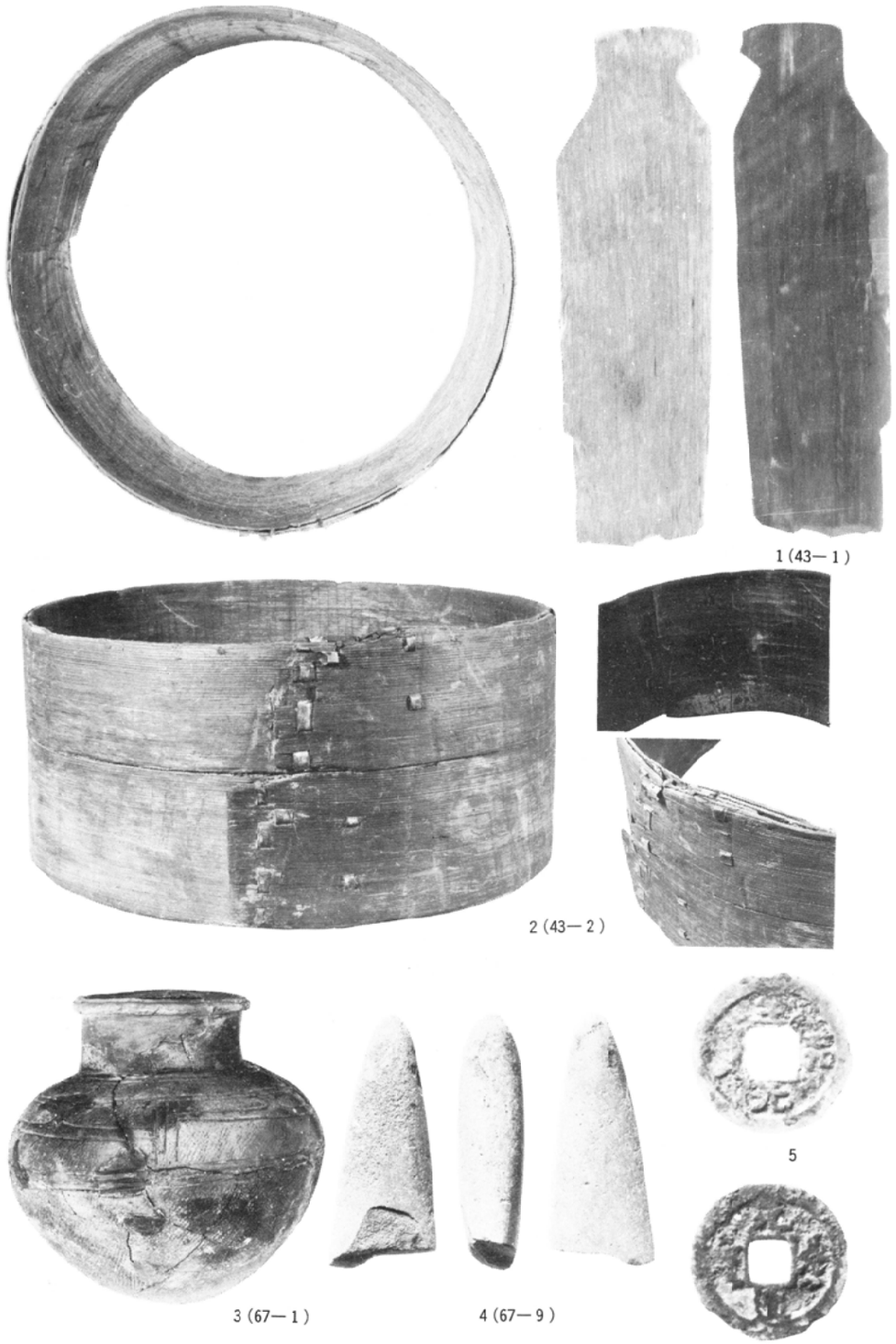
図版80　B地区井戸群・土壙群完掘状況（西方より）



図版81　B地区出土遺物（1）土師器　縮尺1：3



図版82　B地区出土遺物（2）須恵器（上段）赤焼土器（下段）　縮尺1：3（19は1：6）



図版83　B地区出土遺物（3）木簡，曲物，縄文土器・石器，古銭　縮尺1：3
（1・5・6は1：1）

V　考　　察

1　出土遺物の分類

本遺跡からは，縄文時代晩期，弥生時代中期末，古墳時代前期，平安時代の遺物が出土した。このうち，弥生時代，古墳時代の遺物は流れ込みと判断され，また縄文時代の遺物は原位置を保っているものと考えられたが，量的にも少なく，遺構の発見もなかった。ほかに初鋳期が1054年の至和元寶，1078年の元豊通寶の二点の北宋銭が出土し，至和元寶はピット内から得られているが，これらは鎌倉時代に入ってから流通が広まったと考えられている（遠藤1979）ことから，本遺跡の平安時代の遺物の年代を示す指標とはならない。

平安時代の遺物には，土器，土製品，石製品，鉱滓がある。土器は土師器，須恵器，赤焼土器（註1）に大別される。土師器には坏，高台付坏，埦，甕が，須恵器には坏，高台付坏，蓋，壺，甕，また赤焼土器には坏，高台付坏，甕の各器種がある。そして，それぞれの各器種は，形態，法量，整形技法などの属性の相違で第2～4表のように細分することができる。

土師器（Ⅰ）の坏(A)はロクロ使用ケズリ調整の有無によって1類,2類に分けられ,2類は形態によって細分される。高台付坏(B)は内外面とも黒色化処理の施される1類,内面にだけ黒色処理の施される2類，内面にミガキ調整の施される3類に分けられ，それぞれが形態や法量で細分される。埦（C）はロクロ不使用の1類，使用の2類に分けられる。甕（D）はロクロ不使用の5類と，確実にロクロを使っている3・4類，ロクロ使用の可能性のある1・2類に分けられ，形態や法量で細分できる。

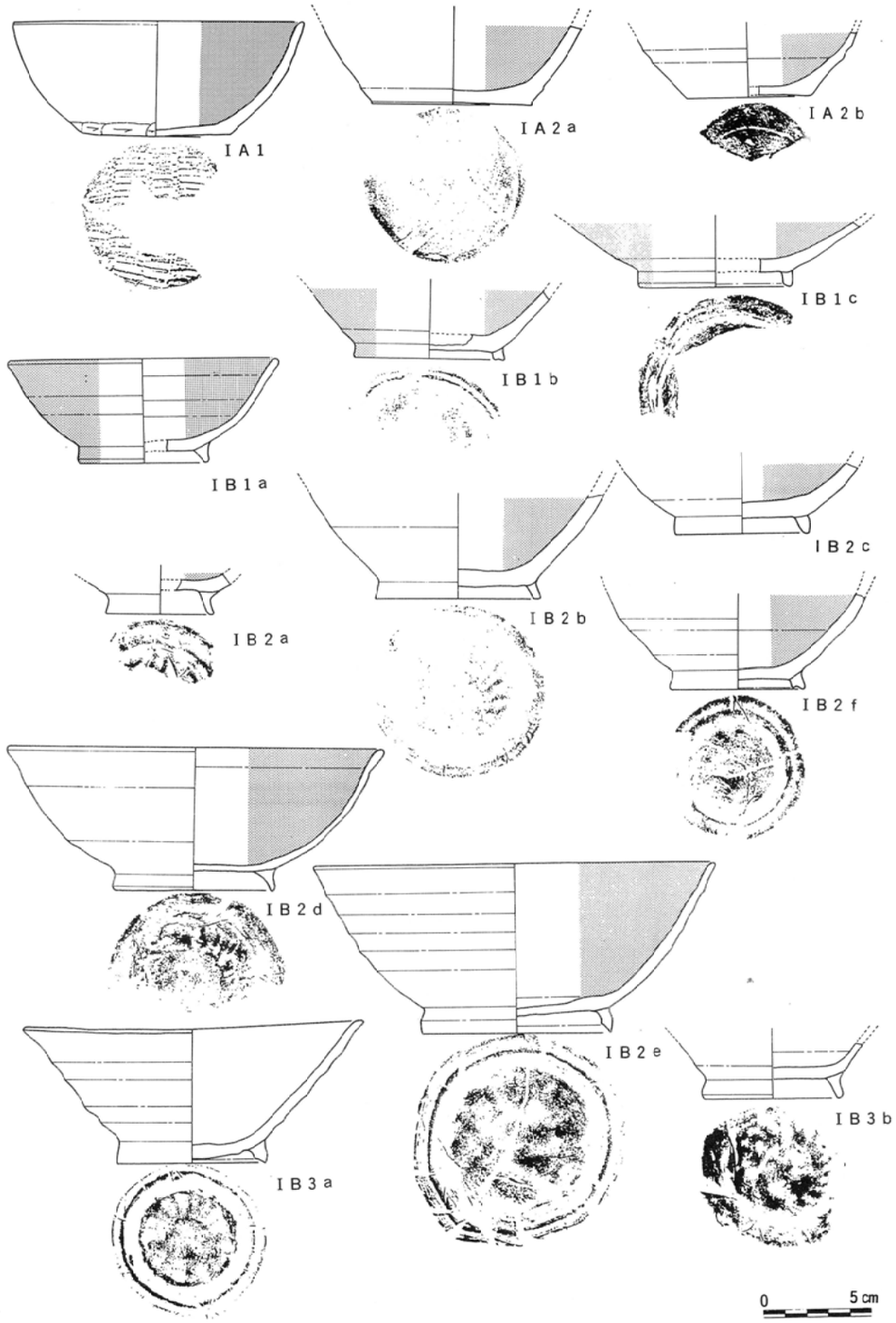
須恵器（II）の坏（A）は底部切り離しがヘラ切りによる1類，糸切りで口縁の強く外反する2類，外反のない3類，それに，全体的に小ぶりの4類に分けられ，形態や法量で細分される。高台付坏（B）は法量によって1類，2類に分けられ，高台の形態で細分される。蓋（C）については不明な点が多いが，法量の相違から1～3類に細分できる。壺（D），甕（E）も完形品はなく，不明な点が多いが，長頸壺ではやや肩の張る（1類）と，体部が球形を呈する（2類）に分けられるようである。甕は頸部径の相違で1～5類に細分した。

赤焼土器（III）の坏（A）は，法量や底部から口縁にかけての形態の相違によって大きく7類に分けられ，器厚の相違，口縁部形態などによって細分できる。高台付坏（B）は法量によって1～4類に分けられ，高台の形態でそれぞれが細分される。

（註1）　本書でいう「赤焼土器」はロクロないし叩きなど，須恵器製作にみられる整形技法をもつが，酸化焔によって焼成された赤褐色を呈する土器で，本遺跡では坏，高台付坏，甕がある。甕については，叩きによって整形されたものに限定し，ロクロ，ないしはロクロとケズリによる整形技法のものについては土師器に含めた。

第２表　土師器（Ｉ）分類表

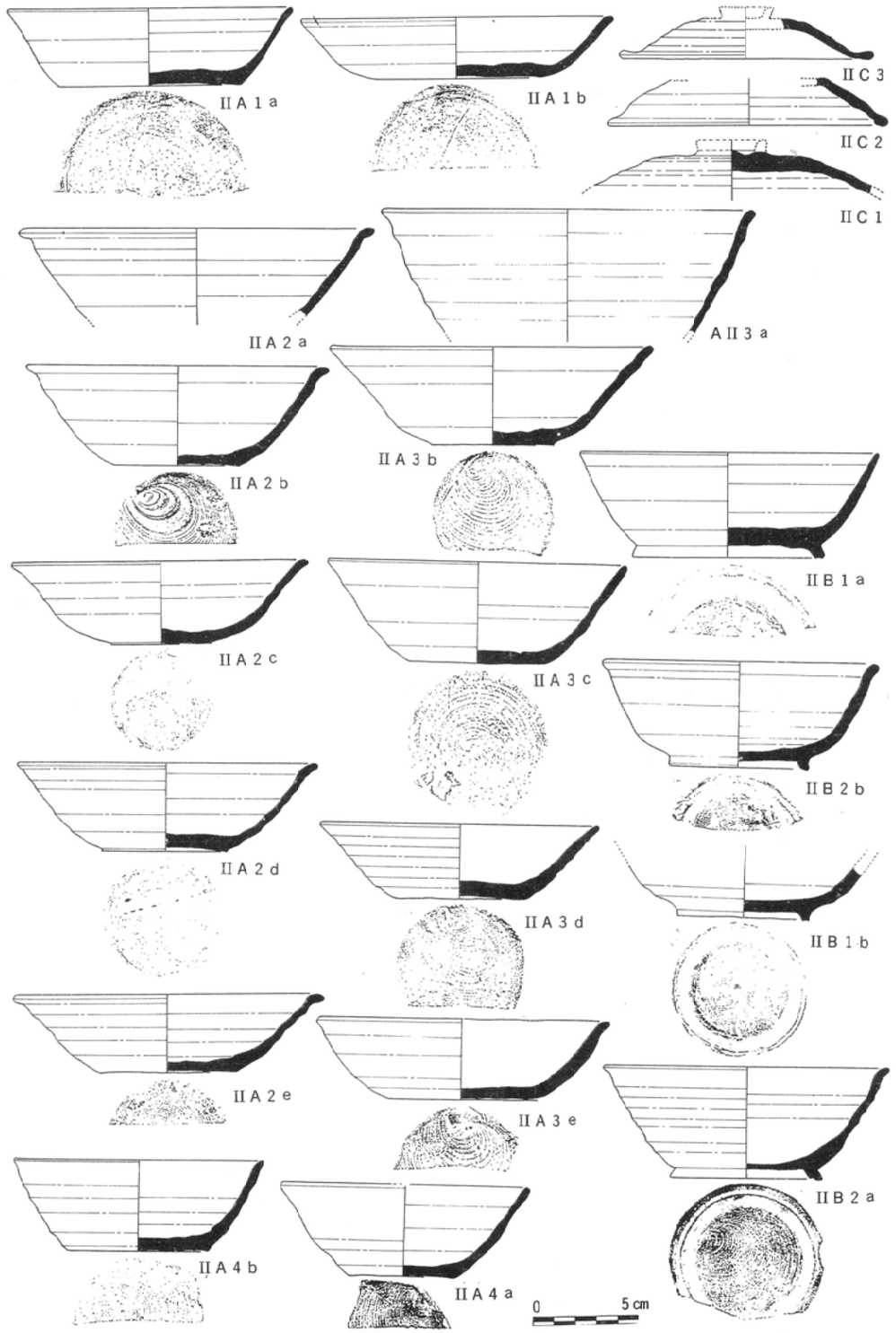
器種	分類	ロクロ	口縁部～体部形態	最大径	外面調整	内面調整	底部	法量
A 坏	1	不使用	やや丸味をもって立ち上がる		体部上半ヘラミガキ 下端手持ちヘラケズリ	ミガキ→黒色処理	平底アンペラB	
	2a	使用	直線的に立ち上がる		ロクロナデ	ミガキ→黒色処理	平底回転糸切り	中形
	2b	〃	丸味をもって立ち上がる		〃	〃	〃	小形
B 高台付坏	1a	〃	やや丸味をもって立ち上がり、口縁はやや外反する		ミガキ→黒色処理	〃	付高台 放射状ナデツケ	中形
	1b	〃	直線的に立ち上がる		〃	〃	〃	大形
	1c	〃	辺状にゆるく立ち上がる		〃	〃	〃	〃
	2a	〃	皿状にゆるく立ち上がる		ロクロナデ	〃	〃	〃
	2b	〃	割合急角度で直線的に立ち上がる		〃	〃	〃	小形
	2c	〃	やや丸味をもって立ち上がる		〃	〃	〃	中形
	2d	〃	底部付近で丸味をもって立ち上がり、口縁が強く外反する		〃	〃	〃	大形 (薄手)
	2e	〃	丸味をもって立ち上がり、体部下半から直線的になり、そのまま外傾する		〃	〃	〃	大形
	2f	〃	やや丸味をもって立ち上がる		〃	〃	付高台 回転糸切り	中形 大形
	3a	〃	底部付近で丸味をもつが、体部下半から直線的になり、そのまま外傾する		〃	ミガキ	付高台 放射状ナデツケ	中形
	3b	〃	直線的に立ち上がる		〃	〃	〃	〃
C 鍋	1	不使用	直線的に立ち上がり、体部中央でややふくらみ、口縁が強く外反	口縁	底部付近斜め、体部は縦方向の刷毛目、口縁ヨコナデ	横方向の刷毛目 口縁ヨコナデ	平底アンペラA	
	2	使用	口縁は体部からの続きで直線的に外傾	〃	口縁ロクロナデ	口縁ロクロナデ	?	
D 甕	1a	使用(?)	単純に「く」の字状に長く外反	口縁	頸部→ロクロ(?)ナデ 体部縦方向の刷毛目	口縁は刷毛目の後ロクロ(?)ナデ体部は横方向の刷毛目	?	大形 長胴
	1b	〃	単純に「く」の字状に長く外反 外面頸部に段が巡る	〃	〃	〃	?	〃
	1c	〃	〃	〃	頸部→口縁刷毛目の後ロクロ(?)ナデ、体部は縦方向の刷毛目	口縁は横方向の刷毛目	?	中形 長胴
	2a	〃	単純に「く」の字状に短かく外反口唇部中央が凹む	〃	頸部→口縁ロクロ(?)ナデ 体部は縦方向の刷毛目	口縁ロクロ(?)ナデ 体部は横方向の刷毛目	?	大形 長胴
	2b	〃	単純に「く」の字状に短かく外反、体部はふくらみをもつ。口唇中央が凹む	〃	体部上端→口頸・口縁ロクロ(?)ナデ、体部は縦方向の刷毛目	〃	?	中形
	2c	〃	単純に「く」の字状に短かく外反	〃	頸部→口縁ロクロ(?)ナデ 体部は縦方向の刷毛目	口縁ロクロ(?)ナデ	?	中形
	3a	使用	「く」の字に外反し、口唇部は上方につまみ出され、内面に段をもつ	〃	体部上半ロクロ、下半はヘラケズリ	体部上半ロクロナデ 体部下半刷毛目	?	大形 長胴
	3b	〃	〃	〃	ロクロ	ロクロ	?	中形
	3c	〃	〃	〃	ロクロ	ロクロ	?	中形
	3c	〃	〃	〃	ロクロ	ロクロ	?	小形
	3d	〃	〃	体部(?)	不明	不明	?	中形 球形(?)
	4	〃	単純に「く」の字状に短かく外反		ロクロ	ロクロ		〃
	5	不使用	単純に「く」の字状に短かく外反		口縁部ヨコナデ、体部は縦方向の刷毛目、下端ヘラズリ	口縁ヨコナデ、体部横方向の刷毛目	平底アンペラA	中形



第68図　土師器坏・高台付坏分類図

第３表　須恵器(Ⅱ)分類表

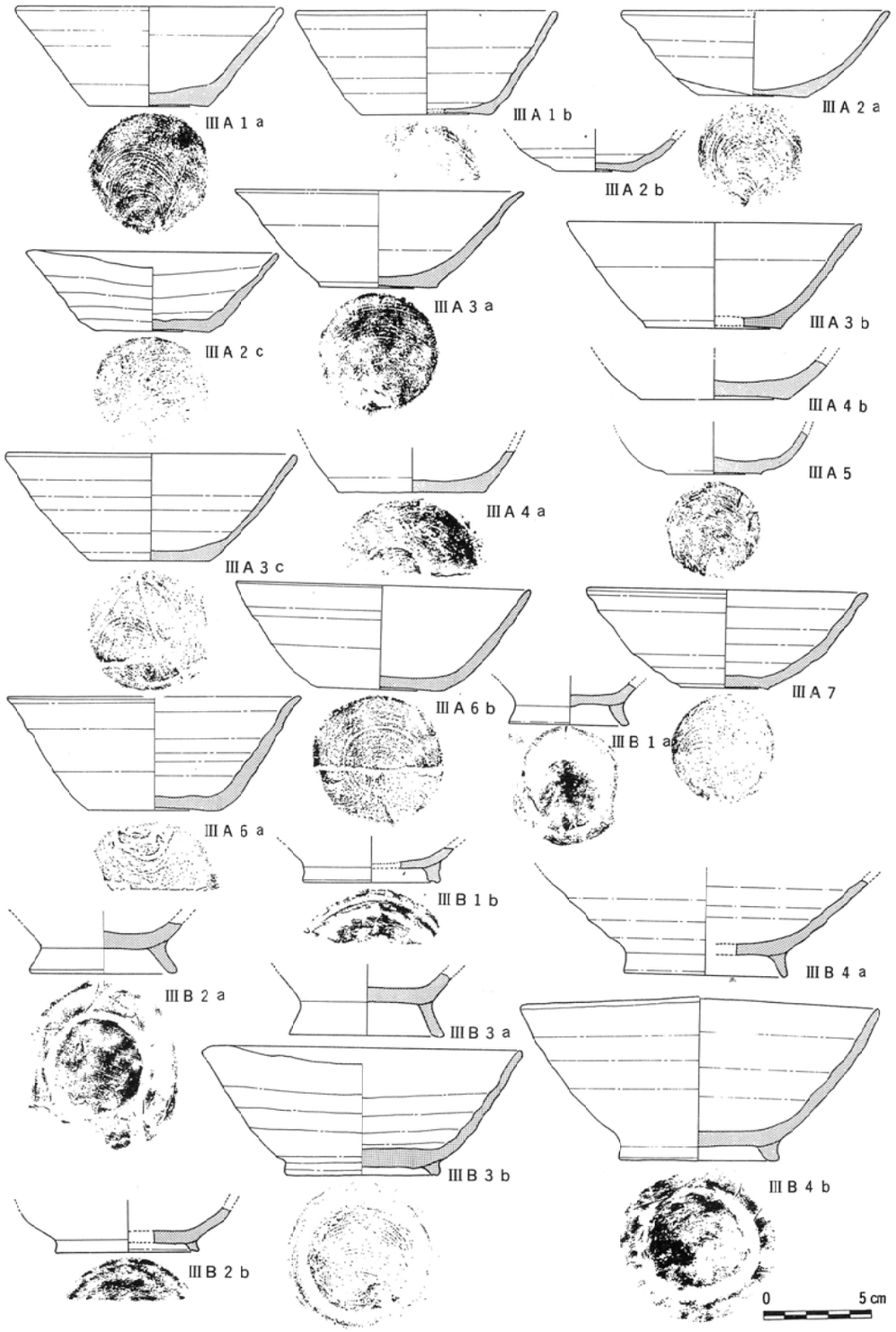
器種	分類	口縁部～体部・高台の形態	法量(mm) 口径	底径	器高	底部	調整等
A 坏	1a	急角度で立ち上がり、そのまま外傾	135	86	37	平底回転ヘラ切り	無調整
	1b	ゆるやかに立ち上がり、そのまま外傾	148	78	29	〃	〃
	2a	やや内湾して立ち上がり、口縁部が強く外反	165以上	不明	55～60	不明	不明
	2b	器高が高くやや内湾しながら立ち上がり、口縁部が強く外反	144～154	54～64	47～49	平底回転糸切り	無調整
	2c	器高が低く、内湾しながら立ち上がり、口縁部が強く外反	138～140	48～50	39～43	〃	〃
	2d	器高が低く、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部が強く外反	142～148	50～58	39～42	〃	〃
	2e	底径がやや大きく、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部が強く外反	146	64	37	〃	〃
	3a	器高が高く、直線的に立ち上がりそのまま外傾	166以上	不明	60以上	不明	不明
	3b	器高が高く、底部付近でゆるく立ち上がり、そのまま外傾	152	58	47	平底・回転糸切り	無調整
	3c	大きめの底部からほぼ直線的に立ち上がり、そのまま外傾	142	64	48	〃	〃
	3d	器高が低く、内湾気味に立ち上がり、そのまま外傾	132～140	54～66	36～42	〃	〃
	3e	器高が低く、大きめの底部からほぼ直線的に立ち上がる	138	74	38	〃	〃
	3f	器高が高く内湾しながら立ち上がり、そのまま外傾する	134	54	46	〃	〃
	4a	口径の割に器高が高く底径が小さい。内湾しながら立ち上がり、口縁がやや外傾する	116～124	48～50	43～44	〃	〃
	4b	口径の割に器高が高く、底径も大きい。急角度で直線的に立ち上がりそのまま外傾	116	66	43	〃	〃
B 高台付坏	1a	短かく外反する高台をもち、底部付近でゆるやかに立ち上がり、体部下半から直線的に外傾	142	90	50	付高台回転糸切り	〃
	1b	短かく直立する高台をもち、底部から体部下半にかけ、ゆるやかに立ち上がる	不明	62	不明	〃	〃
	2a	短かく外反する高台をもち、丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反する	130	71	53	〃	〃
	2b	短かく直立する高台をもち、急角度で立ち上がり、口縁部が外反	128	64	50	〃	〃
C 蓋	1	口径が大きく、中央部が凹むつまみをもつ	140以上	不明	不明	回転ヘラ切り	〃
	2	口径は1と3の中間にあり、折り返されて玉縁状となった口縁をもつ	134	〃	〃	不明	〃
	3	口径が小さく、折り返されて玉縁状となった口縁部が強く外反する	120	〃	〃	〃	〃
D 壺	1	体部上半に最大径をもち、やや肩の張る長頸壺	不明	〃	〃	〃	不明
	2	体部中央に最大径があり、球形を呈する長頸壺	〃	〃	〃	〃	体部中央から下半にかけ手持ちヘラケズリ
	3	ほぼ直立する頸部をもつ壺	〃	〃	〃	〃	不明
	4	外反する頸部をもつ壺、体部は球形	〃	〃	〃	〃	〃
E 甕	1	頸部径が280mm前後と大形の甕 頸部がやや立ち、口縁近くで強く外反	350前後	〃	〃	〃	格子状ー青海波
	2	頸部径が240mm前後の甕、頸部がややたち、口縁近くで強く外反	330前後	〃	〃	〃	平行ー平行
	3	頸部径が200mm前後の甕、頸部から口径にかけ強く外反	280前後	〃	〃	〃	格子状 平行 ＞青海波
	4	頸部径が160mm前後と小形の甕、頸部から口縁にかけ強く外反	220前後	〃	〃	〃	不明ー不明
	5	頸部径が140mm前後の小形の甕、頸部から口径にかけほぼ直立する	164	〃	〃	〃	〃



第69図　須恵器坏・高台付坏・蓋分類図

第４表　赤焼土器(Ⅲ)分類表

器種	分類	口縁部～体部・高台の形態	法量(mm) 口径	底径	器高	底部
A 坏	1a	底部から急角度で直線的に立ち上がる器厚は厚い	118～130	48～60	45～47	平底・回転糸切り
	1b	底部から急角度で直線的に立ち上がる器厚は薄い	120前後	60前後	50前後	〃
	2a	底径が小さくゆるやかな立ち上がりを示す。内面は底部付近でカーブを描く	126～128	50前後	40前後	〃
	2b	底径が2aよりさらに小さい底部付近で丸味をもって立ち上がり、体部下半から直線的に外傾	120前後	40前後	40前後	〃
	2c	口往、器高とも小さく、内面の底部と体部の境界が明瞭	120前後	55前後	38前後	〃
	3a	1･2より大きく、底部から丸味をもって立ち上がり、体部下半から直線的に外傾し、口縁部でさらに外反する	136前後	56前後	46前後	〃
	3b	底部から口縁まで直線的に外傾する 器厚は厚い	140前後	64前後	50前後	〃
	3c	底部から口縁まで直線的に外傾する 器厚は薄い	136前後	56～64	50前後	〃
	4a	底径が大きく、やや丸味をもって急角度で立ち上がる	不明	66～68	不明	〃
	4b	底径が大きく、ゆるく立ち上がる	〃	68	〃	〃
	5	底径は小さく底部付近で丸味をもち椀状の立ち上がりを示す	不明	44	不明	〃
	6a	法量は3aに近いが、外面の底部と体部の境界が丸味をおびる。口縁でさらに外反	136	60	49	〃
	6b	6aと似るが口縁の外反はない	136	58	46	〃
	7	底径が小さく丸味をもって立ち上がる	132	42	46	〃
B 高台付坏	1a	外反する高台がつく	不明	56～64	不明	付高台・回転糸切り
	1b	直立する高台がつく	〃	64	〃	〃
	2a	外反する高台がつく	〃	68	〃	〃
	2b	直立する高台がつく	〃	68	〃	〃
	3a	外反する高台がつく	〃	72	〃	〃
	3b	直立する高台がつく	〃	72	〃	〃
	4a	外反する高台がつく	〃	78～82	〃	〃
	4b	直立する高台がつく	〃	76～80	〃	〃
C 甕	1	体部下半に叩き目が施される	不明	不明	不明	不明



第70図　赤焼土器、坏・高台付坏分類図

第5表　図示遺物計測表(1)

挿図番号	遺物出土区	種類	器種	口径	底径	器高	分類	図版
8	SK18	須恵器	坏	140	60	42	A3d	26−1
10−1	SK19	赤焼	坏	127			A1	
2	〃	〃	〃	146			A4	
3	〃	〃	〃		64		A3	
4	〃	〃	〃		58		〃	
5	SK22	土師器	高台付坏	158	68	66〜62	B3a	25−10
6	SK20	〃	甕	118			D2c	25−13
7	SK22	須恵器	壺	87（頸部）	188（最大幅）		D4	26−11
8	〃	〃	甕	240（頸部）			E2	27−2
12	SK44	〃	〃					27−4
13−1	SP8	土師器	高台付坏	188	89	79	B2c	
2	SP10	〃	〃		68		B3a	
3	SP8	赤焼	坏	140	64	50	A3b	
14−1	SD4	土師器	〃		48		A2b	
2	〃	須恵器	〃		58		A2d	
15	SD5	赤焼	〃	127	50	40	A2a	26−7
18−1	SD30	〃	〃		44		A5	
2	〃	〃	〃		56		A3	
19−1	SX1	土師器	高台付坏		60		B1a	
2	〃	〃	〃		62		〃	
3	〃	〃	〃		〃		〃	
4	〃	〃	〃		82		B1b	25−2
5	〃	〃	〃		98		B1c	25−3
6	〃	〃	〃		72		〃	
7	〃	〃	〃		50		B2a	
8	〃	〃	〃		72		B2b	25−4
9	〃	〃	〃		76		〃	25−7
10	〃	〃	〃		68		〃	25−6
20−1	〃	〃	〃		〃		B2c	
2	〃	〃	〃		62		〃	
3	〃	〃	〃		〃		〃	
4	〃	〃	〃	174	74	76	B2b	
5	〃	〃	〃		78		B2c	
6	〃	〃	〃		72		B2f	
7	〃	〃	〃		68		〃	25−5
8	〃	〃	〃		64		〃	
9	〃	〃	〃		66		B2f	
21−1	〃	〃	坏部	126			B2a	
2	〃	〃	〃	146			B2b	
3	〃	〃	〃	134			B2	
4	〃	〃	〃	130			〃	〃
5	〃	〃	〃	158			〃	〃
6	〃	〃	〃	196			〃	〃
7	〃	須恵器	〃	134	54	46	A3f	26−2
8	〃	〃	〃	116	50	43	A4a	26−3
9	〃	土師器	甕	132			D4	25−14
10	〃	〃	〃	158			D3b	
11	〃	〃	〃		130		D3a	25−16
22−1	〃	須恵器	〃	218			E4	
2	〃	〃	〃	330			E2	
3	〃	〃	〃				E3	27−1
4	〃	〃	〃	338			E1	26−14
23−1	〃	赤焼	坏	126	56	47	A1a	26−4
2	〃	〃	〃	118	54	45	〃	26−5
3	〃	〃	〃	120	40	40	A2	

挿図番号	遺物出土区	種類	器種	口径	底径	器高	分類	図版
23−4	SX1	赤焼	坏	136	56	46	A3a	
5	〃	〃	〃	148	60	49	A3c	
6	〃	〃	〃		38		A2b	
7	〃	〃	〃		44		A2	
8	〃	〃	〃		46		A2	
9	〃	〃	〃		49		A2	
10	〃	〃	〃		46		A2a	
24−1	〃	〃	〃		58		A3	
2	〃	〃	〃		62		〃	
3	〃	〃	〃		64		〃	
4	〃	〃	〃		55		A3c	
5	〃	〃	〃		68		A4a	
6	〃	〃	〃		66		〃	
7	〃	〃	〃		68		A4b	
8	〃	〃	坏部	120			AorB	
9	〃	〃	〃	126			〃	
10	〃	〃	〃	128			〃	
11	〃	〃	〃	〃			〃	
12	〃	〃	〃	146			〃	
13	〃	〃	〃	136			〃	
14	〃	〃	〃	〃			〃	
15	〃	〃	〃	146			〃	
25−1	〃	〃	高台付坏		64		B1a	
2	〃	〃	〃		62		〃	
3	〃	〃	〃		60		〃	
4	〃	〃	〃		68		B2b	
5	〃	〃	〃		72		B3a	
6	〃	〃	〃		82		B4a	
7	〃	〃	〃	170	76	72〜77	B4b	26−9
8	〃	〃	〃		80		〃	
9	〃	〃	坏部	116			AorB	
10	〃	〃	〃	138			〃	
11	〃	〃	〃	128			〃	
27−1	SX6	土師器	高台付坏		72		B2b	
2	〃	赤焼	坏		50		A2	
3	〃	〃	高台付坏		56		B1a	
4	〃	〃	〃		78		B4a	RP16
29−1	SX9	土師器	〃		70		B2f	25−9
2	〃	須恵器	坏	144				
3	〃	〃	〃		46			
4	〃	赤焼	〃	122	60	48	A1b	26−6
5	〃	〃	〃	136	56	[illegible]	A3c	
6	〃	〃	〃	128			A2a	
7	〃	〃	〃		60		A1	
8	〃	〃	〃		52		A2	
9	〃	〃	〃		56		A3	
10	〃	〃	高台付坏		60		B1a	
11	〃	〃	〃		64		B1b	
12	〃	〃	〃		68		B2b	
30−1	〃	須恵器	壺	172			D4	26−12
2	〃	〃	〃	90			D2	26−10
3	〃	〃	〃				D4	26−13
4	〃	〃	甕	278			E3	26−15
5	〃	土師器	長胴甕	243			D1a	25−12
6	〃	〃	甕	127			D2c	25−11

第 6 表　図示遺物計測表(2)

挿図番号No	遺物出土区	種類	器種	口径	底径	器高	分類	図版	挿図番号No	遺物出土区	種類	器種	口径	底径	器高	分類	図版
7	SX9	土師器	塝	427	120	160		25—17	48—5	SK155	須恵器	坏	140	66	39	A3d	
31	SX15	〃	甕		100		B3a	25—15	6	〃	〃	〃	138	74	38	A3e	82—9
33—1	25—18	〃	坏		58		A26	25—1	7	〃	〃	〃	124	48	44	A4a	
2	24—17	〃	高台付坏	126	62	49	B1a		8	〃	〃	〃	116	66	43	A4b	
3	25—17	〃	〃		70		B1b	26—8	49—1	SK154	〃	〃	167			A2a	
4	24—16	〃	〃		68		B2b		2	〃	〃	〃	156				
5	23—19	〃	〃		68		B2c		3	SK155	〃	〃	154				
6	24—18	〃	〃		70		B2f		4	SK154	〃	〃	144				
7	25—18	〃	〃		66		〃		5	SK155	〃	〃	150				
8	24—17	〃	〃		66		〃		6	〃	〃	〃	155				
9	25—18	〃	〃		62		B3a		7	〃	〃	〃	166				
10	〃	〃	〃		66		B3b		8	〃	〃	〃	136				
11	24—17	〃	坏部	174					9	〃	〃	〃		56			
34—5	24—18	須恵器	甕		100			27—3	10	〃	〃	〃		58			
6	〃	〃	甕		176			27—5	11	〃	〃	〃		60			
35—1	24—16	赤焼	坏		54		A1		12	〃	〃	〃		〃			
2	24—18	〃	〃		48		〃		13	SK154	〃	〃		60			
3	24—19	〃	〃	128	50	41	A2a		50—1	SK155	〃	高台付坏	142	90	50	B1a	82—11
4	23—19	〃	〃		42		A2		2	SK154	〃	〃	130	71	53	B2a	82—12
5	25—16	〃	〃		41		〃		3	SK155	〃	〃	128	66	50	B2b	82—10
6	25—18	〃	高台付坏		68		B2a		4	SK154	〃	〃		62		B1b	
7	22—25 13—21	〃	〃		68		〃		5	〃	〃	〃		64		?	
8	25—18	〃	〃		68		〃		6	〃	〃	〃	110			B2b	
9	〃	〃	〃		68		B2b		7	SK155	〃	坏蓋	120			C3	82—15
10	24—18	〃	〃		72		B3a		8	SK154	〃	壺		48		D	82—18
11	25—17	〃	〃		80		B4b		9	〃	〃	〃		84		〃	82—17
12	24—17	〃	坏部	130			A1		10	SK155	〃	〃		75		〃	
13	24—18	〃	〃	128			A2a		51—1	〃	〃	甕	355			E1	82—19
14	24—17	〃	〃	142			B		2	SK347	〃	〃	164			E5	
15	25—18	〃	〃	154			〃		52—1	SK154	赤焼	坏	120	54	38	A2c	82—20
36—1	SD30	古式土師器	壺	103				28—16	2	〃	〃	〃		62		A3	
2	〃	〃	〃		40			28—17	3	SK347	〃	〃	136	60	53	A6a	
3	〃	〃	〃		56			28—18	4	〃	〃	〃	〃	58	49	A6b	82—22
46—1	SK155	土師器	坏	144					5	SK154	〃	〃	132	42	46	A7	82—21
2	〃	〃	〃		68		A2a		54	SK346	土師器	甕		94			
3	SK154	〃	甕	150	80	120	D5	81—11	60	SD278	須恵器	坏		50		A4	
4	SK155	〃	〃	240			D1a	81—2	64—1	20—37	土師器	〃	134	69	54	A1	81—1
5	SK154	〃	〃	204			〃		2	22—37	〃	〃		74		A2a	
6	〃	〃	〃	192			D1c	81—3	3	〃	〃	甕	283			D1b	81—5
7	SK155	〃	〃	155			D2c		4	〃	〃	〃	195			D2a	81—4
8	〃	〃	〃		82				5	22—38	〃	〃		〃		D3a	81—8
9	SK154	〃	〃		76			81—9	6	21—36	〃	〃	100			D3c	81—6
10	SK155	〃	〃	204			D3a	81—7	7	19—38	〃	〃	166			D3d	
47—1	〃	須恵器	坏	135	86	37	A1a	82—1	8	20—38	〃	〃		84			81—10
2	〃	〃	〃	144	59	47	A2b	82—3	65—1	19—38	須恵器	坏	148	78	29	A1b	82—2
3	〃	〃	〃	148	54	〃	〃		2	20—37	〃	〃	154	64	49	A2b	
4	〃	〃	〃	140	48	39	A2c		3	20—38	〃	〃	138	50	43	A2c	
5	SK154	〃	〃	148	50	42	A2d		4	20—41	〃	〃	174			A3a	
6	SK155	〃	〃	142	56	〃	〃	82—4	5	20—38	〃	〃	150			A2b	
7	〃	〃	〃	〃	58	39	〃	82—5	6	〃	〃	〃	140			A2d	
8	〃	〃	〃	146	64	38	A2e	82—6	7	〃	〃	〃		64		A2e	
9	〃	〃	〃	〃	64	37	〃		8	20—41	〃	〃		86		B1a	
48—7	〃	〃	〃	152	58	47	A3b		9	20—38	〃	坏蓋				C1	82—13
2	SK154	〃	〃	142	64	48	A3c	82—7	10	20—37	〃	〃	134			C2	82—14
3	SK155	〃	〃	136	54	42	A3d		11	20—38	〃	壺				D1	82—16
4	〃	〃	〃	132	64	36	〃	82—8	66—1	20—37	赤焼	高台付坏	150	72	52	B3b	82—23

2　A・B地区の土器組成

本遺跡から出土した平安時代の土器は前項で述べたように分類されたが，ここでは再びA地区，B地区に戻って，それぞれの土器の組み合わせについて検討してみたい。

A地区ではすでに述べたように3～4時期の遺構の重複が認められたが，古い時期の遺構には遺物が少なく，また，新しい時期の遺構に，もともと古い時期の遺構にあった遺物が再推積した可能性も否定できないことから，各時期の遺物を特定することはできなかった。また，B地区でも，少なくとも3時期の道構の重複が認められたが，A地区同様各時期の遺物を特定することはできなかった。したがって，A・B地区とも数十年の時間的幅のなかで使用・廃棄された土器であり，細部にわたる編年のための資料としては必ずしも適当なものとは言えないであろう。しかし，時間的な幅をもつとはいえ，A地区，B地区のそれぞれの土器群は，調査例の少ない山形盆地の平安時代の空白を埋める資料としては重要なものであろう。

1）A地区の土器組成

A地区からは，土師器坏（A 2$_b$）・高台付坏（B 1$_a$～B 3$_b$までの各種）・埚（C 1，C 2）・甕（D 1$_a$，D 2$_c$，D 3$_a$，D 3$_b$，D 4），須恵器坏（A 2$_d$，A 3$_d$，A 3$_f$，A 4$_a$）・壺（D 2，D 4）・甕（E 1～4），赤焼土器（A 1$_a$，A 1$_b$，A 2$_a$，A 2$_b$，A 3$_a$，A 3$_b$，A 3$_c$，A 4$_a$，A 4$_b$，A 5）高台付坏（B 1$_a$，B 1$_b$，B 2$_a$，B 2$_b$　B 3$_a$，B 4$_a$，B 4$_b$）の各器種が出土した。ほかに，破片資料として，須恵器の高台付坏，蓋がある。これらのうちB地区の組成になるものは，土師器甕（D 1$_a$，D 2$_c$，D 3$_a$），須恵器坏（（A 2$_d$）・甕（E 1）と少なく，A・B両地区の隔りの大きさを感じさせる。図示遺物における土師器，須恵器，赤焼土器の割合は，それぞれ35.7%，13.6%，50.7%となり，破片における比率は土師器―23.7%，須恵器―6.7%，赤焼土器―69.5%となり，赤焼土器が量的に他を凌駕することが指摘できる。また，供膳形態の土器に限ってみると，図示遺物では土師器の杯が1.7%，高台付坏が33.6%，須恵器の坏が5.0%，赤焼土器の坏が37.8%，高台付坏が21.8%となり，供膳形態の主要な器種は，赤焼土器の坏，高台付坏，土師器の高台付坏となり，土師器の坏，須恵器の坏は極端に少なくなっている。破片では坏，高台付坏を合わせると，赤焼土器は9割に近く，須恵器は2%を占めるにすぎない。

煮沸形態では土師器の甕が主体を占め，県内で，はじめて出土した埚がこれに加わる。A地区には叩きのある赤焼土器の甕はない。

また，貯蔵形態では，体部が球形を呈し肩の張らない長頸壺（D 2）がある。

2）B地区の土器組成

B地区からは，土師器坏（A 1，A 2$_a$）・甕（C 1$_a$，D 1$_b$，D 1$_c$，D 2$_a$，D 2$_c$D 3$_a$，

D3c，D3d，D5），須恵器（A1a～A3dまでの各種とA4b）・高台付坏（B1a～B2bまでの各種）・蓋（C1～C3）・壺（D1）・甕（E1），赤焼土器坏（A2c，A6a，A6b，A7）・高台付坏（B3b）の各器種が出土した。ほかに破片資料として，土師器高台付坏，赤焼土器甕がある。このうち土師器高台付坏にはA地区で主流を占めた，高台接合時における放射状のナデツケの認められるものは1点もなかった。

図示遺物における，土師器，須恵器，赤焼土器の割合は，それぞれ24.1%，68.3%，7.6%となって，須恵器が全体の⅔以上を占める。また，破片ではそれぞれ75.3%，15.7%，9.0%となり，煮沸形態をもつ土師器が全体の¾を占める。

A地区と同じように，これを供膳形態の土器に限ってみると，図示遺物では土師器が6.9%，須恵器の坏が67.2%，高台付坏が10.3%，蓋が5.2%，赤焼土器坏が8.6%，高台付坏が1.7%となり，供膳形態では須恵器が主要な位置を占めていたことが指摘できる。破片では赤焼土器の坏も少なくないが，すでに述べたように，A地区にくらべると器厚の厚いものが多くなっており，図示遺物にもA地区出土の坏と同種のものはない。

煮沸形態ではA地区と同じ様に土師器の甕が主体であり，破片数では実に全体の¾を占めている。A地区にない甕として，頸部外面に段の巡るD1b類，ロクロ不使用のD5類がある。また，赤焼土器の甕の存在も注目される。

また，A地区にない貯蔵形態として，やや肩の張る長頸壺がある。

3　A・B地区の土器群の年代

A・B地区の土器は前項で述べた組成と特徴をもつことが明らかとなったが，つぎにこれらの土器群の年代について検討してみたい。

A地区の主要な供膳形態の土器は，赤焼土器の坏，高台付坏，土師器の高台付坏であり須恵器は極端に少ない。煮沸形態では土師器の甕を主体として若干の鍋が加わり，貯蔵形態には体部が球状を呈し，肩の張らない長頸壺がある。山形県内陸地方において，これと同一の組成となる土器群は見当らないが，山形市坊屋敷遺跡第54号住居跡や土壙群の土器は赤焼土器や土師器高台付坏を主体としており，A地区に近い様相を呈している（佐藤他1981）。東根市軍町遺跡1号住居跡（柏倉他1973）の供膳形態は須恵器，土師器が少なく，赤焼土器が主体を占めている。また，河北町熊野台遺跡の第67号土壙からは本遺跡のⅢA1類，ⅢA3類に近い赤焼土器の坏が出土している（佐藤・安部1980）。佐藤庄一氏によればこれらは11世紀でも後半の土器とされている（佐藤1979b）。手塚　孝氏は川西町道伝遺跡のSD12層から出土した赤焼土器の坏，高台付坏を主体とした土器群を11世紀代に位置づけている（手塚1979a）。しかし，両氏ともその根拠については明確にされていない。

白鳥良一氏は宮城県多賀城跡から出土した土器をA～Fの6群に分類し，それぞれの年

代的位置づけを行っている(白鳥1980)。それによると，10世紀代に位置づけられるE群土器は，糸切りの土師器坏，糸切り無調整の須恵器坏，須恵器系土器（本稿の赤焼土器の範ちゅうに入る）坏を主体としており，11世紀代から12世紀の土器とされるF群土器は，須恵系土器の小皿，台付皿が多くなるという。本遺跡のA地区には，これらの小皿，台付皿は全くみられないことから，多賀城跡の土器と対比させてみる限り，11世紀代まで降ることはないと考えられる。

また，A地区で多く出土した，底部に放射状のナデツケのある土師器の高台付坏は，岩手県の落合II遺跡（朴沢1980）や，下谷地B遺跡（昆野・三上1982）等から多くの出土があり，高橋信夫氏によればIII－2群土器として9世紀末から10世紀代に位置づけられている(高橋1982)。宮城県では五輪C遺跡の井戸跡からロクロ不使用の土師器甕や，ケズリ調整を伴う土師器坏，須恵器坏，無調整の赤焼土器と共伴して出土している（小野寺1979)。本県では現在までのところ，米沢市八幡原№24遺跡（手塚1976）と，天童市柏木遺跡（未発表，名和達朗氏の御教示による）から出土しているだけである。八幡原№24遺跡の土器群は手塚　孝氏によると，10世紀初頭の道伝遺跡ＳＤ１３層出土の土器群の直後に位置づけられるという(手塚1979b)。こうしてみると，底部に放射状ナデツケのある土師器の高台付坏も11世紀まで降る可能性は少ない。

土師器甕は刷毛目調整の施されているものが，ロクロ調整のものより多く，堝は明らかにロクロを使用していない。宮城県において灰釉陶器を根拠として11世紀の年代が与えられた安久東遺跡の竪穴住居跡から出土した土師器甕は，すべてロクロ調整によるものであるという（土岐山1980)。

以上のことから，現時点ではA地区の土器群を10世紀代と考えてもよいと思われる。

山形県内陸地方で，B地区と同一の組成を示す土器群も現在までのところないようである。まず，ロクロ不使用で底部に蓆痕（アンペラB）のつく土師器坏（A１類）が１点出土しているが，ロクロ不使用で平底の土師器坏は山形市下反田遺跡の落込み遺構（佐藤他1976,佐藤1979b）や，川西町道伝遺跡ＳＤ１５層下面（藤田1981)，それに米沢市八幡原遺跡№30・31遺跡（手塚1979b）で出土しており，河北町熊野台遺跡第IV群土器にも存在する（佐藤・安部1980)。前三者は報告者によっていずれも８世紀末葉に位置づけられている。ただし，これらの三例とも，糸切りの後，ヘラ削りが施されているものや，回転ヘラ切りで無調整の須恵器坏が共伴している。また，熊の台遺跡では，ロクロ使用でヘラ切りの土師器坏や，ロクロ不使用の長胴甕，甕，ヘラ切りでヘラ削り調整や，ヘラ切り無調整の須恵器坏，やや肩の張る須恵器長頸壺，器高の高い赤焼土器坏(本遺跡のＡ６a類に近い)，それに赤焼土器の甕の出土がある。報告者は９世紀代に位置づけているが，先の白鳥氏の

論文や，森　貢喜氏によれば（森1982）東北地方の太平洋側においては8世紀末頃にロクロを使用した土師器坏が出現することが明らかとなっており，熊野台第Ⅳ群土器も8世紀末から9世紀初頭頃に位置づけられるものと思われる。

土師器甕はロクロ不使用のもの（D5類），確実にロクロを使用しているもの（D3・4類），刷毛目調整があるがロクロを使用している可能性のある（D1・2類）に分けられたが，このうち，D1$_b$類とした頸部外面に浅い段をもつ甕は山形市塩辛田遺跡第30・31号住居跡に存在する(佐藤他1981)。ここでは磨滅が著しいが平底といえる土師器坏，それにヘラ切りと糸切りの共に無調整の須恵器坏がほぼ同じ割合で存在し，高台付坏には稜椀がある。また赤焼土器の埚がある。報告者によって奈良末～平安初頭の年代が与えられている。多賀城跡のC群土器の甕にも浅い段をもつものがある(白鳥1980)。C群土器は9世紀前半に位置づけられている。岩手県では9世紀前半にロクロ調整の甕が多くなるようである(高橋1982)。叩きによって整形される赤焼土器の甕と埚は日本海沿岸に特有のものであり，庄内地方においては上限はなお明らかではないが，9世紀中葉には確実に存在していたことが知られている（佐藤1979)。また，前述したように，内陸地方では熊野台第Ⅳ群土器や，塩辛田遺跡第30・31号住居跡の組成の一員となり，8世紀末葉から9世紀初頭の段階ですでに出現していたと考えられる。

須恵器坏はヘラ切無調整のA1類と糸切り無調整のA2・3類があり，量的には後者が圧倒的に多くB地区の供膳形態の主体となっている。回転糸切り無調整の坏は，熊野台第Ⅳ土器にはなく，山形市下反田遺跡1号住居跡（佐藤他1976，佐藤1979$_b$）でヘラ切り無調整の坏，ロクロを使用した器高の高い土師器坏，赤焼土器坏，口縁が強く外反して長胴形となる刷毛目調整の土師器甕などとともに出土している。また，道伝遺跡では手塚　孝氏によって9世紀初頭に位置づけられているSD15層上面の須恵器坏は，すでに糸切り無調整が主体となっている(手塚1979$_b$，藤田1981)。多賀城跡では8世紀後半のB群土器9世紀前半のC群土器に少量認められ，9世紀後半のD群土器では供膳形態の主体を占めるようになる(白鳥1980)。また，多賀城跡に近接する水入遺跡の土器を分析した森　貢喜氏によれば，宮城県や岩手県等，東北地方の太平洋側では9世紀中葉の段階で，底径が口径の½以下になる回転糸切り無調整の須恵器坏が主体になるという。そして，この時期の土師器坏のなかに，B地区で出土した回転糸切りの痕跡のある比較的大形の坏もある（森1982)。

赤焼土器の坏は秋田県払田柵跡で嘉祥2（849）年の紀年銘のある木簡と共伴していること（船木1979他）により，本県の庄内地方を含む日本海側の地域では9世紀中葉には出現していたことは確実で，さらに遡る可能性もある。また，前述したように下反田遺跡の第

1号住居跡でも出土している。しかし，9世紀中葉の赤焼土器は供膳形態の主体とはなっていない。

以上，B地区の組成となる各器種の検討により，一部は9世紀初頭にまで遡り得る様相をもつが，全体としては9世紀中葉を中心とする相当長期にわたる時期の土器群とみることが妥当と思われる。

4　遺跡の性格について

本遺跡はその出土した土器から，A地区は10世紀代，B地区は9世紀中葉を中心とした時期に営まれたことが明らかになったが，ここで簡単にその性格について触れてみたい。

A地区では第5図からも明らかなように，今回の調査区はA地区の北端に位置し，土壙や溝跡等を検出したが，住居遺構は発見できなかった。特殊な遺物としてフイゴの羽口，鉱滓があり，遺構の確認はなかったが鍛冶場を伴っていたことは明らかである。また，風字硯の出土から識字層の存在も窺える。A地区の性格を追求するためには，資料不足ではあるが，この両者とも農耕集落に伴うものとしても不自然ではないと考えられる。

B地区では，掘立柱建物跡，井戸跡，土器を多量含む土壙等を検出した。掘立柱建物跡は2×3間，ないしは2×2間と小規模である。これらの遺構は，掘立柱建物跡で少なくとも三時期，井戸跡で二時期，土壙で二時期の重複があり，それぞれのセット関係を把えることはできなかったが，基本的には同一時期に2～3棟の建物と，井戸一基，それに土壙1基の構成とみて誤りはなさそうである。

内陸地方では，河北町熊野台遺跡で先の第Ⅳ群土器の時期に，竪穴住居跡と共存して5棟の掘立柱建物跡が検出されているが，竪穴住居跡との性格上の相違等不明な点が多い。また，ここでは10世紀代でも確実に竪穴住居が残り，住居遺構の主体を占めている(佐藤・安部1980)。太平洋側の地域では多賀城跡に近接する水入遺跡で，2×3間でその規模がB地区に類似する掘立建物だけで構成される9世紀中葉の集落が検出されているが，これは多賀城に関係のある集団の居住地域の一部と考えられ，一般集落とは性格を異にするものと理解されている(森　1982)。一般集落は10世紀から11世紀に至っても，なお竪穴住居で構成されるのが普通であり，B地区のように掘立柱建物を中心とした集落は，現在までの山形県内陸地方や太平洋側の調査例からみる限り，特殊であると言わざるを得ない状況にある。しかし，目を日本海側に転じてみると掘立柱建物跡を中心とする集落構成は，一般的な事象となる。B地区と類似する集落構成をもつ遺跡として，9世紀中葉の藤島町平形遺跡跨り地区・笠地区（川崎他1980)，10世紀代の遊佐町地正面遺跡（佐藤他1982a)，10世紀中葉から後半の酒田市北田遺跡(佐藤他1982)がある。これらの遺跡では3×7間や2×5間，2×3間でもひとまわり大きい面積をもつ母屋的色彩の強い建物とそれに付属する

建物1～2棟，および倉庫，井戸，数基の土壙という構成単位となっており，報告者によって律令村落の普遍的な在り方といわれている。川崎利夫氏は掘立柱建物群によって構成される集落について，9世紀初頭に遷移された出羽国府庁である城輪柵の建物にともなう「計画村落」であるとの見解を示している（川崎1980）。また，佐藤庄一氏らは，庄内地方における竪穴住居を「在地における自然村落の系譜に連なるもの」とし，「平安時代の初めにあってまだ残存し，その後に政治的な計画村落である掘立柱建物群に移行した」との仮説を提起している（佐藤他1982a）。

内陸地方では本遺跡B地区のような掘立柱建物による集落は，現段階では特異な存在ではあるが，庄内地方の諸例や，その規模からみて公的施設とは考えにくく，農耕集落の一単位との見方は許されるであろう。その出現の背景に政治的な計画性があったかどうかについて説明することは難しいが，山形盆地の須川西部地域には奈良時代から平安時代前半にかけて，「山辺条里」（阿部他1979）他の一連の条里遺構が存在し，この時代に計画村落が存在していたことは十分に予想できる。ただ，計画村落だからといって掘立柱建物であるという保証はなく，竪穴から掘立柱建物への移行については，なお近隣地域の資料の増加を待って検討されるべきものと思われる。

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査の結果を要約するとつぎのようになる。

1　境田C遺跡は馬見ケ崎川や高瀬川によって形成された標高100mの自然堤防に立地し，調査区内でA地区（南東部），B地区（北西部）の2ケ所の遺構・遺物の集中箇所があった。両者は，その出土土器の検討から時間差をもって営まれたことが明らかになった。

2　A地区では，平安時代中期，10世紀代の土器とともに，土壙13基，溝跡6本等の遺構が発見された。他に，フイゴの羽口，鉱滓の鍛冶場に関する遺物や，風字硯が出土している。また，溝跡から弥生時代，古墳時代の遺物が出土したが流れ込みと考えられた。

3　B地区からは，9世紀中葉を中心とする時期の掘立柱建物跡，井戸跡，土壙等で構成される集落跡が発見された。建物跡は2×3間，2×2間の小規模なもので，現在までのところ山形県内陸地方での類例は少ないが，農耕集落における一般庶民の住居とそれに付随する施設と考えられる。井戸跡から，判読はできないが付札とみられる木簡が出土した。また，平安時代の地山であるⅢ層から，縄文時代晩期中葉の土器が出土し，この時期から遺跡近辺の自然堤防はすでに，地形的に安定し，集落立地のうえで好条件を備えた場となったことが知られる。

引用・参考文献（あいうえお順）

阿部明彦・茨木光裕・佐藤庄一（1979）：『山辺条里遺構発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第22集

安孫子昭二（1982）：「第五章　縄文時代　後・晩期」『村山市史　別巻１原始古代編』　村山市

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』　pp１～14

遠藤　巌（1979）：「第八章１経済生活の進展　交易と代銭納」『東北の歴史上巻』　pp333～335

岡田茂弘・桑原滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』　pp65～92　宮城県多賀城跡調査研究所

岡村道雄（1976）：「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』　pp75～96　東北考古学会編

小野寺祥一郎（1979）：「五輪Ｃ遺跡』　宮城県文化財調査報告書第61集

柏倉亮吉（1953）：『山形県の古墳』　山形県文化財調査報告４

柏倉亮吉・武田好吉・加藤　稔・山口和夫（1968）：『山形市史　別巻１嶋遺跡』　山形市

柏倉亮吉・本間敬義・伊藤　忍・保角里志（1973）：『東根市西北平坦部の遺跡群―古墳から条里へ―』　山形県教育委員会

加藤　稔（1973）：「最上川流域における古墳文化の展開」『最上川流域の歴史と文化』　pp108～164　工藤定雄教授還暦記念会編

狩野　久編（1979）：『第160号木　簡』　日本の美術９　至文堂

川崎利夫（1980）：「城輪柵周辺の諸遺跡」『羽陽文化第112号』　pp15～31

川崎利夫・野尻　侃・横戸昭二（1979）：「大之城古墳発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第18集

川崎利夫・佐藤庄一・野尻　侃・長橋　至（1980）：『平形遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第26集

昆野　靖・三上　昭（1982）：「下谷地Ｂ遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ』　pp123～268　岩手県文化財調査報告書第72集

佐藤鎮雄・佐藤庄一（1976）：『山形県文化財発掘調査報告書―昭和48・49年度山形県営農林事業関係遺跡』　山形県埋蔵文化財調査報告書第６集

佐藤庄一（1979$_a$）：『分布調査報告書（４）―東北横断自動車道酒田線関係―』　山形県埋蔵文化財調査報告書第12集

佐藤庄一（1979$_b$）「山形県における平安時代の土器様相（予察）」『庄内考古学第16号』　pp15～39

佐藤庄一・尾形與典・阿部明彦（1979）：『山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第17集

佐藤庄一・安部　実（1980）：『熊野台遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第31集

佐藤庄一・野尻　侃・安部　実（1982$_a$）：『地正面遺跡・前田遺跡・佐渡遺跡・塚田遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第51集

佐藤庄一・野尻　侃・安部　実（1982$_b$）：『北田遺跡第２次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第53集

佐藤正俊・佐藤庄一他（1981）：『柏倉遺跡群発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第33集

佐藤禎宏・矢口　勲（1977）：「庄内地方出土の古銭」『庄内考古学第14号』　pp77～100

白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』　pp１～38　宮城県多賀城跡調査研究所

高橋信雄（1982）：「３　古代」『岩手県の土器』　pp27～33　岩手県立博物館

手塚　孝（1976）：「第８章　№24（清水北Ｃ）遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成予定内埋蔵文化財調査報告書第２集」pp15～92　米沢市教育委員会

手塚　孝（1979$_a$）：「資料編　１　川西町竜蔵北遺跡出土土師器々形・調整手法分類及び川西町中世遺跡に関する考察」『川西町史上巻』　pp924～994　川西町

手塚　孝（1979$_b$）：「道伝遺跡出土土器をめぐって」『山形考古学会第15回研究大会発表要旨』　pp29～34

土岐山　武（1980）：「（１）安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』　pp３～85　宮城県文化財調査報告書第27集

名和達朗・阿部明彦編：『分布調査報告書（８）』　山形県埋蔵文化財調査報告書第45集

藤田宥宣（1981）：『山形県川西町道伝遺跡発掘調査報告書』　川西町埋蔵文化財調査報告書第２集

藤村東男（1978）：『九年橋遺跡第４次調査報告書』　北上市文化財調査報告第23集

船木義勝（1979）：「払田柵出土の木簡」『月刊考古学ジャーナル№160』　pp13～16

朴沢正耕（1980）：「落合Ⅱ遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』　pp223～374　岩手県埋蔵文化財調査報告書第50集

森　貢喜（1982）：『多賀城市高崎水入遺跡発掘調査報告書』　宮城県文化財調査報告書第84集

山形　理・米地文夫（1967）：「考古資料と地形・地質との関係―山形県の例について―」『山形県の考古と歴史』　pp３～11　柏倉亮吉教授還暦記念会編

米地文夫（1973）：「第一章山形の自然とおいたち　第一節２地形と地質３気候と水系』　『山形市史上巻』　pp19～72　山形市

第７表　土師器破片集計表　Ａ地区

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SX1	SD4	SD5	SX6	SD7	SP8	SX9	SP14	SX15	SK16	SK17	SK18	SK19	SK20
坏・高台付坏	口縁部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	外反	1						1							
		〃	〃	外傾	4			2			1							
		ロクロ	ミガキ→黒色	外反	10	1		1			3					2		
		〃	〃	外傾	16	1		2			3							
		〃	ミガキ	外反							1.			1		5		
		〃	〃	直線	1									2		1		
	体部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	厚手	20						5							
		〃	〃	薄手	5	3					3							
		ロクロ	ミガキ→黒色	厚手	72	1	1	8			28			2	1	3		2
		〃	〃	薄手	27	3		5			7			2				
		〃	ミガキ	厚手		1								2		3		
		〃	〃	薄手		1								2		1	1	
	底部・高台部	糸切り痕	ミガキ→黒色		6	1		1			8				1			
		ナデツケ	〃	段有	2						1							
		㊗ 〃	〃	段無	2													
		㊗ ナデツケ	〃	段有	1						1							
		㊗ 〃	〃	段無	7		1	1			1							
		㊗ 糸切り	〃	段有														
		㊗ 〃	〃	段無							1					1		
		㊗ ナデで不明	〃	段有	1												1	
		㊗ 〃		段無	9			1										
		高台はがれ			8						3							
		高台のみ																
		高台なし	不明　黒色															1
		不明	不明												1			
鍋	口縁	横ナデ	横ナデ															
		ロクロ	ロクロ		1						1							
	底部	ケズリロクロ			1													
甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ 刷毛目	長く外反	1						1			1			1	1
		〃	刷毛目	〃	4						3							
		〃	ロクロナデ	短かく外反	5						1						1	
		〃	刷毛目	〃						1								
		〃	〃	不明														
		ロクロ	ロクロ	段有厚手	2													
		〃	〃	段有薄手														
		〃	〃	段無薄手														
		〃	ミガキ→黒色															
		横ナデ	横ナデ															
		不明	ロクロナデ															
		〃	不明															
	体部	刷毛目	刷毛目		156				1	1	28		1		1	1	7	1
		〃	ロクロナデ		32						5			1			1	
		〃	不明		29						2		1	2			6	1
		〃	ミガキ→黒色		3						1							
			ケズリミガキ黒色		1													
		ロクロ	ロクロ															
		〃	ロクロナデ		20													
		〃	刷毛目		16													
		〃	不明		13													
		ケズリ	ロクロナデ		13						3			1	1			
		〃	刷毛目		2		1				1		1					
		〃	不明		5													
		不明	ロクロナデ		8						1							
		〃	刷毛目		10						4							2
		〃	ミガキ→黒色		2													
		〃	不明		51			1		6	5			1	1		3	2
	底部	糸切り痕			1						2							
		アンペラA			4						5							
		アンペラB			2	1					2							
		不明			14			1			4							
合計					588	13	3	23	1	8	136		3	17	6	17	21	10

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SX21	SK22	SK23	SK28	SD30	SX31	SP32	SD39	SD43	SK44	SX45	包含層	計
坏・高台付坏	口縁部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	外反												1	3
		〃	〃	直線	1	1										1	10
		ロクロ	ミガキ→黒色	外反												7	24
		〃	〃	直線												11	33
		〃	ミガキ	外反						1						2	10
		〃	〃	直線												1	5
	体部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	厚手			1									11	37
		〃	〃	薄手	1		1									5	18
		ロクロ	ミガキ→黒色	厚手												32	150
		〃	〃	薄手		2										28	74
		〃	ミガキ	厚手												1	7
		〃	〃	薄手												2	7
	底部・高台部	糸切り痕	ミガキ→黒色													17	34
		ナデツケ ミガキ→黒色	〃	段有												0	3
		高 〃	〃	段無												2	4
		高 ナデツケ	〃	段有												1	3
		高 〃	〃	段無												2	12
		高 糸切り	〃	段有												1	1
		高 〃	〃	段無												2	4
		高 ナデで不明	〃	段有												10	12
		高 〃		段無												6	16
		高台はがれ														5	16
		高台のみ														4	4
		高台なし	不明 黒色													0	1
		不明	不明													5	6
埦	口縁	横ナデ	横ナデ													0	0
		ロクロ	ロクロ													1	3
	底部	ケズリロクロ														0	1
甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ 刷毛目	長く外反												6	11
		〃	刷毛目	〃												3	10
		〃	ロクロナデ	短かく外反			1									4	12
		〃	刷毛目	〃												1	2
		〃	〃	不明												1	1
		ロクロ	ロクロ	段有厚手												2	4
		〃	〃	段有薄手												0	0
		〃	〃	段無薄手												1	1
		〃	ミガキ→黒色													0	0
		横ナデ	横ナデ													0	0
		不明	ロクロナデ													0	0
		〃	不明													7	7
	体部	刷毛目	刷毛目		1	9	3									68	278
		〃	ロクロナデ													5	44
		〃	不明										1			14	56
		〃	ミガキ→黒色													1	5
			ケズリミガキ黒色													0	1
		ロクロ	ロクロ													0	0
		〃	ロクロナデ										3			17	40
		〃	刷毛目													7	23
		〃	不明													15	28
		ケズリ	ロクロナデ													6	24
		〃	刷毛目													11	16
		〃	不明													8	13
		不明	ロクロナデ													5	14
		〃	刷毛目													24	40
		〃	ミガキ→黒色													1	3
		〃	不明													125	195
	底部	糸切り痕														3	6
		アンペラA				1										4	14
		アンペラB														3	8
		不明												3		14	36
合計					3	13	6			1			4	3		514	1,390

第8表　A・C地区　赤焼破片集計集

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SX1	SD4	SD5	SX6	SD7	SP8	SX9	SP14	SX15	SK16	SK17	SK18	SK19	SK20
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外傾厚	70	5	1	11			19				1		1	
		〃	〃	〃薄	219	28	1	12		1	10		1	1			6	
		〃	〃	外反厚	10	3	2	9			11	1		3		1	1	
		〃	〃	〃薄	42	3		6		2	20			2	1		2	
	体部	〃	〃	厚	87	7	9	42		9	79			3	1	5	1	4
		〃	〃	薄	898	46		36		2	57	1		3		3	8	
	底部 坏	糸切り	ロクロ		72	4		10			22	1		2	1	2	3	
		不明	ロクロ		102	12	1	14		1	1			1		1	1	1
	底部 高台部	糸切り	〃	外傾段有														
		不明	〃	〃		1												
		糸切り	〃	外傾段無							1							
		不明	〃	〃	8	3												
		糸切り	〃	直立段有														
		不明	〃	〃	2													
		糸切り	〃	直立段無				1										
		不明	〃	〃	1						1							
		ナデツケ	〃		7			1										
		高台はがれ	不明		10		1											
		高台のみ			6	3		6			3							
甕		タタキ	アテ															
不明		不明	不明															
合計					1,534	115	15	148		15	224	3	1	15	4	12	23	5

須恵器破片集計表A

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SX1	SD4	SD5	SX6	SD7	SP8	SX9	SP14	SX15	SK16	SK17	SK18	SK19	SK20
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外反	1	1			1		2					1		1
		〃	〃	外傾	7					1	6							
	体部	ロクロ	ロクロ		13						4						2	
	底部・高台部	ヘラ切り	〃															
		糸切り	〃		7					1				1				
		不明	〃		3													
		(高)糸切り	〃	段有						1								
		(高)〃	〃	段無														
蓋	口縁	ロクロ	ロクロ	玉縁														
		〃	〃	折れ														
壺	口縁	ロクロ	ロクロ		5													
	頸部	〃	〃		1													
	体部	〃	〃		9						1							
		ケズリ	〃		5													
	底部	(高)糸切り	ロクロ															
		(高)不明	〃		3						1							
甕	口縁	ロクロ	ロクロ					1			2							
	頸部	〃	〃		9	1		1		2	2						1	
	体部	タタキ格子	アテ格子		1													
		〃	平行															
		〃	青海波		8													
		〃	圧痕															
		〃	不明		3					1								
		平行	格子					1										
		〃	平行		17			1			4		1	1			1	2
		〃	青海波		25	1		1			13			1			1	1
		〃	圧痕		6	2										1		
		〃	不明		1						3							
		ロクロ	ロクロ															
		不明	不明		1													
		糸切り	ロクロ															
		不明	〃															
不明		不明	不明		6													
合計					131	5		5	1	6	38		1	3		2	5	4

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SX21	SK22	SK23	SK28	SD30	SX31	SP32	SD39	SD43	SK44	SX45	包含層	計
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外傾厚		3	1									67	179
		〃	〃	〃 薄	1	1	2					1	1			167	452
		〃	〃	外反厚		2										33	76
		〃	〃	〃 薄		1										43	122
	体部	〃	〃	厚		4	1	5	2			1	1			568	829
		〃	〃	薄		2	1	3	8							711	1,779
	底部 坏	糸切り	ロクロ			2						1	1			117	238
		不明	ロクロ				3							1		137	276
	底部 高台部	糸切り	〃	外傾段有												0	0
		不明	〃	〃												3	4
		糸切り	〃	外傾段無												1	2
		不明	〃	〃												21	32
		糸切り	〃	直立段有												0	0
		不明	〃	〃												1	3
		糸切り	〃	直立段無												0	1
		不明	〃													9	11
		ナデツケ	〃													3	11
		高台はがれ	不明													14	25
		高台のみ														14	32
甕		タタキ	アテ													0	0
																0	0
																0	0
不明		不明	不明													1	1
合計					1	15	8	8	10			3	3	1		1,910	4,073

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SX21	SK22	SK23	SK28	SD30	SX31	SP32	SD39	SD43	SK44	SX45	包含層	計
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外反			1								1	6	15
		〃	〃	外傾												6	20
	体部	ロクロ	ロクロ								1					18	38
		ヘラ切り	〃													0	0
		糸切り	〃													9	18
		不明	〃													0	3
		(高)糸切り	〃	段有												1	2
		(高)〃	〃	段無												0	0
蓋	口縁	ロクロ	ロクロ	玉縁												0	0
		〃	〃	折れ												2	2
壺	口縁	ロクロ	ロクロ													2	7
	頸部	〃	〃													2	3
	体部	〃	〃													4	14
		ケズリ	〃													5	10
	底部	(高)糸切り	ロクロ													0	0
		(高)不明	〃													1	5
甕	口縁	ロクロ	ロクロ													8	11
	頸部	〃	〃										1			6	23
	体部	タタキ格子	アテ格子													0	1
		〃	平行													2	2
		〃	青海波													1	9
		〃	圧痕													4	4
		〃	不明													0	4
		平行	格子													6	7
		〃	平行													30	57
		〃	青海波									1				40	84
		〃	圧痕													8	17
		〃	不明													8	12
		ロクロ	ロクロ													0	0
		不明	不明									1				11	13
		糸切り	ロクロ													1	1
		不明	〃													5	5
不明		不明	不明													2	8
合計							1				1	2	1		1	188	395

第9表　B地区　土師器破片集計表

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	EB114	EB131	EB135	EB137	EB142	EB145	EB147	EB148	EB176	EB351	SK154 F1	SK154 F2	SK154 F3	SK154 F4
坏・高台付坏	口縁部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾								1						
		ロクロ	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾														1
		〃	ミガキ	外反														
		〃	〃	直線														
	体部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	厚手														
		〃	〃	薄手				1										
		ロクロ	ミガキ→黒色	厚手														
		〃	〃	薄手														
		ロクロ	ミガキ	厚手														
		〃	〃	薄手														
	底部・高台部	糸切り痕	ミガキ→黒色													2		
		ナデツケ ミガキ→黒色	〃	段有														
		高 〃	〃	段無														
		高 ナデツケ	〃	段有														
		高 〃	〃	段無														
		高 糸切り	〃	段有														
		高 〃	〃	段無														
		高 ナデで不明	〃	段有														
		高 〃		段無														
		高台はがれ															3	
		高台のみ																
		高台なし	不明 黒色															
		不明	不明															
鍋	口縁	横ナデ	横ナデ															
		ロクロ	ロクロ															
	底部	ケズりロクロ																
甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ 刷毛目	長く外反														
		〃	刷毛目	〃													1	
		〃	ロクロナデ	短かく外反											9		5	
		〃	刷毛目	〃														
		〃	〃	不明														
		ロクロ	ロクロ	段有厚手														
		〃	〃	段有薄手													1	
		〃	〃	段無薄手														
		〃	ミガキ→黒色															
		横ナデ	横ナデ															
		不明	ロクロナデ															
		〃	不明															
	体部	刷毛目	刷毛目		1					1	4			1	54	11	28	8
		〃	ロクロナデ			1						1				2		
		〃	不明												16	1	6	5
		〃	ミガキ→黒色															
			ケズりミガキ黒色															
		ロクロ	ロクロ															
		〃	ロクロナデ								1							
		〃	刷毛目															
		〃	不明									1						
		ケズり	ロクロナデ															
		〃	刷毛目				1									1		
		〃	不明														1	
		不明	ロクロナデ															
		〃	刷毛目												16		2	2
		〃	ミガキ→黒色															
		〃	不明												39	2	12	4
	底部	糸切り痕																
		アンペラA													1			
		アンペラB													1	1		
		不明			1		1								1	1	2	
合計					2	1	2	1		1	5	3		1	137	21	61	20

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SK154 F_1	SK154 F_6	SK154 Y	SK155 F_1	SK155 F_2	SK155 F_3	SK155 F_4	SK155 F_5	SK155 F_6	SK155 Y	SE156	SE156 F_1	SE156 F_2	SE157 F
坏・高台付坏	口縁部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾														
		ロクロ	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾	1													
		〃	ミガキ	外反														
		〃	〃	直線														
	体部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	厚手														
		〃	〃	薄手														
		ロクロ	ミガキ→黒色	厚手														
		〃	〃	薄手														
		ロクロ	ミガキ	厚手														
		〃	〃	薄手														
	底部・高台部	糸切り痕	ミガキ→黒色		1													
		ナデツケ ミガキ→黒色	〃	段有														
		高 〃	〃	段無														
		高 ナデツケ	〃	段有														
		高 〃	〃	段無														
		高 糸切り	〃	段有														
		高 〃	〃	段無														
		高 ナデで不明	〃	段有														
		高 〃		段無														
		高台はがれ																
		高台のみ																
		高台なし	不明 黒色															
		不明	不明															
堝	口縁	横ナデ	横ナデ															
		ロクロ	ロクロ															
	底部	ケズリロクロ																
甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ 刷毛目	長く外反		1				1	1			1				
		〃	刷毛目	〃														
		〃	ロクロナデ	短かく外反		1		2										
		〃	刷毛目	〃														
		〃	〃	不明														
		ロクロ	ロクロ	段有厚手														
		〃	〃	段有薄手					1	1								
		〃	〃	段無薄手														
		〃	ミガキ→黒色															
		横ナデ	横ナデ															
		不明	ロクロナデ															
		〃	不明															
	体部	刷毛目	刷毛目		12		3	37	3	35	14	1	5	7	1			
		〃	ロクロナデ					1		11	1			2				
		〃	不明		5			9	4	5							2	3
		〃	ミガキ→黒色						1	1				1				
			ケズリミガキ黒色												*			
		ロクロ	ロクロ															
		〃	ロクロナデ							12	2							
		〃	刷毛目							3								
		〃	不明		2					1								
		ケズリ	ロクロナデ		1					1			1					
		〃	刷毛目							1								
		〃	不明					2		1								
		不明	ロクロナデ							1								
		〃	刷毛目		2			3										
		〃	ミガキ→黒色															
		〃	不明		17		1	15	2	16			2		2		1	
	底部	糸切り痕						1										
		アンペラA			1													
		アンペラB						1										
		不明			1			2	1	1	2							
合計					43	2	4	73	12	91	20	1	8	11	3	0	3	3

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SE157 F_1	SE158 F_1	SE158 F_4	SK164	SK164 F_1	SK346 F_1	SK347 F_2	SK347 F_3	SK347 F_4	SK347 F_5	SP161	SP162	SP163	SP167
坏・高台付坏	口縁部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾														
		ロクロ	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾														
		〃	ミガキ	外反														
		〃	〃	直線														
	体部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	厚手														
		〃	〃	薄手														
		ロクロ	ミガキ→黒色	厚手														
		〃	〃	薄手														
		ロクロ	ミガキ	厚手														
		〃	〃	薄手														
	底部・高台部	糸切り痕	ミガキ→黒色															
		ナデツケ ミガキ→黒色	〃	段有														
		(高) 〃	〃	段無														
		(高) ナデツケ	〃	段有														
		(高) 〃	〃	段無														
		(高) 糸切り	〃	段有														
		(高) 〃	〃	段無														
		(高) ナデで不明	〃	段有														
		(高) 〃		段無														
		高台はがれ																
		高台のみ																
		高台なし	不明 黒色															
		不明	不明															
鍋	口縁	横ナデ	横ナデ															
		ロクロ	ロクロ															
	底部	ケズリロクロ																
甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ 刷毛目	長く外反														
		〃	刷毛目	〃									1					
		〃	ロクロナデ	短かく外反														
		〃	刷毛目	〃														
		〃	〃	不明														
		ロクロ	ロクロ	段有厚手														
		〃	〃	段有薄手		1												
		〃	〃	段無薄手						1								
		〃	ミガキ→黒色															
		横ナデ	横ナデ															
		不明	ロクロナデ															
		〃	不明															
	体部	刷毛目	刷毛目			2		2	4	14	1	2	2	5	1	4	1	1
		〃	ロクロナデ															
		〃	不明							4								
		〃	ミガキ→黒色							4								
			ケズリミガキ黒色															
		ロクロ	ロクロ															
		〃	ロクロナデ							1					1			
		〃	刷毛目															
		〃	不明															
		ケズリ	ロクロナデ							1								
		〃	刷毛目							1								
		〃	不明							5								
		不明	ロクロナデ												1			
		〃	刷毛目									1					1	
		〃	ミガキ→黒色															
		〃	不明				1		3	10	1							
	底部	糸切り痕																
		アンペラA																
		アンペラB								1								
		不明								5				2				
合計						3	1	2	7	47	2	3	3	7	3	4	2	1

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SP168	SP170	SP187	SP302	SP331	SP344	SP347	SP349	SP350	SP352	SP357	SP358	SP360	SP361
坏・高台付坏	口縁部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾														
		ロクロ	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾														
		〃	ミガキ	外反														
		〃	〃	直線														
	体部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	厚手									1					
		〃	〃	薄手														
		ロクロ	ミガキ→黒色	厚手														
		〃	〃	薄手														
		ロクロ	ミガキ	厚手														
		〃	〃	薄手														
	底部・高台部	糸切り痕	ミガキ→黒色															
		ナデツケ ミガキ→黒色	〃	段有														
		㊗ 〃	〃	段無														
		㊗ ナデツケ	〃	段有														
		㊗ 〃	〃	段無														
		㊗ 糸切り	〃	段有														
		㊗ 〃	〃	段無														
		㊗ ナデで不明	〃	段有														
		㊗ 〃		段無														
		高台はがれ																
		高台のみ																
		高台なし	不明 黒色															
		不明	不明															
鍋	口縁	横ナデ	横ナデ															
		ロクロ	ロクロ															
	底部	ケズリロクロ																
甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ 刷毛目	長く外反														
		〃	刷毛目	〃														
		〃	ロクロナデ	短かく外反		1												
		〃	刷毛目	〃														
		〃	〃	不明														
		ロクロ	ロクロ	段有厚手														
		〃	〃	段有薄手														
		〃	〃	段無薄手														
		〃	ミガキ→黒色									1						
		横ナデ	横ナデ															
		不明	ロクロナデ															
		〃	不明															
	体部	刷毛目	刷毛目			2		1		1		4						
		〃	ロクロナデ															1
		〃	不明		1													
		〃	ミガキ→黒色															
			ケズリミガキ黒色															
		ロクロ	ロクロ															
		〃	ロクロナデ				1					1						
		〃	刷毛目															
		〃	不明															
		ケズリ	ロクロナデ															
		〃	刷毛目									1						
		〃	不明															
		不明	ロクロナデ															
		〃	刷毛目						1									
		〃	ミガキ→黒色															
		〃	不明											1	1	1		
	底部	糸切り痕																
		アンペラA																
		アンペラB																
		不明										1						
合計					1	3	1	1	1	1		8	1	1	1	1		1

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SP371	SD152	SD268	SD269	SD273	SD274	SD275	SD276	SD277	SD278	SD284	SD288	SD289	SD290
坏・高台付坏	口縁部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾														
		ロクロ	ミガキ→黒色	外反														
		〃	〃	外傾														
		〃	ミガキ	外反														
		〃	〃	直線														
	体部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	厚手														
		〃	〃	薄手														
		ロクロ	ミガキ→黒色	厚手														
		〃	〃	薄手														
		ロクロ	ミガキ	厚手														
		〃	〃	薄手														
	底部・高台部	糸切り痕	ミガキ→黒色															
		ナデツケ ミガキ→黒色	〃	段有														
		(高) ナデツケ	〃	段無														
		(高) ヘラさし	〃	段有														
		(高) 〃	〃	段無														
		(高) 糸切り	〃	段有														
		(高) 〃	〃	段無														
		(高) ナデで不明	〃	段有														
		(高) 〃		段無														
		高台はがれ																
		高台のみ																
		高台なし	不明 黒色															
		不明	不明															
鍋	口縁	横ナデ	横ナデ															
		ロクロ	ロクロ															
	底部	ケズリロクロ																
甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ 刷毛目	長く外反														
		〃	刷毛目	〃														
		〃	ロクロナデ	短かく外反														
		〃	刷毛目	〃														
		〃	〃	不明														
		ロクロ	ロクロ	段有厚手														
		〃	〃	段有薄手													1	
		〃	〃	段無薄手														
		〃	ミガキ→黒色															
		横ナデ	横ナデ															
		不明	ロクロナデ															
		〃	不明															
	体部	刷毛目	刷毛目			2	4	4	10		1	3	3	3		3	2	1
		〃	ロクロナデ						1			1		1				
		〃	不明						3	2	1		2	1			1	
		〃	ミガキ→黒色										1					
			ケズリミガキ黒色								1		1			1		
		ロクロ	ロクロ															
		〃	ロクロナデ							2	1					3		
		〃	刷毛目							1								
		〃	不明							1			1					
		ケズリ	ロクロナデ			1												
		〃	刷毛目								1		1					1
		〃	不明					1	1			1						
		不明	ロクロナデ						1					1				
		〃	刷毛目		1				3									1
		〃	ミガキ→黒色					1	1	1							1	
		〃	不明			6		1	15	2	5	2	1	5		4	2	2
	底部	糸切り痕					1											
		アンペラA																
		アンペラB																
		不明																
合計					1	9	5	7	35	9	10	7	10	11	0	11	7	5

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SD291	SD292	SD293	SD294	SP331	SD474	SX353	SP347	包含層	合計
坏・高台付坏	口縁部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	外反									0	0
		〃	〃	外傾									0	1
		ロクロ	ミガキ→黒色	外反									0	0
		〃	〃	外傾									0	2
		〃	ミガキ	外反									0	0
		〃	〃	直線									0	0
	体部	ミガキ→黒色	ミガキ→黒色	厚手									3	4
		〃	〃	薄手							1		1	3
		ロクロ	ミガキ→黒色	厚手							1		8	9
		〃	〃	薄手									0	0
		ロクロ	ミガキ	厚手									0	0
		〃	〃	薄手									5	8
	底部・高台部	糸切り痕	ミガキ→黒色		1								2	6
		ナデツケ ミガキ→黒色	〃	段有									0	0
		(高) 〃	〃	段無									0	0
		(高) ナデツケ	〃	段有									0	0
		(高) 〃	〃	段無									0	0
		(高) 糸切り	〃	段有									0	0
		(高) 〃	〃	段無									0	0
		(高) ナデで不明	〃	段有									0	0
		(高) 〃		段無									1	1
		高台はがれ											0	3
		高台のみ											1	1
		高台なし	不明 黒色										0	0
		不明	不明										3	3
鍋	口縁	横ナデ	横ナデ										0	0
		ロクロ	ロクロ										0	0
	底部	ケズリロクロ											0	0
甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ 刷毛目	長く外反									17	21
		〃	刷毛目	〃		1							2	5
		〃	ロクロナデ	短かく外反									14	32
		〃	刷毛目	〃									0	0
		〃	〃	不明									0	0
		ロクロ	ロクロ	段有厚手									0	0
		〃	〃	段有薄手				1					2	8
		〃	〃	段無薄手									3	4
		〃	ミガキ→黒色										2	3
		横ナデ	横ナデ										0	0
		不明	ロクロナデ										0	0
		〃	不明										0	0
	体部	刷毛目	刷毛目		1	6	7	1			42	1	464	831
		〃	ロクロナデ								3		90	116
		〃	不明			1					10		95	177
		〃	ミガキ→黒色								4		13	25
			ケズリミガキ黒色										0	3
		ロクロ	ロクロ										0	0
		〃	ロクロナデ										88	113
		〃	刷毛目										14	18
		〃	不明							2	2		6	16
		ケズリ	ロクロナデ		1	1							13	20
		〃	刷毛目					1					11	20
		〃	不明		1								6	19
		不明	ロクロナデ							2	2		10	18
		〃	刷毛目										68	101
		〃	ミガキ→黒色			1							8	13
		〃	不明			13	2	2	1	1	79		792	1,066
	底部	糸切り痕											6	8
		アンペラA											5	7
		アンペラB											7	11
		不明				2					2		30	55
合計					4	25	9	5	1	5	146	1	1,788	2,751

第10表　赤焼破片集計集

器種	部位		器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	EB114	EB131	EB135	EB137	EB142	EB145	EB147	EB148	EB176	EB351	SK154 F_1	SK154 F_2	SK154 F_3	SK154 F_4
坏・高台付坏	口縁		ロクロ	ロクロ	外傾厚				2				1			2	1		
			〃	〃	〃 薄								2			3		2	
			〃	〃	外反厚													1	
			〃	〃	〃 薄											1		1	
	体部		〃	〃	厚								1	1		1	1		1
			〃	〃	薄											5	11	4	4
	底部	坏	糸切り	ロクロ												1	2	1	1
			不明	ロクロ															1
		高台部	糸切り	〃	外傾段有														
			不明	〃	〃														
			糸切り	〃	外傾段無														
			不明	〃	〃														
			糸切り	〃	直立段有														
			不明	〃	〃														
			糸切り	〃	直立段無														
			不明	〃	〃														
			ナデツケ	〃														1	
			高台はがれ	不明												1			
			高台のみ																
甕			タタキ	アテ															
不明			不明	不明												1			
合計									2				4	1		15	15	10	7

須恵器破片集計表

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	EB114	EB131	EB135	EB137	EB142	EB145	EB147	EB148	EB176	EB351	SK154 F_1	SK154 F_2	SK154 F_3	SK154 F_4
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外反											8	1	9	4
		〃	〃	外傾											12	1		3
	体部	ロクロ	ロクロ				1							1	17	1	5	5
	底部・高台部	ヘラ切り	〃															
		糸切り	〃												5	7	2	1
		不明	〃									1				1		
		(高) 糸切り	〃	段有														
		(高) 〃	〃	段無														
蓋	口縁	ロクロ	ロクロ	玉縁														
		〃	〃	折れ														
壺	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃		1													
	体部	〃	〃															
		ケズリ	〃															
	底部	(高) 糸切り	ロクロ															
		(高) 不明	〃															
甕	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃															
	体部	タタキ格子	アテ格子															
		〃	平行															
		〃	青海波															
		〃	オサエ															
		〃	不明															
		平行	格子															
		〃	平行															
		〃	青海波												3	2	1	
		〃	オサエ															
		〃	不明												1			
		ロクロ	ロクロ															
		不明	不明												10		3	
	底部	糸切り	ロクロ															
		不明	〃															
不明		不明	青海波															
高台	底	高台のみ																
合計							1					1		1	56	13	20	13

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SK154 F_5	SK154 F_6	SK154 Y	SK155 F_1	SK155 F_2	SK155 F_3	SK155 F_4	SK155 F_5	SK155 F_6	SK155 Y	SE156	SE156 F_1	SE156 F_2	SE157 F
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外傾厚		2		5										
		〃	〃	〃 薄	3			4	1	3								
		〃	〃	外傾厚				4	1									
		〃	〃	〃 薄	2			1		1								
	体部	〃	〃	厚	1			5	1	4	1		1					
		〃	〃	薄	1	2		4	2	2	1		1					
	底部 坏	糸切り	ロクロ					1										
		不明	ロクロ			1		3		1								
	底部 高台部	糸切り	〃	外傾段有														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	外傾段無														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	直立段有														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	直立段無														
		不明	〃	〃														
		ヘラさし	〃															
		高台はがれ	不明															
		高台のみ																
甕		タタキ	アテ										1					
不明		不明	不明															
合計					7	5		27	5	11	2		3					

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SK154 F_5	SK154 F_6	SK154 Y	SK155 F_1	SK155 F_2	SK155 F_3	SK155 F_4	SK155 F_5	SK155 F_6	SK155 Y	SE156	SE156 F_1	SE156 F_2	SE157 F
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外反	1	1	1	3	1	6	2					2		
		〃	〃	外傾	5					5	1							
	体部	ロクロ	ロクロ		3		1	10	4	10						1		
	底部・高台部	ヘラ切り	〃															
		糸切り	〃		2			4	1							1		
		不明	〃					1										
		(高) 糸切り	〃	段有						2						1		
		(高) 〃	〃	段無														
蓋	口縁	ロクロ	ロクロ	玉縁														
		〃	〃	折れ														
壺	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃															
	体部	〃	〃															
		ケズリ	〃															
	底部	(高) 糸切り	ロクロ															
		(高) 不明	〃															
甕	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃															
	体部	タタキ格子	アテ格子							1								
		〃	平行															
		〃	青海波		1													
		〃	オサエ															
		〃	不明															
		平行	格子															
		〃	平行							1								
		〃	青海波							1								
		〃	オサエ															
		〃	不明															
		ロクロ	ロクロ														1	
		不明	不明				3				2							
	底部	糸切り	ロクロ															
		不明	〃													1		
不明		不明	青海波															
高台	底	高台のみ																
合計					12	1	5	18	6	26	5					6	1	

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SE157 F_1	SE158 F_1	SE158 F_4	SK164	SK164 F_2	SK346 F_1	SK347 F_2	SK347 F_3	SK347 F_4	SK347 F_5	SP161	SP162	SP163	SP167
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外傾厚														
		〃	〃	〃 薄														
		〃	〃	外傾厚														
		〃	〃	〃 薄														
	体部	〃	〃	厚		1					1			2				
		〃	〃	薄	1	1												
	底部 坏	糸切り	ロクロ		1													
		不明	ロクロ															
	底部 高台部	糸切り	〃	外傾段有														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	外傾段無														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	直立段有														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	直立段無														
		不明	〃	〃														
		ナデツケ	〃															
		高台はがれ	不明															
		高台のみ																
甕		タタキ	アテ															
不明		不明	不明															
合計					2	2					1			2				

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SE157 F_1	SE158 F_1	SE158 F_4	SK164	SK164 F_2	SK346 F_1	SK347 F_2	SK347 F_3	SK347 F_4	SK347 F_5	SP161	SP162	SP163	SP167
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ															
		〃	〃											1				
	体部	ロクロ	ロクロ											1				
	底部・高台部	ヘラ切り	〃															
		糸切り	〃											1				
		不明	〃															
		(高) 糸切り	〃															
		(高) 〃	〃															
蓋	口縁	ロクロ	ロクロ															
		〃	〃															
壺	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃															
	体部	〃	〃		1													
		ケズリ	〃															
	底部	(高) 糸切り	ロクロ															
		(高) 不明	〃															
甕	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃															
	体部	タタキ格子	アテ格子															
		〃	平行															
		〃	青海波										1					
		〃	オサエ															
		〃	不明															
		平行	格子															
		〃	平行															
		〃	青海波															
		〃	オサエ															
		〃	不明															
		ロクロ	ロクロ															
		不明	不明		1													
	底部	糸切り	ロクロ															
		不明	〃															
不明		不明	青海波															
高台	底	高台のみ																
合計					2								1	3				

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SP168	SP170	SP187	SP302	SP306	SP331	SP344	SK347	SP349	SP350	SP352	SP357	SP358	SP360
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外傾厚														
		〃	〃	〃 薄														
		〃	〃	外傾厚														
		〃	〃	〃 薄														
	体部	〃	〃	厚	1													1
		〃	〃	薄	1													
	底部 坏	糸切り	ロクロ															
		不明	ロクロ															
	底部 高台部	糸切り	〃	外傾段有														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	外傾段無														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	直立段有														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	直立段無														
		不明	〃	〃														
		ナデツケ	〃															
		高台はがれ	不明															
		高台のみ																
甕		タタキ	アテ															
不明		不明	不明															
合計					2													1

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SP168	SP170	SP187	SP302	SP306	SP331	SP344	SK347	SP349	SP350	SP352	SP357	SP358	SP360
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外反							1			1				
		〃	〃	外傾											1			
	体部	ロクロ	ロクロ											1				
	底部・高台部	ヘラ切り	〃															
		糸切り	〃															
		不明	〃															
		(高) 糸切り	〃	段有														
		(高) 〃	〃	段無														
蓋	口縁	ロクロ	ロクロ	玉縁														
		〃	〃	折れ														
壺	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃															
	体部	〃	〃															
		ケズリ	〃															
	底部	(高) 糸切り	ロクロ															
		(高) 不明	〃															
甕	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃															
	体部	タタキ格子	アテ格子															
		〃	平行															
		〃	青海波															
		〃	オサエ															
		〃	不明															
		平行	格子															
		〃	平行															
		〃	青海波															
		〃	オサエ															
		〃	不明															
		ロクロ	ロクロ															
		不明	不明															
	底部	糸切り	ロクロ															
		不明	〃															
不明		不明	青海波															
高台	底	高台のみ																
合計											1			2	1			

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SP361	SP371	SD152	SD268	SD269	SD273	SD274	SD275	SD276	SD277	SD278	SD284	SD288	SD289
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外傾厚														
		〃	〃	〃 薄														
		〃	〃	外傾厚														
		〃	〃	〃 薄														
	体部	〃	〃	厚														
		〃	〃	薄												1		
	底部 坏	糸切り	ロクロ															
		不明	ロクロ															
	底部 高台部	糸切り	〃	外傾段有														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	外傾段無														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	直立段有														
		不明	〃	〃														
		糸切り	〃	直立段無														
		不明	〃															
		ナデツケ	〃															
		高台はがれ	不明															
		高台のみ																
甕		タタキ	アテ															
不明		不明	不明															
合計																1		

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SP361	SP371	SD152	SD268	SD269	SD273	SD274	SD275	SD276	SD277	SD278	SD284	SD288	SD289
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ		1			1										
		〃	〃									1						
	体部	ロクロ	ロクロ		2				1	2								
	底部・高台部	ヘラ切り	〃															
		糸切り	〃										1					
		不明	〃															
		(高) 糸切り	〃															
		(高) 〃	〃															
蓋	口縁	ロクロ	ロクロ															
		〃	〃										1					
壺	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃															
	体部	〃	〃															
		ケズリ	〃															
	底部	(高) 糸切り	ロクロ															
		(高) 不明	〃															
甕	口縁	ロクロ	ロクロ															
	頸部	〃	〃															
	体部	タタキ格子	アテ格子															
		〃	平行															
		〃	青海波															
		〃	オサエ															
		〃	不明															
		平行	格子															
		〃	平行															
		〃	青海波															
		〃	オサエ															
		〃	不明															
		ロクロ	ロクロ										2					1
		不明	不明															
	底部	糸切り	ロクロ															
		不明	〃															
不明		不明	青海波															
高台	底	高台のみ																
合計					3			1	1	2		1	4					1

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SD290	SD291	SD292	SD293	SD294	SP331	SD474	SX353	包含層	合計
坏・高台付坏	口縁	ロクロ	ロクロ	外傾厚									10	23
		〃	〃	〃 薄									12	30
		〃	〃	外傾厚									10	16
		〃	〃	〃 薄									2	8
	体部	〃	〃	厚								3	65	92
		〃	〃	薄									66	107
	底部 坏	糸切り	ロクロ									1	8	16
		不明	ロクロ										7	13
	底部 高台部	糸切り	〃	外傾段有									2	2
		不明	〃	〃									0	0
		糸切り	〃	外傾段無									0	0
		不明	〃	〃									0	0
		糸切り	〃	直立段有									0	0
		不明	〃	〃									0	0
		糸切り	〃	直立段無									0	0
		不明	〃	〃									0	0
		ナデツケ	〃										0	1
		高台はがれ	不明										3	4
		高台のみ											9	9
甕		タタキ	アテ										0	1
		不明	不明										0	1
合計												4	194	323

器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	特徴	SD290	SD291	SD292	SD293	SD294	SP331	SD474	SX353	SP306	包含層	合計
坏・高台付坏		ロクロ	ロクロ	外反				1				7		55	106
		〃	〃	外傾				2				4		33	69
	体部	ロクロ	ロクロ									28	1	88	183
	底部・高台部	ヘラ切り	〃											4	4
		糸切り	〃					1				8		28	62
		不明	〃											11	14
		(高) 糸切り	〃	段有										0	3
		(高) 〃	〃	段無										1	1
蓋	口縁	ロクロ	ロクロ	玉縁										1	1
		〃	〃	折れ										0	1
壺	口縁	ロクロ	ロクロ											0	0
	頸部	〃	〃											0	0
	体部	〃	〃											0	1
		ケズリ	〃											0	0
	底部	(高) 糸切り	ロクロ											0	0
		(高) 不明	〃											0	0
甕	口縁	ロクロ	ロクロ											1	1
	頸部	〃	〃											0	0
	体部	タタキ格子	アテ格子											0	1
		〃	平行											0	0
		〃	青海波											0	2
		〃	オサエ											0	0
		〃	不明											0	0
		平行	格子									1		2	3
		〃	平行											5	6
		〃	青海波									2		9	18
		〃	オサエ									1		1	2
		〃	不明									3		9	13
		ロクロ	ロクロ									5		10	19
		不明	不明									5		25	49
	底部	糸切り	ロクロ									1		5	6
		不明	〃									1		2	4
不明		不明	青海波											2	2
高台	底	高台のみ												1	1
合計								4				66	1	293	572

計
23
30
16
8
92
107
16
13
2
0
0
0
0
0
0
0
1
4
9
1
1
323

計
106
69
183
4
62
14
3
1
1
1
0
0
1
0
0
0
1
0
1
0
2
0
0
3
6
18
2
13
19
49
6
4
2
1
572

山形県埋蔵文化財調査報告書第62集

境田（さかいだ）C遺跡

発掘調査報告書

昭和57年12月20日　印刷
昭和57年12月25日　発行

発行　日本道路公団仙台建設局
　　山形県教育委員会
印刷　㈱大風印刷